県道本吉小川線関係埋蔵文化財調査報告

山門牛島遺跡

－福岡県みやま市瀬高町山門所在遺跡の調査－

福岡県文化財調査報告書　第226集

中　巻

2010

福 岡 県 教 育 委 員 会

県道本吉小川線関係埋蔵文化財調査報告

山門牛島遺跡

－福岡県みやま市瀬高町山門所在遺跡の調査－

福岡県文化財調査報告書　第226集

中　巻

本文目次

Ⅳ　山門牛島遺跡
1　２次調査…… 1
1　調査の概要…… 1
2　遺構と遺物…… 1
(1) 竪穴住居跡…… 1
(2) 井戸…… 2
(3) 土坑…… 7
(4) 溝状遺構…… 9
(5) 層位出土の遺物…… 22
(6) その他の遺物…… 22
3　小結…… 26
2　３次調査１区…… 27
1　調査の概要…… 27
2　遺構と遺物…… 27
(1) 掘立柱建物跡 …… 27
(2) 土坑…… 40
(3) 溝状遺構…… 43
(4) 流路…… 50
3　小結…… 60
3　３次調査２区 …… 65
1　調査の概要…… 65
2　遺構と遺物…… 65
(1) 竪穴住居跡 …… 65
(2) 掘立柱建物跡…… 65
(3) 石蓋土坑墓…… 67
(4) 土坑…… 69
(5) 波板状遺構…… 74
(6) 溝状遺構…… 78
(7) 流路…… 100
(8) ピット…… 103
(9) その他の遺物…… 103
3　小結…… 106
4　４次調査…… 115
1　調査の概要…… 115
2　遺構と遺物…… 115
(1) 掘立柱建物跡…… 115
(2) 竪穴住居跡 …… 120
(3) 土坑…… 120
(4) 溝状遺構…… 120

３　小結…… 122
５　５次調査…… 123
１　調査の概要…… 123
２　基本土層…… 123
３　遺構と遺物…… 123
(1) 竪穴住居跡…… 123
(2) 土坑…… 127
(3) 溝状遺構…… 133
(4) その他の遺構…… 138
(5) その他の遺物…… 141
４　小結…… 141
６　まとめ…… 142

図版目次

図版１　１．山門牛島遺跡遠景（西から）
２．山門牛島遺跡遠景（東から）
図版２　１．山門牛島遺跡２次調査区遠景（南西から）
２．山門牛島遺跡２次調査区全景（北から）
図版３　１．山門牛島遺跡２次調査区全景（下が北）
２．１号住居跡（西から）
図版４　１．１号井戸遺物出土状況１（南東から）　２．１号井戸遺物出土状況２（南から）
３．１号井戸の木材出土状況（西から）
図版５　１．２号井戸（東から）　２．１号溝状遺構（南から）
３．流路土層堆積状況（南東から）
図版６　出土遺物１
図版７　出土遺物２
図版８　１．山門牛島遺跡３次調査１区遠景（西上空から）
２．同上遠景（上空から）
図版９　１．山門牛島遺跡３次調査１区北半全景（上空から）
２．同左南半全景（上空から）
図版 10　１．１号掘立柱建物跡（東から）　２．２号掘立柱建物跡（西から）
３．３号掘立柱建物跡（西から）
図版 11　１．４号掘立柱建物跡（東から）　２．５号掘立柱建物跡（東から）
３．同上柱１土層断面（南東から）
図版 12　１．６・12 号掘立柱建物跡（上空から）　２．７号掘立柱建物跡（東から）
３．８号掘立柱建物跡（南東から）
図版 13　１．10 号掘立柱建物跡・４号土坑（上空から）２．同上柱２土層断面（南西から）
３．13 号掘立柱建物跡（東から）
図版 14　１．12 号掘立柱建物跡柱３土層断面（北東から）
２．１号土坑（東から）　３．２号土坑（南東から）

図版 15　１．12 号掘立柱建物跡・３号土坑（北東から）
２．３号土坑土層断面１（北から）　３．同上土層断面２（南から）
４．４号土坑土層断面（北東から）
図版 16　１．５号土坑（南東から）　２．１号溝状遺構土層断面１（北西から）
３．同左土層断面２（南東から）　４．２号溝状遺構土層断面（北西から）
５．４号溝状遺構土層断面（北東から）　６．５・６号溝状遺構土層断面（北東から）
図版 17　１．８号溝状遺構（北東から）　２．10 号溝状遺構土層断面（南東から）
３．流路上面遺物出土状態（南西から）
図版 18　１．流路上位遺物出土状態（西から）　２．流路完掘状態（南西から）
３．流路土層断面（北西から）
図版 19　出土土器１
図版 20　出土土器２
図版 21　出土石製品・土製品
図版 22　１．山門牛島遺跡３次調査２区遠景（西上空から）
２．同上西半部（上空から）
３．同上東部（上空から）
図版 23　３次調査２区東半全景（西から）　２．１号竪穴住居跡（北から）
３．同上炉跡（北から）　４．同左屋内土坑土層断面（東から）
図版 24　１．１号土坑（南から）　２．同上土層断面（南東から）
３．２号土坑（南から）　４．同上土層断面（西から）
図版 25　１．３号土坑（北東から）　２．同上土層断面（北東から）
３．４号土坑（北から）　４．同上土層断面（北東から）
図版 26　１．５号土坑完掘状況（北から）　２．同上土層断面（北から）
３．６号土坑遺物出土状態（西から）　４．同上完掘状況（西から）
図版 27　１．７号土坑（南から）　２．７号土坑・12 号溝状遺構土層断面（北から）
３．８号土坑（南から）　４．同上土層断面（南から）
５．１号墓（南東から）
図版 28　１．波板状遺構群検出状況（西から）　２．同上完掘状況（西から）
図版 29　１．１・２号波板状遺構東部土層断面（南から）　２．同上中部土層断面１（南から）
３．同上２（南から）　４．２号波板状遺構北端完掘状況（西から）
図版 30　１．３号波板状遺構東部土層断面（南から）
２．４・６・７号波板状遺構土層断面（北から）
３．５号波板状遺構北部土層断面１（南から）　４．同上北部土層断面２（南から）
５．同上南部土層断面１（北から）　６．同上南部土層断面２（南から）
図版 31　１．６・７号波板状遺構土層断面（北から）
２．８号波板状遺構北部土層断面（南から）
３．10 号波板状遺構北部土層断面１（北から）　４．同上２（北から）
図版 32　１．11 号波板状遺構土層断面（南から）　２．１号溝状遺構（西上空から）
３．同上遺物出土状態（東から）　４．同左木製品出土状態（北東から）
図版 33　１．１号溝状遺構土層断面（南から）　２．１号流路（南西から）
３．同上土層断面（北東から）
図版 34　１．８～17・20 号溝状遺構・２号流路（南東から）

２．８・９号溝状遺構、２号流路土層断面（北から）
３．12 号溝状遺構土層断面（北から）　４．14・17 号溝状遺構土層断面（南から）
５．２号流路土層断面（南西から）
図版 35　出土土器１
図版 36　出土土器２
図版 37　出土石器１
図版 38　出土石器２
図版 39　出土石器・木器・獣骨
図版 40　１．山門牛島遺跡４次調査区遠景（西から）
２．山門牛島遺跡４次調査区全景（東から）
図版 41　１．山門牛島遺跡４次調査区全景（西から）
２．山門牛島遺跡４次調査区全景（上空から）
図版 42　１．１号掘立柱建物跡（南西から）　２．１号掘立柱建物跡柱掘形土層堆積状況
３．１号掘立柱建物跡屋内土坑（北西から）
図版 43　１．１号竪穴住居跡（北東から）　２．１号竪穴住居跡屋内小穴土層堆積状況（北東から）
３．１号竪穴住居跡屋内小穴（北東から）
図版 44　１．１号竪穴住居跡屋内土坑土層堆積状況（北東から）
２．１号竪穴住居跡屋内土坑（北東から）　３．２号土坑（南東から）
図版 45　１．１・２号溝状遺構（上空から）　２．３号溝状遺構（上空から）
３．１・２号土坑出土土器
図版 46　山門牛島遺跡 5 次調査区全景（上空から）
図版 47　１．山門牛島遺跡 5 次調査区遠景（北東から）　２．5 次調査区遠景（西から）
図版 48　１．空中撮影風景　２．5 次調査区北側基本土層（北西から）
３．南側基本土層（北西から）
図版 49　１．1 号竪穴住居跡（北西から）
２．2 号竪穴住居跡（南東から）
３．3 号竪穴住居跡（北東から）
図版 50　１．1 号土坑（南から）　２．2 号土坑（北西から）
３．3 号土坑（北東から）
図版 51　１．4 号土坑（南西から）　２．5 号土坑（北から）
３．5 号土坑土層（北から）
図版 52　１．6 号土坑（南西から）　２．7 号土坑（東から）
３．7 号土坑土層（北西から）
図版 53　１．北端 1 ～ 7 号溝状遺構分布状況（上空から）
２．南端 1 および 6 ～ 10 号溝状遺構分布状況（上空から）
３．1、5 および 6 号溝切り合い状況（西から）
図版 54　１．1 号溝状遺構ベルト 1 土層（北から）
２．1 号溝状遺構ベルト 2 土層（北から）
３．1 号溝状遺構ベルト 3 土層（北から）
図版 55　１．1 号溝状遺構（ベルト 4）および 5 号溝切り合い状況土層（北から）
２．1 号溝状遺構ベルト 5 土層（北から）
３．1 号溝状遺構ベルト 6 土層（北から）

図版 56　１．３－１号溝状遺構ベルト土層（南から）
２．３－２号溝状遺構東側ベルト土層（西から）
３．３－２号溝状遺構西側ベルト土層（東から）
図版 57　１．5 号溝土層（北東から）
２．6 号溝状遺構東側ベルト土層（西から）
３．6 号溝状遺構西側ベルト土層（東から）
図版 58　１．7 号溝状遺構南側ベルト土層（南から）
２．7 号溝状遺構北側ベルト土層（南から）
３．8 号溝状遺構土層（南から）
図版 59　１．9 号溝状遺構土層（北から）
２．10 号溝状遺構北側ベルト土層（北から）
３．10 号溝状遺構南側ベルト土層（北から）
図版 60　出土土器および石器

挿図目次

第１図　２次調査区全体図（1/300）…… 1
第２図　１号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 2
第３図　１号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 2
第４図　１号井戸実測図（1/30）…… 3
第５図　１号井戸出土土器実測図１（1/3）…… 4
第６図　１号井戸出土土器実測図２（1/3）…… 5
第７図　１号井戸出土土器実測図３（1/3）…… 6
第８図　１号井戸出土土器実測図４（1/3）…… 7
第９図　２号井戸実測図（1/30）…… 7
第 10 図　２号井戸出土土器実測図（1/3）…… 8
第 11 図　土坑出土土器実測図（1/3）…… 8
第 12 図　１号溝状遺構土層断面図（1/20）…… 9
第 13 図　溝状遺構出土土器実測図（1/3）…… 10
第 14 図　流路（暗褐色土層）出土土器実測図 1（1/3）…… 11
第 15 図　流路（暗褐色土層）出土土器実測図 2（1/3）…… 12
第 16 図　流路（暗褐色土層）出土土器実測図 3（1/3）…… 13
第 17 図　流路（暗褐色土層）出土土器実測図 4（1/3）…… 14
第 18 図　流路（暗黄褐色シルト層）出土土器実測図 5（1/3）…… 15
第 19 図　流路（灰色シルト層）出土土器実測図 6（1/3）…… 16
第 20 図　流路（灰色シルト層）出土土器実測図 7（1/3）…… 17
第 21 図　流路（灰色シルト層）出土土器実測図 9（1/3）…… 18
第 22 図　流路（灰色シルト層）出土土器実測図 9（1/3）…… 19
第 23 図　流路（灰色シルト層）出土土器実測図 10（1/3）…… 20

第 24 図　流路（灰色シルト層）出土土器実測図 11（1/3）…… 21
第 25 図　流路（灰色シルト層）出土土器実測図 12（1/3）…… 22
第 26 図　暗茶灰色土層出土土器実測図 1（1/3）…… 23
第 27 図　暗茶灰色土層出土土器実測図 2（1/3）…… 24
第 28 図　その他の遺構・層位出土石器実測図１（2/3・1/2）…… 25
第 29 図　その他の遺構・層位出土石器・土製品実測図 2（2/3・1/2）…… 26
第 30 図　３次調査１区略遺構配置図（1/400）…… 27
第 31 図　３次調査１区遺構全体図（1/300）…… 28
第 32 図　１・8 号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 29
第 33 図　２号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 30
第 34 図　３・４号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 31
第 35 図　５～７号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 33
第 36 図　９号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 34
第 37 図　10 号掘立柱建物跡・４号土坑実測図（1/60）…… 35
第 38 図　11・12 号掘立柱建物跡・３号土坑実測図（1/60）…… 36
第 39 図　１・３～６・８～ 12 号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/ ３）…… 37
第 40 図　１・２・５号土坑実測図（1 は 1/40、2・3 は 1/20）…… 38
第 41 図　１号土坑出土土器実測図（１は 1/4、他は 1/3）…… 39
第 42 図　１・2・４号土坑出土土器実測図（1/3）…… 40
第 43 図　５号土坑出土土器実測図（1/3）…… 41
第 44 図　柵跡、1・2・4・8・10 号溝状遺構実測図・土層断面実測図（1/60）…… 42
第 45 図　１～４号溝状遺構出土土器実測図（1/3）…… 43
第 46 図　５・６号溝状遺構出土土器実測図（６は 1/4、他は 1/3）…… 45
第 47 図　７・８号溝状遺構出土土器実測図（1/3）…… 47
第 48 図　９号溝状遺構出土土器実測図（1/3）…… 48
第 49 図　10 号溝状遺構出土土器実測図（１は 1/4、他は 1/3）…… 49
第 50 図　流路跡土層断面実測図（1/80）…… 50
第 51 図　流路跡出土土器実測図１（15 は 1/4、他は 1/3）…… 51
第 52 図　流路跡出土土器実測図２（１・２・６～９は 1/4、他は 1/3）…… 52
第 53 図　流路跡出土土器実測図３（１・２・10 は 1/4、他は 1/3）…… 53
第 54 図　流路跡出土土器実測図４（1/3）…… 54
第 55 図　流路跡出土土器実測図５（1/3）…… 55
第 56 図　流路跡上層・中層出土土器実測図（1/3）…… 56
第 57 図　流路跡下層出土土器実測図（１・２は 1/4、他は 1/3）…… 57
第 58 図　流路跡２・流路跡８層出土土器実測図（１～３は 1/4、他は 1/3）…… 58
第 59 図　ピット・撹乱出土土器実測図（５・６は 1/4、他は 1/3）…… 61
第 60 図　出土石器実測図１（2/3）…… 62
第 61 図　出土石器実測図２（1 ～ 4 は 2/3、他は 1/3）…… 63
第 62 図　出土石器・鉄製品・土製品実測図（3・13 ～ 15 は 1/2、他は 1/3）…… 64
第 63 図　３次調査２区略遺構配置図（1/1,000）…… 66
第 64 図　３次調査２区遺構全体図（1/300）…… 67
第 65 図　１・２号竪穴住居跡遺構実測図（1/60）…… 68

第 66 図　１号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 69
第 67 図　１号墓実測図（1/20）…… 69
第 68 図　１～４号土坑実測図（1/40）…… 71
第 69 図　５～８号土坑実測図（1/40）…… 72
第 70 図　１号竪穴住居跡、1・5・6 号土坑出土土器実測図（13 ～ 16 は 1/4、他は 1/3）…… 73
第 71 図　１～４・７号波板状遺構実測図（1/60）…… 75
第 72 図　５・６・８号波板状遺構実測図（1/60）…… 77
第 73 図　９～ 11 号波板状遺構実測図（1/60）…… 79
第 74 図　溝状遺構・流路跡土層断面図（1/60）…… 80
第 75 図　１号溝状遺構出土土器実測図 1（１・７～９・11 は 1/4、、他は 1/3）…… 82
第 76 図　１号溝状遺構出土土器実測図２（１・６～ 10 は 1/ ３、他は 1/ ４）…… 83
第 77 図　１号溝状遺構出土土器実測図３（３・９・10・18 ～ 20 は 1/4、他は 1/3）…… 84
第 78 図　１号溝状遺構出土土器実測図４（７・９・10 は 1/ ３、他は 1/ ４）…… 85
第 79 図　１号溝状遺構出土土器実測図５（４～６・８は 1/4、他は 1/3）…… 86
第 80 図　１号溝状遺構出土土器実測図６（６は 1/3、他は 1/4）…… 87
第 81 図　１号溝状遺構出土土器実測図７（５は 1/4、他は 1/3）…… 89
第 82 図　１号溝状遺構出土土器実測図８（２・９は 1/4、他は 1/6）…… 90
第 83 図　１号溝状遺構出土土器実測図９（７～ 12 は 1/4、他は 1/3）…… 91
第 84 図　１号溝状遺構出土土器実測図 10（1/3）…… 92
第 85 図　１号溝状遺構出土土器実測図 11（４は 1/4、他は 1/3）…… 93
第 86 図　１号溝状遺構出土土器実測図 12（1/3）…… 95
第 87 図　１号溝状遺構出土土器実測図 13（９は 1/4、他は 1/3）…… 96
第 88 図　５～９・11・12・14・16・17 号溝状遺構、1 号流路出土土器実測図（1/3）…… 99
第 89 図　２号流路出土土器実測図１（３は 1/4、他は 1/3）…… 104
第 90 図　２号流路出土土器実測図２（１・２・15・16・22 は 1/4、他は 1/3）…… 105
第 91 図　出土石器実測図１（2/3）…… 107
第 92 図　出土石器実測図２（１・２は 2/3、他は 1/3）…… 108
第 93 図　出土石器実測図３（７は 1/4、8 は 1/10、他は 1/3）…… 109
第 94 図　出土木製品実測図（1/ ６）…… 110
第 95 図　祭祀遺構と類例資料（１は 1/40、２・４は 1/80、３・５は 1/6、６は 1/30、７は 1/4）111
第 96 図　弥生時代北部九州の腰掛け・脚付盤（1/15）…… 112
第 97 図　４次調査区周辺地形図（1/1,000）…… 116
第 98 図　４次調査区全体図（1/300）…… 117
第 99 図　１号掘立柱建物跡・１号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 118
第 100 図　１・２号土坑実測図（1/30）…… 119
第 101 図　１・２号土坑出土土器実測図（1/4）…… 121
第 102 図　５次調査区基本土層（1/40）…… 124
第 103 図　５次調査区全体図（1/250）…… 125
第 104 図　1 ～ 3 号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 125
第 105 図　1 ～ 3 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）…… 126
第 106 図　1 ～ 6 号土坑実測図（1/30）…… 128
第 107 図　1 ～ 3 号土坑出土土器実測図（1/3）…… 129

第 108 図 4・5 号土坑出土土器実測図（1/3）…… 130
第 109 図 6・7 号土坑出土土器実測図（1/3）…… 132
第 110 図 7 号土坑実測図（1/30）…… 133
第 111 図 溝状遺構土層断面図および 1・5・6 号溝状遺構重複地点実測図（1/40、平面図は 1/80） 134
第 112 図 1・2 号溝状遺構出土土器実測図（1/3）…… 135
第 113 図 3-1 および 5 ～ 7 号溝状遺構出土土器実測図（1/3） …… 136
第 114 図 1 号落ち込み土層断面図（1/50）…… 138
第 115 図 出土石器実測図（1 は 2/3、他は 1/2） …… 139
第 116 図 出土石器実測図（1 は 2/3、他は 1/2）…… 140
第 117 図 山門牛島遺跡遺構変遷図１ （1/4,000）…… 143
第 118 図 山門牛島遺跡遺構変遷図２ （1/4,000）…… 144
第 119 図 山門牛島遺跡 3 次 2 区 12・18 号溝状遺構（1/160）…… 145
第 120 図 西海身道推定線（1/50,000）…… 145

1　２次調査

1　調査の概要

山門牛島遺跡２次調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡１棟、井戸２基、弥生時代中期の溝状遺構５条、流路（旧河川）などが検出された。ほかには不正形の溝もしくは土坑状の溜まりがあるものの顕著な遺構ではない。遺構の先後関係では、発掘区の中央部を南北に走る流路が埋没した後に１号溝状遺構が開削される。さらに１号溝状遺構が機能を終え、完全に埋没し１号竪穴住居跡が営まれる。１号井戸は流路の最終埋没土である暗褐色土層から切り込まれ、１号溝状遺構との層位的な先後関係はわからないが、出土遺物からみるとこの時期に１号竪穴住居跡と共存していたものと思われる。２号井戸についても同時期に機能していた可能性が高い（図版２・3、第１図）。

２次調査区の基本層序は上層から、灰色土（表土）→黄褐色粘土層→暗茶灰色土層（遺物包含層）で、暗茶灰色土層下層の黄褐色粘土層面が遺構面となる。また、発掘区中央部では流路の最終埋没土である暗褐色粘土層の上面が遺構面となる。発掘区での遺構検出面は全体的に北東部から南西部にむけて緩く傾斜し、その高低差は北東隅部と南西隅部で 20 ㎝ほどある。調査面積は 326 ㎡。

出土遺物には弥生土器や土師器と、磨製石斧・石鏃・凹石などがあるが、１号井戸から出土した古墳時代前期の土師器はこの地域における当該期の良好な一括資料として特筆できる。

２次調査は、平成 18（2006）年 12 月 26 日から重機による対象地の表土剥ぎを始め、翌 19（2007）年１月 11 日に発掘関係機材及び事務所となるユニットハウスを搬入・設置するとともに作業員を投入した。周辺整備の後、翌日から発掘区の北側から遺構検出作業開始した。あわせて座標と基準点を発掘区内に移動する作業を行った。その後、発掘区内の遺構の検出・掘削をしながら遺構平面図・断面図・土層図作成、写真撮影を２月８日まで行い、引き続き遺構の断ち割りなどの精査に入った。精査が終了した部分から随時人力による埋め戻しをしながら、２月 21 日には人力による作業を終え、２月 26 日に埋め戻しを完了した。

2　遺構と遺物

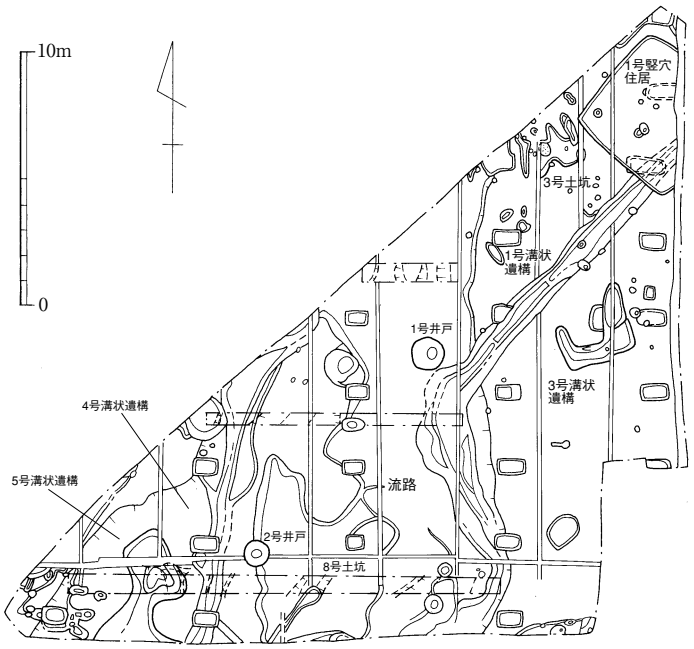
（1）竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（図版 3、第２図）

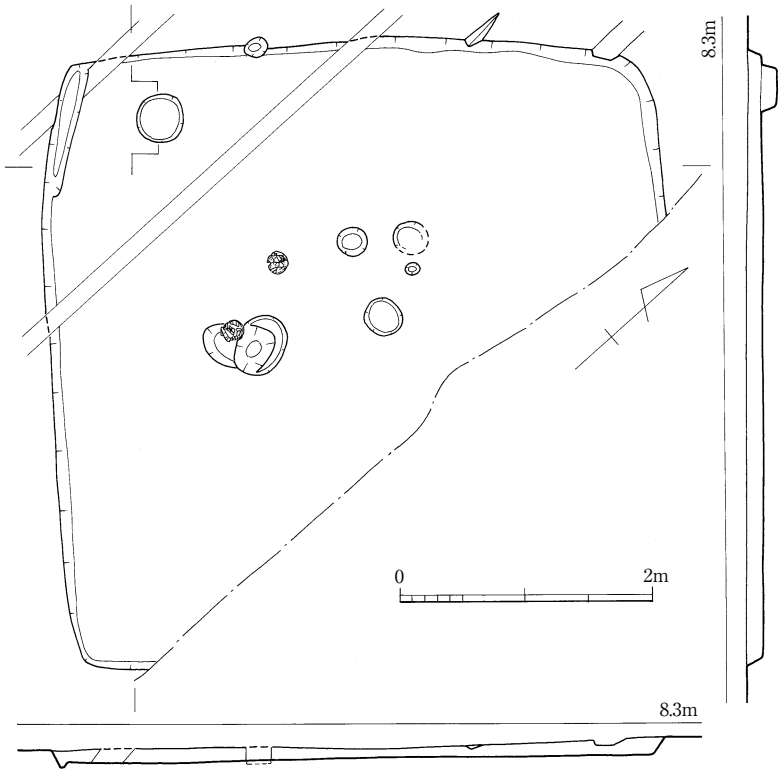
発掘区の北東隅部で検出した。東側の 1/3 ほどは発掘調査区外となる。平面プランは隅部がやや丸みを帯びた方形を呈し、規模は 5.00 ｍ× 4.84 ｍ、深さ 0.12 ｍを測る。南側の住居壁に沿って長さ 1.00 ｍ、幅 0.10 ｍほどの溝が存在する。中央部より南西部に寄った位置で長軸長 48 ㎝×短軸長 38 ㎝、深さ９㎝の浅い土坑を確認した。埋土には炭化物が混じる。住居跡床面で浅いピットを数個確認したが、いずれも明確に主柱穴であるとは言いがたい。１号竪穴住居跡は、１号溝状遺構を切っている。

出土土器（第３図１～６）

１は小形の壺。調整は体部外面に斜位のハケを施した後下半部はナデ。２



第１図　山門牛島遺跡２次調査区全体図（1/300）



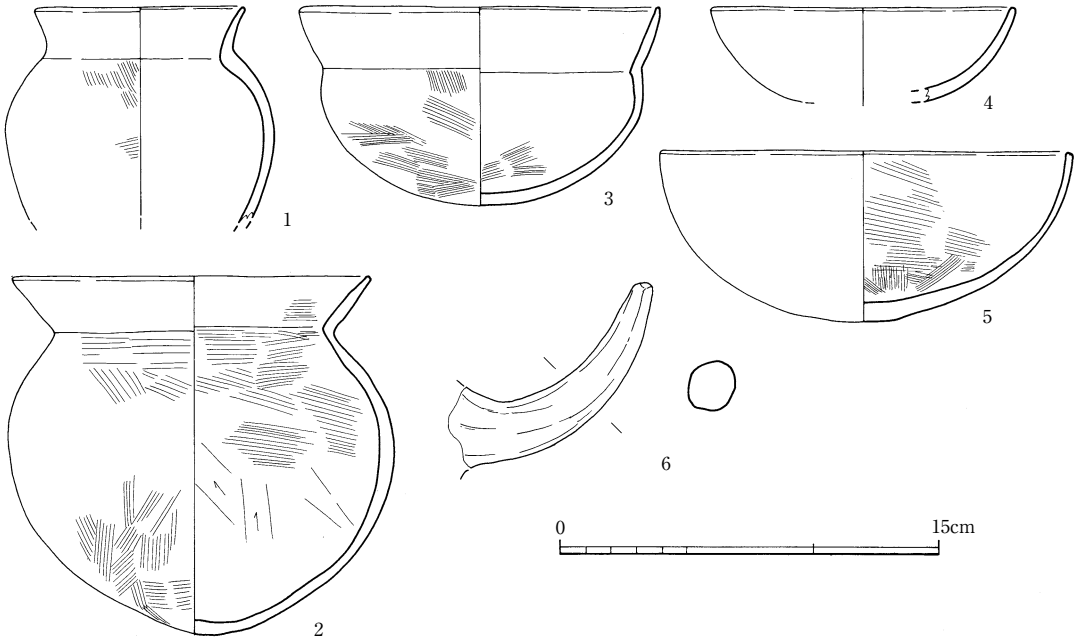
第２図　１号竪穴住居跡実測図（1/60）

は甕。口縁端部に面をなす。丸底であるが、尖底の名残をとどめる。調整は外面が斜位のハケ、体部内面はヘラケズリ後上半部はハケ。体部の肩部から中位にかけて器壁がやや厚みをもつ。色調は暗茶褐色。３は小形丸底壺。体部の調整は内外面とも斜位の細かなハケ。４・５は丸底の鉢。５の底部は平底気味になる。内面の調整はハケ。６は細身の把手。成形後、丁寧になでて仕上げている。色調は灰褐色を呈する。胎土は精良で色調は淡灰褐色を呈する。２・３・５は住居跡の床面直上から出土した。

（２）井戸

１号井戸（図版４、第４図）

発掘区の中央部北寄り、流路の埋土である暗褐色土層上面で検出した。平面プランは円形で、上端径 1.40 m× 1.32 m、下端径 0.48 m、深さ 1.70 mを測る。断面形は、検出面から 55 cmほど下がったレベルで稜を持って上方に広がる形状となる。この稜の部分には擦痕もしくは押圧痕のような溝状の凹みが残る。底面から 50 cmほど浮いて長さ 25 cm、幅 20 cmの板材が鍵形に配置されており、東側では複数の板材が内側にずれ込んだ状態で出土した。また、北側隅部では横板に接して、幅 20 cm、長さ 25 cmの縦板と径２

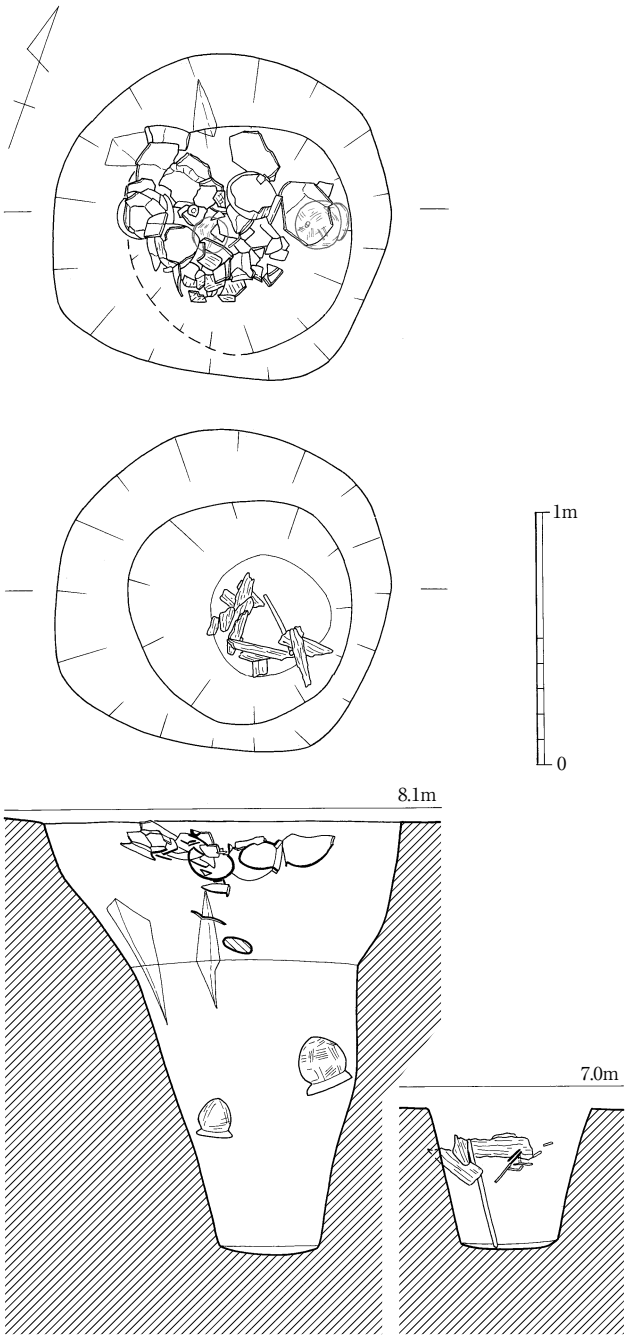


第３図　１号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

cmの棒状の木材が確認できた。いずれも腐朽が著しいため加工痕跡は確認できなかったものの、材の配置から考えると方形横板枠構造である可能性がある。遺物は、井戸埋没後の窪みに完形土器が一括して投棄された状態で出土した。さらに、井戸下半部の中位でも完形の甕が口縁部を下に向けた状態で出土している。なお、井戸の底面は灰色粘土層に達する。

出土土器（図版6、第5～7図）

１～10・12は甕。７・８は尖り底の名残をとどめ、１・８は平底気味となる。口縁部形状は１のように端部が面をなすもの、４～８のように端部をつまみ上げるものがみられ、後者では端部を丸く肥厚させる３～５と、明瞭に稜を形成する６のようなバリエーションがみられる。外面調整は３・６・12についてはハケであるが、その他はタタキの痕跡を残す。１は特にタタキ痕が顕著で、底部は斜位、胴部は横位に叩き分け、その後に斜位のハケを施す。内面にもハケを施している。甕の内面調整はいずれもケズリであるが、特に１は器壁が厚くぼってりした感がある。１の口縁部外面には成形時の指頭圧痕が遺存し、また、２・10の底部には指頭圧痕が残る。６の肩部は横位のハケを施す。口径15.2～19.1cm、器高16.1～22.6cmを測る。１・７は井戸下層から出土した完形品。11・13・14は壺。11・14とも底部は凸レンズ状の平底で、口縁端部をつまみだし丸く収める。外面調整はタタキの後ハケ。内面調整はケズリ後ハケ。13は二重口縁壺で、口縁部は欠失する。調整は外面がハケ、内面は底部が縦位のケズリ、肩部～胴部にかけては横位のケズリを施す。口径17.7～19.6cm、器高26.5～31.3cm。15は小形器台。台部の中位にわずかに稜をもつ。脚部は直線的に開き、中位に径８mmの穿孔を３ヶ所にあける。復元口径11.5cm、器高8.6cm。16は高坏。17～21は混入した弥生土器。17～19は口縁端部を肥厚させる亀の甲タイプ。20はＴ字形の口縁、21は小形の甕でＬ字形口縁で端部を丸く肥厚させる。22は底部。23は高坏の脚部。外面に丹を塗布する。



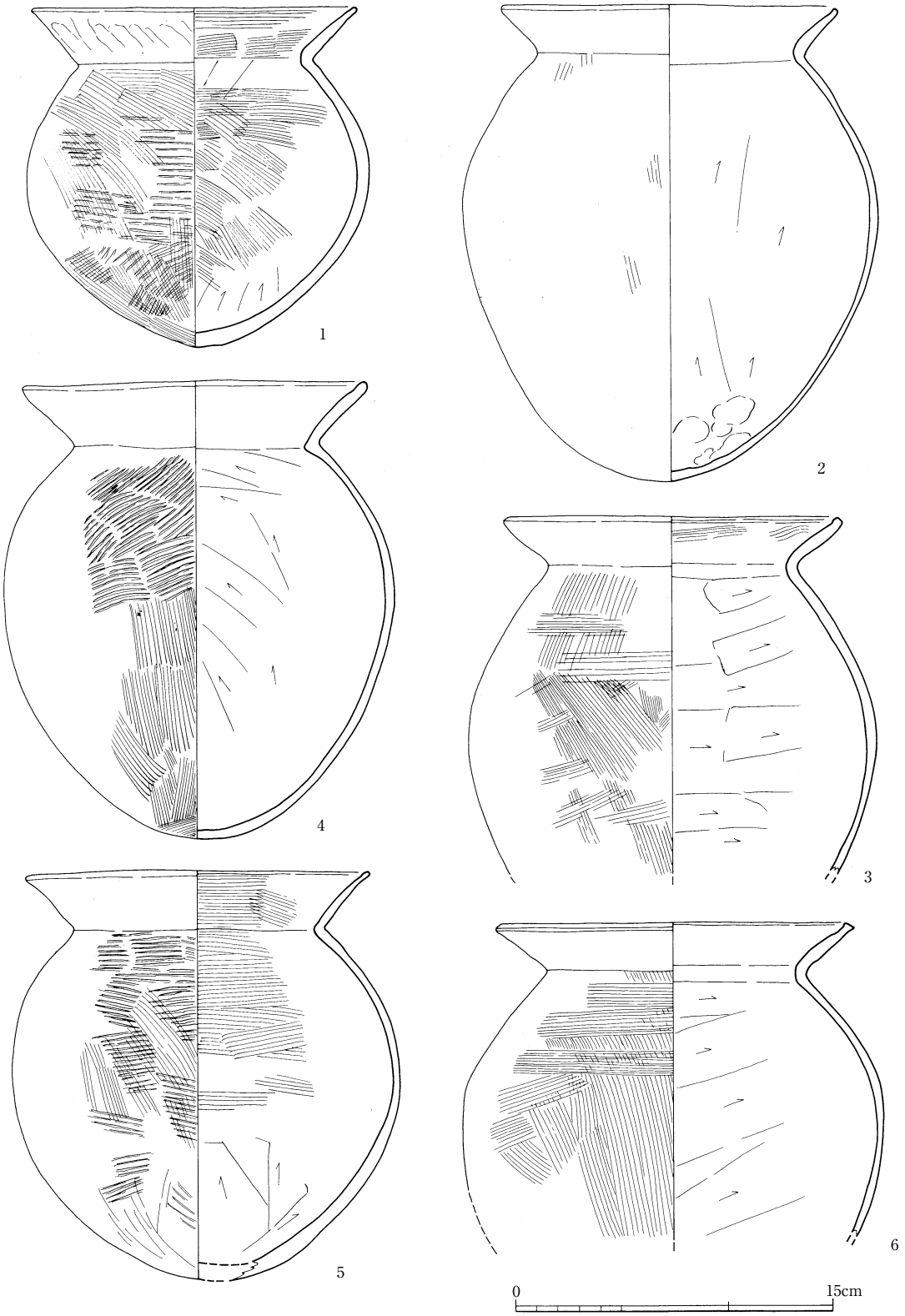
第４図　１号井戸実測図（1/30）

２号井戸（図版5、第9図）

発掘区の南西部で検出した。平面プランは楕円形で、上端径1.20ｍ×1.02ｍ、下端径0.54ｍ×0.47ｍ、深さ1.52ｍを測る。断面形は、検出面から0.5ｍほど下位で稜をもって上方に広がる形状となる。床面から20cmほど浮いた状態で完形の甕が出土した。埋土は上半が灰色粘質土、下層が暗灰色粘土。底面は灰色粘土層に達する。

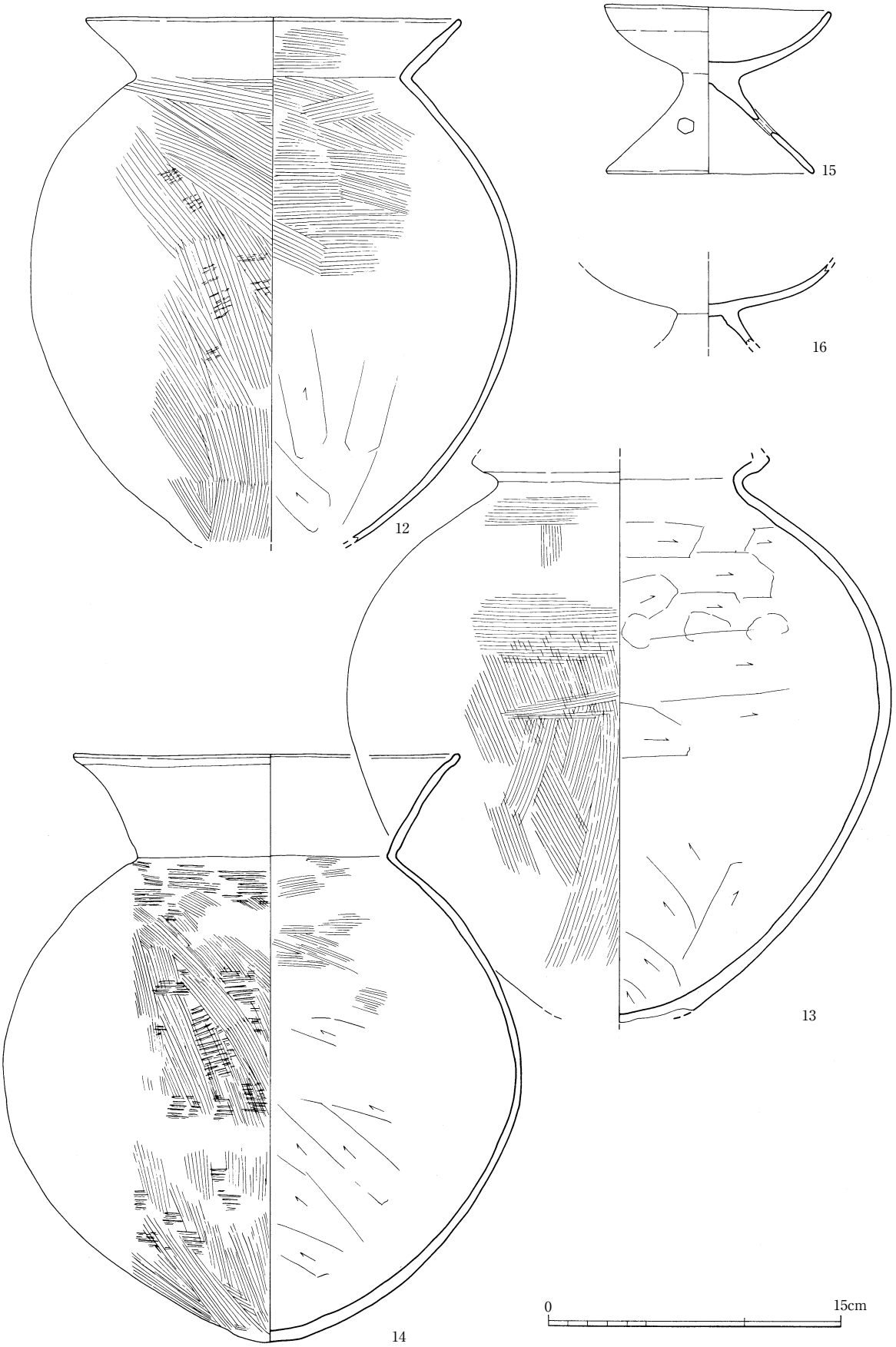
出土土器（図版６、第５～８図）

１は完形の甕。卵倒形の体部にやや外反する口縁がつく。口縁端部はつまみ上げる。調整は、外面がタタキの後ハケ、内面はケズリ後体部上半がハケ。口縁部外面にもタタキの痕跡を残す。口径16.4㎝、器高22.4㎝を測る。井戸の下層から出土した。２は混入した弥生土器甕の底部。

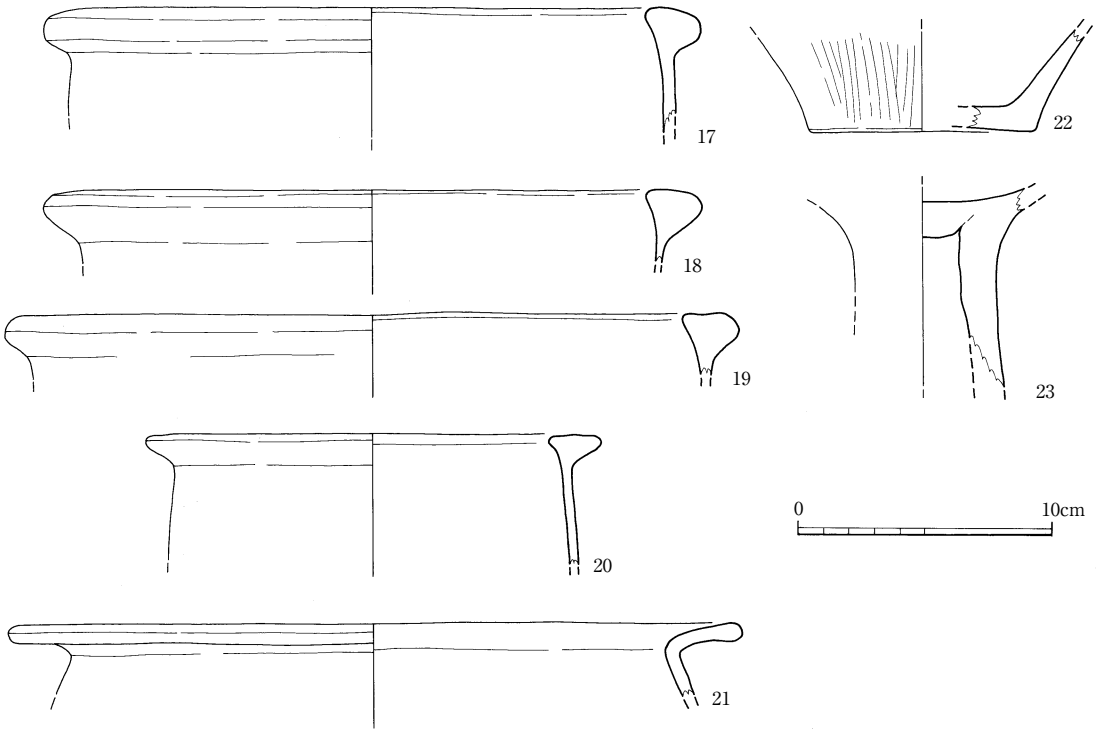


第５図　１号井戸出土土器実測図１（1/3）

第６図　１号井戸出土土器実測図２（1/3）



第７図　１号井戸出土土器実測図３（1/3）



第８図　１号井戸出土土器実測図４（1/3）

（３）土坑

流路の両側において、暗褐色粘質土を埋土とする土坑状の遺構を検出したが、いずれも不正形な浅い溜まりである。

３号土坑（第１図）

発掘区の北東部、１号竪穴住居跡の東側で検出した不正形な溜まり状の土坑。深さ５㎝を測る。

出土土器（第11図１）

１は甕。口縁部はＬ字状を呈し、内側の端部を内方につまみ出す。口縁の平坦面にはヘラ状工具の押圧を施して文様として巡らせる。口縁の下部には突帯状の稜を廻す。

８号土坑（第１図）

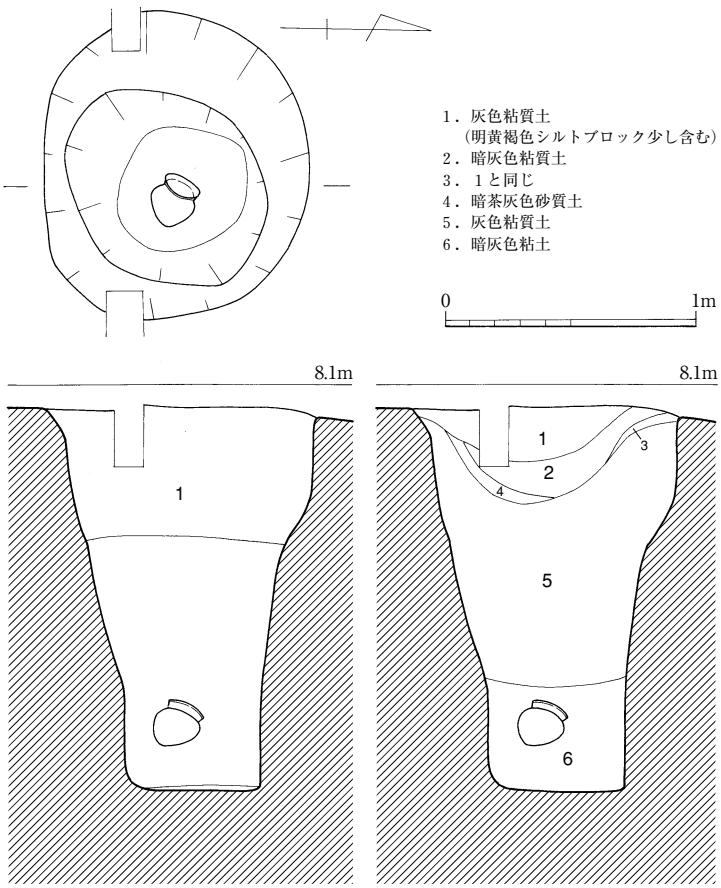
発掘区の東部で検出した溝状の土坑で、平面プランは凹字形を呈する。規模は東西長2.90ｍ、南北長2.70ｍ、深さ0.15ｍを測る。

出土土器（第11図２～４）

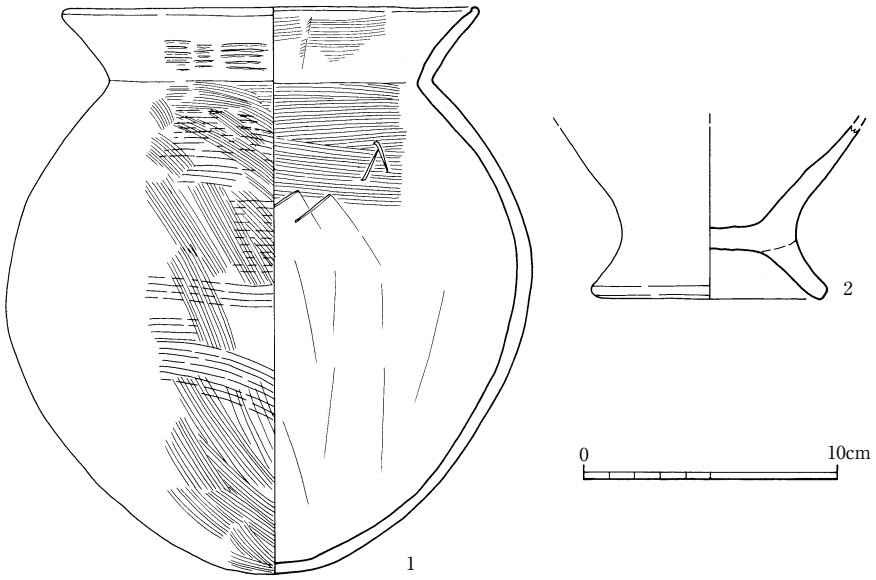
２は亀の甲タイプの甕の口縁部。３はく字形口縁の甕。摩滅が著しく調整不明。４は甕の脚部。外面の調整はハケ。

９号土坑（第１図）

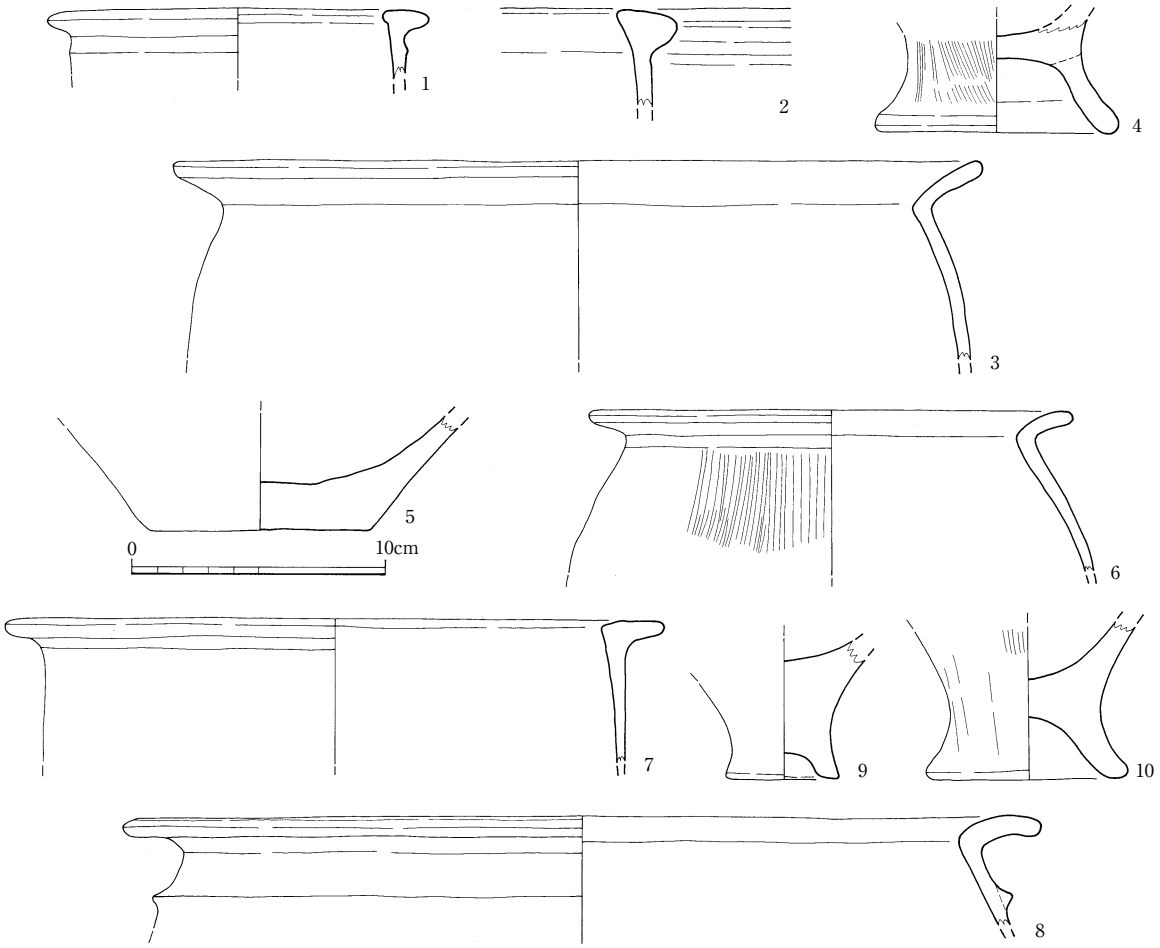
発掘区の南西部で検出した不正形な



第９図　２号井戸実測図（1/30）



第 10 図　２号井戸出土土器実測図（1/3）



第 11 図　土坑出土土器実測図（1/3）

溜まり状の土坑。深さ 0.20 mを測る。

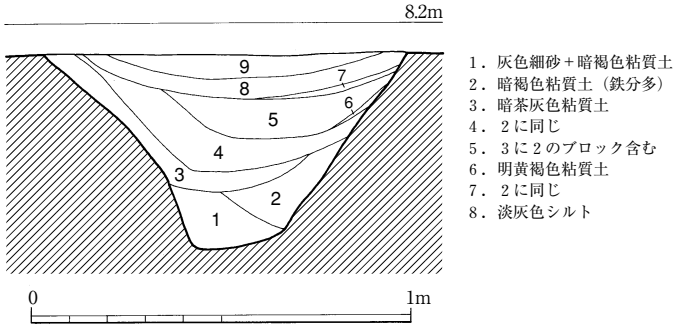
出土土器（第 11 図５～ 10）

５は壺の底部。６～ 10 は甕。６の外面調整は縦位のハケ。８は口縁部下に断面三角形の突帯を巡らせる。復元口径は６が 18.8 ㎝、７が 26.0 ㎝、８が 36.2 ㎝。

（４）溝状遺構

１号溝状遺構（図版２・３、第１・12 図）

発掘区の北東部から南側に向かって蛇行しながら流れる。上端幅 0.50 ～ 1.25 m、下端幅 0.20 ～ 0.65 m、深さ 0.51 ～ 1.07 mを測る。また、長さ 3.20 mほどにわたって深さ 0.37 mと他位より底面が一段高くなっている。溝の断面形状は逆台形を呈する。埋土は下層が灰色細砂と暗褐色粘土の混成土、中層～上層にかけては粘質土とシルト層の互層の堆積で、西側から先に埋没している。流路埋没後に開削され、１号竪穴住居跡に切られる。



第 12 図　１号溝状遺構土層断面図（1/20）

出土土器（第 13 図１～５）

１～３は甕の口縁部。１は亀の甲タイプ。２はＬ字形に屈曲させ、端部は丸く収める。調整は外面が縦位のハケ、内面は横委のハケ。３はく字形口縁で端部を上方につまみ出す。頸部下に断面三角形の突帯を貼付する。調整は内外面とも斜位のハケ。４は外面から口縁部内面にかけて丹を塗布する。精製。復元口径 31.0 ㎝。５は椀。復元口径 15.0 ㎝。

３号溝状遺構（図版３、第１図）

発掘区の東側で検出した凹字形を呈する溝状の遺構。上端幅は東西 2.90 m、南北 2.70 m、下端幅 0.12 ～ 0.73 m、深さ 0.17 ㎝を測る。土器の砕片が出土したが図示できるものがない。

４号溝状遺構（図版３、第１図）

発掘区の西部で検出した南北方向の溝状遺構。北側は溝幅が広く、南半部では１mほどの安定した溝幅を測る。上端幅 0.50 ～ 1.55 m、下端幅 0.17 ～ 1.14 m、深さ 0.11 m。

出土土器（第 13 図６～ 13）

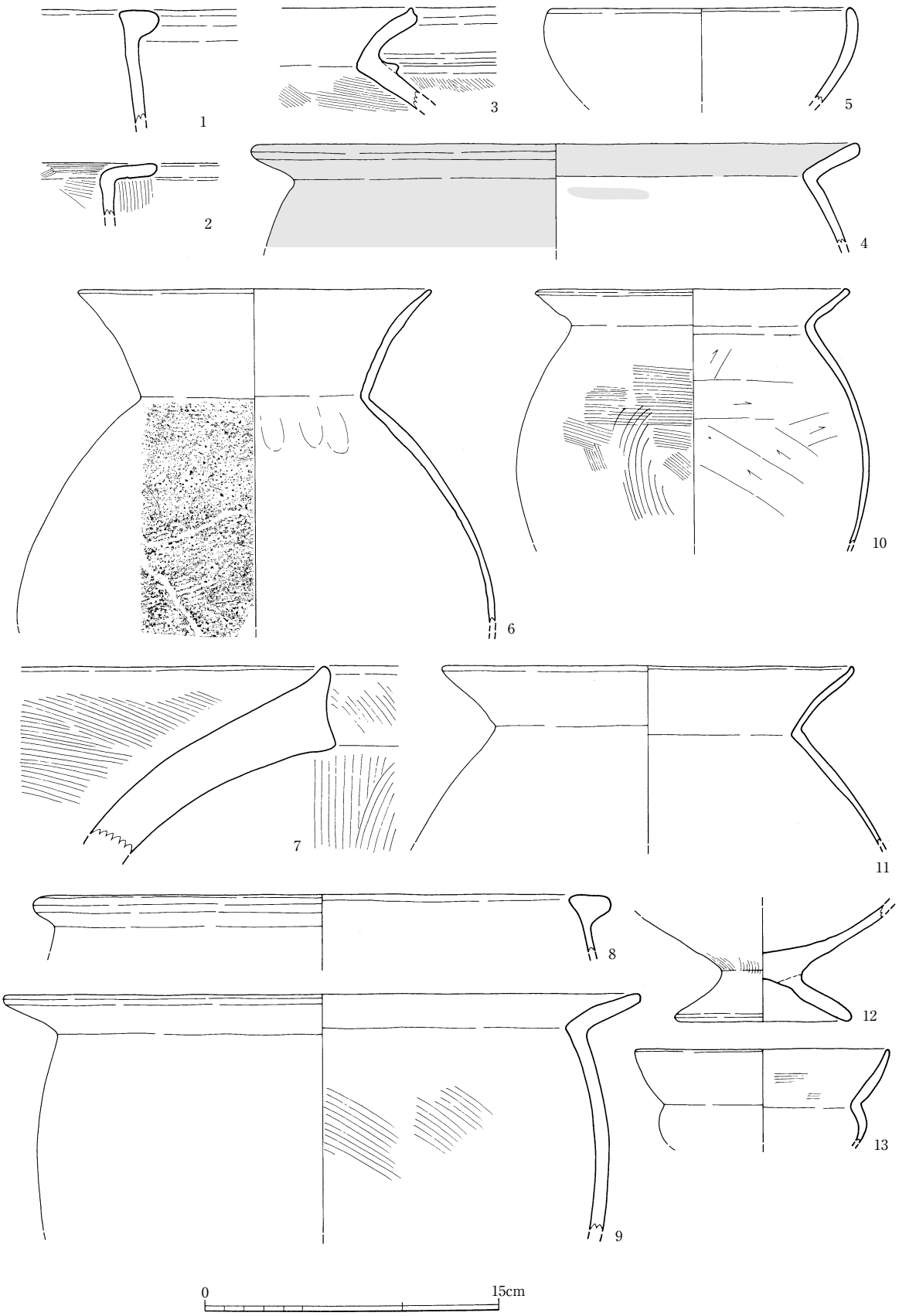
６・７は壺。６は扁球形の体部に緩く外反する長い口縁がつく。摩滅が著しいが外面にはタタキの痕跡がみられる。また、頸部内面にナデによる指頭圧痕が残る。７は大形甕の口縁部破片。端部に面をなす。調整は内外面ともハケ。８～ 11 は甕。８は亀の甲タイプ。復元口径 29.4 ㎝。９は口縁部をく字形となるもの。10 は口縁端部を上方につまみ上げる。調整は外面がハケ、内面はケズリ。復元口径 16.0 ㎝を測る。11 も口縁端部を上方につまみ上げるが、外端部が丸みを帯びる。調整は摩滅が著しく不明。12 は脚付鉢。復元脚部径 9.0 ㎝を測る。13 は小形丸底壺。調整は口縁部の内面がハケ。復元口径 13.0 ㎝。

５号溝状遺構（図版３、第１図）

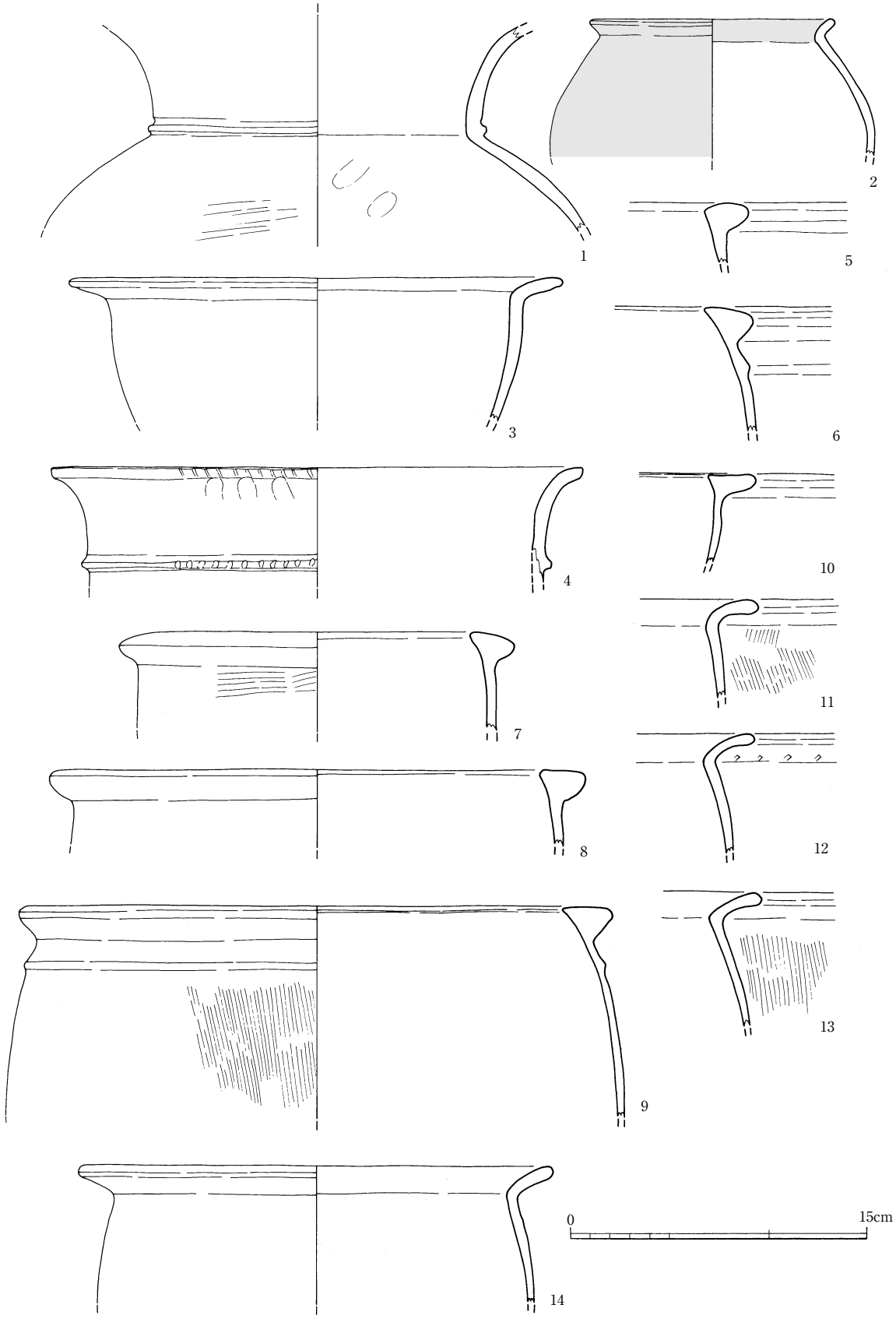
発掘区の西端部で検出した溝。東側の肩部のみしか確認していない。

流路（図版２・３、第１図）

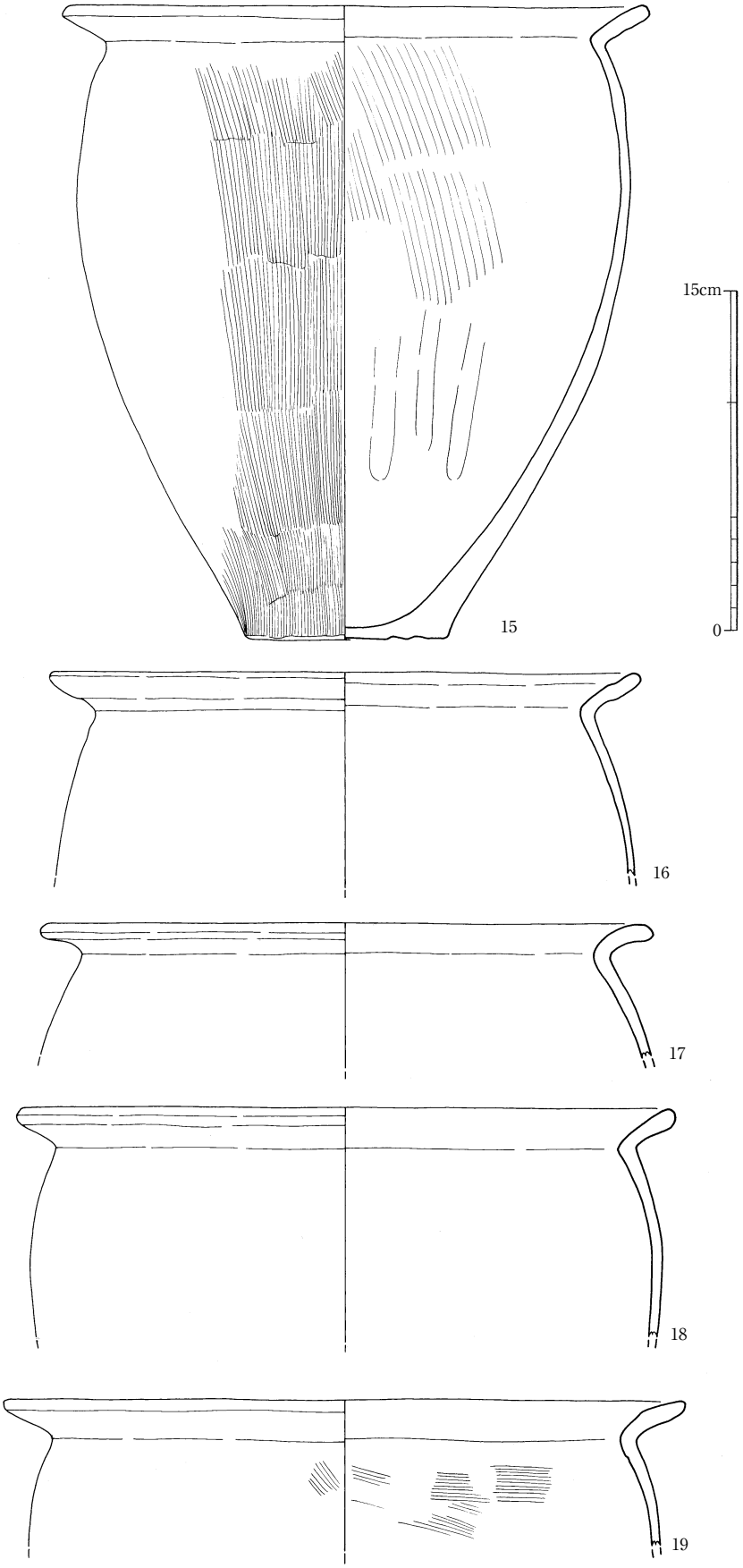
発掘区の中央を南北に走る溝状遺構で発掘区の南北に延びる。溝幅は出入りが著しく最も狭いところで 10.0 m、広い部分で 18.6 mを測り、概ね 10 mほどとなる。深さは最も深いところで 1.25 mを測る。底面はほぼフラットで、東側はやや深く落ち込む。調査期間に制約があったため全掘はしていないが、南北２本のトレンチ調査によって、規模および堆積状況を確認した。堆積土の基本層序は下層から灰色シルト層（この層の上層は暗黄灰色シルト）→暗黄褐色シルト層→暗褐色土層（暗褐色粘質土・暗褐色粘土）となり、部分的に砂層や砂礫層も見られるが、流れた形跡はそれほど顕著ではない。なお、１号井戸、２号井戸、１号溝状遺構は流路の埋没後に営まれている。



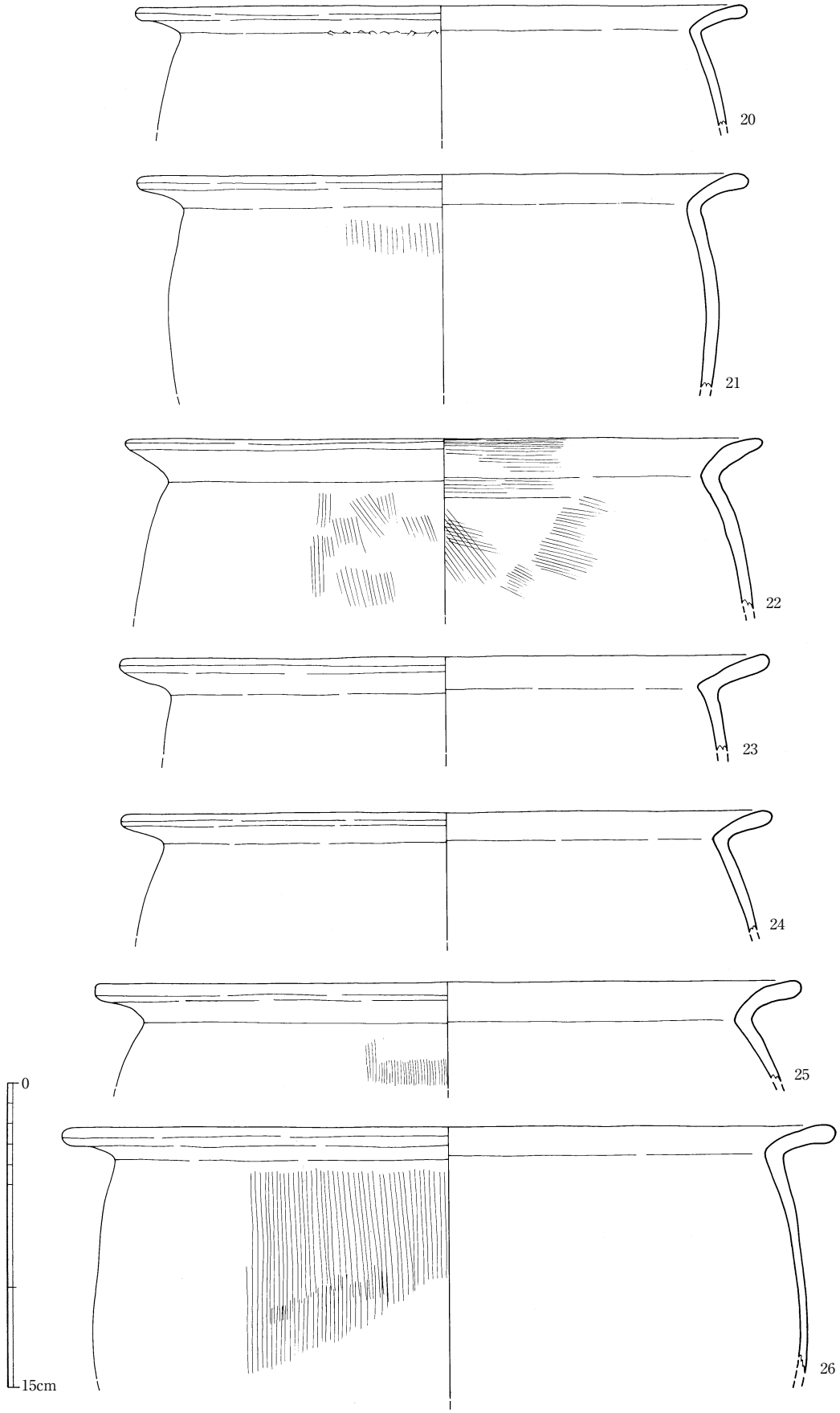
第 13 図　溝状遺構出土土器実測図（1/3）



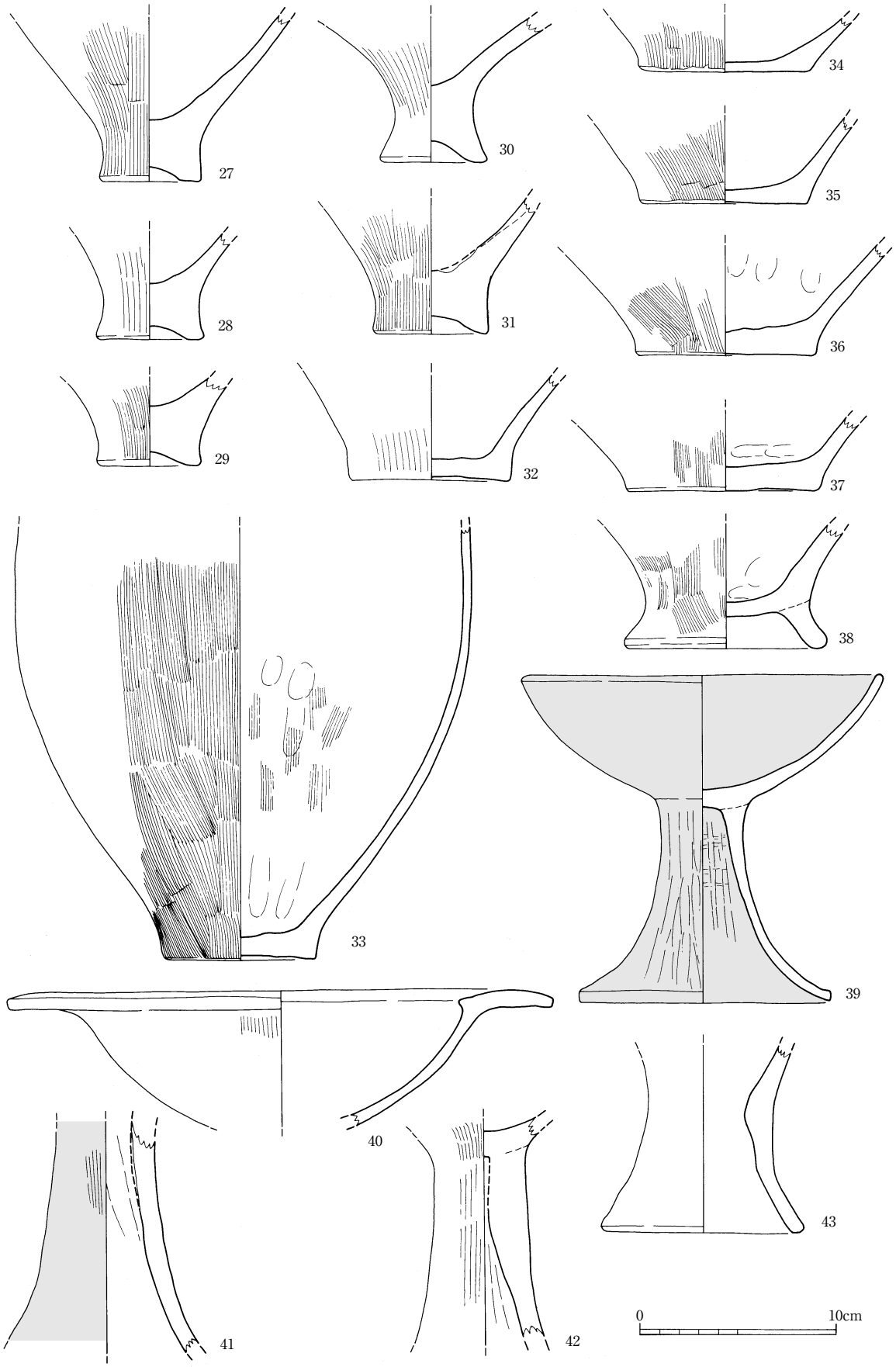
第 14 図　流路（暗褐色土層）出土土器実測図 1（1/3）



第 15 図　流路（暗褐色土層）出土土器実測図２（1/3）



第 16 図　流路（暗褐色土層）出土土器実測図 3（1/3）

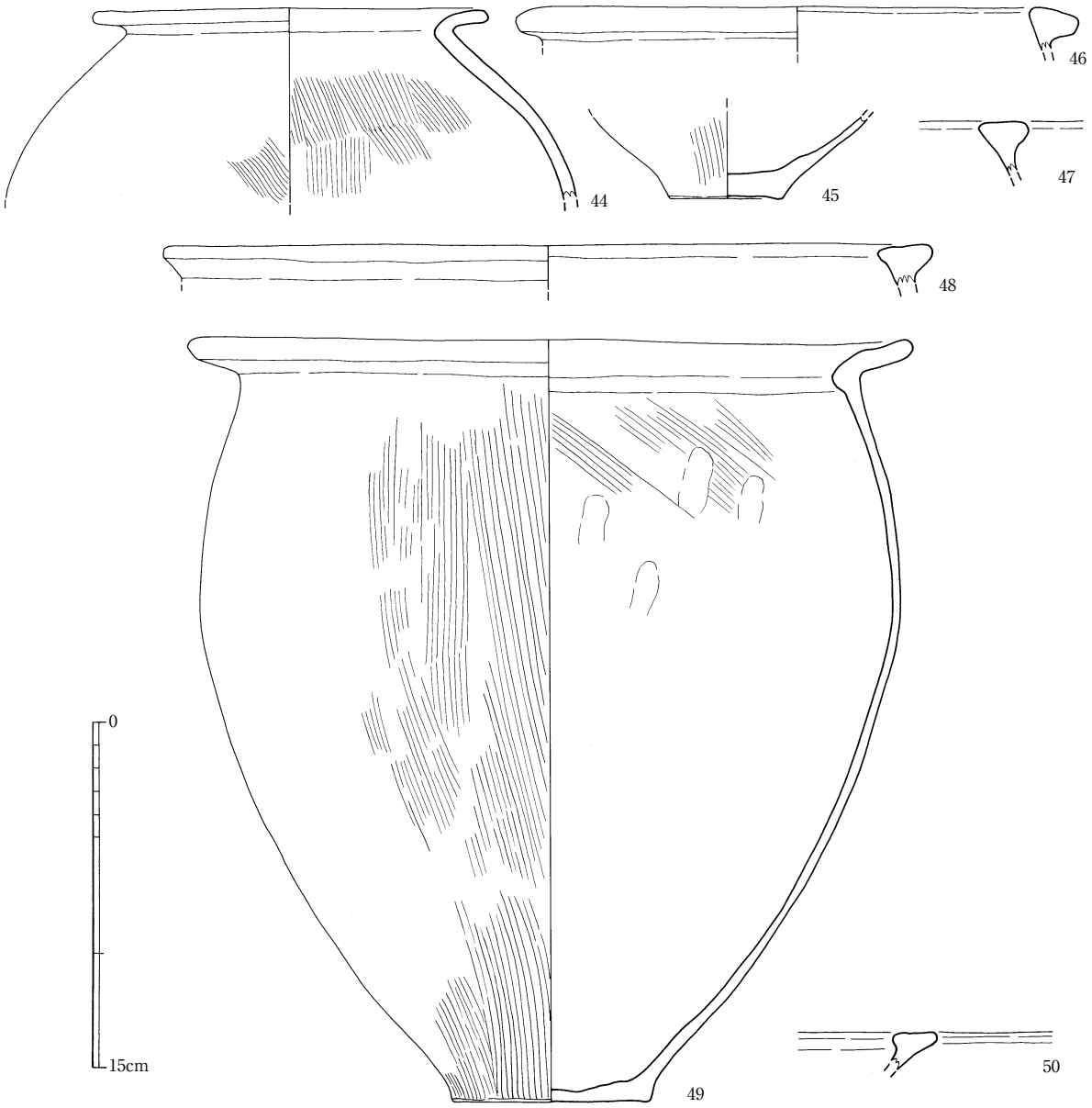


第 17 図　流路（暗褐色土層）出土土器実測図４（1/3）

出土土器（第 13 ～ 24 図）

１～ 43 は暗褐色土層出土土器。１・２は壺。１は口縁部～頸部にかけての破片。頸部に断面台形の突帯を貼付する。摩滅が著しいが、胴部外面に横位のミガキが確認できる。２は口縁部を短く屈曲させる精製の無頸壺。胎土は精良で、外面と口縁部内面に丹を塗布する。復元口径 12.4 ㎝。胎土は精良。３～ 38 は甕。３～ 26 は口縁部。３・４のような如意形口縁や亀の甲タイプも見られるが、口縁をく字形に屈曲させるのものが多数を占める。３は小片であり、傾きはやや起きるかもしれない。４は口縁端部に密に刻みを施す。下位にも刻みが入った断面三角形の突帯を廻す。７は口縁の平坦面が外傾し、断面三角形状になる。復元口径 20.0 ㎝。９は口縁下に断面三角形状の低い突帯を作り出す。復元口径 30.0 ㎝。15 の調整は内外面ともハケで、内面の下半はナデ上げる。口径 24.9 ㎝、底径 9.0 ㎝、器高 27.7 ㎝。20 は口縁部下端に工具の押圧による刻みを施す。26 は復元口径 38.0 ㎝。27 ～ 38 は底部。上げ底と平底が同量出土しており、38 のように脚を付すものもある。底部径 5.1 ～ 9.8 ㎝。39 ～ 42 は高坏。39 は椀形の杯部をもつ精製の高坏。口径 18.4 ㎝、裾部径 12.9 ㎝、器高 16.6 ㎝。杯部内外面と脚部外面にヘラミガキを施す。杯部外面は摩滅が著しいがミガキと思われる。胎土は精良。40 は鋤先口縁となる高坏の杯部。復元口径 29.6 ㎝。41・42 は脚柱部。ともに外面にミガキを施す。39・41 は丹塗り。40 は器台。端部は丸く収める。

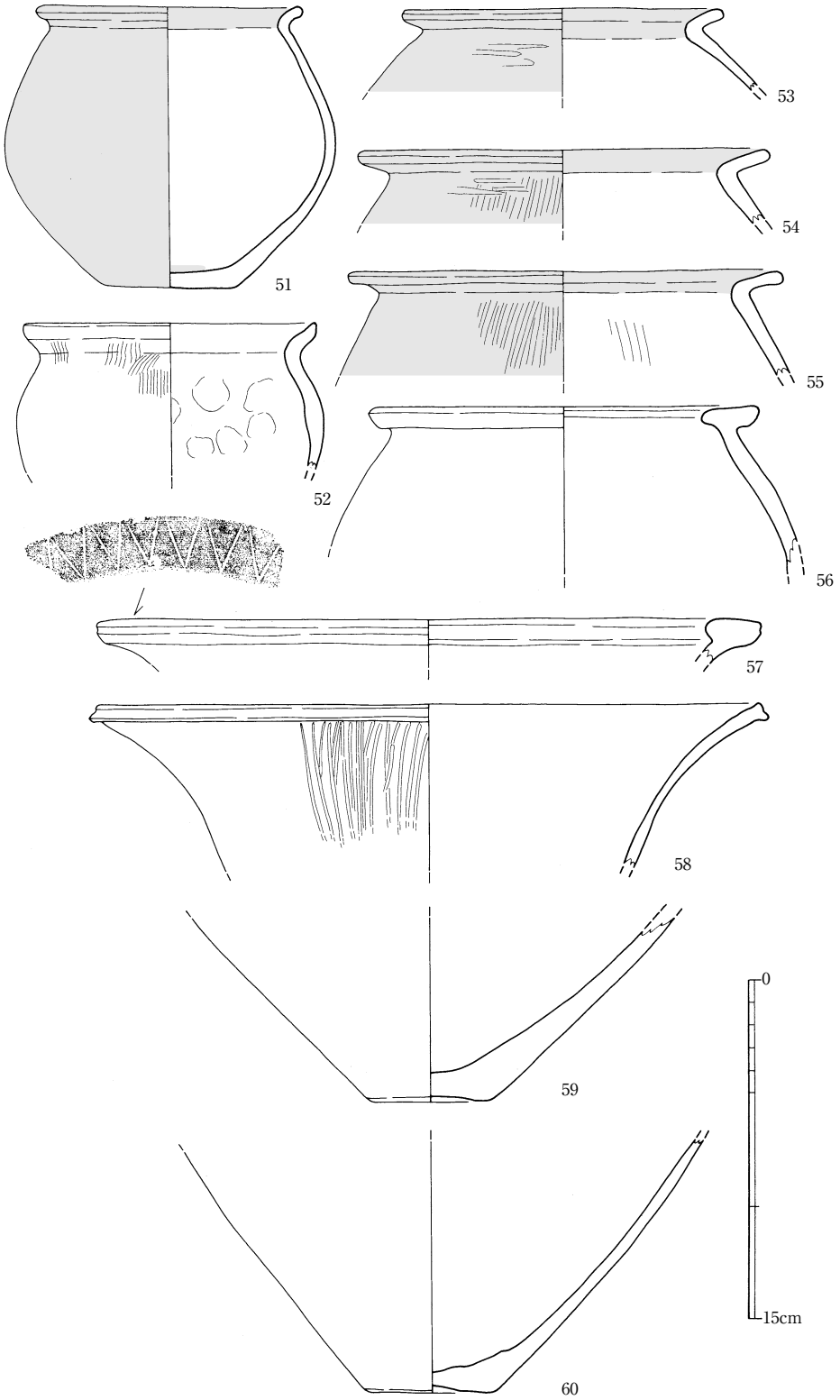
44 ～ 50 は暗黄褐色シルト層出土土器。44 は無頸壺。調整は内外面とも斜位のハケ。45 は小形の



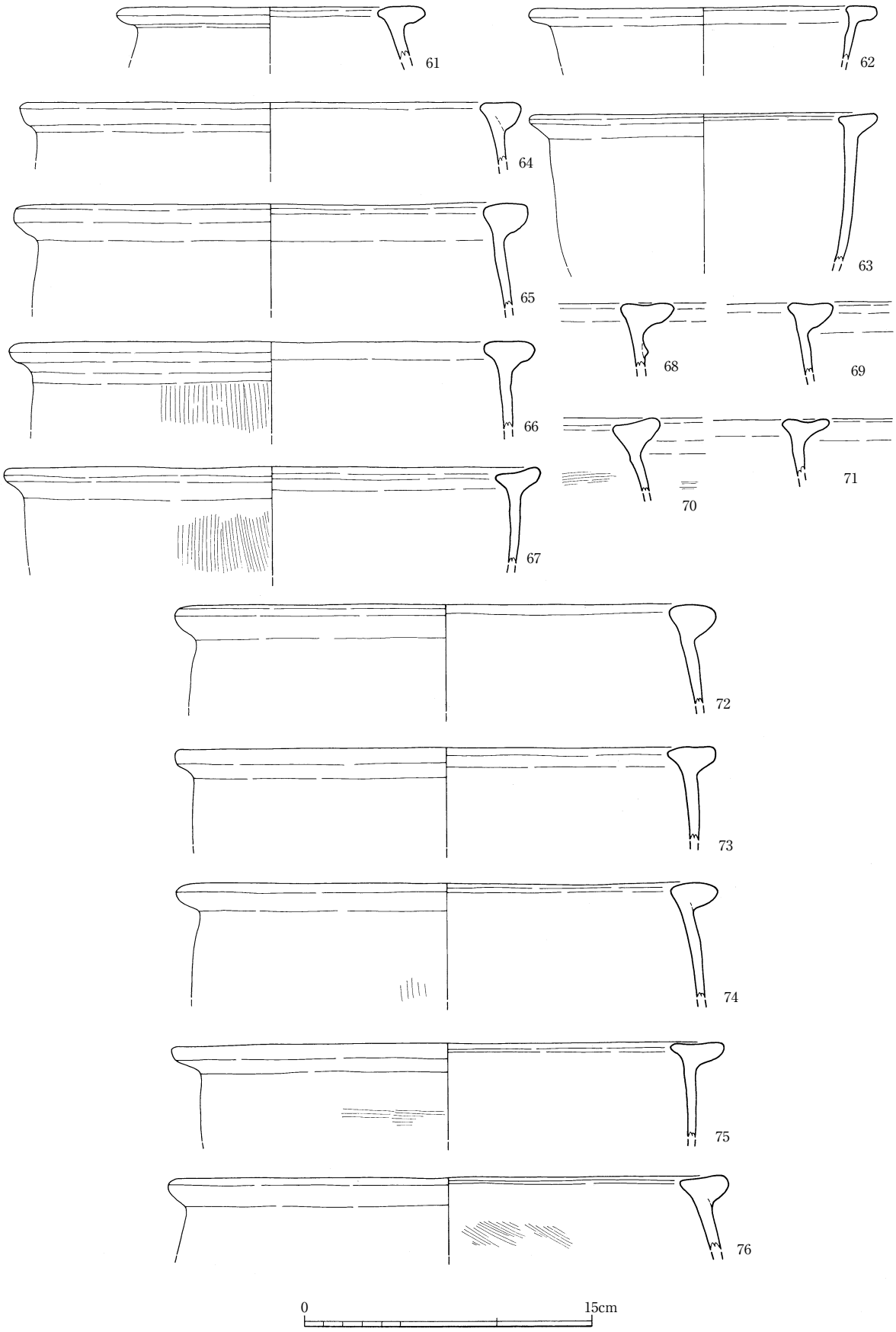
第 18 図　流路（暗黄褐色シルト層）出土土器実測図５（1/3）

壺の底部。46 ～ 49 は甕。49 の調整は外面が縦位、内面が斜位のハケ。口径 31.0 ㎝、底径 8.4 ㎝、器高 32.9 ㎝。50 は高坏の口縁部小片。

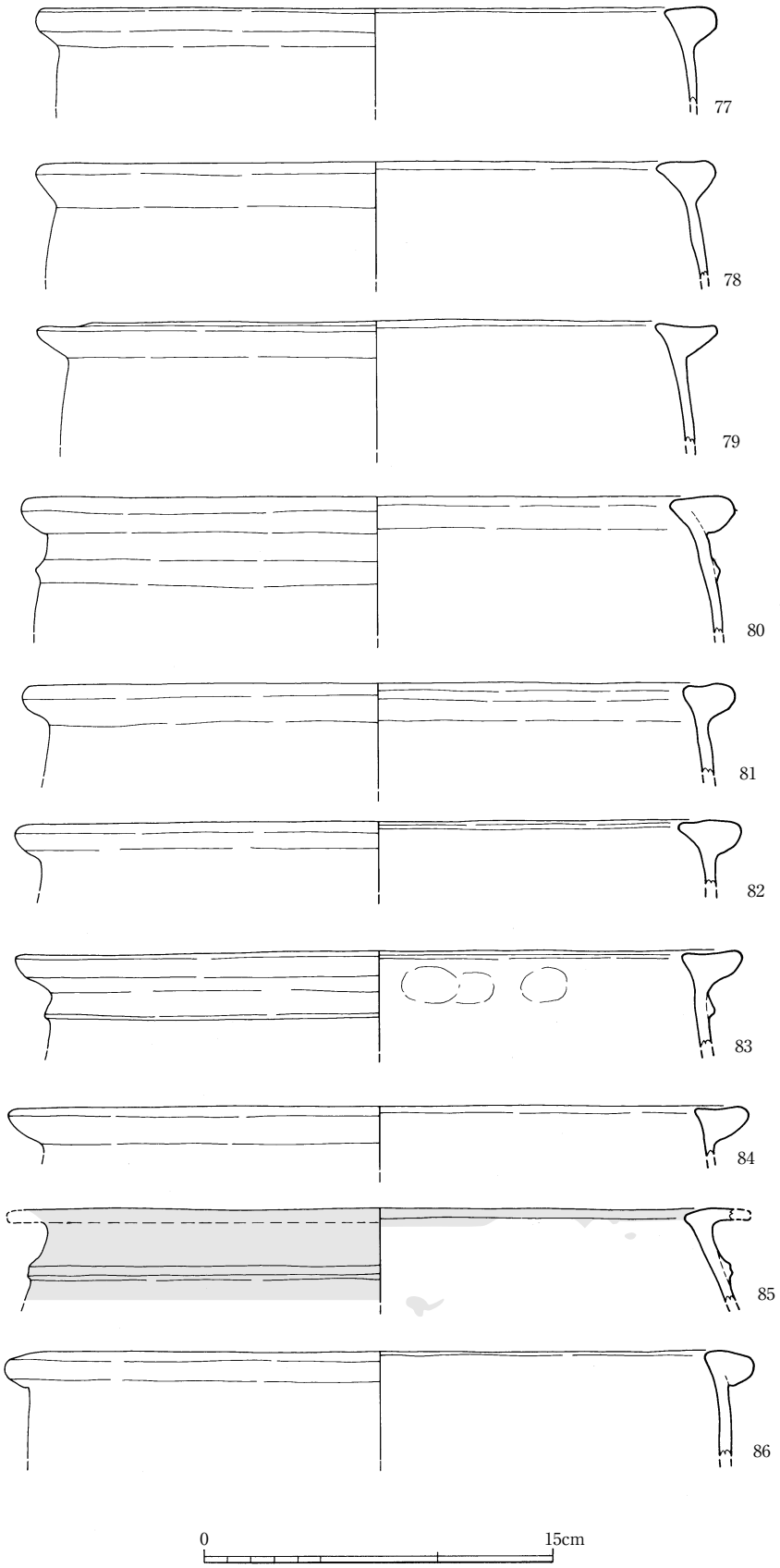
51 ～ 141 は灰色シルト層出土土器。51 ～ 60 は壺。51 ～ 56 は無頸壺。51 は精製の壺で外面と口縁部内面に丹を塗布する。52 は作りが粗い。甕としたほうがよいか。調整は外面がハケ、内面には指頭圧痕が顕著に残る。口径 12.8 ㎝。53 ～ 55 は精製。内外面とも丹塗り。53 の調整は外面が横位のミガキ。56 はＴ字形の口縁をもつ甕か。57 ～ 60 は広口壺。57 は鋤先形口縁。上端の平坦面に鋸歯状の暗文を施す。復元口径 29.0 ㎝。58 は口縁端部に凹線を巡らせ、外面には縦位に暗文を密に施す。61 ～ 127 は甕。亀の甲タイプや口縁部が内側に伸びるＴ字形に近いもの、鋤先形になるもの、く字形となるものなどがある。口径は 61 ～ 63 が 16.0 ～ 18.0 ㎝、64 ～ 92 が 26.0 ～ 36.0 ㎝。80・83・



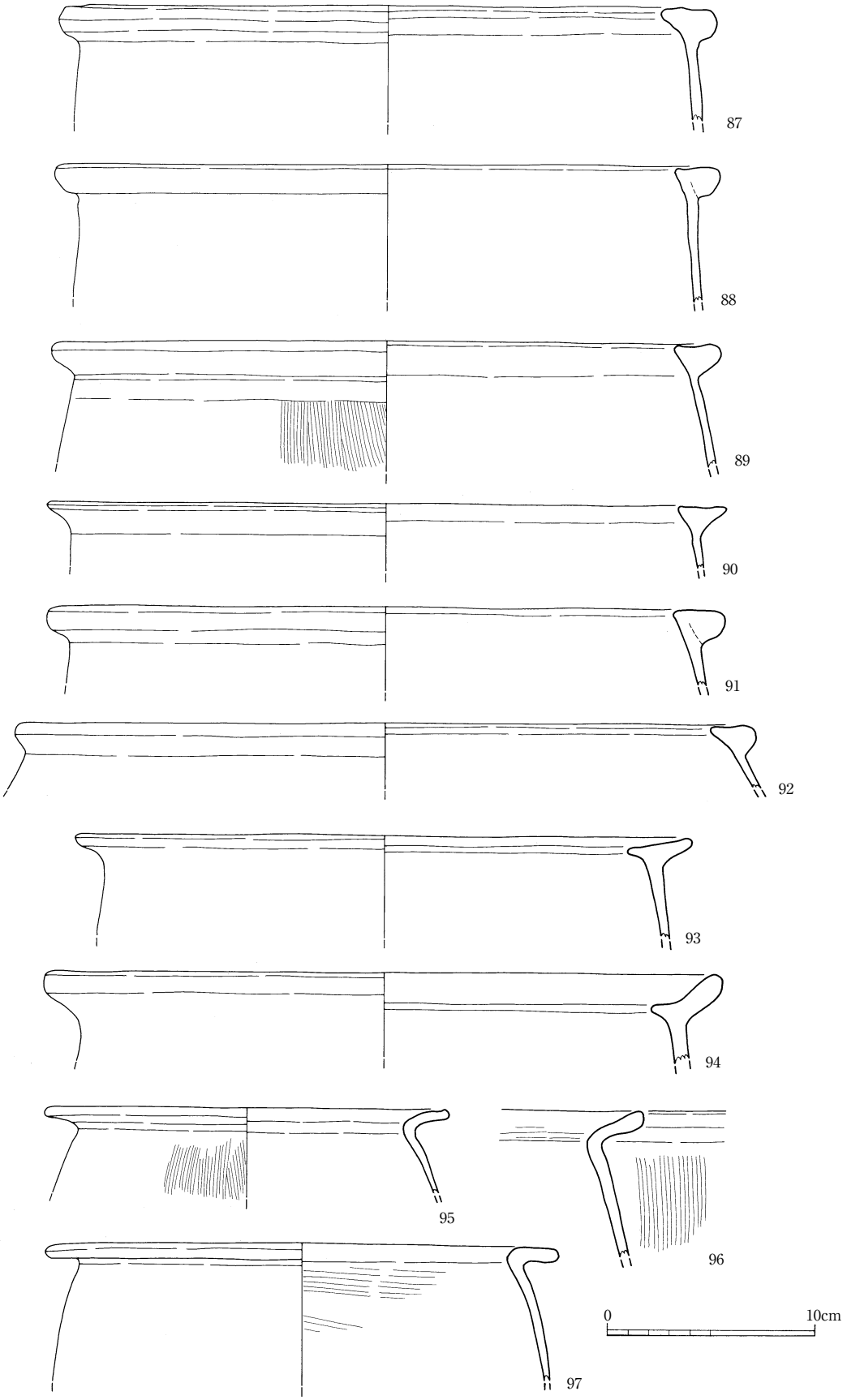
第 19 図　流路（灰色シルト層）出土土器実測図 6（1/3）



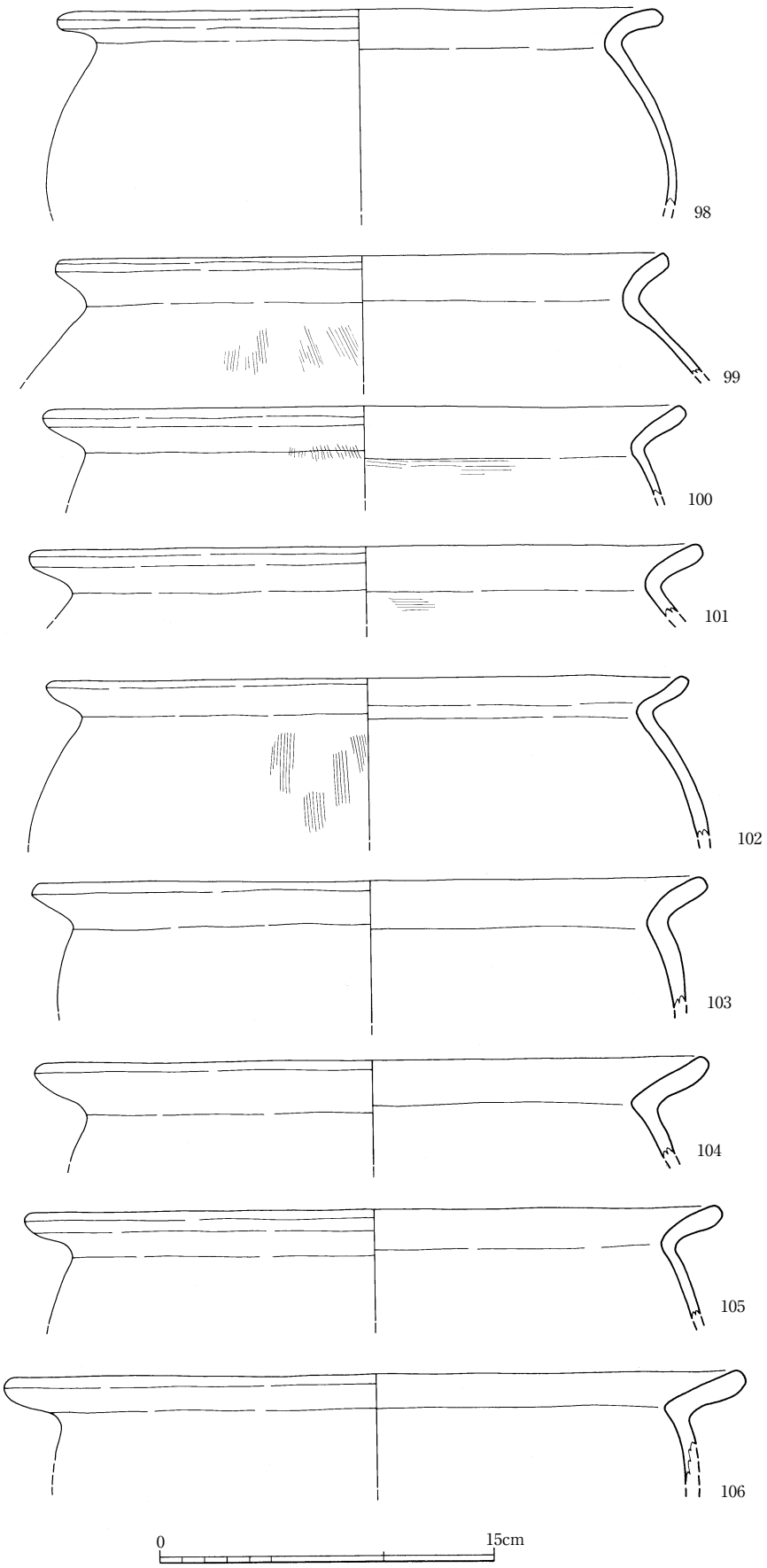
第 20 図　流路（灰色シルト層）出土土器実測図 7（1/3）



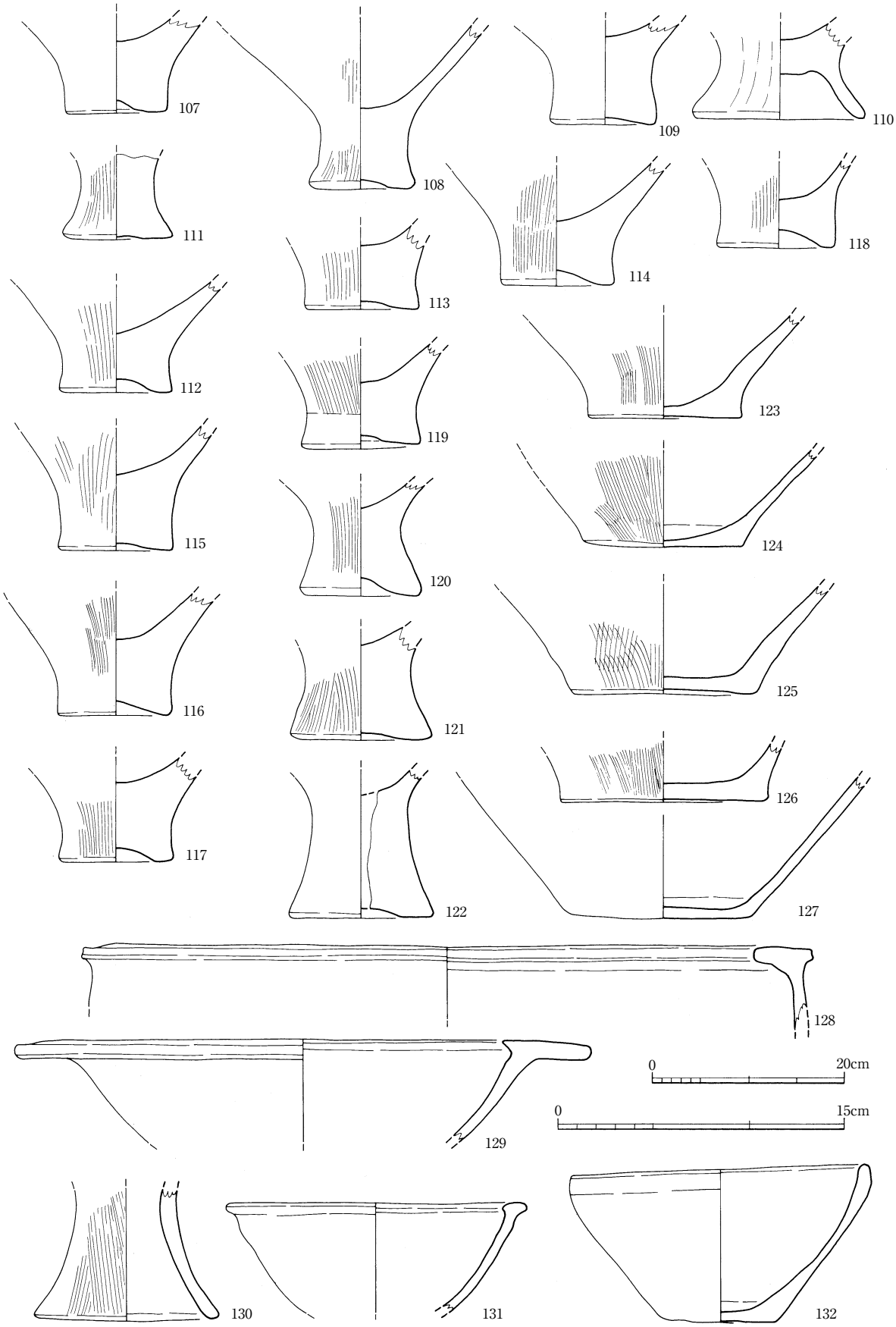
第 21 図　流路（灰色シルト層）出土土器実測図 8（1/3）



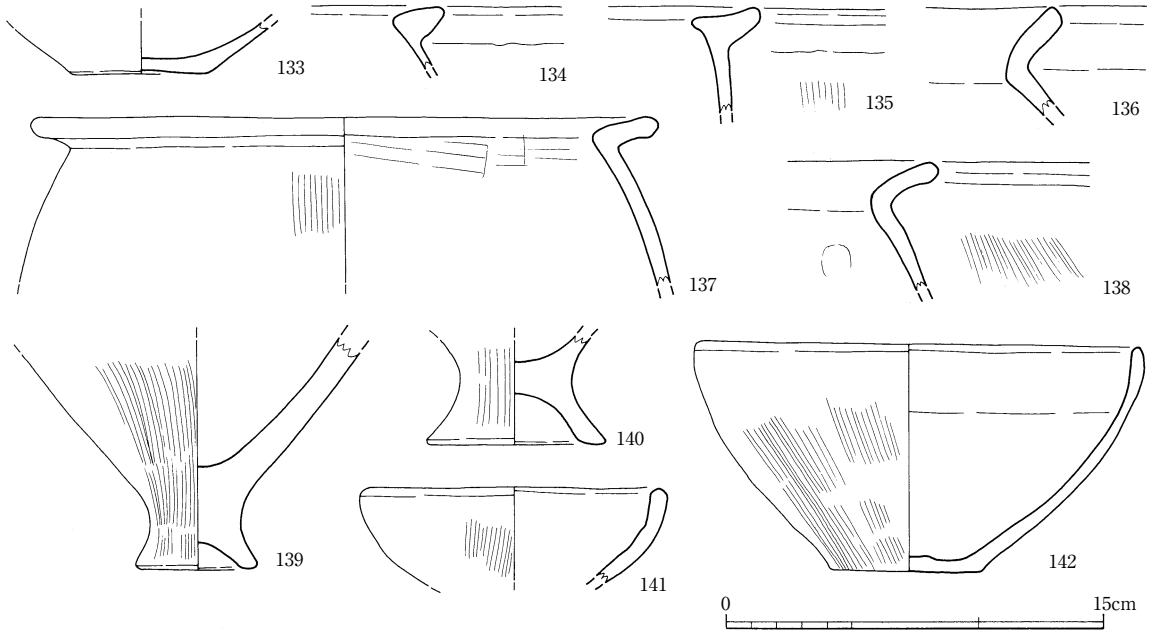
第 22 図　流路（灰色シルト層）出土土器実測図 9（1/3）



第 23 図　流路（灰色シルト層）出土土器実測図 10（1/3）



第 24 図　流路（灰色シルト層）出土土器実測図 11（1/3）



第 25 図　流路（灰色シルト層）出土土器実測図 12（1/3）

85 は口縁部下に断面三角形もしくは断面M字形の突帯を貼付する。85 は鋤先状口縁で、丹を塗布する。精製。110 ～ 126 は底部。平底と上げ底があるが平底は少数である。外面の調整はハケ。127 は甕棺。Ｔ字形口縁で内端部が内側に大きく張り出す。復元口径 76.0 ㎝。128 は高坏。口縁部が外方に長く伸びる。129 は器台。調整は外面が縦位のハケ、内面はナデ。130・131 は鉢。130 は高坏になるのかもしれない。ともに摩滅著しく調整不明。131 の口縁部は分厚い。口径 15.8 ㎝、底径 5.8 ㎝、器高 8.0 ㎝。

132 ～ 141 は灰色シルト層上層出土土器。132 は小形の壺の底部。外面に丹を塗布する。133 ～ 139 は甕。136 は口縁屈曲部の内面に横位の板ナデを施す。140 は小形の椀。復元口径 12.0 ㎝。器壁が厚い。外面にハケメが残るが摩滅が著しい。141 平底の鉢。復元口径 17.2 ㎝、底径 6.0 ㎝、器高 9.0 ㎝。

（5）層位出土の遺物

調査区の全域にわたって暗茶灰色土層が遺構面を覆っており、この層位からも遺物が出土している。

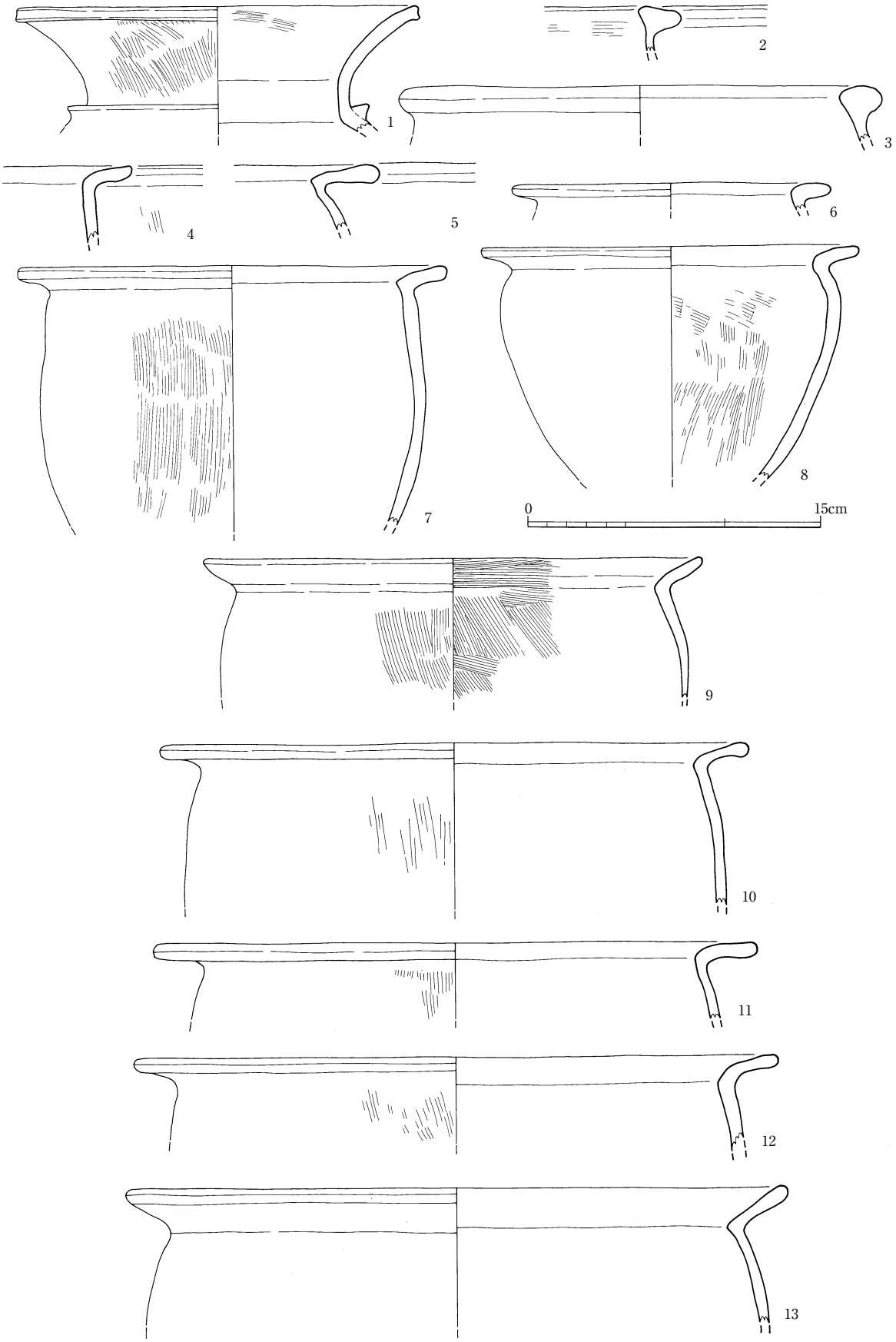
暗茶灰色土層出土土器（第 26・27 図）

１は壺。口縁部は大きく外反し、頸部には断面三角形の突帯を貼付する。２～ 21 は甕。２～ 13 は口縁部。Ｌ字形に折り返す口縁が多数を占める。調整は外面がハケ、８・９の内面がハケ、他はナデ。口径 22.0 ㎝～ 33.3 ㎝。14 ～ 18 は底部。17 は底部から丸みをもって体部に至る。19 ～ 21 はハ字形に開く高台をもつもの。いずれも端部を丸く収める。22 は鋤先状の口縁をもつ高坏で、口縁部が外方に長く伸びる。19 は復元口径 28.9 ㎝、脚径 8.8 ㎝、器高 39.8 ㎝。23 は鉢の口縁部で端部は面をなす。外面には横方向のタタキ痕が残る。内面は斜位のハケ。器壁は薄い。

（6）その他の遺物

石器（図版 7、第 28・29 図）

１は磨製石鏃。全面を丁寧に研磨し、基部に浅い抉りをもつ。長さ 3.0 ㎝、幅 2.2 ㎝、厚さ 0.15 ㎝。重量 11g。緑色片岩製。包含層出土。２は抉入柱状片刃石斧で、基部および刃部を欠失する。42g。頁岩製。包含層出土。３は小形の扁平な磨製石斧。刃部の欠損は使用によるものと思われる。全面を磨くが裏面のミガキはやや粗い。長さ 8.8 ㎝、幅 4.7 ㎝、厚さ 1.5 ㎝。104g。茶灰色土層出土。４は太型蛤刃石斧。中位で折損している。現存長 7.8 ㎝、幅 8.3 ㎝、最大厚 4.4 ㎝。重量 455g。安山岩。包含層出土。５は砥石。両端を折損する。裏面も欠失するが破損後に使用しており、部分的に平滑になっている。現存長 9.7 ㎝、幅 6.5 ㎝、厚さ 4.3 ㎝。重量 433g。流路の灰色シルト層出

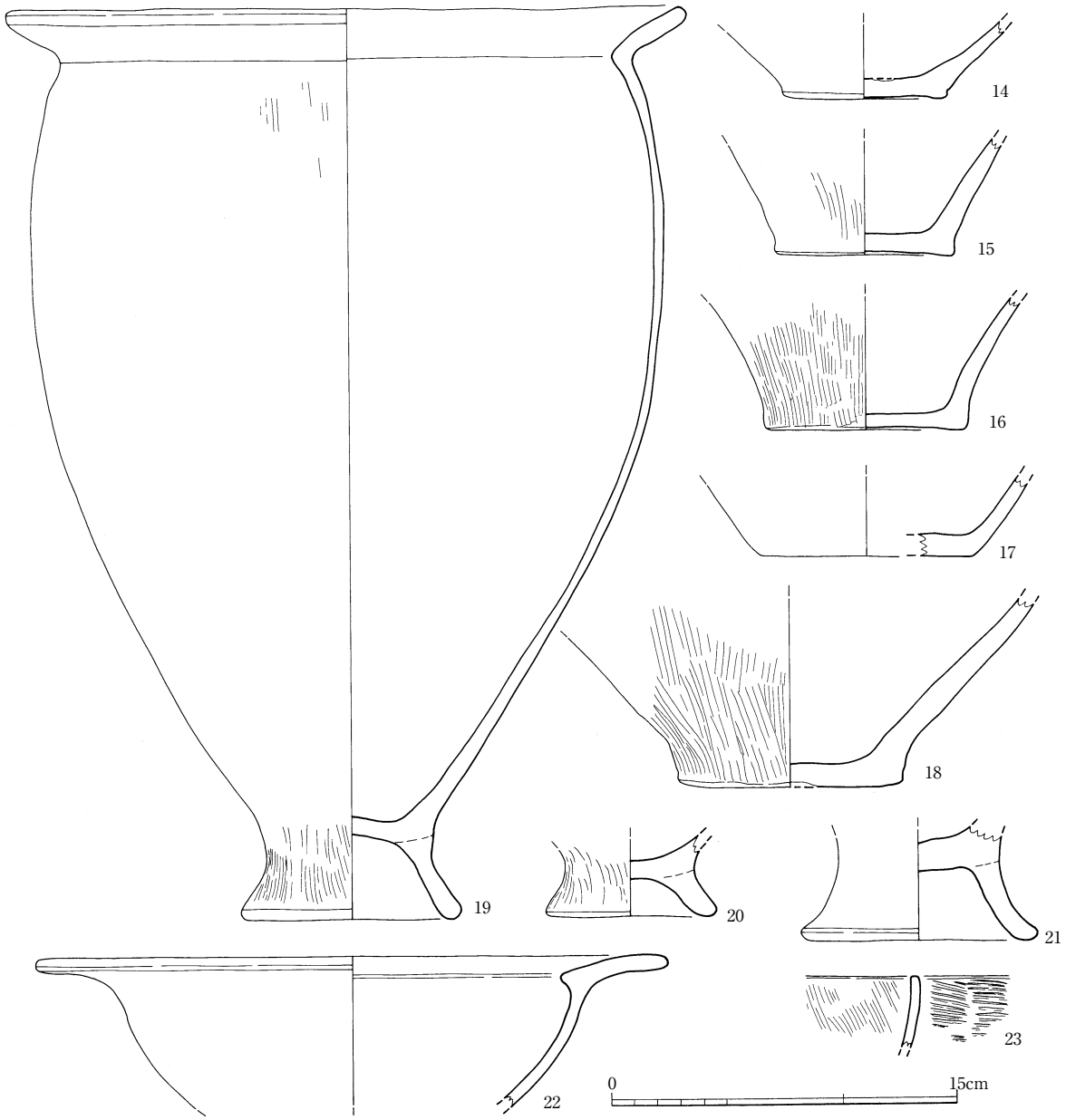


第 26 図　暗茶灰色土層出土土器実測図１（1/3）

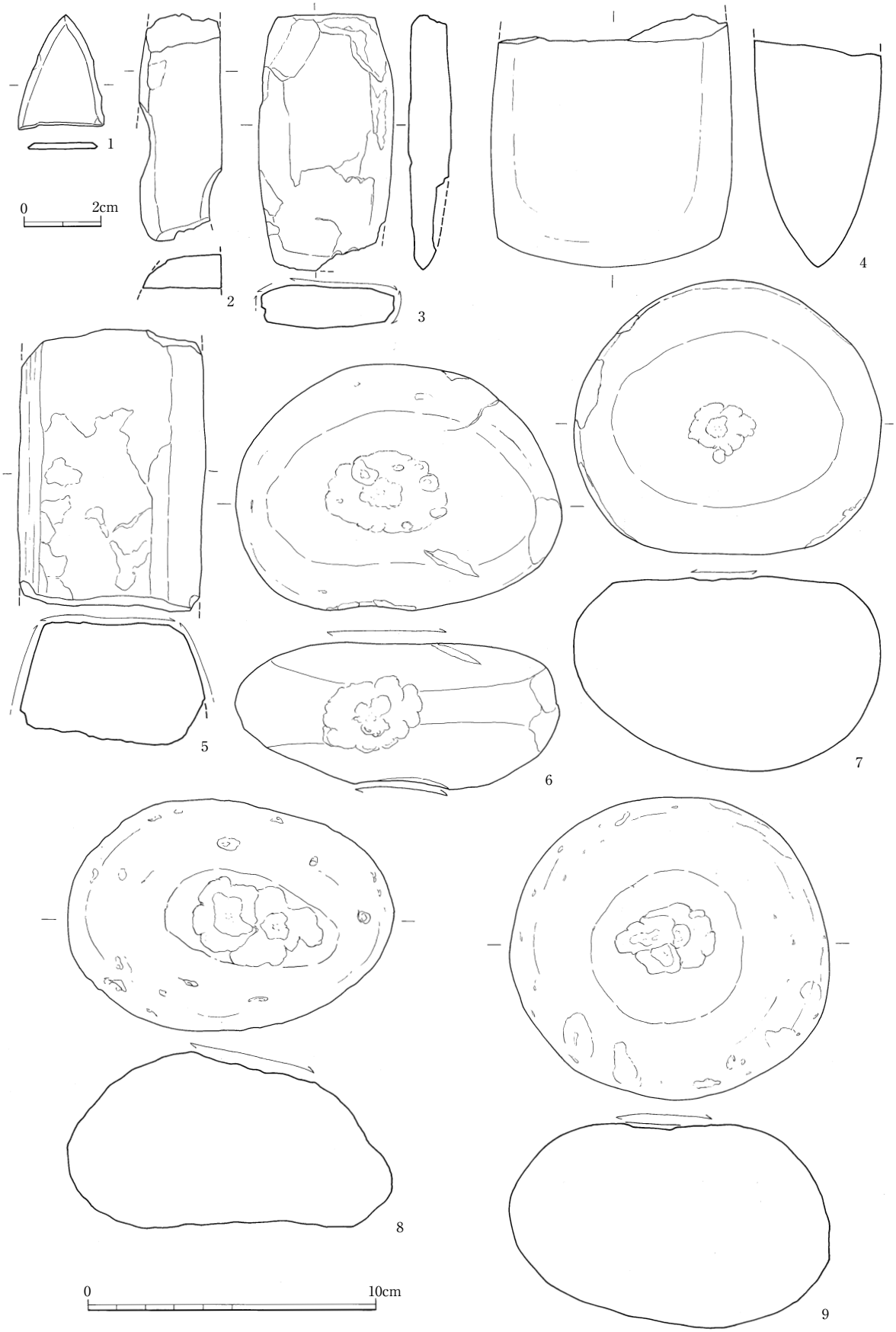
土。６～11は凹石。いずれも全面が平滑に磨れている。６は表裏中央部と測縁部の３面に凹みがある。長径11.3㎝、短径8.6㎝、厚さ5.0㎝。重量943g。包含層出土。７～９の窪みは上面の１ヶ所。７は長径10.9㎝、短径9.5㎝、厚さ6.8㎝。重量547g。８は長径11.3㎝、短径8.0㎝、厚さ6.1㎝。重量666g。９は長径11.1㎝、短径10.5㎝、厚さ7.1㎝。重量503g。６・７・９は安山岩製、８は凝灰岩製。10・11は磨石。ともに全面が平滑に磨れる。10は長径15.2㎝、短径11.8㎝、厚さ4.2㎝。重量1098g。11は周縁部に幅１㎝ほどの敲打痕跡が残る。長径15.8㎝、短径14.4㎝、厚さ4.3㎝。重量1504g。ともに安山岩。６・10が包含層、７・９・11が流路の灰色シルト層、８が４号土坑、12～17は軽石。全面が磨れている。15の裏面には幅５㎜ほどの断面半円形の擦痕が残る。重量はそれぞれ５g、10g、11g、18g、25g、15g。12が１号溝状遺構、13が流路の暗褐色土層、14～16が同灰色シルト層出土。

土製品（図版７、第29図）

18は土製の玉。径0.7㎝。重量18g。流路の暗褐色土層出土。19は下半部を欠失し、全形が知れない。残存部の中央には径0.2㎝の孔をあける。重量21g。流路の灰色シルト層出土。20は土錘。調整はナデで、部分的にハケメ状の擦痕が残る。長さ4.3㎝、厚さ2.4㎝。重量22g。包含層出土。



第27図　暗茶灰色土層出土土器実測図２（1/3）



第 28 図　その他の遺構・層位出土石器実測図１（2/3・1/2）

３．小結

山門牛島遺跡２次調査区は遺構が希薄であるものの、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡１棟、井戸２基、溝状遺構５条、流路、不正形な土坑状の落ち込み状遺構などが検出された。

２次調査区では、まず、弥生時代中期前半～後半にかけて、発掘区の中央部を自然流路が貫流する。この時期の遺構は検出していないが、流路には前期後半の遺物も少量含まれることから、近隣に前期後半から中期後半にかけての集落の存在が予想される。そして、流路埋没後に１号溝状遺構が開削される。さらに１号溝状遺構が機能を失った後、古墳時代前期（布留古相段階）に至って１号竪穴住居・１号井戸・２号井戸が営まれる。

１号井戸の下層で検出した木材に関しては、その配置から考えて板材の可能性が高いものの、腐朽が著しく加工痕を認めるには至っていない。この１号井戸から出土した土器群は、当地域における布留古相段階の良好な一括となった。

第 29 図　暗茶灰色土層出土土器実測図２（1/3）

２　３次調査１区

１　調査の概要

３次調査１区は２次調査の南西部に隣接しており、みやま市瀬高町山門 2168-1 ～３、2169、2170- １・２番地の一部を対象として、1,348 ㎡を調査した。11 月 9 日に バックホー 0.7 を入れて、表土掘削を始め、13 日にリース品を搬入、14 日に機材を搬入し、作業員の作業を開始した。

調査中に柳川土木事務所から作業ヤードにしていた２次調査区で橋梁工事を行うので 12 月中に移転するように求められたので、次の調査地点である２区に移転することになった。12 月６日に２区で表土剥ぎと作業ヤードつくりを開始し、11 日には一部の作業員を２区に移し、作業を始めた。25 日にはリース機材も移動させた。12 月 27 日に空中写真を撮影し、１月 24 日には遺構実測を終了し、１月 30 日には埋め戻しを完了した。

２　遺構と遺物

山門牛島遺跡３次調査１区からは、掘立柱建物跡 12 棟、土坑５基、溝状遺構 11 条、流路１条が検出された。遺構面は砂質土で、ほ場整備のため平坦に削平されていた。

（１）掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（図版 10、第 32 図）

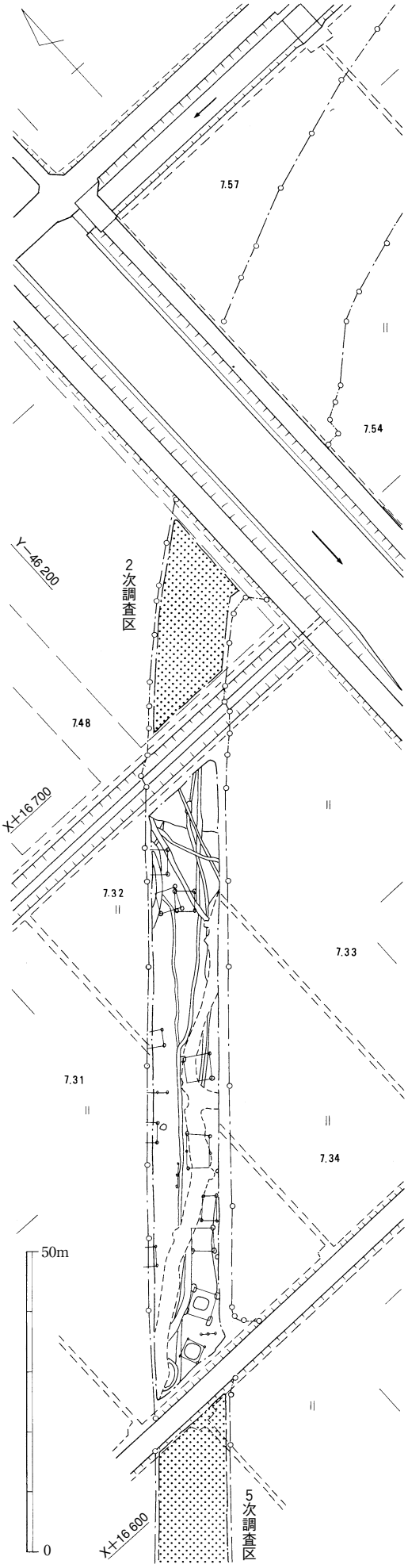
調査区北西部に位置し、北部は３号溝状遺構に切られている。１×１間の建物跡であり、330 × 380cm の規模に復元できる。柱穴は略方形で、柱穴の深さは 20 ～ 25cm 前後を測る。柱１・３は底面に柱根の沈み込みがあるが、柱２の底面の窪みは異なるものと思われる。出土遺物から中期初頭に属する。

出土遺物（第 39 図）

１から４は柱２出土で、１は甕の口縁部で器面は摩滅。変色なし。２は胴下位が膨らむタイプの甕の底部片で摩滅のため外面の調整はない。内面はナデ。変色なし。３は口縁部に刻みがあり、口縁端部がやや肥厚しているので、前期末のものと考えられる。４は小型器台の脚裾で器壁が厚く、胎土は混入物が多い。５は柱３出土で、底部外面はハケ、内面はオサエのちナデ。外面に変色がないことから、内面の黒灰色は焼成時のものだろう。甕の底部で弥生時代前期末から中期のものである。

２号掘立柱建物跡（図版 10、第 33 図）

調査区中央部に位置し、中央部をクリークに切られている。柱の大きさの差異があるので、やや確実性に欠けるが、1 × 2 間の建物に復元した。他の建物跡と等しい。２間の中央の柱穴３・４がやや小さいタイプの建物かもしれない。



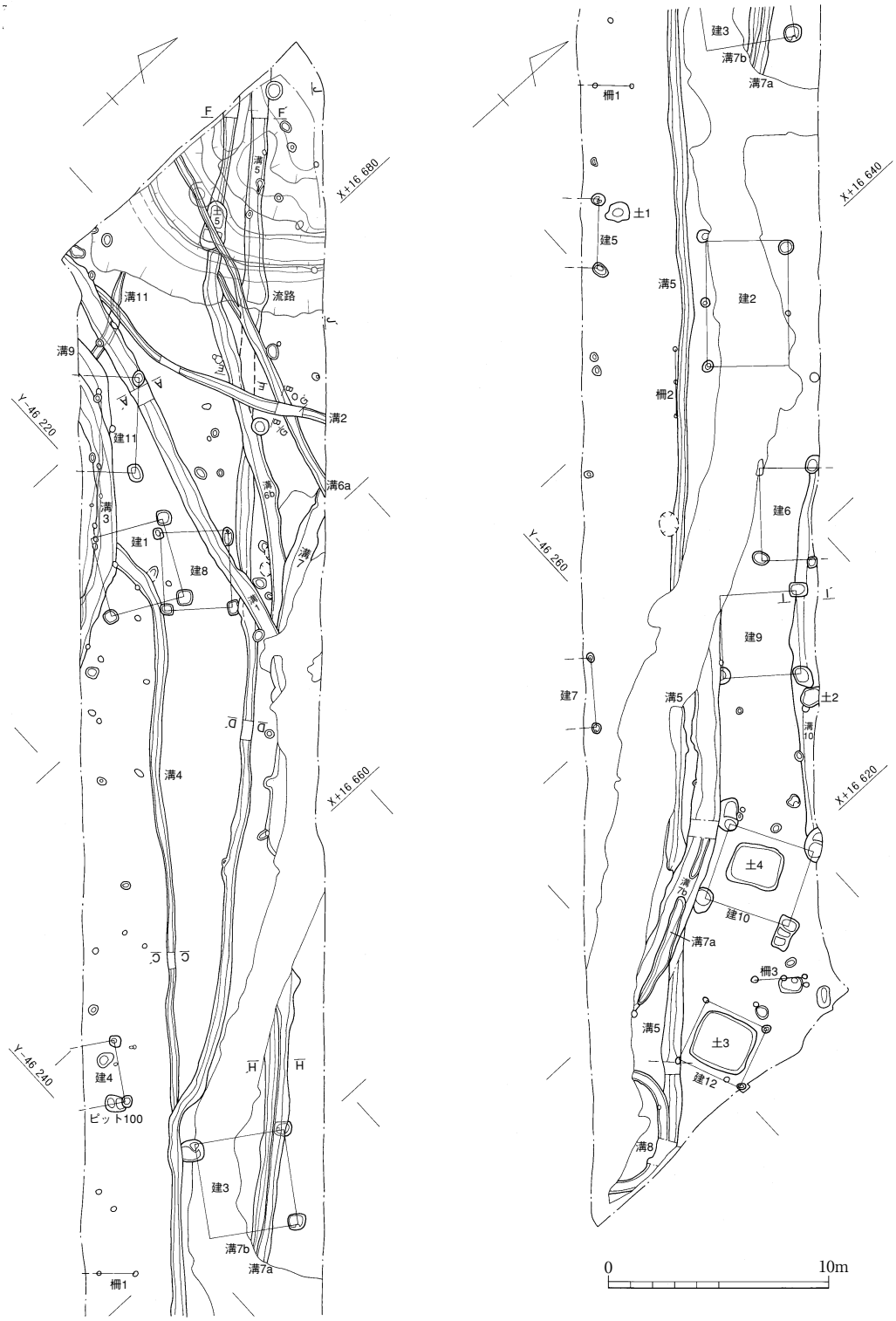
第 30 図　山門牛島遺跡３次調査１区略遺構配置図（1/400）

370 × 594cm の規模に復元できる。柱穴は円形プランから略方形プランで、10 ～ 15cm しか残っておらず、柱根部は床面の下に検出されることから、沈み込んだ可能性がある。

図化できる出土遺物がなく、時期は特定できない。

３号掘立柱建物跡（図版 10、第 34 図）

調査区中央部に位置し、西部をクリークに切られている。柱の大きさの差異があるので、やや確

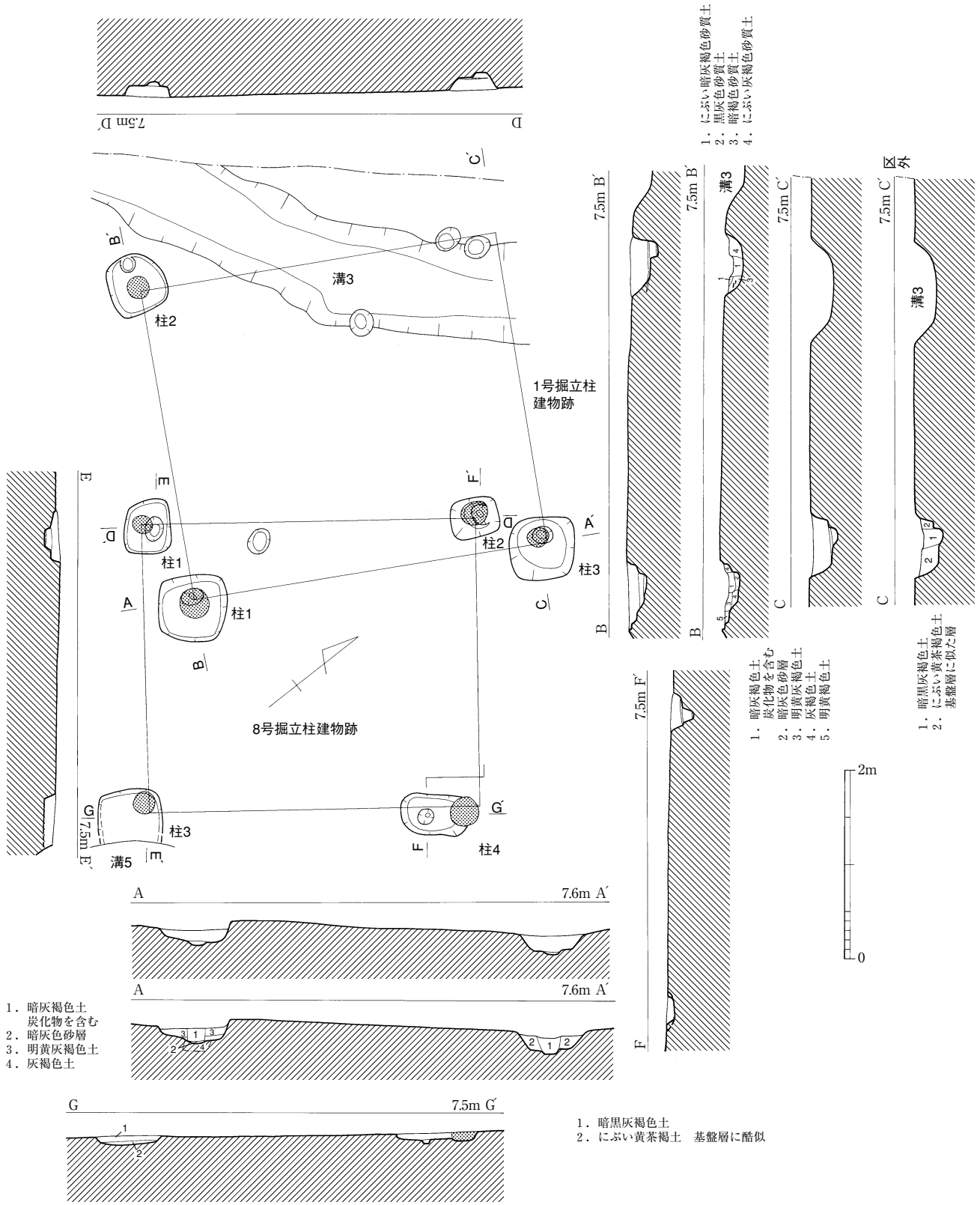


第 31 図　山門牛島遺跡３次調査１区遺構全体図 (1/300)

実性に欠けるが、１×２間の建物に復元した。他の建物跡と等しいので、２間の中央の柱穴３・４がやや小さいタイプの建物かもしれない。370 × 594cｍの規模に復元できる。柱穴は円形プランから略方形プランで、10 から 15cｍしか残っておらず、柱根部は床面の下に検出されることから、沈み込んだ可能性がある。

出土遺物（図版 21、第 39・61 図）

第 39 図６・13 は柱１出土の甕の口縁部で、器面が摩滅しているため、調整・色調不明。第 39 図



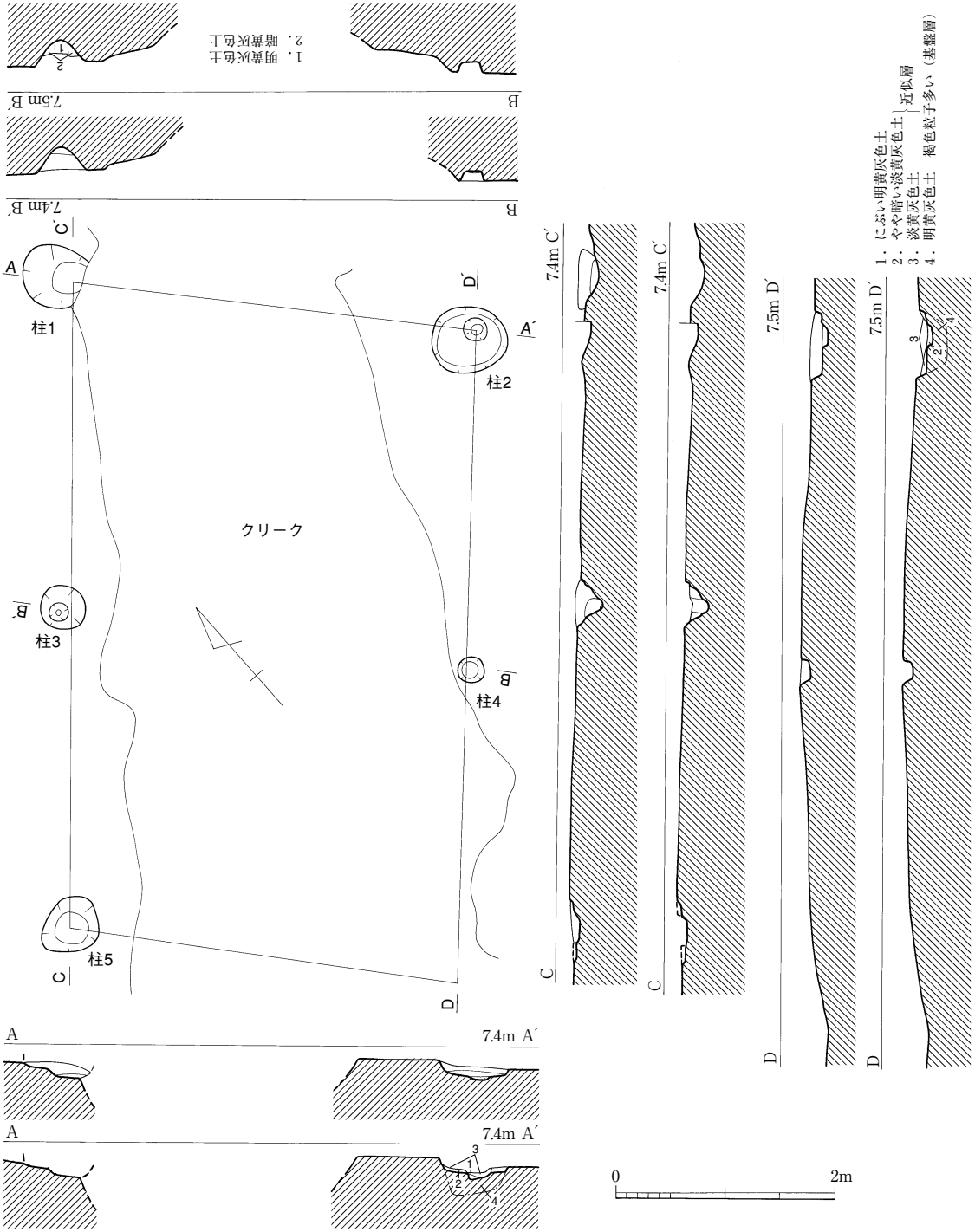
第 32 図　１・８号掘立柱建物跡実測図（1/60）

７は柱４出土の口縁下が窪む甕の口縁で、第 39 図８・９・12 は柱３出土である。器面は摩滅しており、調整は不明である。第 39 図６から９は小片のため径を復元できない。第 39 図 10 は口縁以下が使用により変色している。第 39 図 11 は外面がハケの上に丹塗り。器壁が厚く、口縁部が大きく屈曲することから弥生時代中期中葉から後葉の広口壺の頸部で、不正確だが径は 30 ㎝前後と考えられる。

第 61 図２は柱１出土の完形のスクレーパーで、側面の一方は素面で、対面は整形剥離し、刃部の先端は尖らせている。サヌカイト製で 28.34 ｇを測る。

４号掘立柱建物跡（図版 11、第 34 図）

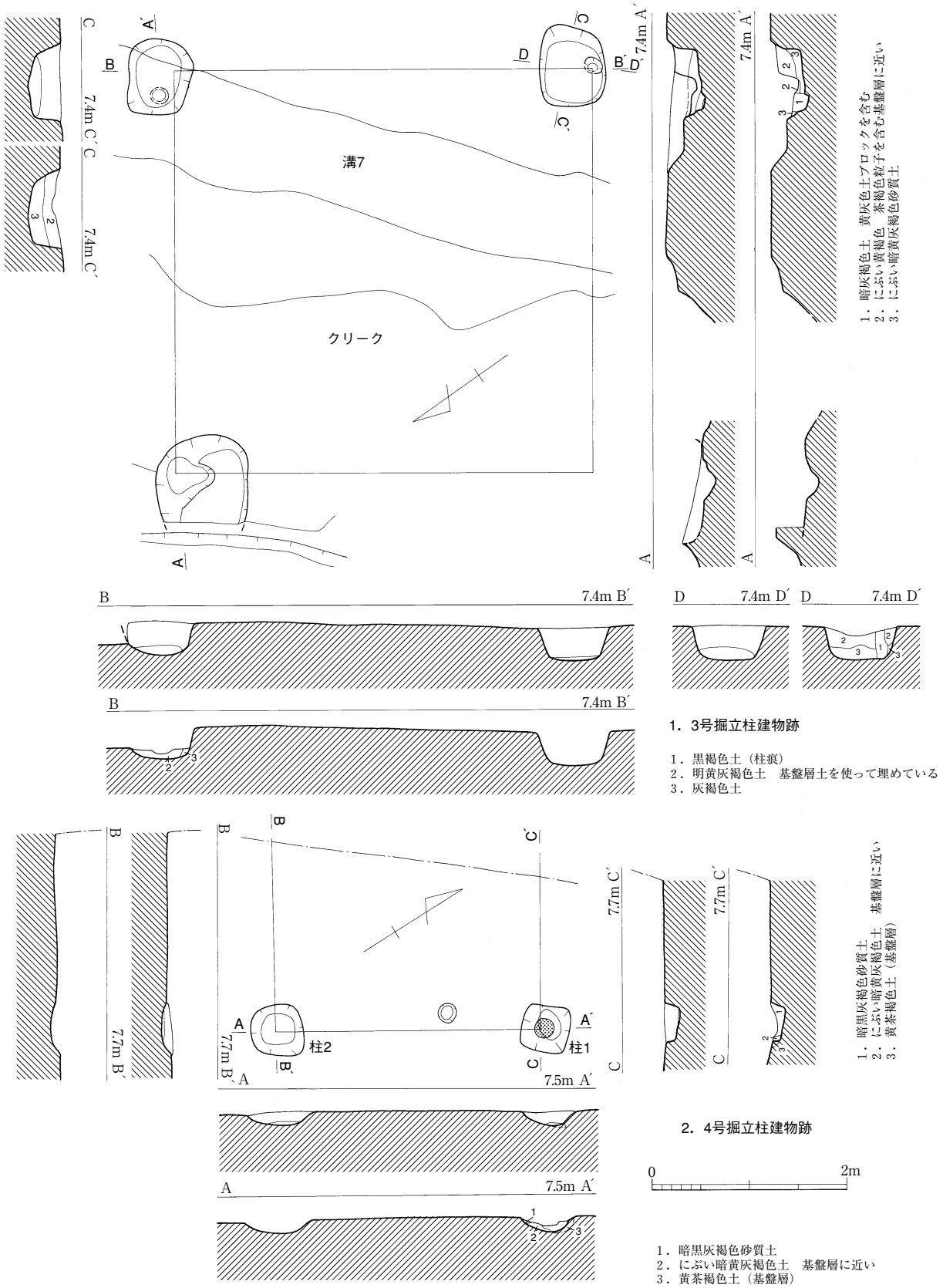
調査区中央部に位置し、北側が調査区外に出る１間の建物で、梁行か桁行かは不明である。柱穴



第 33 図　２号掘立柱建物跡実測図（1/60）

は略方形プランで、１辺 40cm 前後で、埋土も他の掘立柱建物跡と等しいことから、掘立柱建物跡とした。柱間は 272cｍで、他の建物跡より小さい。梁行とすれば、主軸方向が他の建物と異なる。柱は 20cm しか残っておらず、柱痕が確認できたものは柱１のみである。

柱１・２ライン上に小ピットがあるが、本遺構に伴う可能性がある。遺物から弥生時代中期前葉。



第 34 図　３・４号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

出土遺物（第 39 図）

14 は柱１出土で器面摩滅で調整不明。15 は柱２は口縁下の接合部が調整不良で窪んでいる。器面はやや残っており、外面は口縁から使用変色している。

５号掘立柱建物跡（図版 11、第 35 図）

調査区中部に位置し、北側が調査区外に出る１間の建物で、梁行か桁行かは不明である。柱穴は略方形プランで、1 辺 45 ～ 60cm 前後で、埋土も他の掘立柱建物跡と等しいことから、掘立柱建物跡とした。柱間は 312cm で、他の建物跡より小さい。梁行とすれば、主軸方向が他の建物と異なる。柱穴は 30 ～ 40cm 残っており、柱１の柱痕の深さから、柱２の最深部は柱根部と考えられる。柱１には焼けた痕跡がある。出土遺物から時期を特定できない。

出土遺物（第 39 図）

16・17 は柱２出土で、16 は器種不明、17 は不正確ながら裾径 11.6 ㎝ほどに復元できるので器台片と考えられる。

６号掘立柱建物跡（図版 12、第 35 図）

調査区中部に位置し、南側か北側に延びる可能性もあるが、1 × 2 間の建物として報告する。10 号溝状遺構を切る。柱穴は略方形プランで、1 辺 40 ～ 60cm 前後で、埋土も他の掘立柱建物跡と等しいことから、掘立柱建物跡とした。柱間は梁行 248cm で、桁行 420cm 他の建物跡より小さい。柱穴は 20 ～ 40cm 残っており、柱２はクリークに切られており、プランの一部だけが残っている。柱３・４の底面には柱根の沈み込みがある。出土遺物から弥生時代中期前葉。

出土遺物（第 39 図）

16 は壺の胴部、17 は器台片、18 は柱４出土の甕の口縁部片で、器面摩滅のため、調整不明。

７号掘立柱建物跡（図版 12、第 35 図）

調査区南部に位置し、北側が調査区外に出る１間の建物で、梁行か桁行かは不明である。柱穴は略方形プランで、1 辺 30 ～ 40cm 前後で、埋土も他の掘立柱建物跡と等しいことから、掘立柱建物跡とした。柱間は 330cm で、他の建物跡より小さい。梁行とすれば、主軸方向が他の建物と異なる。

柱は 20 ～ 34cm しか残っておらず、柱２の床面の窪みは柱根の沈み込みと考えられる。柱１の土層では柱痕が確認できなかったので、柱根は柱穴側縁にあったものと思われる。

図化できる出土遺物はなく、時期を特定できない。

８号掘立柱建物跡（図版 12、第 32 図）

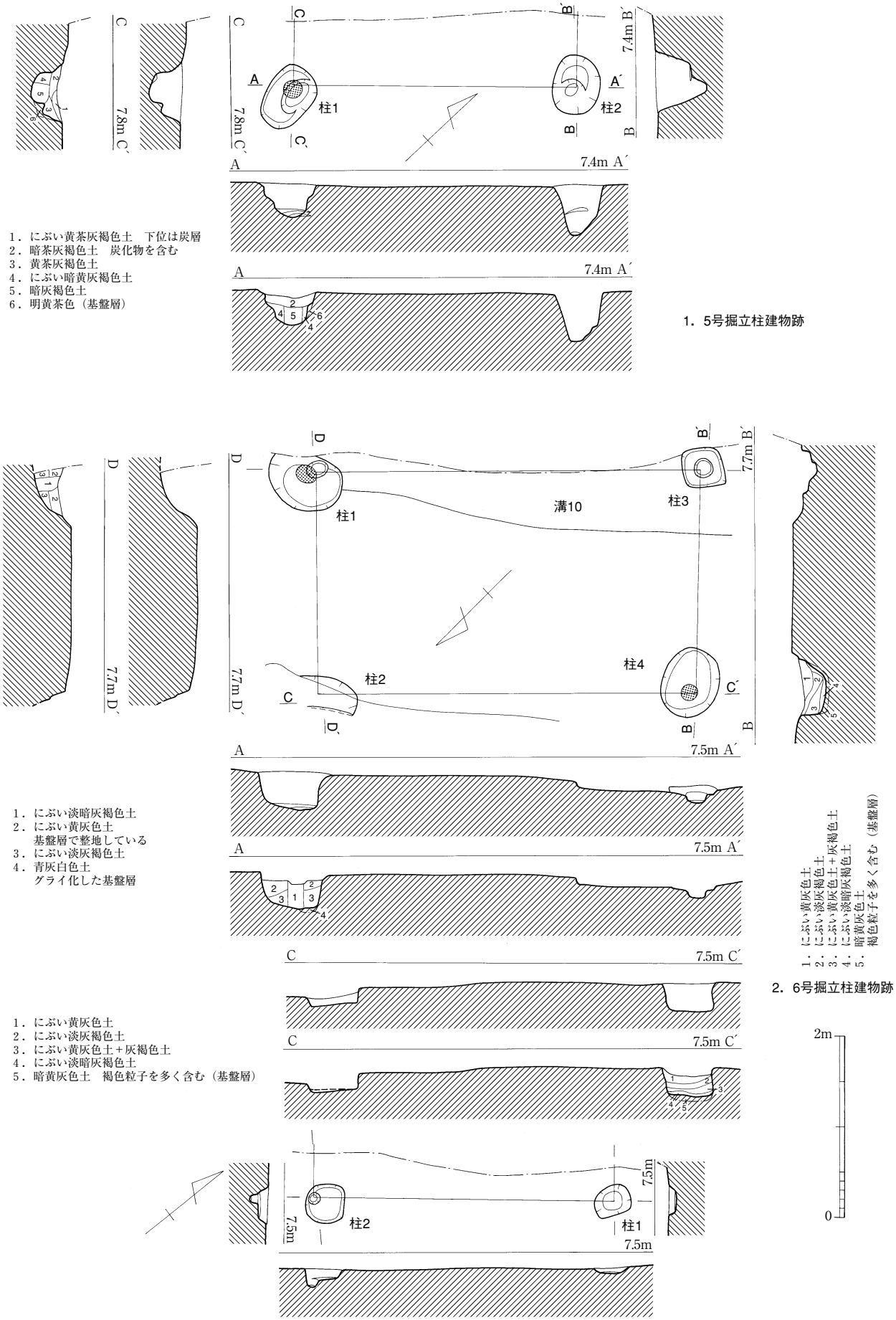
調査区北西部に位置し、西部は４号溝状遺構を切り、５号溝状遺構に切られている。１×１間の建物跡で、303 × 348cm の規模に復元できる。柱穴は略方形と長方形で、柱穴の深さは 10 ～ 25cm 前後だが、柱１・２・４は柱根の沈み込みがある。柱４の柱痕は径が大きかったので、柱穴を切る別のピットの可能性もある。柱１・２間のピットは本建物に伴う可能性がある。

出土遺物（第 39 図）

19 は柱１出土の甕の口縁部片で、器面は摩滅しており、調整不明。20 は柱４出土で、甕の底部片で裾がやや広がり平坦と考えられる。外面は赤橙色で２次焼成を受けたものと思われる。

９号掘立柱建物跡（図版 12、第 36 図）

調査区南部に位置し、北部をクリークに切られている。柱穴が１つ失われているが、1 × 2 間の建物で、370 × 352cm の規模に復元できる。柱穴は略方形プランで、40cm 前後残っている。土層では柱痕が確認できたものは柱３のみで、柱 1・2 は柱根部が土層断面にかからなかったものと思われる。21 は混入品で、24 は３号掘立柱建物跡の柱穴からも出土しているので、上位の混入であろう。22・23 は小片で時期の特定が難しいが、弥生時代後期であろう。



第 35 図　5～7 号掘立柱建物跡実測図（1/60）

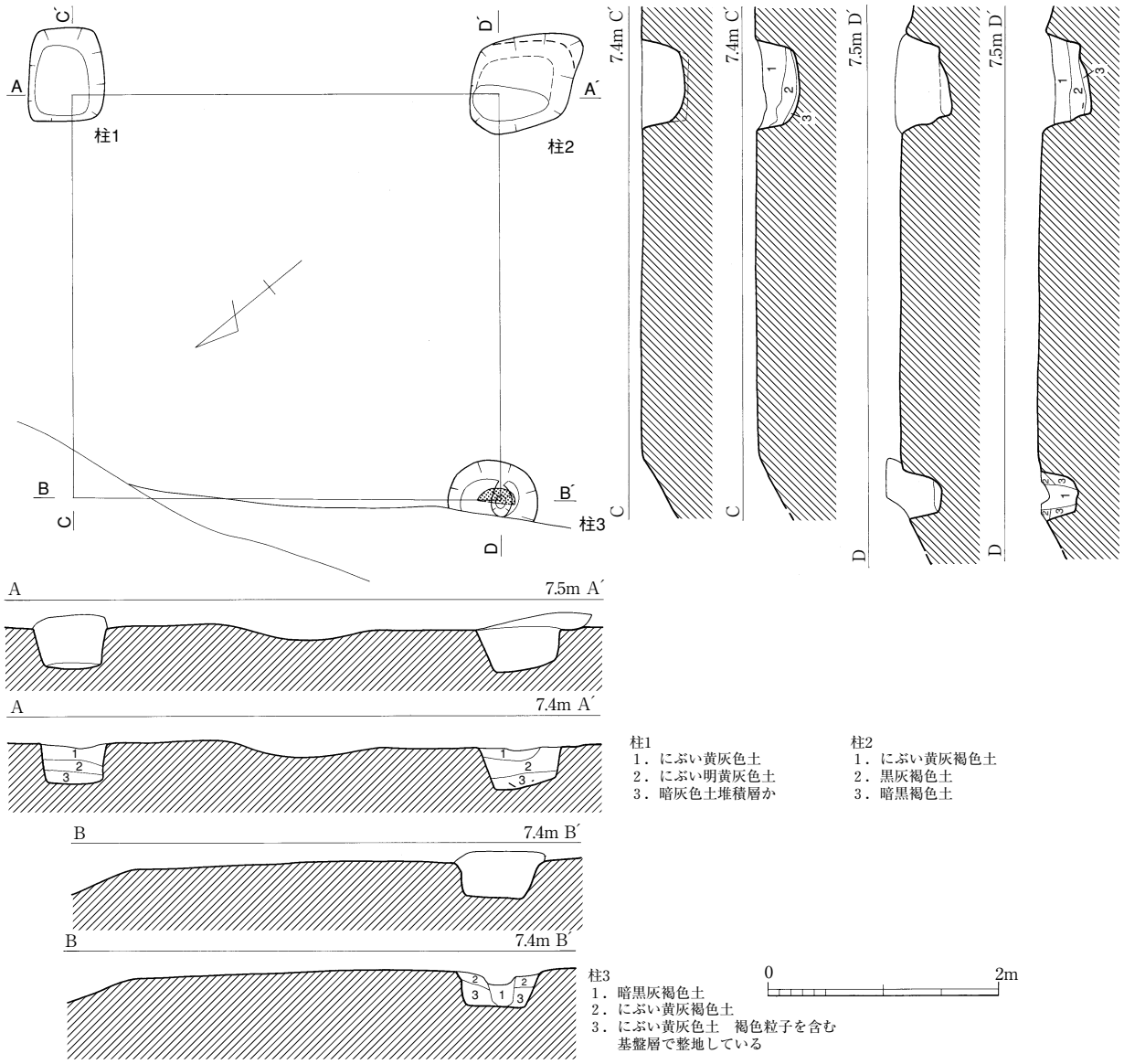
出土遺物（図版 19・21、第 39・60 図）

第 39 図 21 は柱１出土の弥生時代中期前葉の甕の口縁部片で、器面は失われている。第 39 図 22 は柱１出土の甕の口縁部。第 39 図 23 は柱１出土で壺の胴部片か。第 39 図 24 は柱２出土と３号掘立柱建物跡柱１出土片が接合したもので、５割残存している。口縁部はわずかに突出し、胴中位以下は煤が付着する。第 60 図 10 は柱２出土の掻器で、右側面は刃潰ししているので、欠損ではなく、つまみ状に作った完形品である。左端は素面で上端も刃潰しして整形している。黒曜石製で 6.36 g を測る。

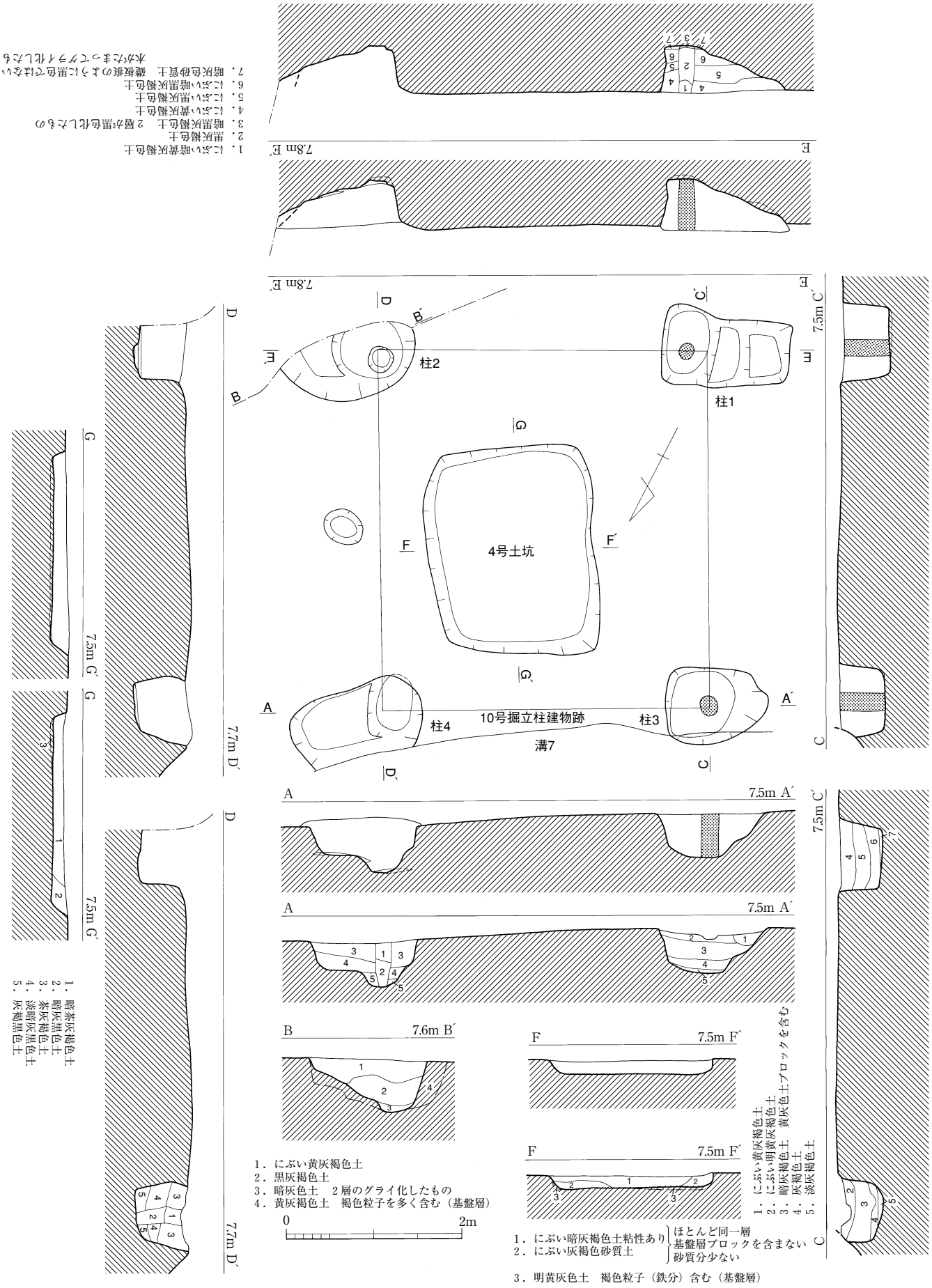
10 号掘立柱建物跡（図版 13・14、第 37 図）

調査区南部に位置し、柱３・４を７号溝状遺構に切られ、柱２は 10 号溝状遺構を切っている。１×１間の建物で、370 × 404cm の規模に復元できる。柱穴は長方形プランで、東西にスロープとテラスがつく。柱１・４では土層で柱痕が確認できた。柱３は土層に柱痕が入らないが上面では確認されたので、土層ラインにかからないように傾いたものと思わる。これらのスロープは長い柱を挿し込むためのものと考えられるが、柱２は土層から見ると抜き取りがあったようだ。底面に柱根部が変色して見えた。壁は 50 ～ 60cm 前後残っている。

ほぼ中央に４号土坑があるが、これは本遺構に伴うものと考えられる。また、柱２・４ラインにピットがあるが、本建物に伴う可能性がある。出土遺物から弥生時代中期末から後期初頭だろう。



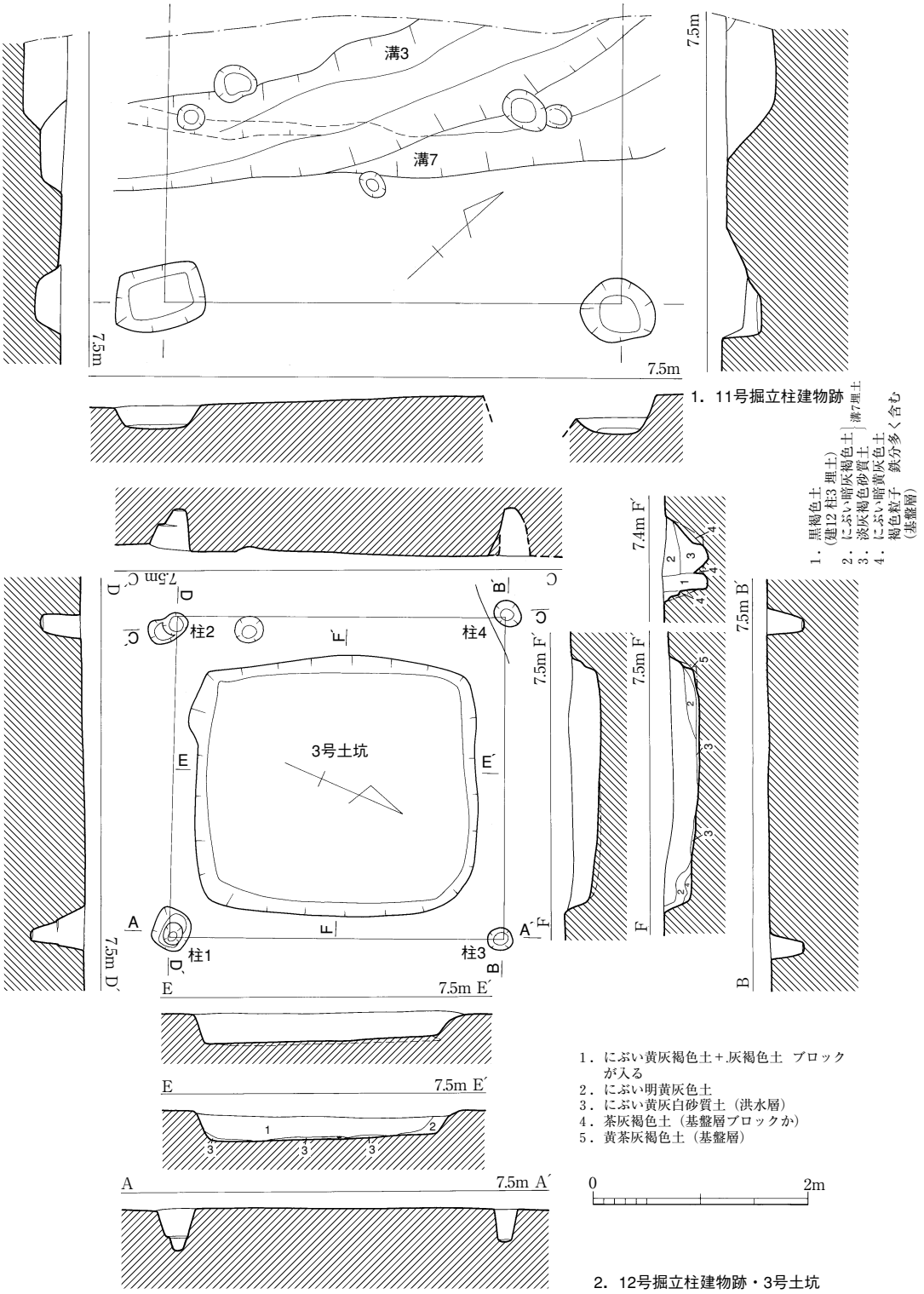
第 36 図　９号掘立柱建物跡実測図（1/60）



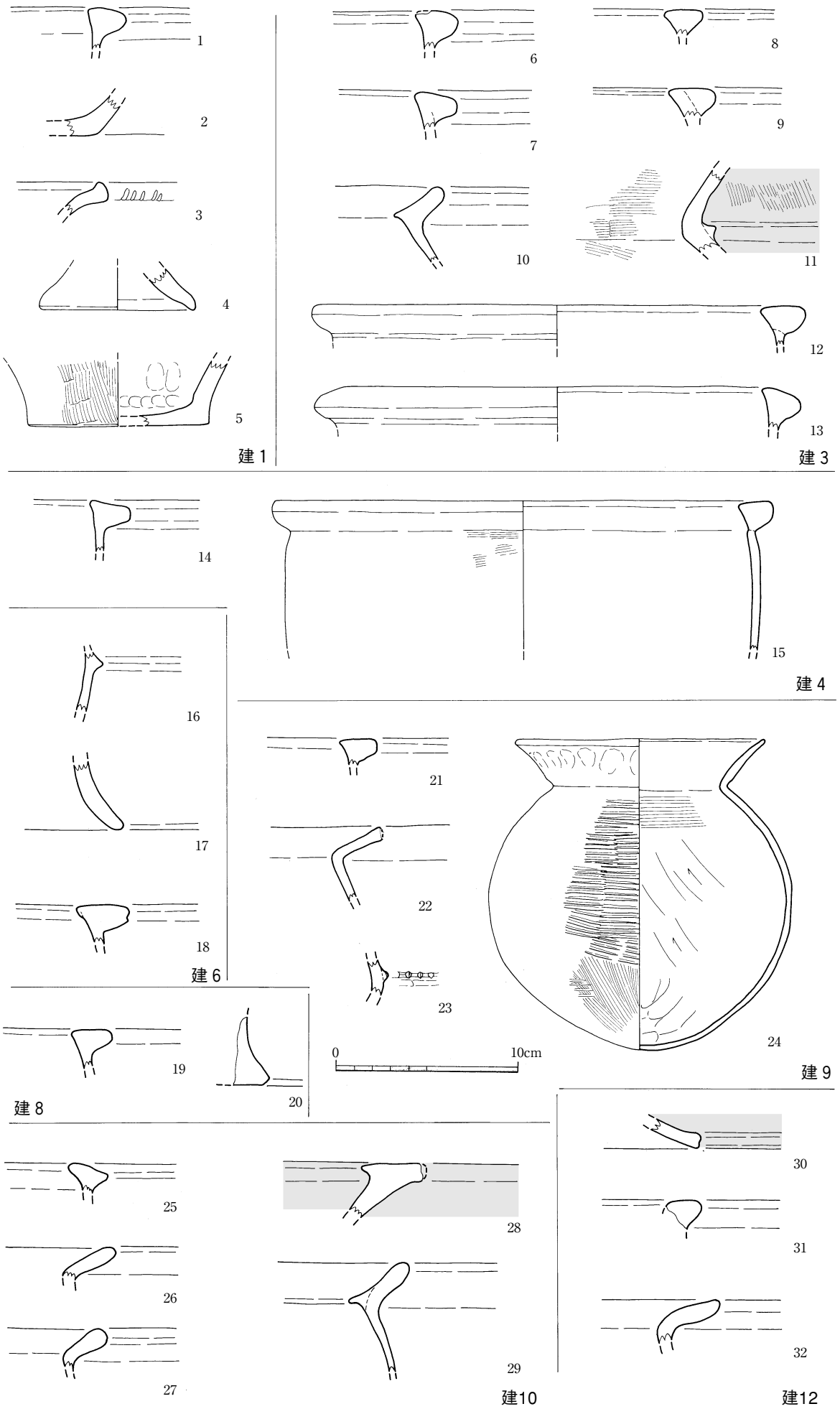
第37図　10号掘立柱建物跡・4号土坑実測図（1/60）

出土遺物（図版 21、第 39 図）

第 39 図 25 は柱３出土、口縁下から使用変色が見られる。第 39 図 26 は柱４出土で、口縁下から変色している。第 10 図 27 は柱２出土で、器面は摩滅している。第 39 図 28 は柱１出土で、口縁先端部は残っていない。器壁の厚さから広口壺の口縁部と考えられる。第 39 図 29 は柱１出土の中型甕で、小片のため不明確だが 36 ㎝程に復元できる。第 60 図４は柱４出土の黒曜石製の石錐で、右上の角は欠損後に再利用のため丸く調整剥離したものである。先端は欠損しており、1.24 ｇを測る。



第 38 図　11・12 号掘立柱建物跡・３号土坑実測図（1/60）



第 39 図　１・３～６・８～ 12 号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/3)

11 号掘立柱建物跡（図版 13、第 38 図）

調査区北西部に位置し、柱穴は１辺 30 ～ 80cｍ前後の略方形プランで、埋土も他の掘立柱建物跡と等しいことから、西半部が調査区外に出る１間の建物に復元した。柱間は 422cｍで、他の建物の桁行に近いので、これを桁行とする。柱穴の深さは 25 ～ 38cｍ残っているが、柱根の沈み込みは見られない。出土遺物から弥生時代中期後葉と思われる。

出土遺物（第 39 図）

30・31 は柱２出土で、30 は径 18cｍ前後の小型器種なので、短頸壺の蓋になるものと思われる。31 は甕の口縁部で内面側が接合部で剥離している。

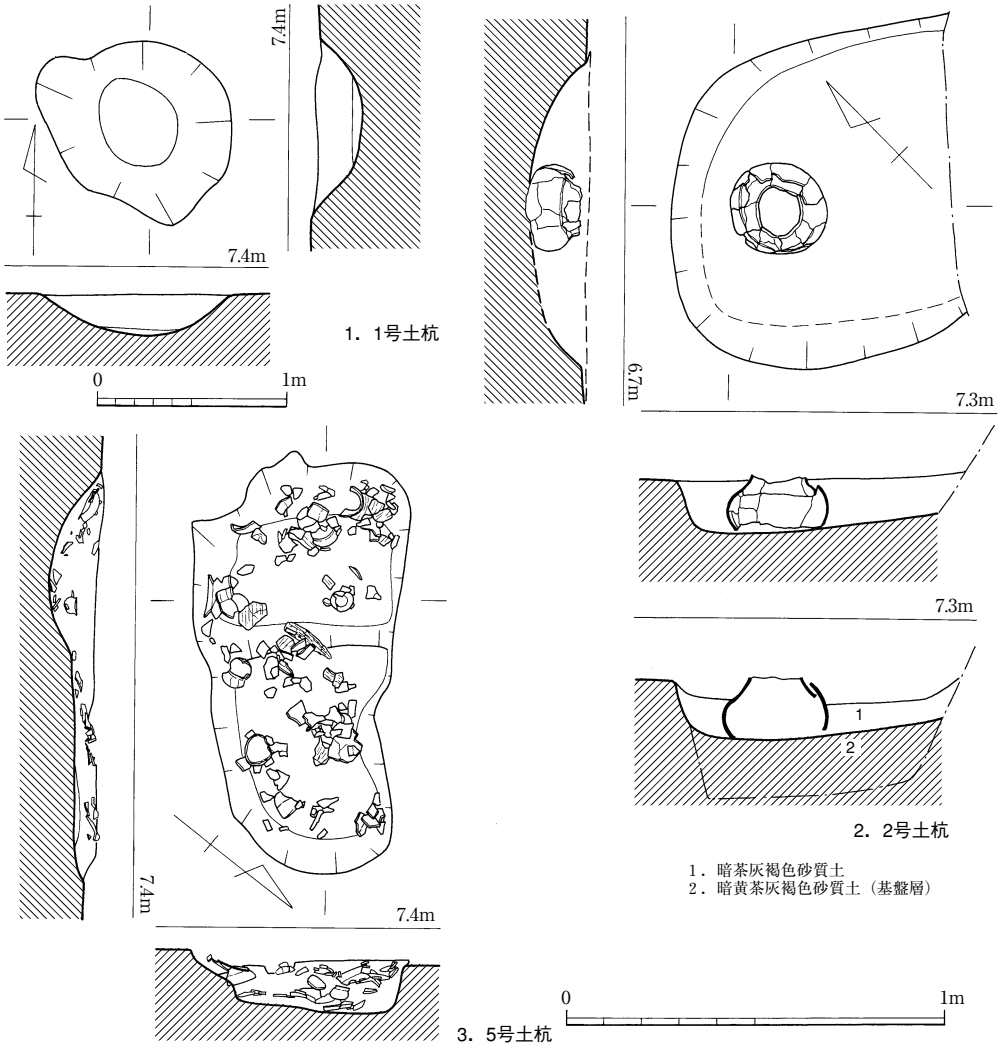
12 号掘立柱建物跡（図版 9・13・14、第 38 図）

調査区南部に位置し、１×１間の建物で、296 × 306cｍの規模に復元できる。他の建物跡の柱穴より小型で、径 22・26cｍの円形と、1 辺 32cｍ前後の略方形プランである。38 ～ 50cｍ前後残っており、柱４は５号溝状遺構を切る。柱２の北側に柱穴があるが、柱穴２・４のライン上に位置するので、建物に伴うものかもしれない。

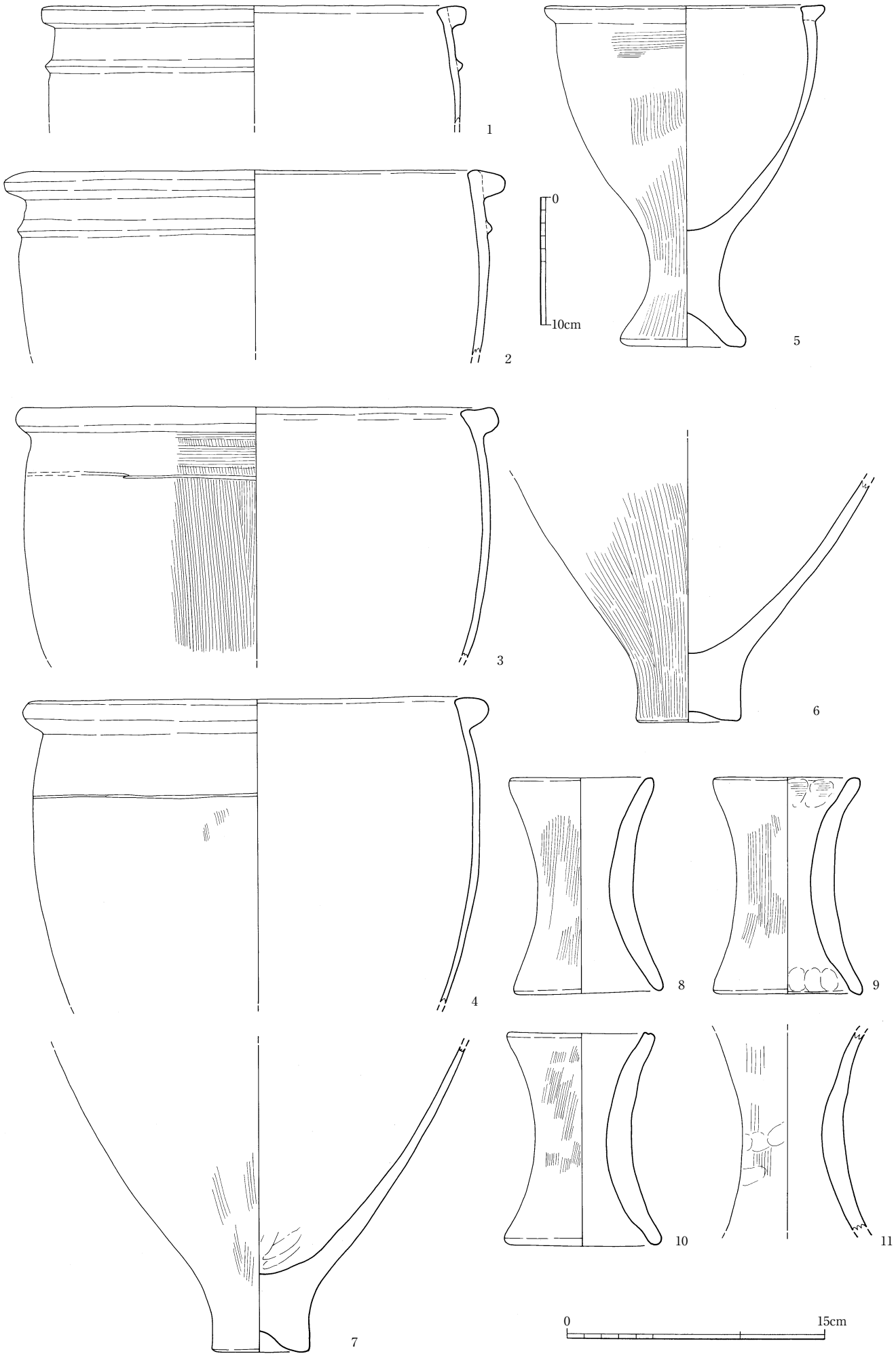
ほぼ中央に３号土坑があるが、これは本遺構に伴うものと考えられる。出土遺物が少なく、時期を特定できない。

出土遺物（第 39 図）

30 は丹塗り器台裾片、31 は甕の口縁部片、32 は口縁部の内面側がやや肥厚する甕の口縁部。



第 40 図　１・２・５号土坑実測図（1 は 1/40、2・3 は 1/20）



第 41 図　　1 号土坑出土土器実測図（1 は 1/4、他は 1/3）

（２）土坑

１号土坑（図版 14、第 40 図）

調査区中央西端部に位置し、５号掘立柱建物跡に隣接する。不整形で、長軸 110cｍ、短軸 90cｍを測る小型の土坑である。最深部でも 22cｍで、土器が集中して出土したので、廃棄土坑の可能性がある。側壁に沿って土器が広がっていた。出土遺物から弥生時代中期初頭。

出土遺物（図版 19、第 41・42 図）

第 41 図１～４・６・７は中型甕で、１・２は器面が失われており、器面調整は不明。３は口縁内側端部が突出しており、内外口縁下まで使用による変色が見られる。器面の残りがよく、外面肩部と内面口縁下まで使用による変色がある。４は器面の一部が残っており、目の細かいハケの痕跡がある。５はほぼ完形の小型甕で、底部が大きいのは自立するためのものである。胴部は使用変色がある。６は目の間隔の広いハケによる丁寧な調整で、使用変色あり。７は器面が摩滅しており、外面は一部にハケが残る。使用変色あり。

第 41 図８～ 11 は器台で、大きさが似通っており、特に８・９は胎土や色調まで酷似している。丁寧なつくり。第 42 図１は蓋で完形に復元できる。歪みが大きい。天井部内面は接合部で剥落している。

２号土坑（図版 14、第 40 図）

調査区南東部に位置し、東側が調査区外に出るため、主軸方向や平面プランは明確でない。深さは 15cｍ程の深さしかなく、底面は平坦である。下半部を打ち欠いた壺を底面に土坑中央に正置しており、ほかに遺物が見られないことから、この壺を埋設した祭祀土坑と考えられる。弥生時代前期後葉（板付Ⅱｂ～ｃ式）か。

出土遺物（図版 19、第 42 図）

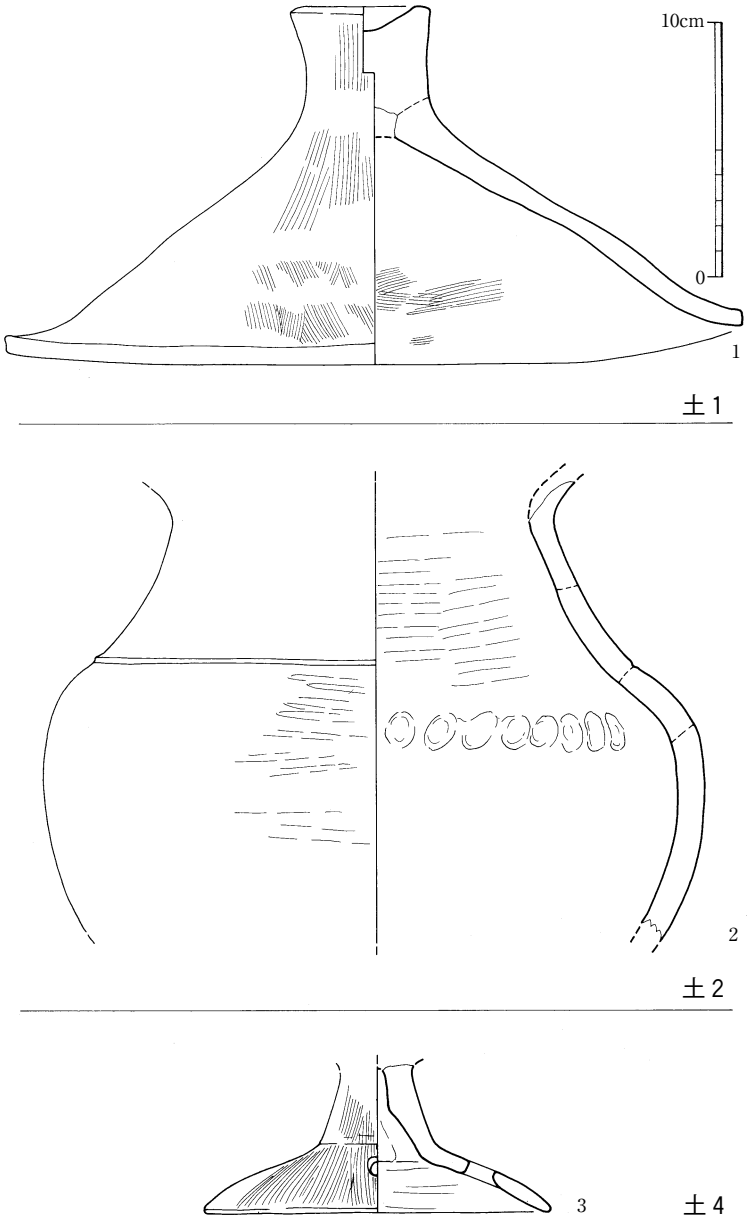
２は壺で、口縁部は削平を受けており、本来は口縁部まで残っていた可能性が高い。下部はほぼ水平に打ち掻いている。外面と内面口縁部は磨きが残る。器壁は厚い。

３号土坑（図版 15、第 38 図）

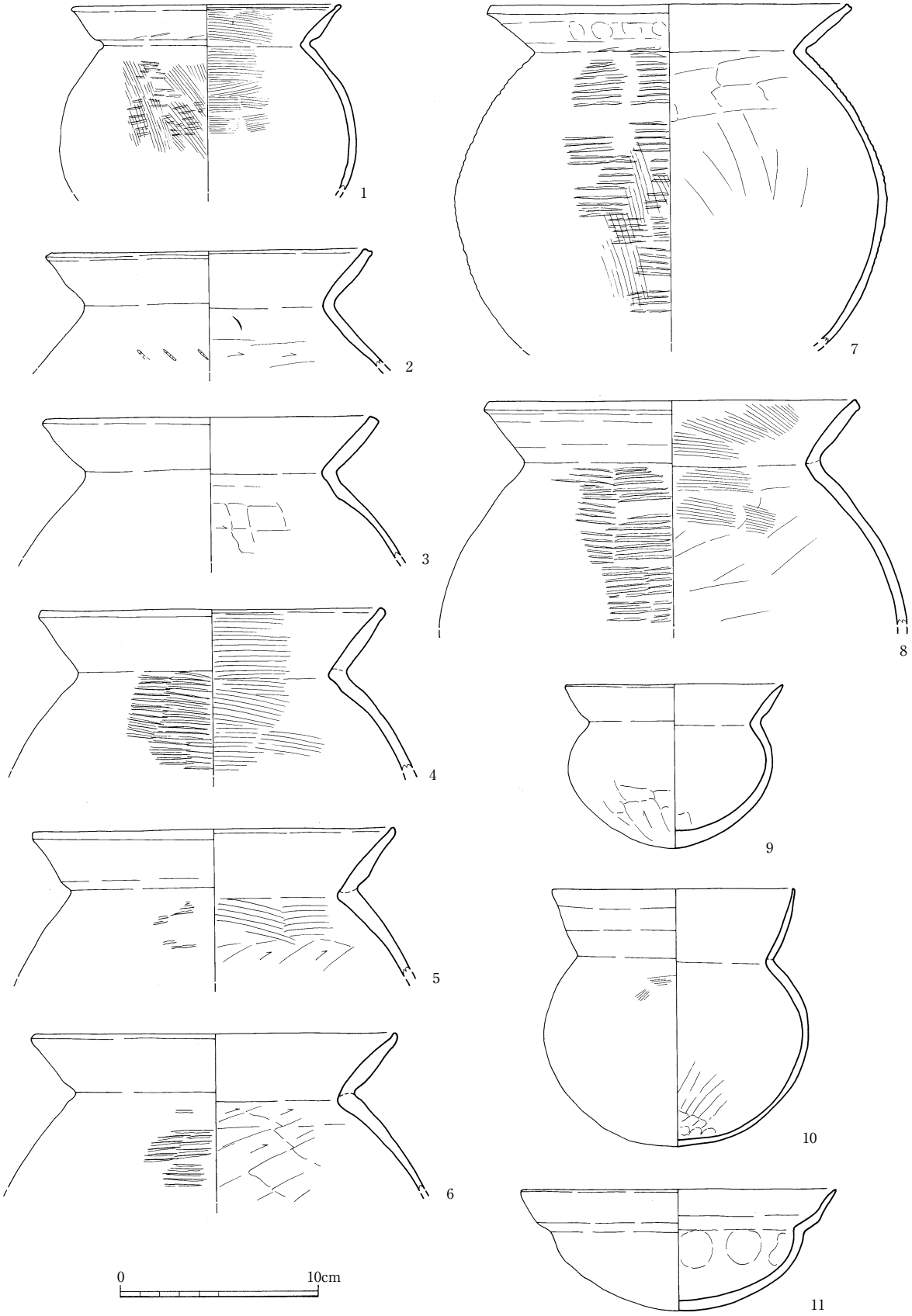
調査区南部に位置する略方形プランで、長軸は現存で 260cｍ、短軸 242cｍを測る。25m 前後の深さで、床面はほぼ平坦で、壁は直に立ち上がる。12 号掘立柱建物跡のほぼ中央に位置しており、これに伴うものと考えられる。図化できる遺物は出土しておらず、時期不明。

４号土坑（図版 13・15、第 37 図）

調査区南部に位置する略方形プランで、長軸は現存で 242cｍ、短軸



第 42 図　１・２・４号土坑出土土器実測図（1/ ３）



第 43 図　　5 号土坑出土土器実測図（1/ 3）

194cｍを測る。15m前後の深さで、床面はほぼ平坦で、壁は直に立ち上がる。10号掘立柱建物跡のほぼ中央に位置しており、これに伴うものと考えられる。出土遺物から古墳時代初頭。

出土遺物（第42図）

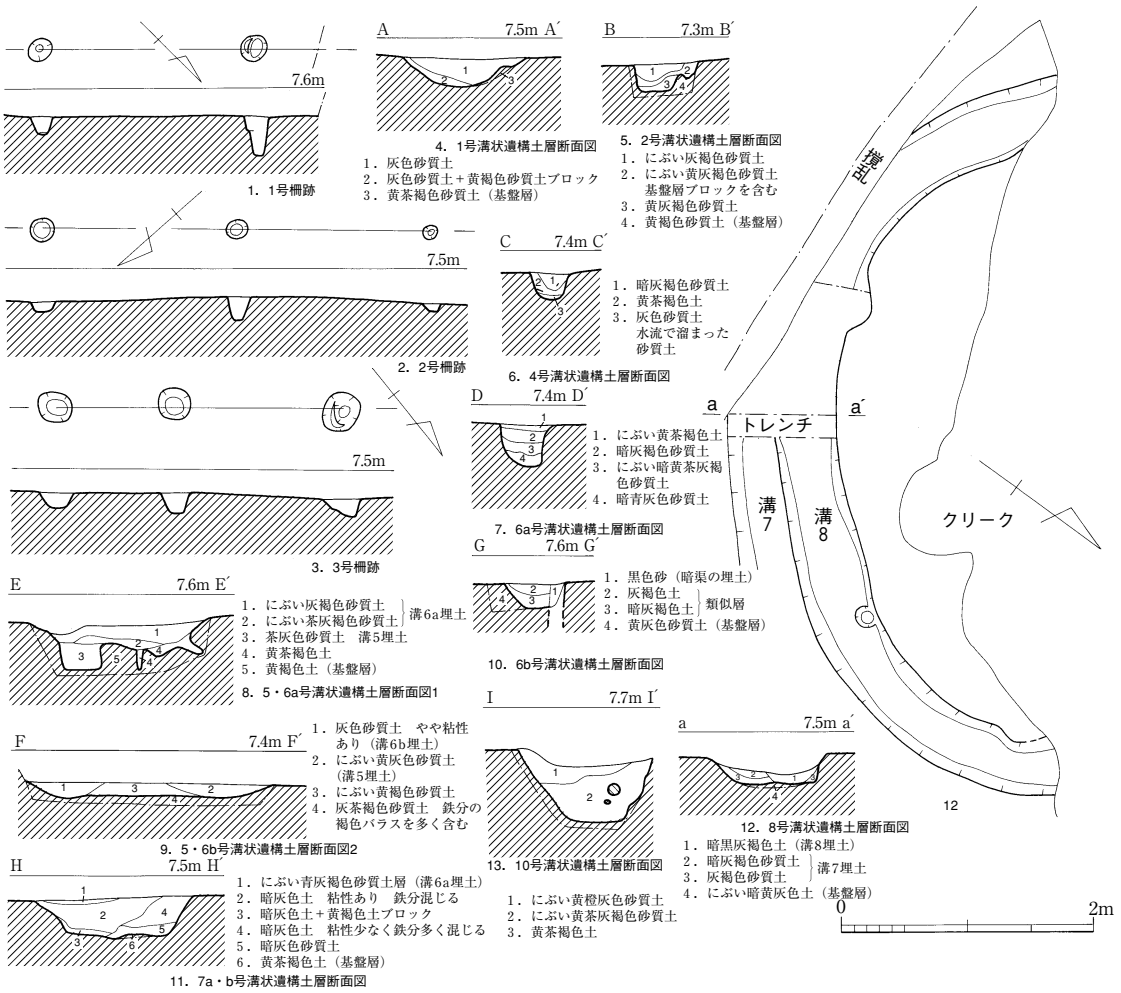
３は小型高杯か器台の脚部で、ハケ目は丁寧で、精良な胎土で、変色なし。残る穴の位置から、穿孔は４ヵ所である。

５号土坑（図版16、第40図）

調査区北部に位置する不整形プランで、長軸は235cm、短軸110mを測る。25㎝ほどの深さで壁は緩やかに立ち上がる。流路跡の埋没上位の窪みに廃棄されたもの。土坑周辺の流路上面にも庄内期の遺物が散見されるので、掘り込んで廃棄したのではなく、自然の窪みの可能性もある。出土遺物から古墳時代初頭。

出土遺物（図版19・21、第43・61図）

第43図１～８は甕で、１は口縁内側が尖らず肥厚し、頸部はナデで窪んでいる。器面の残りは悪い煤など使用による変色はない。２は口縁端部に丸みがあり、口唇部に窪みがある。肩部に刺突列がある。外面から内面口縁部に使用変色が見られる。３は器面が摩滅している。４は器面が残るが、使用による変色は認められなかった。５・６は器面が摩滅しており、使用変色は見られない。７・８は口縁内縁が尖り、口唇部は平坦面をなす。７は胴部中位から口縁部まで煤が付着する。内面は肩部以下に変色が見られる。タタキの上に目の幅の広いハケが施される。８は外面に煤の付着はなく、内面は焼成不良で灰色を呈する。第43図９・10は小型丸底壺で、９は器面が磨滅しており、胴下



第44図　柵跡、１・２・４～８・10号溝状遺構実測図・土層断面実測図（1/60）

位は削りが残る。口唇部は尖る。10 は器面が摩滅しており、ハケ目らしいものが部分的に見られる。第 43 図 11 は鉢で、口唇部は尖る。器面が摩滅しており、調整不明。

第 61 図 10 は砂岩製砥石で、粗砥。４面使用しており、上面は使用痕が多く残る。下端の欠損面が滑らかなので欠損後も使用したものと思われる。240 ｇを測る。

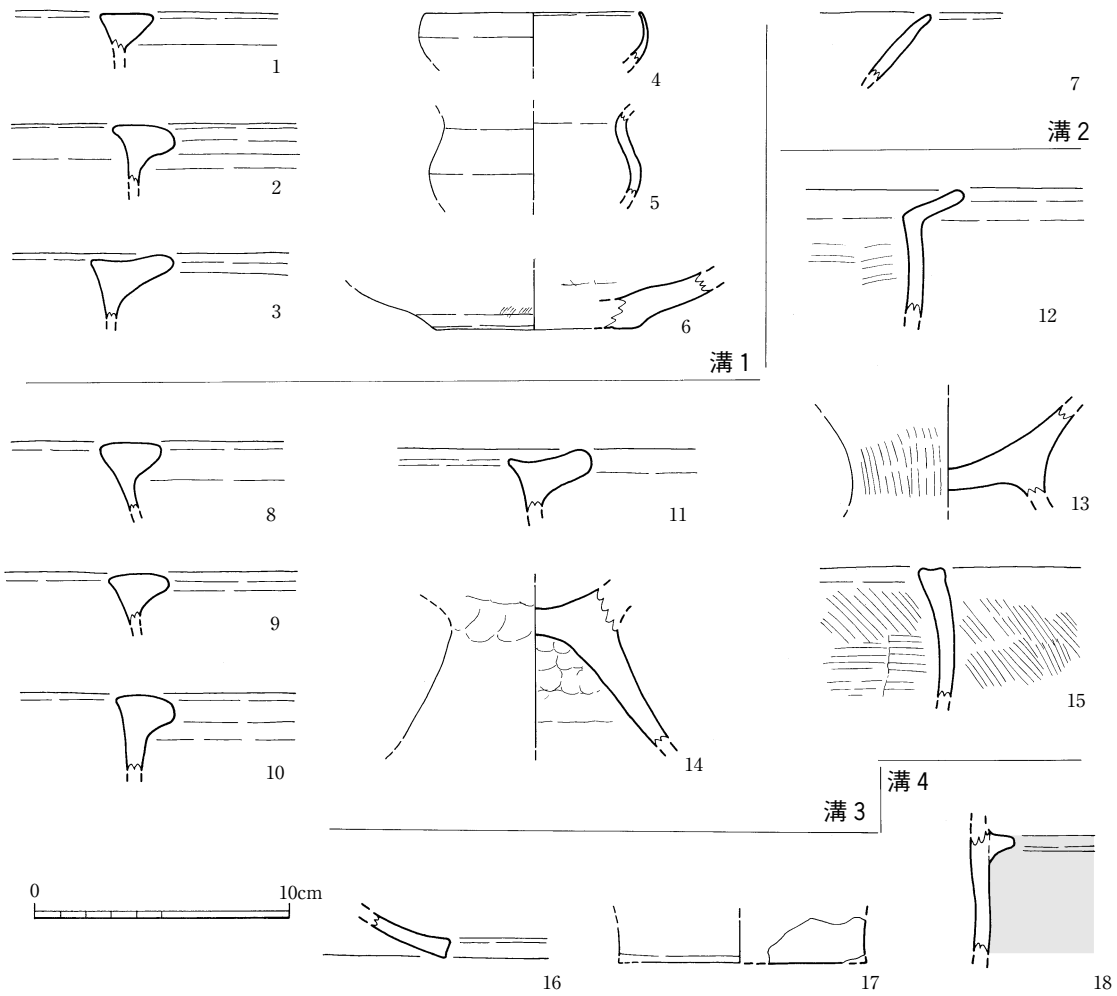
（３）溝状遺構

１号溝状遺構（図版 9・16、第 31・44 図）

調査区中央部に位置する。調査区北端が最も幅が広く最大 90cｍを測る。北に下がる。11 号掘立柱建物跡、２・５・６・11 号溝状遺構を切る。７号溝状遺構との切り合いは不明確だが、埋土から７号溝状遺構が切っていた。南端はクリークに切られている。中期初頭から中期末までの遺物が出土しているが、５号溝状遺構を切り、７号溝状遺構に切られていることから、弥生時代末から古墳時代初頭の間に収まるものと思われる。

出土遺物（第 45・32 図）

第 45 図１～３は甕の口縁部で、口径を復元できない小片である。いずれも器面が摩滅しており、調整不明。１は摩滅が顕著で、胎土は混入物少ない。２は径 25 ㎝前後の口径が想定できる。３は中型甕の大きさと思われる。第 45 図４は袋状口縁長頭壺の口縁部片と考えられる。器面が摩滅したため器壁が薄くなったもので、胎土は精良。５は器面が摩滅したため器壁が薄くなったもので、胎土は精良。６は胴部の広がりかたからみて壺の底部と思われ、器形や色調から古墳時代前期のものと考えられる。



第 45 図　１～４号溝状遺構出土土器実測図（1/3）

２号溝状遺構（図版 9・16、第 31・44 図）

調査区北部に位置し、南東端部調査区外に出る。幅は 40 ～ 60cm 前後、深さは 10 ～ 30cm の小溝で、わずかに南に下がる。11 号溝状遺構を切り、１号溝状遺構に切られる。古墳時代初頭だが、出土遺物が少ないため確実性に欠ける。

出土遺物（第 45 図）

７は甕の口縁部で、器面は摩滅しており、調整不明。小片なため反転復元不能。

３号溝状遺構（図版 9、第 31 図）

調査区西北端部に位置し、北端部は調査区外に出る。幅は均一で 100cm 前後、20cm 前後の深さで、北にやや下がっている。東から北に湾曲しており、他の溝状遺構とは湾曲方向が異なる。９・11 号溝状遺構を切っているが、９号溝状遺構はほぼ併走していることから、その掘り直しと考えられる。1 号掘立柱建物跡を切るものと思われるが、柱穴の切り合いは不鮮明だった。土層セクションが冠水時に崩落したため、土層はメモしか残っていないが、最上位は灰褐色土、次いで、灰褐色土、灰砂質土と堆積しており、最下層に地山漸移層がある。

出土遺物（図版 21、第 43・60・61 図）

第 45 図８から 11 は甕の口縁部で、８から 10 は器面が摩滅している。８・10 は小片で復元できないが、第 45 図９は不正確ながら径 28 ㎝前後に復元できる。第 45 図 11 はやや器面が残る。不正確ながら径 35 ㎝前後に復元できる。第 45 図 12 は器面が摩滅しているが、内面に使用変色が見られる。不正確ながら径 28 ｃｍ前後に復元できる。第 45 図 13 は甕の底部で、外面は目間隔の広いハケが施されている。第 45 図 14 は裾が開くことと、使用変色がないことから、高台付甕ではなく、脚付器種の脚部と考えられる。第 45 図 15 は単口縁の鉢で、口唇部にナデ窪みがある。目間隔の広いハケが施される。不正確ながら径 30 ㎝ほどの復元できる。内面の摩滅が外面に比べて著しいのは使用によるものと考えられるが、使用変色はなく。煮沸使用するものではないのだろう。

第 60 図 17 は掻器で、右側面は欠損。黒曜石製で、204 ｇを測る。第 61 図 12 は緑色片岩製の砥石で、３面使用している。小型なので手持ちの中砥であろう。

４号溝状遺構（図版 9・16、第 31・44 図）

調査区中央部に位置し、３号溝状遺構に切られる。８号掘立柱建物跡に切られている。幅は北部で 75cｍ前後で南に行くと広くなる。22 ～ 30cｍ前後の深さで、北に下がっている。出土遺物の時期は特定にしくいが、８号掘立柱建物跡を切ることから前期末か。

出土遺物（図版 21、第 43・62 図）

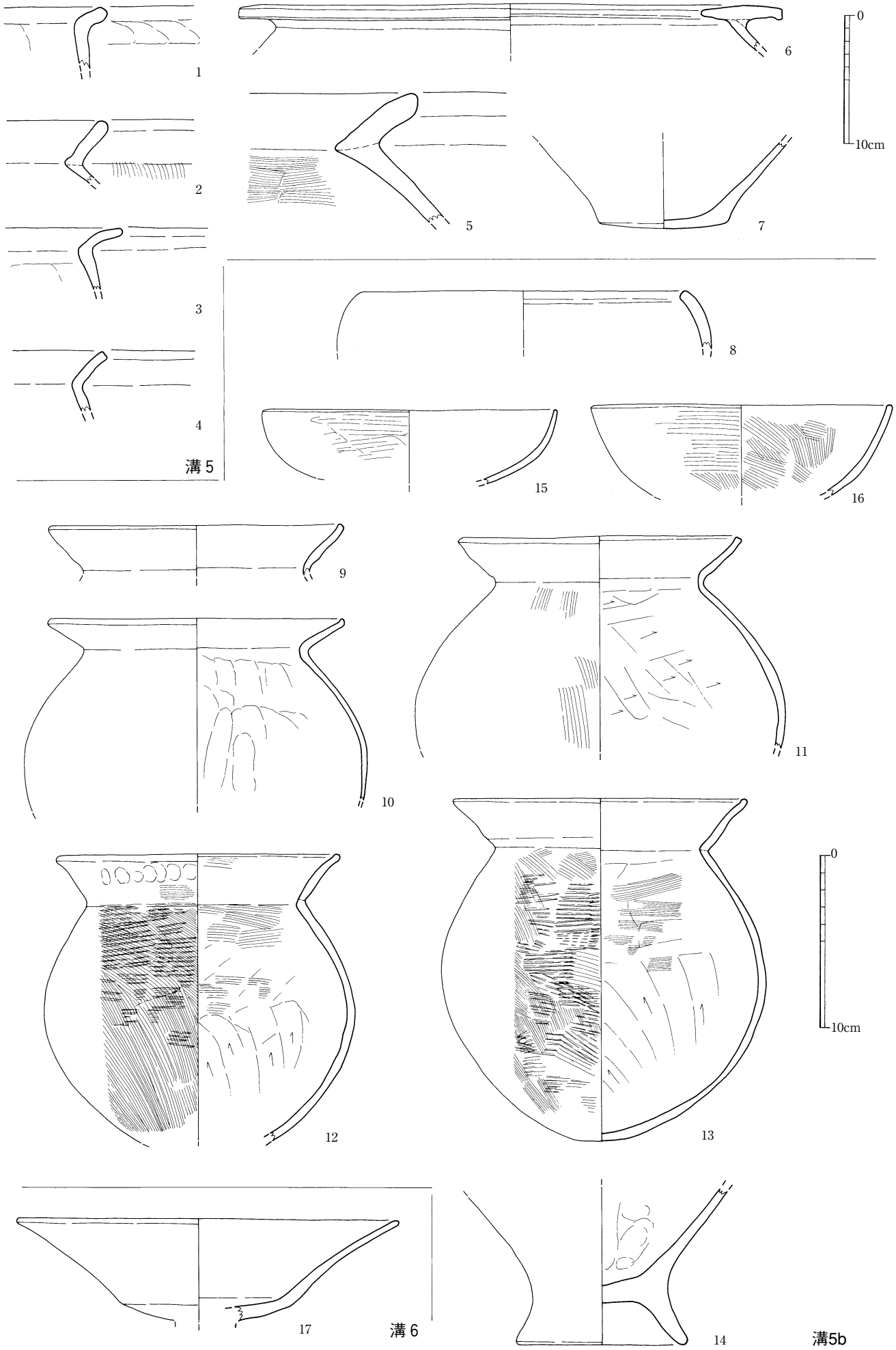
第 45 図 16 は口縁部に煤が付着するが、器面が摩滅しているため調整はわからない。第 45 図 17 は底部片だが、外面の側縁が欠損しているため、本来の外形がわかりにくい。第 45 図 18 は丹塗り土器の胴部片で、甕であろうか。径の復元不能。第 62 図 14 は半分遺存する投弾である。

５号溝状遺構（図版 9・16、第 31・44 図）

調査区西部に位置し、試掘トレンチのために 1 号溝状遺構との切り合いはわからなかったが、７号溝状遺構との関係から切っていると考えられ、１・６a・７・８号溝状遺構に切られている。４号溝状遺構とは合流しており、湾曲したところで４号溝状遺構と重なるので掘り直しの可能性がある流路を切る調査区中央で２号柵跡と平行する。幅は 50 ～ 80cｍ前後で南が幅広い 15 ～ 35cｍ、深さはほぼ均一だが、わずかに北が深い。出土遺物から、弥生時代中期末から後期初頭だろう。

出土遺物（図版 21、第 46・60・62 図）

第 46 図１～８は甕の口縁部で、１は径 18cm 前後の小型品で、調整も粗い。２～４は径 30cm 前後の中型甕で、器面の摩滅が著しい。５は大型甕で、成型・調整が丁寧で、煮沸使用した痕跡がないことから、甕棺片の可能性がある。第 46 図９～ 11 は器面が摩滅しているが、タタキの痕跡はなく、このうち 9・11 は器形・胎土が類似しているが別個体である。第 46 図 12 は７割ほど残存している。



第 46 図　5・6 号溝状遺構出土土器実測図（6 は 1/4、他は 1/3）

煤は外面に全体的に付着している。第46図13はほぼ完形で、胴中位以下は煤付着。9～13の口縁端部は突出していないがやや尖る。第46図7はレンズ底で器面は摩滅していて調整不明。外面には使用変色あり。第46図8は器面摩滅が著しく、色調の変化もわからない。第46図15・16は椀で、いずれも丁寧な調整が施されており、第46図16は胎土も精良である。第46図6～13・15・16は5号土坑周辺から出土したもので、上位の5号土坑から流れ込んだものと思われる。

第60図9は小型の掻器で、右側縁は調整剥離、第60図20はスクレーパーで、左側縁は刃潰ししており、左上縁には平坦面をもつ。サヌカイト製で、20.49 gを測る。第62図11は球形で、加工痕はないが石弾かもしれない。凝灰岩製で36.09 gを測る。

6号溝状遺構（図版9・16、第31・44図）

調査区西部に位置し、1号流路との切り合いはわからなかった。1号溝状遺構を切っており、切り合い関係は明確に検出された。遺構の北東端は検出されていないが、4号溝状遺構に繋がる可能性がある。4号溝状遺構と同一遺構であれば、切っていると考えられる。幅は60cm前後で北東ほど狭くなる。深さは10～15cmで南に下がっている。遺物は少ないが古墳時代初頭に属すると考えられる。

出土遺物（図版21、第46・61図）

第46図17は高杯で、胎土は精良。第61図1はスクレーパーで、下辺にのみ刃がつく。サヌカイト製で、30.43 gを測る。

7号溝状遺構（図版9、第31・44図）

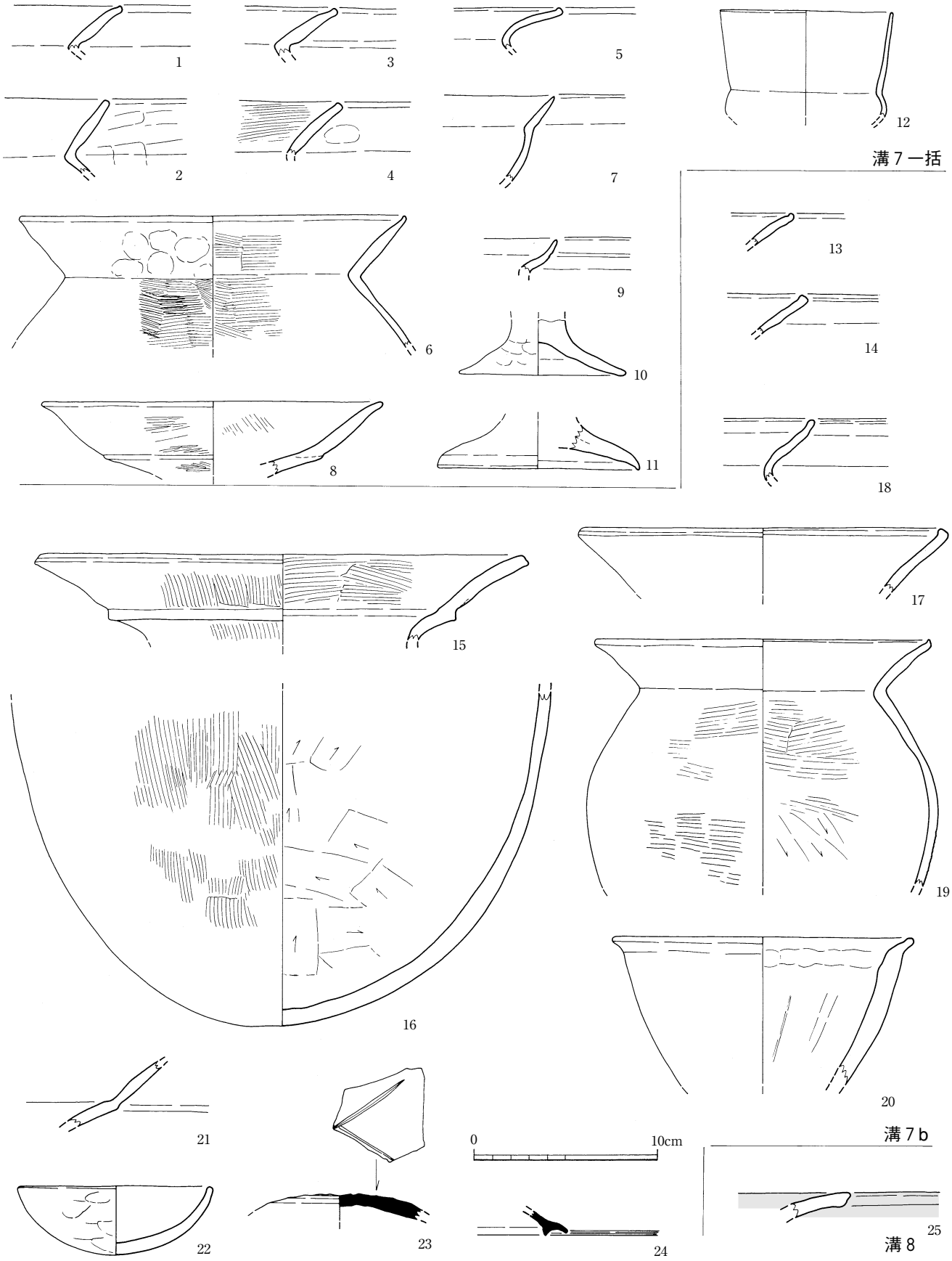
調査区西部に位置し、クリークのために西南部と中央部が失われているが、浅くもなっている。掘り直しによりa・bに別れ、西南部では7a号が7b号の中央部に重なって検出され、130cm深さは残りがよく、aは35～40cm、bは20～35cmを測る。北東ほど残りが悪く、北東端はクリークに切られ、わずかに検出された。9・10号掘立柱建物跡を切る。床面は北に下がる。7a号は古墳時代初頭で、掘り直しの7b号は7世紀前葉だろうか。

出土遺物（図版21、第47・60・61図）

第47図1～3は口縁端部がやや尖る。1と2は胎土や色調が近く、同一個体の可能性もある。2は外面に削り状のナデが見られる。胎土は混入物が少なく軟質。変色は見られない。第47図4は径17cm前後で、整形・調整は丁寧である。口唇部には平坦面がある。第47図5は他のものと異なり器壁が薄く湾曲して外反し、口縁端部が肥厚する。第47図6は肩部片で、外面は摩滅してわずかにタタキが残る。使用変色は見られず、胎土は軟質で精良。第47図7は鉢で、器面は摩滅しており、胎土は精良で軟質。径は18cm前後に復元できる。第47図8は小型高杯で、外面は磨き、内面はハケのみ。胎土は精良だが混入物は入る。第47図9は器台で口縁下に段をもつ。径は14cm前後に復元できる。胎土は精良で軟質。第47図10・11は小型の脚付器種の脚部で、10は器面が摩滅しており調整は不明。胎土は精良だが混入物は入る。11は器面が摩滅しており調整は不明。胎土は精良。8と10は胎土と色調が近いので同一個体の可能性がある。第47図12は小型丸底壺で、胎土は精良。

第47図13・14は7a号出土である。13は口縁端部に丸みのある肥厚があり、やや外反する。14の口縁端部は尖っておらず、肥厚といったほうがよい。外面口縁下の段はナデによるもの。

第47図15は2重口縁壺で、整形・調整が丁寧で、胎土も精良。第47図16は壺の底部で、外面の底部に器面の摩滅が集中しており、使用時のものと思われる。外面に煮沸使用の痕跡なし。外面は目の間隔の広いハケ、内面は削り。第47図17は壺で胎土は軟質で精良、18は甕の口縁部片で、器面摩滅で調整不明。口縁端部の肥厚は丸みを持つ。19は甕の上半で、口縁部と胴部片は図上接合である。第47図20は小型の鉢で器壁が厚く、つくりも調整も粗く、内外面は削り状のナデ。使用変色はないことから、煮沸使用はされていないと考えられる。第47図21は高杯片で胎土は精良軟質。口縁部は欠損しているが、径37cm前後に想定される。器面は摩滅のため残っていない。第47図22は杯で外面は削り状ナデでゴワゴワしており、内面は平滑になでられている。第47図23・24は須



第 47 図　７・８号溝状遺構出土土器実測図（1/3）

恵器蓋で、23はヘラ記号が見られるが、欠損が大きく、全体像はわからない。23と24は焼成が異なり、別個体。

第60図１は７ｂ号出土で、石鏃で、先端と基部を欠損している。黒曜石製で0.80ｇを測る。第61図13は砥石で、上下端は欠損しており、２面使用している。側面の平坦面は整形面である。砂岩製の粗砥で、93.96ｇを測る。

８号溝状遺構（図版９・17、第31・44図）

調査区南西端部に位置する円形周溝遺構で、クリークのために西半分が失われている。径480cm前後に復元でき、５号溝状遺構を切る。幅は55cm前後でほぼ均一である。深さ25cm前後で、南に下がっている。溝内部からの出土遺物はわずかでだが、５号溝状遺構を切ることから弥生時代中期末から後期初頭だろうか。

出土遺物（第47図25）

内外丹塗りの口縁部で、内面に暗文状のミガキが縦方向に入ることから、口縁が大きく開く壺か。

９号溝状遺構（図版９、第31図）

調査区西北端部に位置し、基盤層に近い砂質土で検出時は不明瞭だった。東から北に湾曲する。西壁が調査区外に出るため、幅は現存で100cm前後、20cm前後の深さを測るが、底面は検出されていない。３号溝状遺構に切られているが、３号溝状遺構とはほぼ併走していることから、３号溝状遺構は掘り直しと考えられる。

土層セクションが冠水時に崩落したため、土層はメモしか残っていないが、最上位は黄灰褐色土、次いで、青灰色砂質土と堆積している。３号溝状遺構との関係から中期前葉か。

出土遺物（第48図）

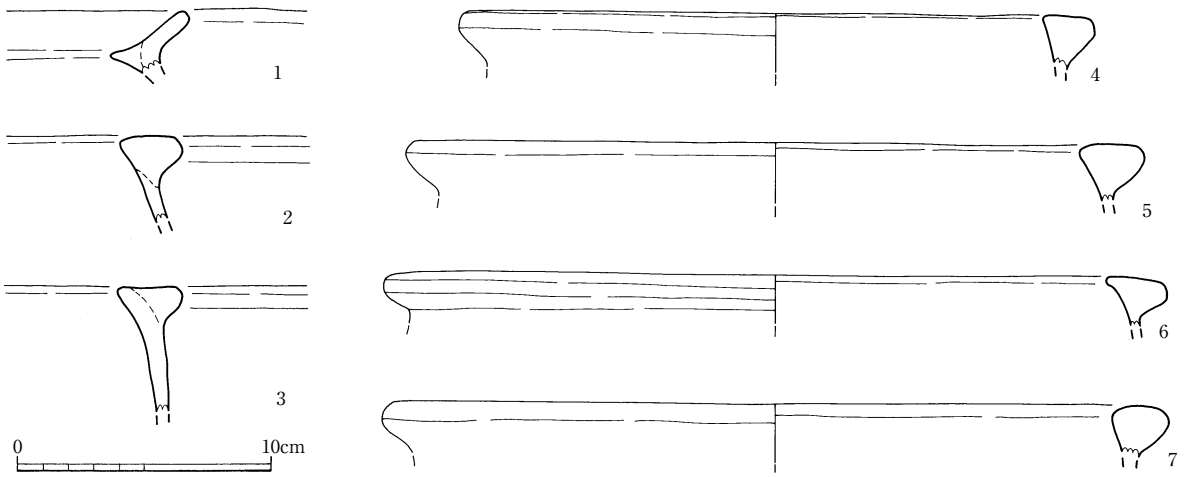
１～７は甕の口縁で、４以外は中型甕と考えられる。１は器面が残るが、２は器面摩滅で調整不明。胎土は混入物が多い。３は器面摩滅で調整不明。口縁部に使用変色あり。４～７は器面摩滅で、５・７は外面口縁下まで使用変色がある。

10号溝状遺構（図版９・17・20、第31・44図）

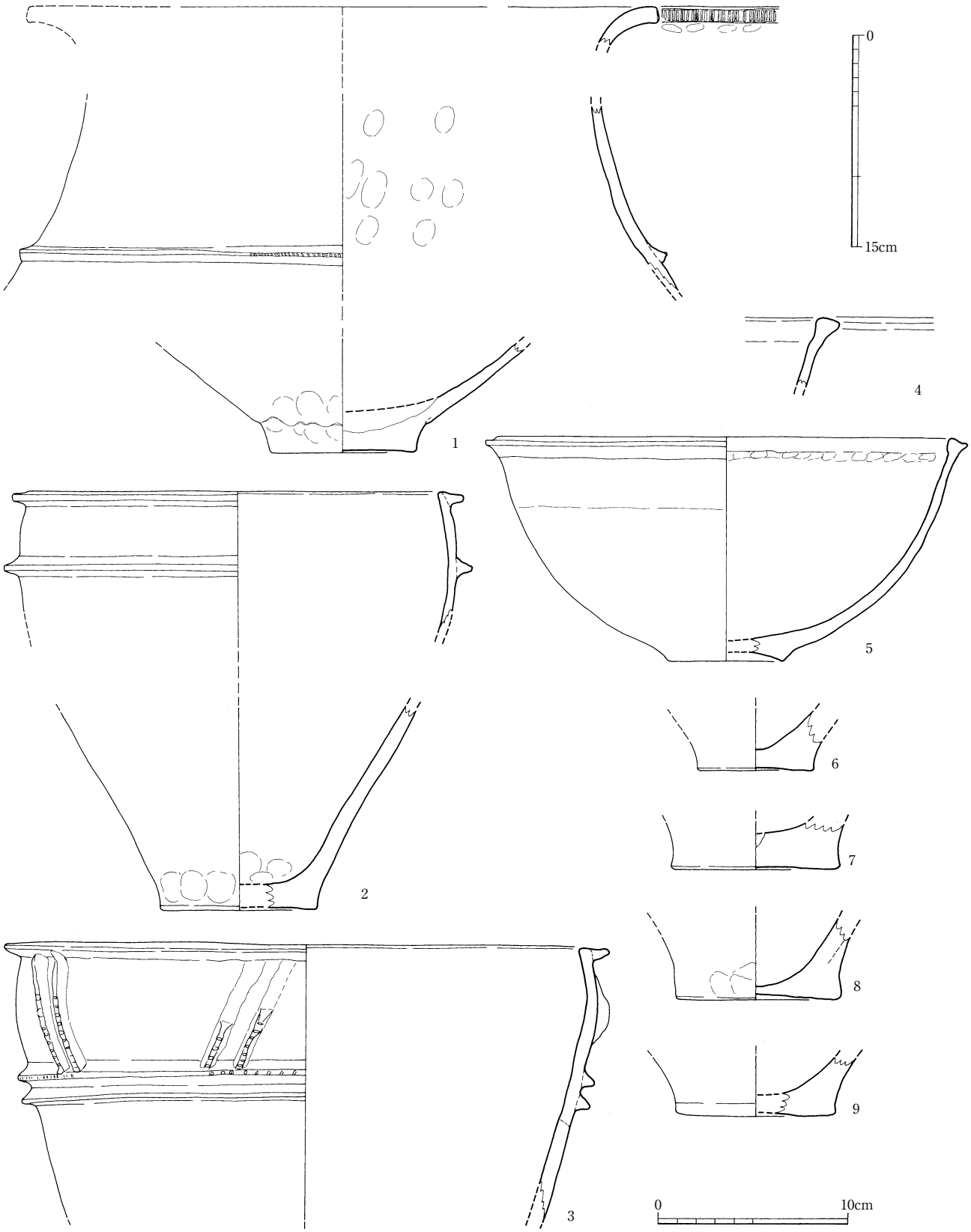
調査区南東端部に位置し、埋土が基盤層に近く検出は不明瞭だった。東壁は調査区外に出る。６・９号掘立柱建物跡・２号土坑に切られる。幅は現存で120cm前後で、深さ60cm前後で、溝内部からの出土遺物はわずかだが、弥生時代前期後葉の板付Ⅱｂ式期と考えられる。

出土遺物（図版９・21・61、第49図）

第21図１は接合しないが同一個体と思われる大型壺である。頸部片の下位には突帯はなく、肩部片との接合位置は不鮮明で、傾きから位置を推定した。内面底部は班状に剥離している。２・３は



第48図　９号溝状遺構出土土器実測図（1/3）



第 49 図　10 号溝状遺構出土土器実測図（1 は 1/4、他は 1/3）

口縁部を外に肥厚させた甕で、２の口縁部と底部は同一個体である。胴部の突帯上から下と口縁端部に煤が付着する。底部の内面は使用変色あり。３は口縁部と胴部の突帯の間に二重の突帯を斜めに貼り付けたもので、一部に刻み目が残っている。口縁部の突帯は貼り付け後の調整がない。器面は摩滅。４・５は鉢で、５は口縁外縁が尖っている。器面の残りはよくないが、ナデである。６～９は甕の底部で、器面摩滅で調整不明。

第60図８は掻器で、つまみ部を持ち。上縁は刃潰ししている。1.78 ｇを測る。第61図４は未製品で器種不明。128 ｇを測る。

11号溝状遺構（図版9、第31図）

調査区西北端部に位置し、基盤層に近い砂質土で検出時は不明瞭だった。西端は９号溝状遺構に切られ、東端は流路に切られている。幅は40cm前後、10～18cm前後の小溝で、北に下がっており、流路に流れ込むようである。７号溝状遺構とはほぼ併走していることから、掘り直しと考えられる。１号掘立柱建物跡を切るものと思われるが、柱穴の切り合いは不鮮明だった。１・２号溝状遺構にも切られる。図化できるものがないが、遺構の切り合い関係から中期中葉から後葉と推察される。

（４）流路跡

流路跡（図版9・17・18、第31・50図）

調査区北東部に位置し、西から北へ湾曲する。埋土が基盤層に近かったので検出は不鮮明だったが、壁は明確に確認できた。床面に鉄分が吸着し、硬化していたため３つの流れた痕跡が見つかり、８層に対応する最も外側のものを流路２とした。東壁沿いが最も深く、120cmほど残っている。11号溝状遺構と埋土が近く、切り合いが見られず、同時に存在するものかもしれない。５号土坑と５・６号溝状遺構に切られている。

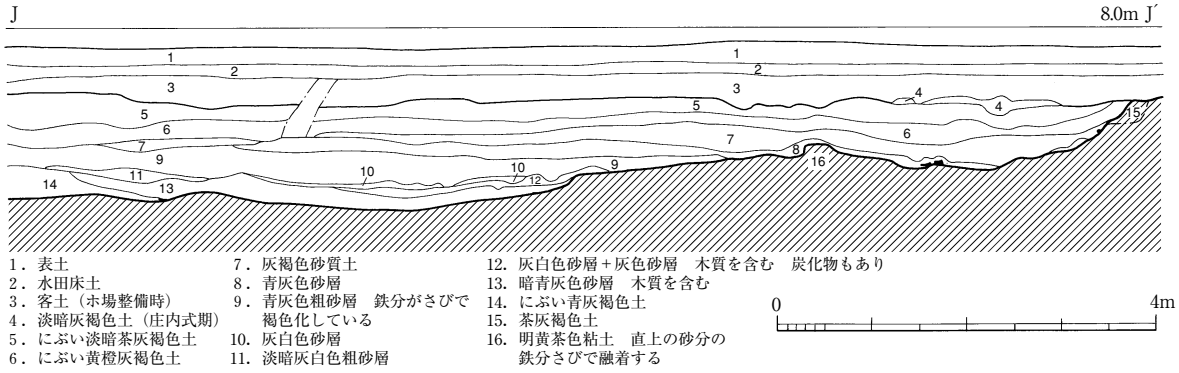
出土遺物はパンケース６箱ほどにのぼる。土層が明確に分けられなかったので、一括として取り上げたものと、上・中・下層で大きく分けて取り上げた。

出土遺物（図版20・21、第51～58・60～62図）

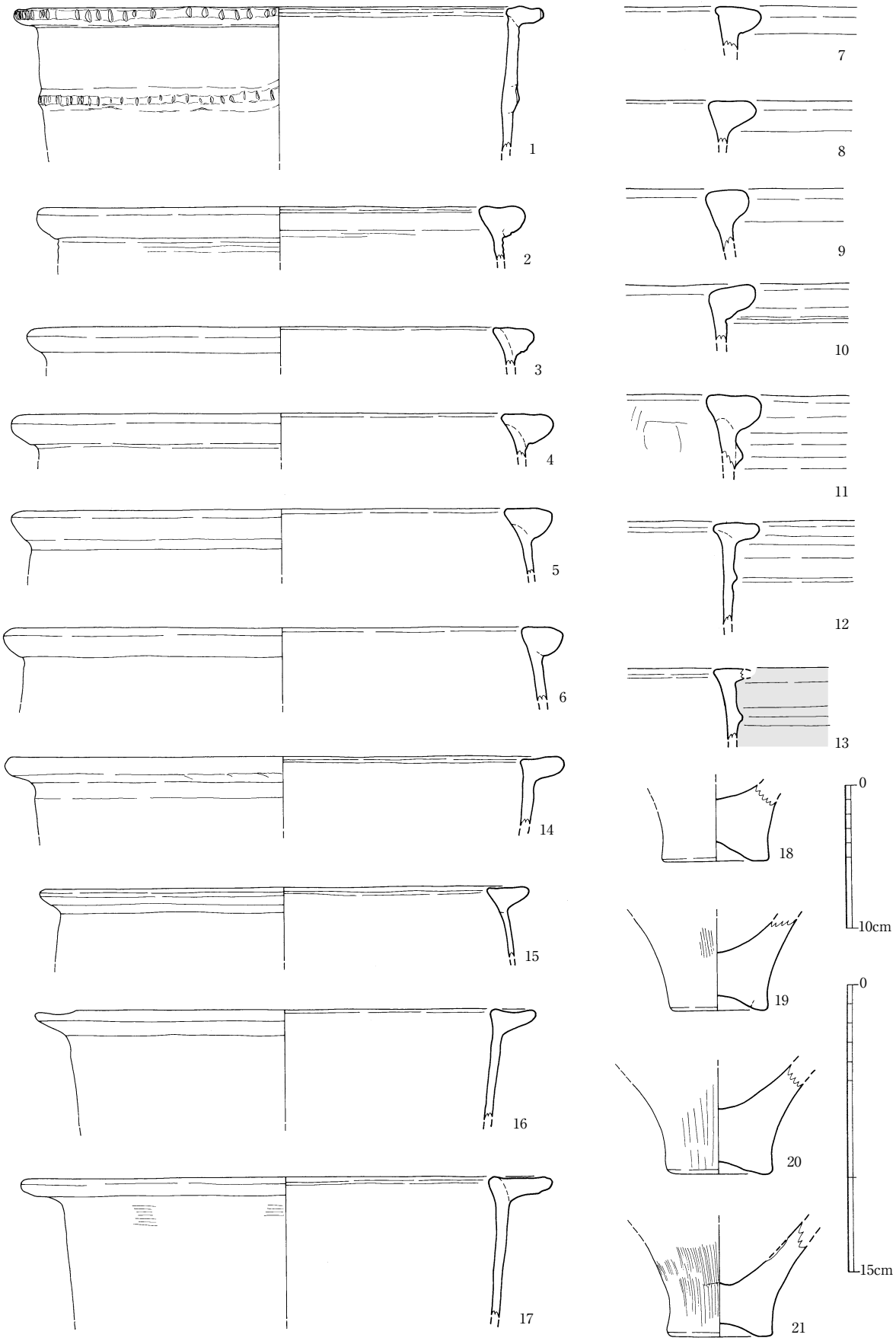
第51～55図は一括で取り上げた土器である。第51図１は弥生時代前期後葉の甕で、外面の口縁下と突帯下に使用変色がある。突帯は摩滅している。２～21は甕で、２～４・７は口縁外面下から変色している。いずれも器面が摩滅する小片である。10は口縁下の接合部を沈線で調整している。10・12は小片で不明確だが30cm前後に復元できる。13は口径から、中型か大型品で、外面には赤色顔料があるが、口唇部には見られない。15は器壁が薄く、精良なつくり。19～21は底部で、20・21は外面が使用により変色している。

第52図１～11は甕の口縁部で、12は高台付の甕の底部。13～22は高台付甕の高台部。３は口縁内面の途中から外面に使用変色がある。10・11は小型品で整形も粗い。22は高台内面が焼成不良で暗灰褐色を呈する。

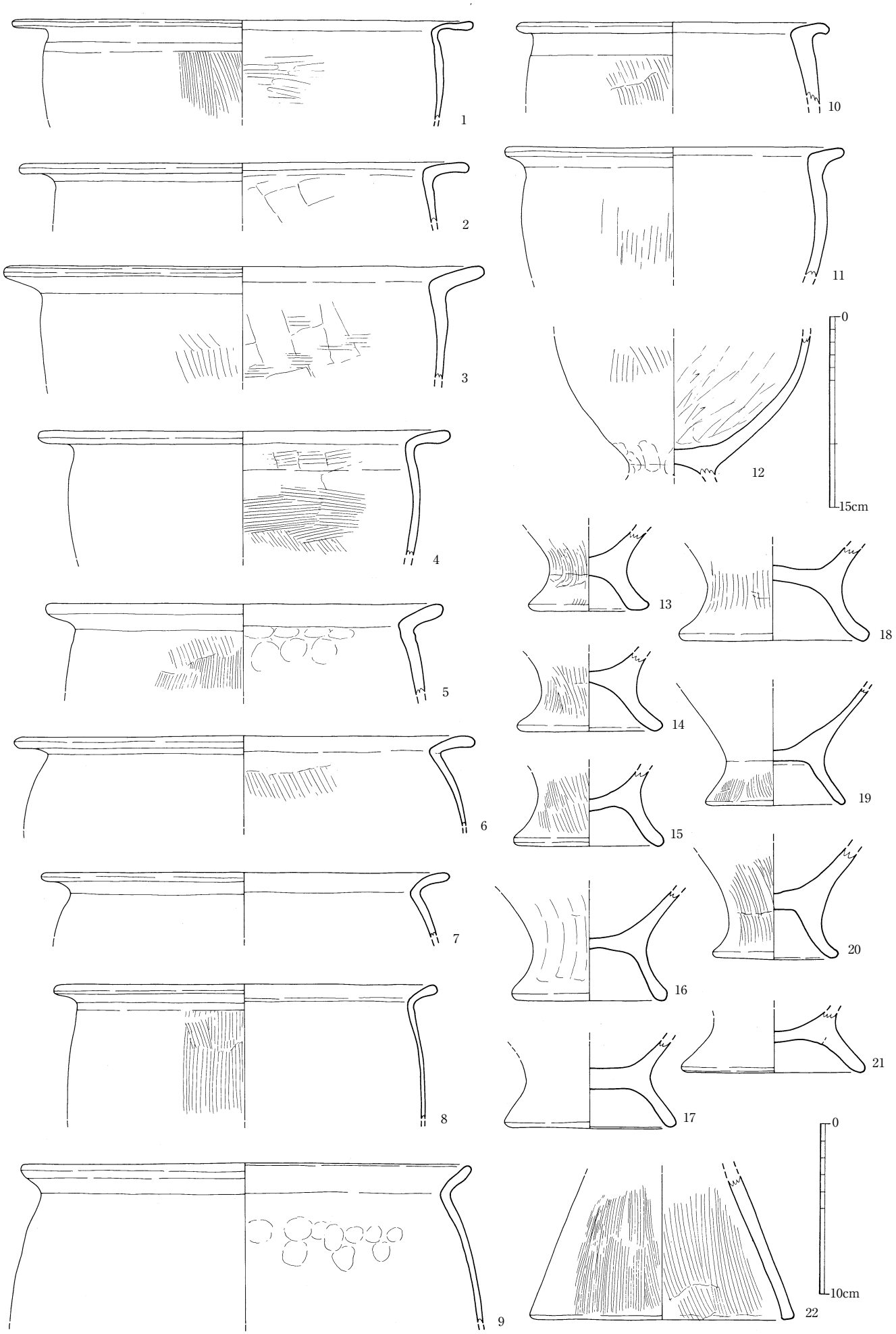
第53図１～13は甕の口縁部で、14～19は底部である。１・３・６～８・12は口縁から外面に



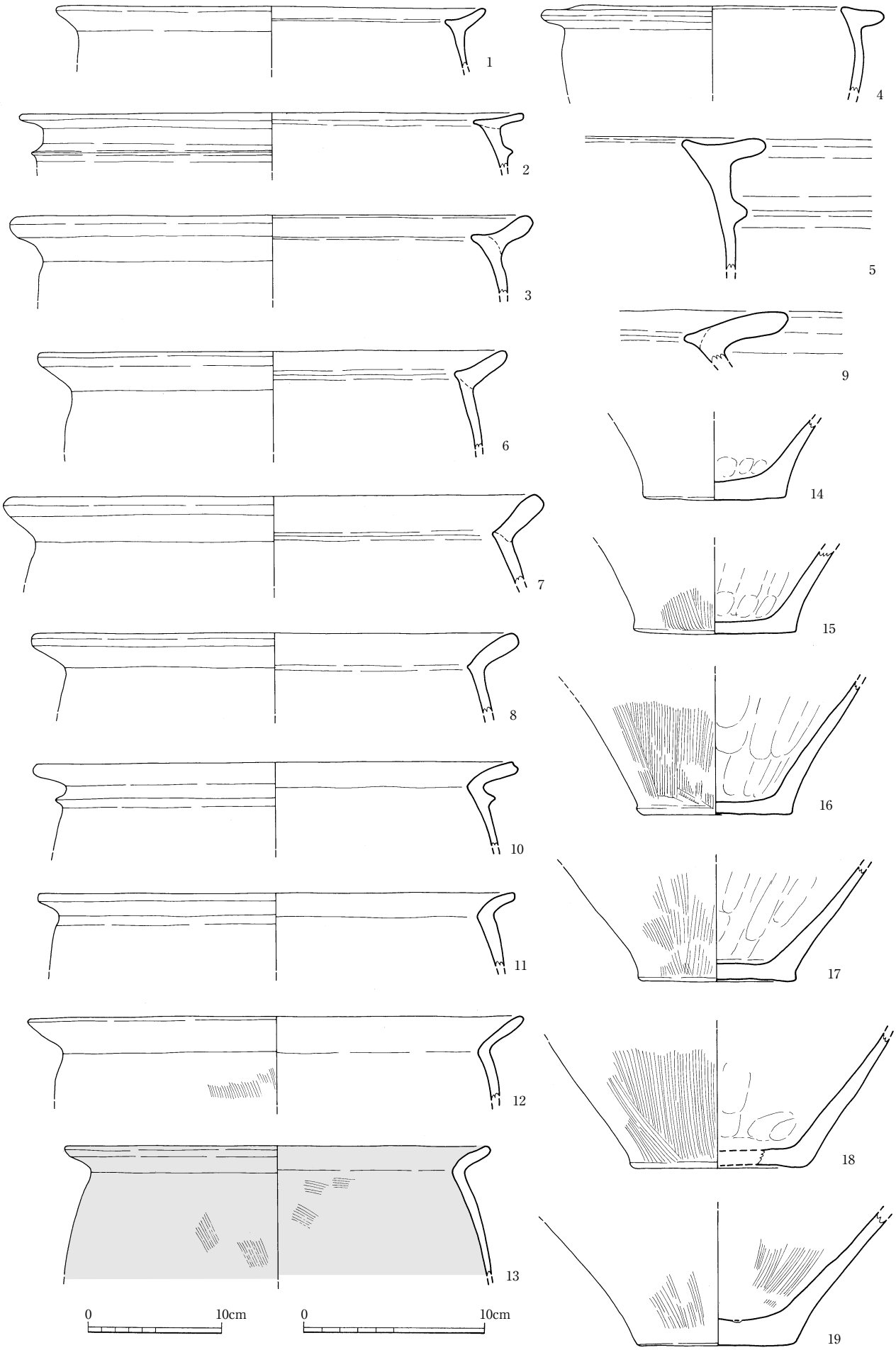
第50図　流路跡土層断面実測図（1/80）



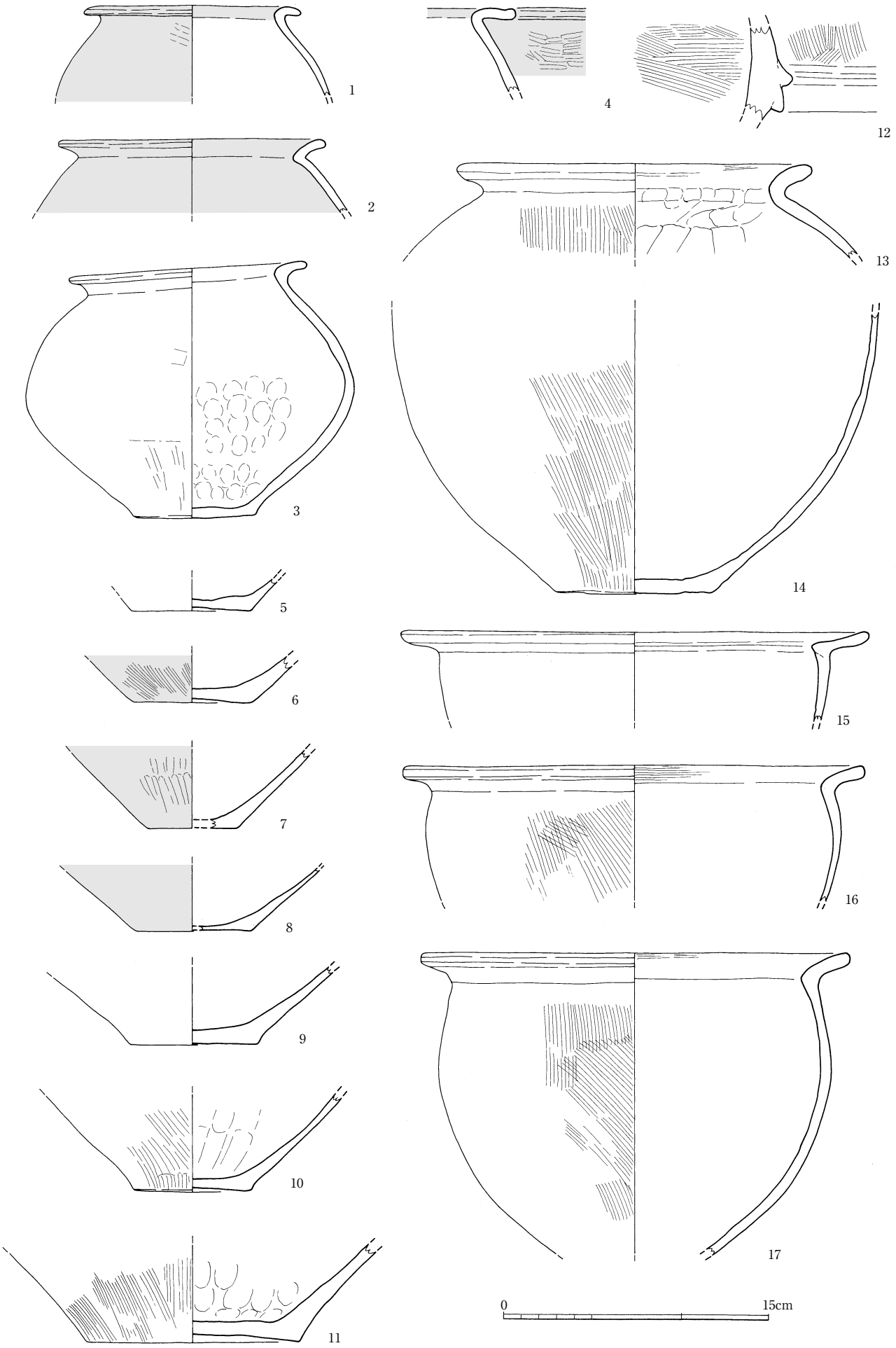
第 51 図　流路跡出土土器実測図１（15 は 1/4、他は 1/3）



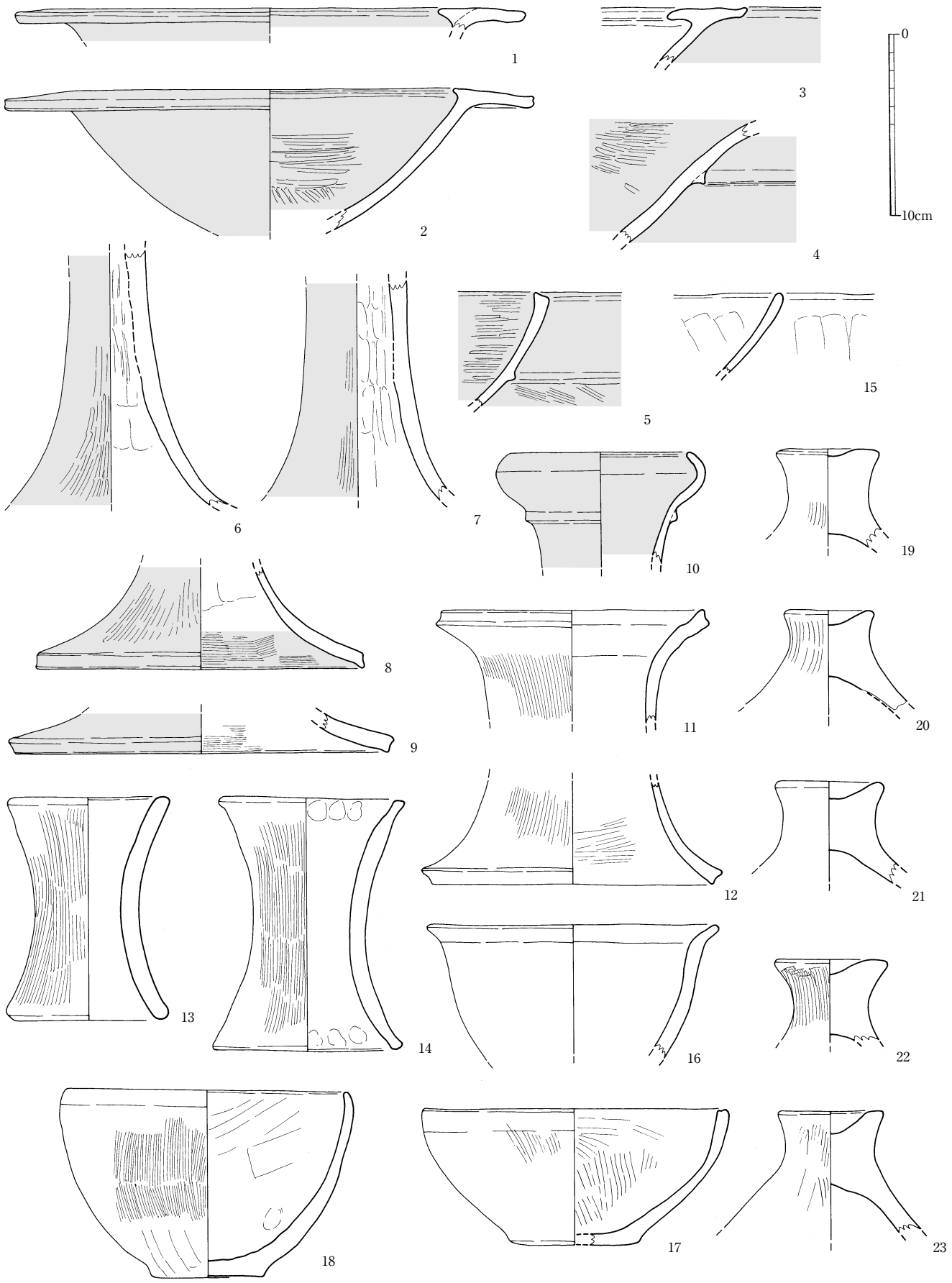
第 52 図　流路跡出土土器実測図２（１・２・６～９は 1/4、他は 1/3）



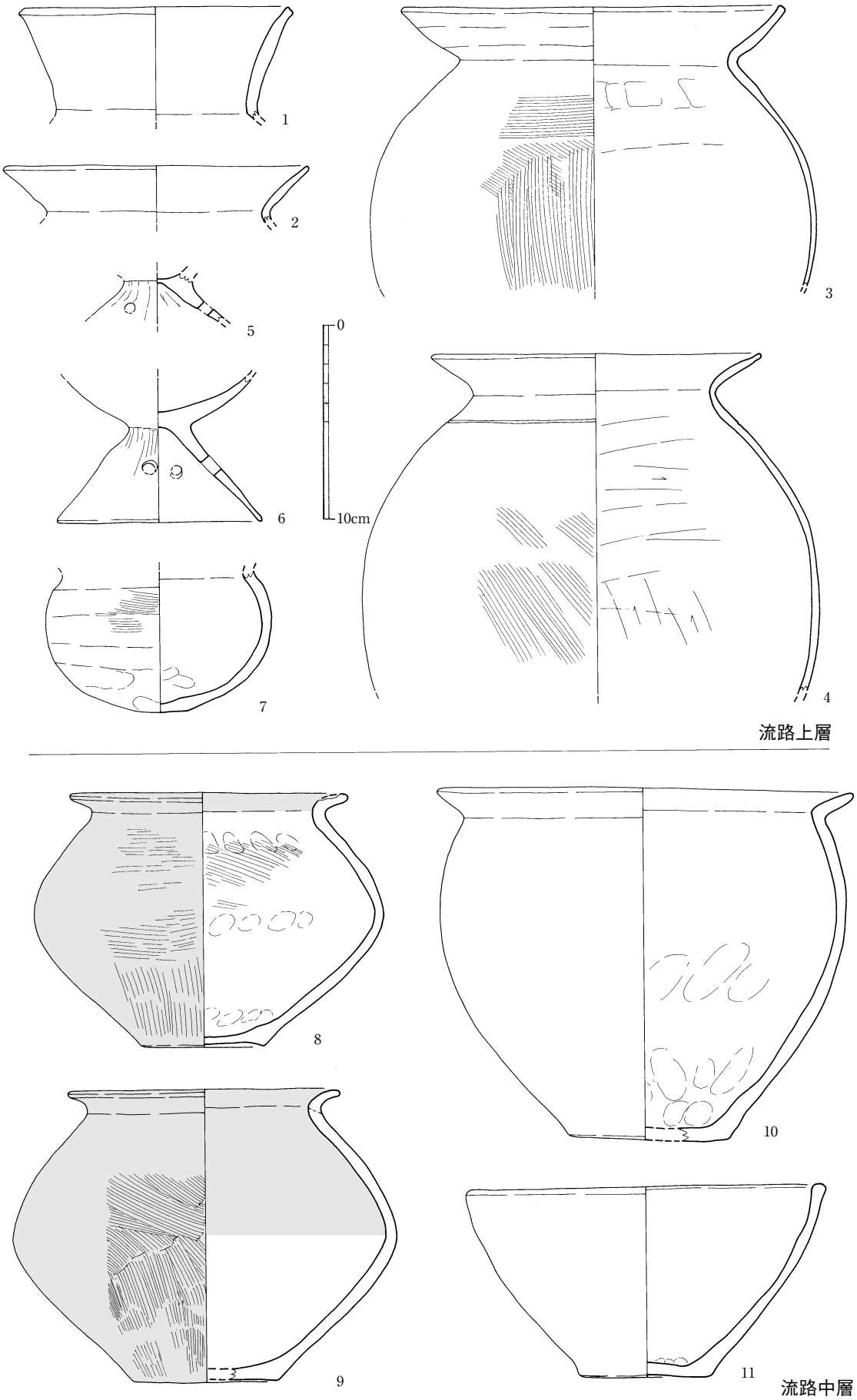
第 53 図　流路跡出土土器実測図３（１・２・10 は 1/4、他は 1/3）



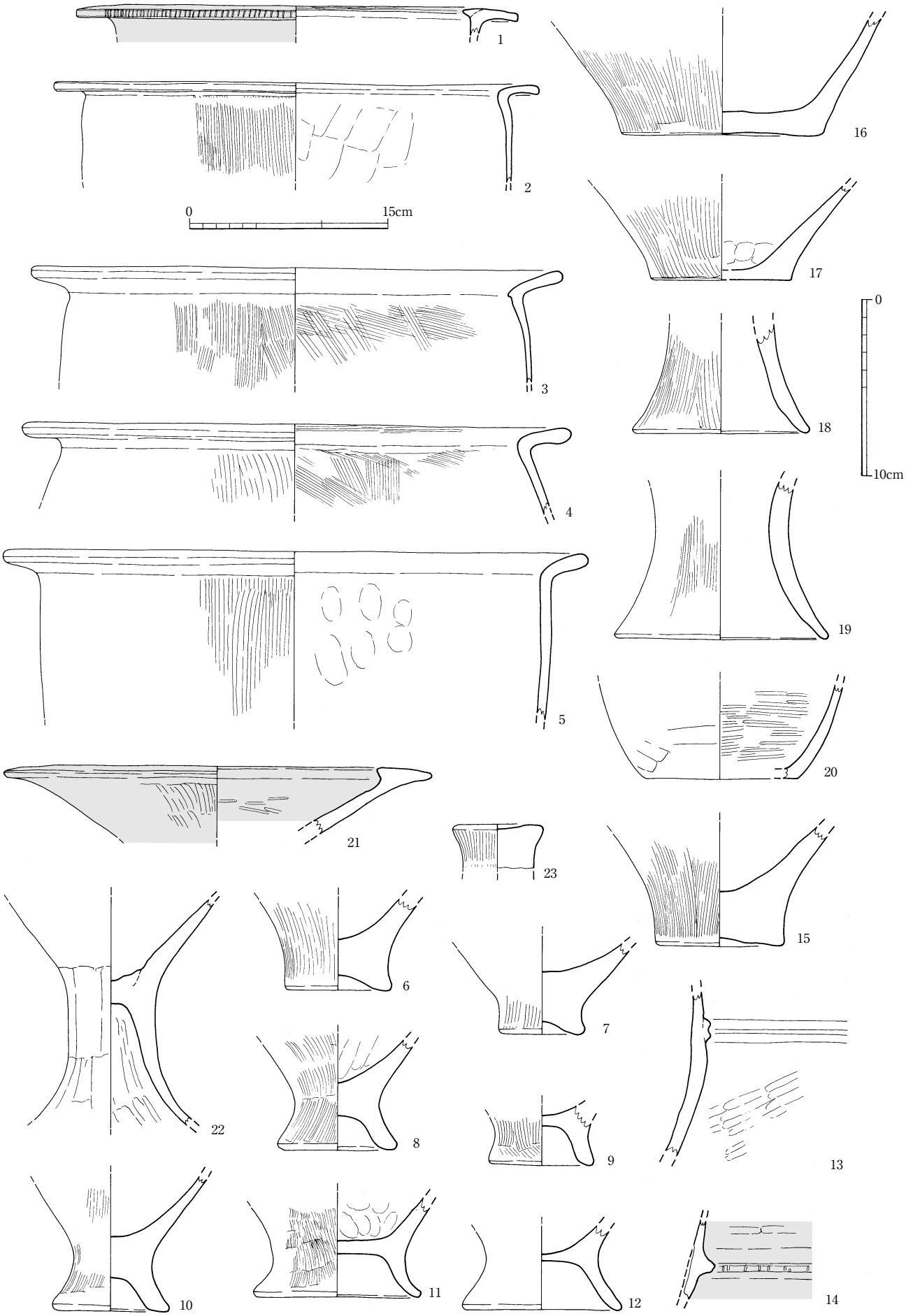
第 54 図　流路跡出土土器実測図４（1/3）



第 55 図　流路跡出土土器実測図５（1/3）



第 56 図　流路跡上層・中層出土土器実測図（1/3）



第 57 図　流路跡下層出土土器実測図（1・2 は 1/4、他は 1/3）

使用変色あり。２は内面の口縁端の突起が大きい。４は小型品である。5･9は使用変色のない中型品。13は内面まで赤色顔料が掛る。11は黄灰白色で、搬入品の可能性あり。17は使用変色なし。

第54図１～４は短頸壺で、１にはミガキの痕跡が残る。５～10は底部径が小さく、器壁も薄いので短頸壺だろう。11は変色がなく、壺だろう。12は大型壺の胴部だろう。13･14は胴が張る甕で、15～17は鉢と思われる。15は胎土が精良。17は内外胴最大径部に使用変色ある。

第55図１～９は高杯で、10は袋状口縁の長頸壺、11～14は器台で、15～18は鉢、19～23は蓋である。５は小片のため正確な復元ではないが径34cm前後だろう。11･12は類似する形態であり、上下を特定できない。16は厚手で使用変色なし。18は丁寧な調整。

第56図１～７は流路上層出土の土器で、１は口縁が急に立ち上がる壺で、精良な胎土。２～４は甕で、２はわずかに口縁端部が尖る。３は口縁部にナデ列が３段ある。他の甕と異なり、黄白灰色を呈し、搬入品の可能性がある。４は口縁端部の内面はナデによる窪みがある。５は穿孔が３か所ある。精良な胎土で軟質。６は２つの穿孔が並列しており、欠損のため対面にも２つあるのかわからない。精良な胎土で軟質。７は小型丸底壺で、底部外面は削り。８～11は中層出土で、８・９は短頸壺で、８は口縁部、９は底部の一部が欠損するのみでほぼ完形。10・11は鉢で、10は使用変色なし。11はほぼ完形で積み上げ痕部分がナデで窪んでいる。

第57図１～20は下層出土で、１から５は甕の口縁部で、１は口縁部を最大径とする赤色顔料を塗布された甕である。２の内面はケズリ状のナデ。３の内面のハケは縦方向のハケが等間隔に入っている。４は胎土に金雲母が目立つ。６～12は甕の底部で､いずれも内面は使用変色が認められる。13･14は甕の胴部片だろう。13は大型品になると考えられる。15･16は内面に変色がないことから、壺だろう。18・19は器台で上下不明。20は小型壺片である。ミガキはあるが、赤色顔料は塗布されていない。

最下層出土の遺物は図化できない程度の小片で時期もわからない。流路の最下層が８層であり、土層断面に入っていた確実なものを８層出土、流れ直した流路を流路２としている。

第58図１～10は流路２出土で、１～４・５は中型甕、６は小型、９は大型甕である。７・８は高台付き甕の底部片。10は蓋である。

第60図２・７・13・15・22は黒曜石、第60図19・21はサヌカイト製の石器である。２は石鏃で、先端の欠損は新しい。1.20ｇを測る。７は掻器で三角板状の素材剥片を剥離し、つまみを形成している。13は縦長剥片の側縁を刃部とする削器で､下端部は欠損しており､0.41ｇを測る。15は削器で、基部は欠損で、左側縁には刃こぼれがあり、下端は折切で平坦面がある。1.88ｇを測る。19は先端部が欠損した削器で、上縁は刃潰ししている。第60図21は左側縁と下縁を欠損した削器で、小型磨製石斧を再加工したもので、研磨面が残る。右側縁が刃部にあたる。14.01ｇを測る。第60図22は石核で、平坦な素面を上面として剥片を剥ぎ出している。7.61ｇを測る。

第61図３はサヌカイト製で、１角を打点にして剥ぎ出した山形の剥片である。53.10ｇを測る。第61図８は太型蛤刃石斧片で、安山岩製。表裏に平坦面があり、装着のための調整研磨であろう。第61図11は小型の手持ち砥石片で、砂岩製の中砥。４面使用。

第62図１・２は石庖丁で、第62図１は左縁に荒い研磨の面がある。刃部には刃こぼれあり。凝灰岩製で、30.43ｇを測る。２は左下と右上に研磨による面を持つ。凝灰岩製で、26.24ｇを測る。４～６・９・10は凹石で、４の上面は敲打痕と思われる。硬質の凝灰岩製で、839ｇを測る。５は硬質の凝灰岩製で、621ｇを測る。６は凹石としたが、窪みがほとんどなく、叩石というべきか。風化した凝灰岩製で､331ｇを測る。９は両側面に敲打痕がある。風化した凝灰岩製で､442ｇを測る。10は上下端欠損、側面に手に持つのによい窪みがある。凝灰岩製で、839ｇを測る。第62図12は加工痕はないが石弾だろう。安山岩製で126.27ｇを測る。

第62図13は土錘片で、鉄分が吸着しているため、5.71ｇを測る。第62図15は投弾で完形品。17.31ｇを測る。

その他の出土遺物

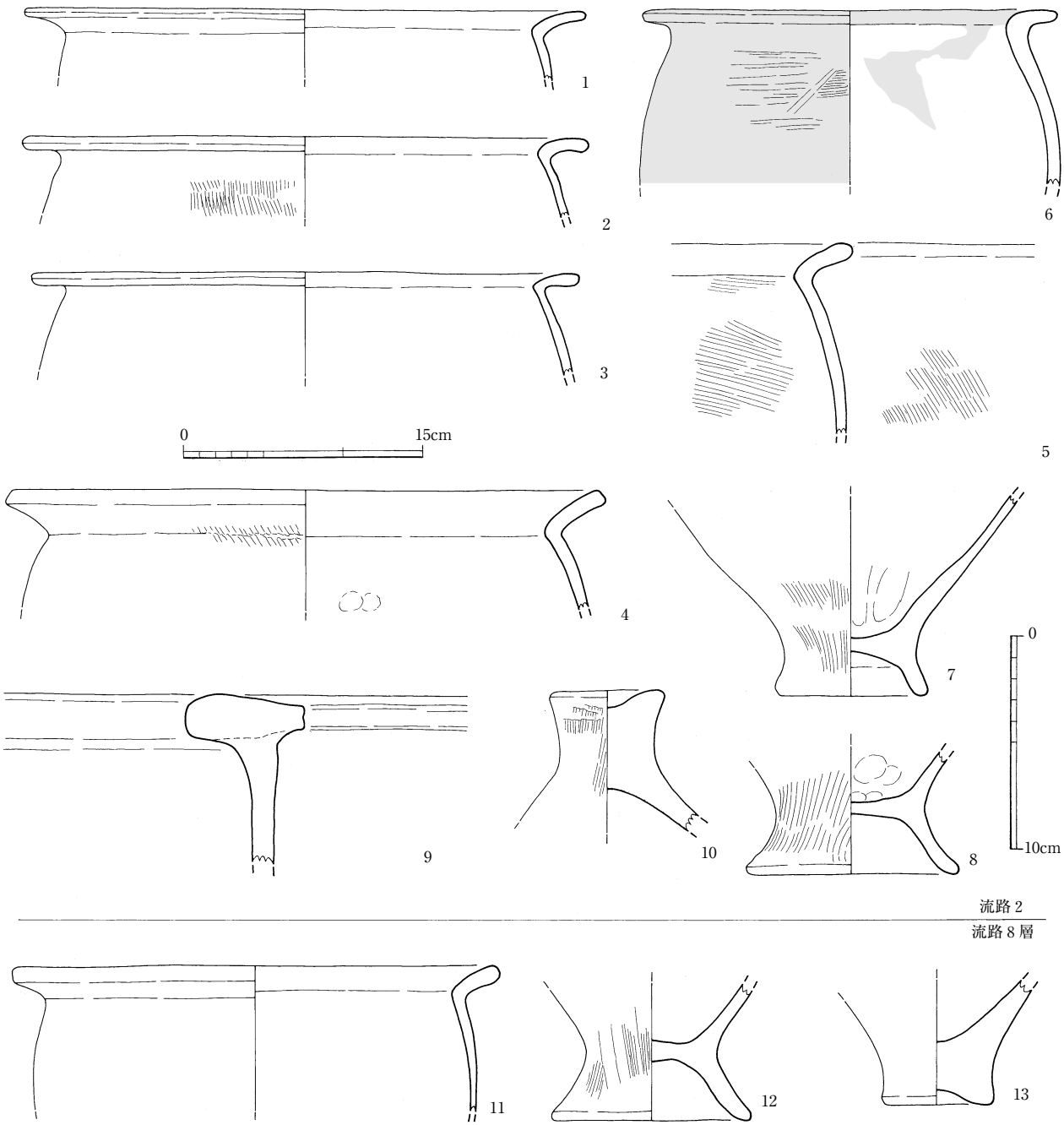
ピット（第 59・60 図）

第 59 図１・２はピット 35 出土で、１は鉢で、器面調整はナデのみ、胎土は精良。２は甕で口縁端部はナデで突出させている。古墳時代初頭に属する。３・４はピット 43 出土。３は摩滅のため器面調整が不明だが、壺だろうか。４は広口壺で不正確ながら径を 30 ㎝前後に復元できる。５はピット 100 出土で、図上接合であるため、口縁部と突帯との距離は不確実である。

第 60 図 12 は、ピット 100 出土の掻器で、粗割り段階の縦長剥面の一端を打ち欠いて刃部にしている。黒曜石製で 10.62 g を測る。

撹乱（図版 21、第 59 ～ 62 図）

第 59 図６～ 18 は撹乱出土で、６～８は甕で、６は頸部内面に突出がある。７は古墳時代後期か



第 58 図　流路跡２・流路跡８層出土土器実測図（１～３は 1/4、他は 1/3）

ら奈良時代の甕と考えられる。９は弥生土器と同じ胎土だが、弥生土器かはわからない。10 は高杯の脚部で中期のものだろう。11 ～ 15 は須恵器である。11 ～ 13 は６世紀後葉､14･15 は８世紀前葉。11・12 は蓋で、11 は焼成不良で軟質。16 は瓦質鉢で内面は目の細かいハケ。17 は白磁の紅猪口で、珍しいモチーフの型造り。18 は焼成不良の染付小皿で、17 世紀中葉～後葉のものと思われる。

第 60 図３・５・６・11・14・16・18 は黒曜石製の打製石器である。３は石錐で刃部が摩滅している。1.24 ｇを測る。５は突起部の欠損する石錐か。3.52 ｇを測る。６は石鏃の未製品だろう。刃部は形成されていない。3.52 ｇを測る。11 は削器で、刃部を形成しておらず、剥離した縁を刃として使用している。左側縁は刃潰し加工である。1.45 ｇを測る。14 は下部が欠損しており、刃部が残っていない。右側縁に刃こぼれのがあるので、右側縁に刃がつく削器か。1.53 ｇを測る。16 は下縁を刃部とする掻器だろう。左側縁は平坦面があり､右側縁の素面の剥離面は刃潰ししている。6.56 ｇを測る。18 は小型の削器で 、左側縁は丁寧に整えられている。

第 61 図５は扁平型片刃石斧で、丁寧に研磨されており、サヌカイト製の完形品で、49.47 ｇを測る。第 61 図６は幅が狭く薄い打製石斧か、石庖丁の未製品だろう。片岩製で、上下が欠損しており、128 ｇを測る。第 61 図７は幅が狭いが石斧片と考えられる。基部が残っており、刃部が欠損したと見られる。172 ｇを測る。第 61 図９は砥石で４面使用し、上端面は整形面で、下端面も欠損後整えている。砂岩製で、421 ｇを測る。

第 62 図３は滑石製紡錘車片で､上面の径がわずかに狭い。19.16 ｇを測る。第 62 図７・８は凹石で、７は凝灰岩製で、多孔質で角閃石を多く含む。579 ｇを測る。８は結晶片岩製で、上面の傷は石器か鉄器の刃を研いだものか。445 ｇを測る。

３ 小結

３次調査区の北に位置する２・４次調査区と、南に位置する５次調査区の成果を含め、遺跡の全体像がわかってきたが、それについては、まとめの章で述べるものとし、本章では３次調査区１区内での遺跡の変遷をまとめてみる。

３次調査１区では、弥生時代前期から奈良時代の遺構が確認された。遺構の変遷を見ると、まず、弥生時代前期中葉の板付Ⅱｂ式期に 10 号溝状遺構が掘られており、本調査区内ではこの遺構しか見られないので、集落域は別にあるのかもしれない。10 号溝状遺構は基盤層に類似した砂質土壌で埋没しており、10 号掘立柱建物跡が切っていることから、溝が埋没した後で、中期の集落が展開しているようだ。

前期末から中期初頭には遺物量が増加しているので、掘立柱建物跡を中心とする集落が営まれるようになったようだ。円形竪穴住居が別に設けられたにしては、隣接する他の調査区でも発見されておらず、有明海沿岸の佐賀平野では掘立柱建物のみか、あるいは掘立柱建物を主体として構成される弥生集落が存在しているので、こうしたものの１つであろう。

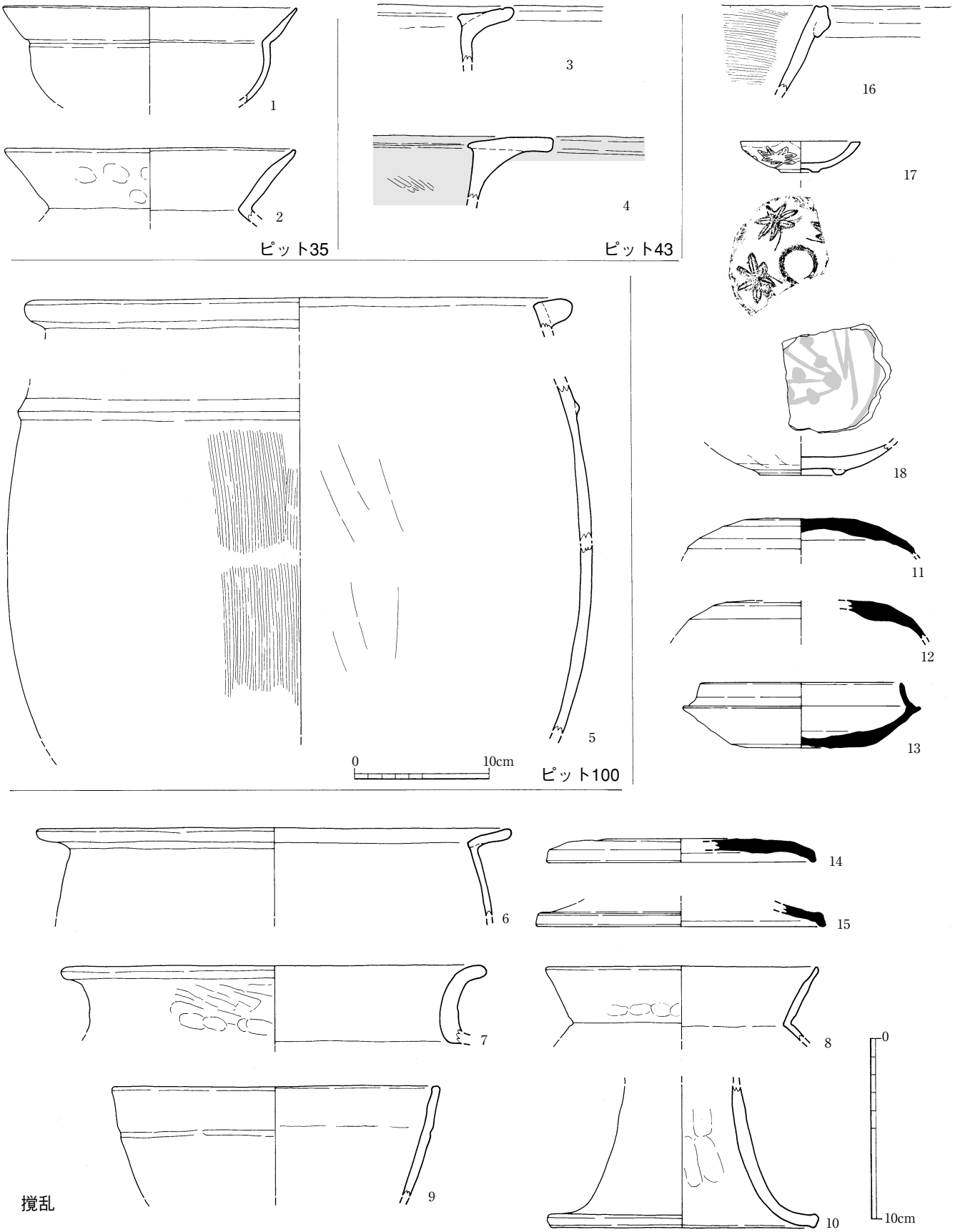
10・12 号掘立柱建物跡のように柱穴の中央に方形土坑を設けるものは弥生時代に見られるもので、これを伴わないものとの差異は明らかではないが、竪穴住居跡がないことと 10 号掘立柱建物跡の規模が大きいところから考えれば、住居としての使用も考えられよう。

流路は規模が大きいため、短期間に成立したものではないだろうが、最下層で中期初頭の遺物が出土している。弥生集落がこの流路を水運に利用したことは想像に難くない。

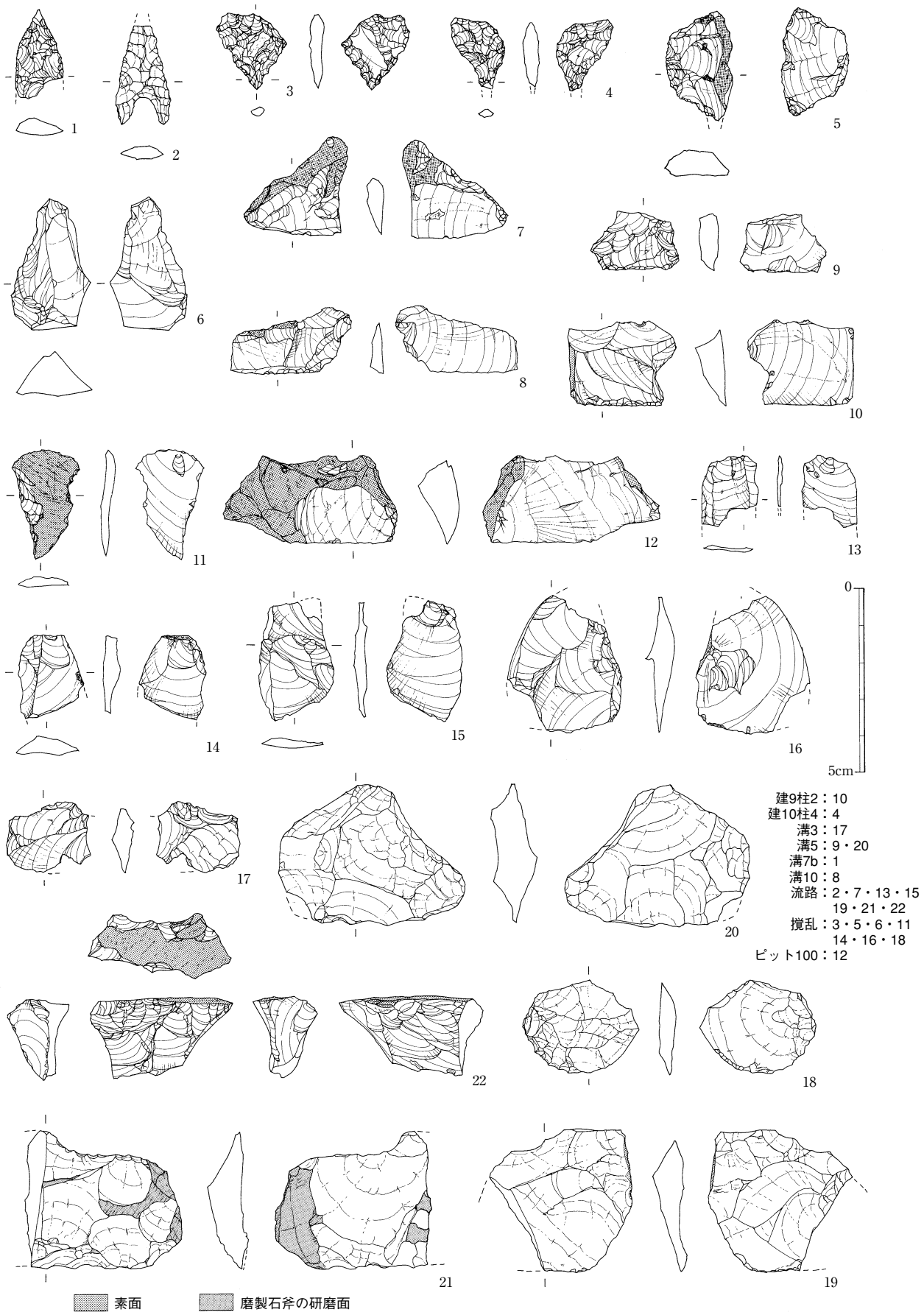
中期中葉の遺構は４号溝状遺構のみしか見られないが、ちょうどこの時期から流路が埋没しはじめており、生活環境が変わったため集落が移動したことが考えられる。流路にやや窪みが残る程度に埋まった古墳時代初頭になって再び集落が作られる。この時期の遺構は調査区北部に偏って分布している。

７世紀には７ｂ号溝状遺構が掘り直されており、ちょうど本吉条里の北端の坪堺にあたる。８世紀の条里施工前に同じ方向の水田が作られていた可能性がある。

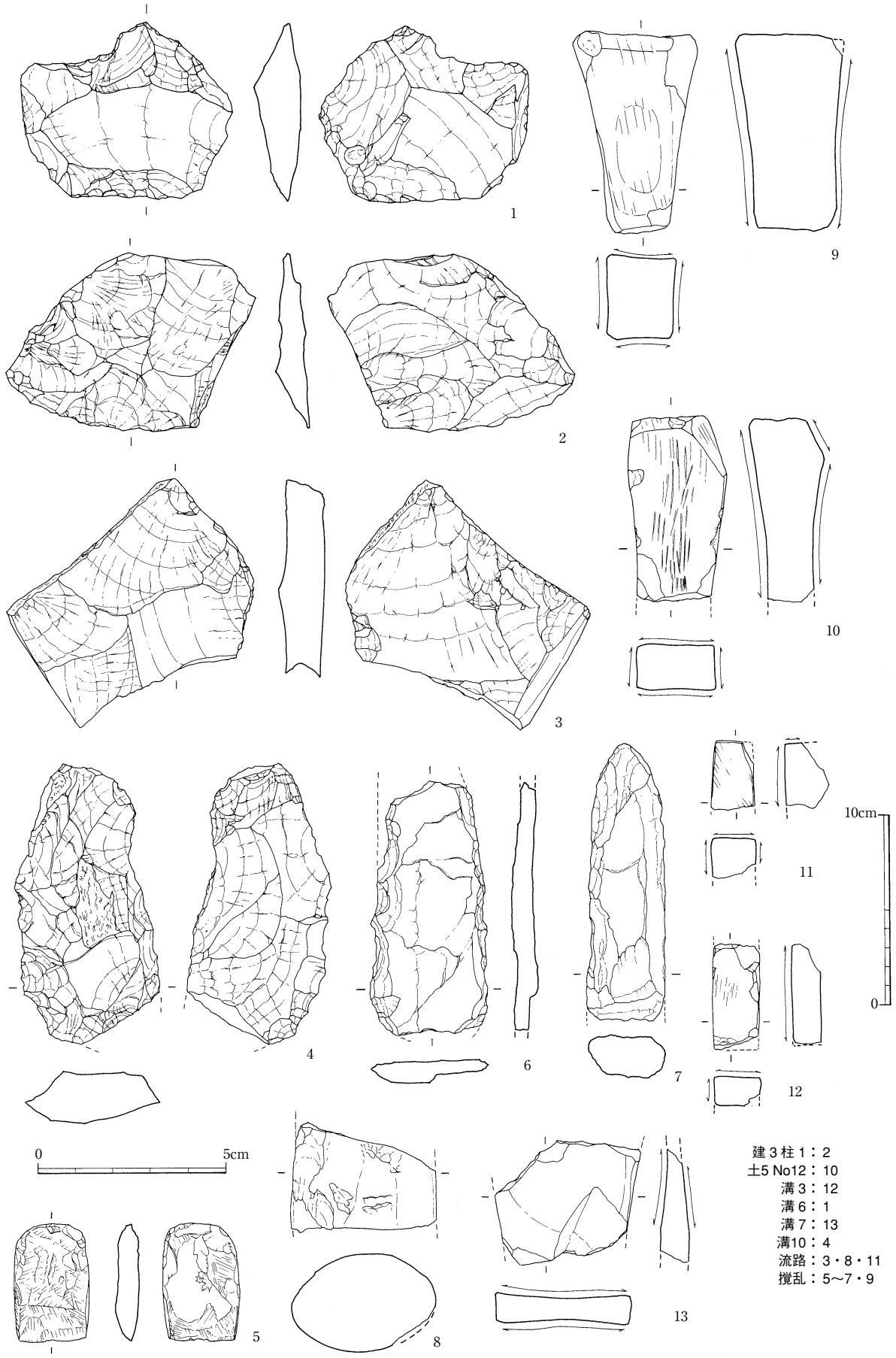
これ以降、調査区内では集落は営まれず、水田としてのみ利用されたようだ。



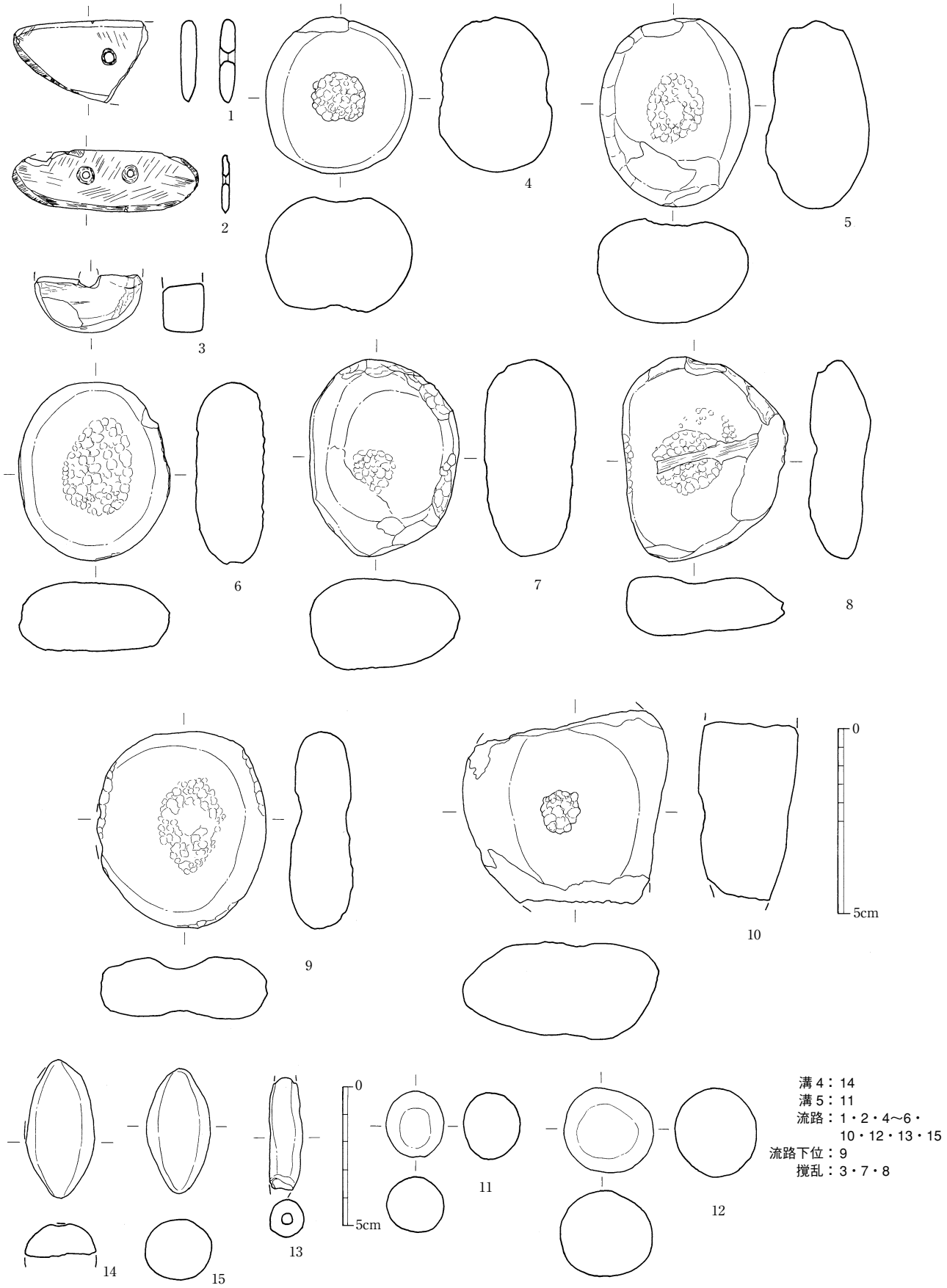
第 59 図　ピット・撹乱出土土器実測図（５・６は 1/4、他は 1/3）



第60図　出土石器実測図1（2/3）



第 61 図　出土石器実測図２（１～４は 2/3、他は 1/3）



第 62 図　出土石器・鉄製品・土製品実測図（3・13 ～ 15 は 1/2、他は 1/3）

３　３次調査２区

１　調査の概要

３次調査２区は４次調査の南西部に位置しており、みやま市瀬高町山門 2186、2187-2 番地の一部を対象として、1,650 ㎡を調査した。３次調査２区と４次調査区との間の路線内は試掘調査により、遺構がなく遺物をあまり含まない流路とされている。

３次１区の調査に併行して実施しており、１区の作業ヤードを移転する必要が生じたため、12 月６日に表土剥ぎと作業ヤードつくりを開始した。11 日には一部の作業員を２区に移し、掘り下げ作業を始めた。25 日にはリース機材を２区に移動させ、１区の作業ヤードを引き渡した。１月 17 日には本吉条里遺跡試掘調査の調査指導に来訪していた日野尚志先生の視察を受けた。２月 20 日には西半の調査を終了し、反転した。２月 25 日ユニットハウスの壁面に傷がついているのを発見し、警察に通報した。３月 18 日には全体写真を写真台から撮影し、３月 24 日に埋め戻しを始め、機材を搬送、25 日に埋め戻しを終了し、リース機材を完全撤収した。

２　遺構と遺物

山門牛島遺跡３次調査２区からは、竪穴住居跡２基、掘立柱建物跡１基、土坑８基、波板状遺構 11 基、溝状遺構 23 条、流路３条が検出された。遺構面は砂質土で、ほ場整備のため平坦に削平されていたが、遺構の残り具合から西半部が大きく削平されていたようだ。

（１）竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（図版 23、第 65 図）

調査区西南端部に位置し、５号溝状遺構に切られる。床面しか残っていないが、炉跡を中心とした２本柱の主柱穴と屋内土坑があることから方形プランの竪穴住居跡とわかる。床面に貼床が残っていなかったため、ベッド状遺構の有無は不明である。規模は、長軸 460cm、短軸 370cm 程と想定される。炉跡は炭化物が充填していたが、床面は赤化していなかった。屋内土坑内には小穴や板材の痕跡はなく、磨石と台石が中位に入っていた。方形住居であることと出土土器から後期前半代だろう。

出土遺物（図版 38、第 70・92・93 図）

第 70 図１は平底の底部で、器面が剥落しているため不確定だが、壺だろうか。第 92 図 12 は扁平な板石の中央部が彫啄で窪んだもので、凹石とは異なる。第 93 図４と一緒に出土しており、扁平な円礫であるが、窪みがないので第 92 図 14 とセットをなし、14 を台石としたのかもしれない。第 92 図 14 は緑色片岩で 838 ｇ、第 93 図４は凝灰岩製で 1438 ｇを測る。

２号竪穴住居跡（第 65 図）

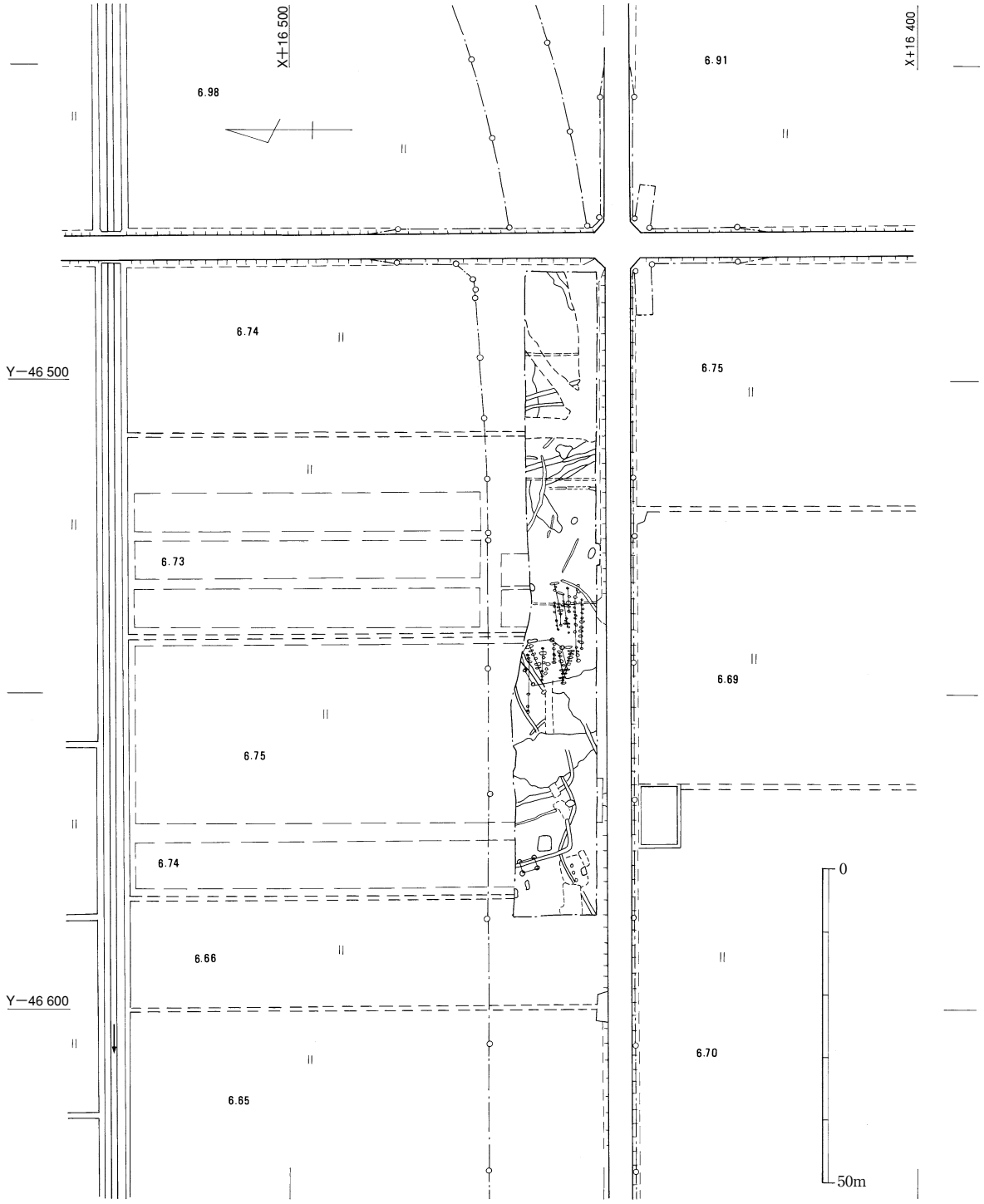
調査区中央部の波板状遺構の集中部に位置し、１号流路跡に切られる。壁が残っておらず、７本の柱穴の配置から想定復元した径約９ｍの円形プランである。柱穴は径 40 ～ 80cm で、円形と略方形プランがあり、20 ～ 40cm の深さである。中央土坑らしいものがあるが、流路に切られているためはっきりしない。柱穴からは小片の土器が出土しているが、図化できるほどの大きさのものはない。遺構の時期は、円形住居であることと、１号流路に切られることから弥生前期末から中期初頭だろう。

（２）掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（第 66 図）

調査区北西部に位置し、検出時には建物跡になる認識がなかったので、整理段階で復元した１×１間の建物跡である。柱１の柱痕推定部の位置から、260 × 140cm の規模に復元できる。柱穴

は柱４を除いて略方形で、柱２は９号溝状遺構に西壁を切られている。柱穴の深さは 20 ～ 25cm 前後だが、柱穴１は柱痕部が深いので 36cm を測る。出土遺物がなく、９号溝状遺構より古いとはいえるが、時期は不明。

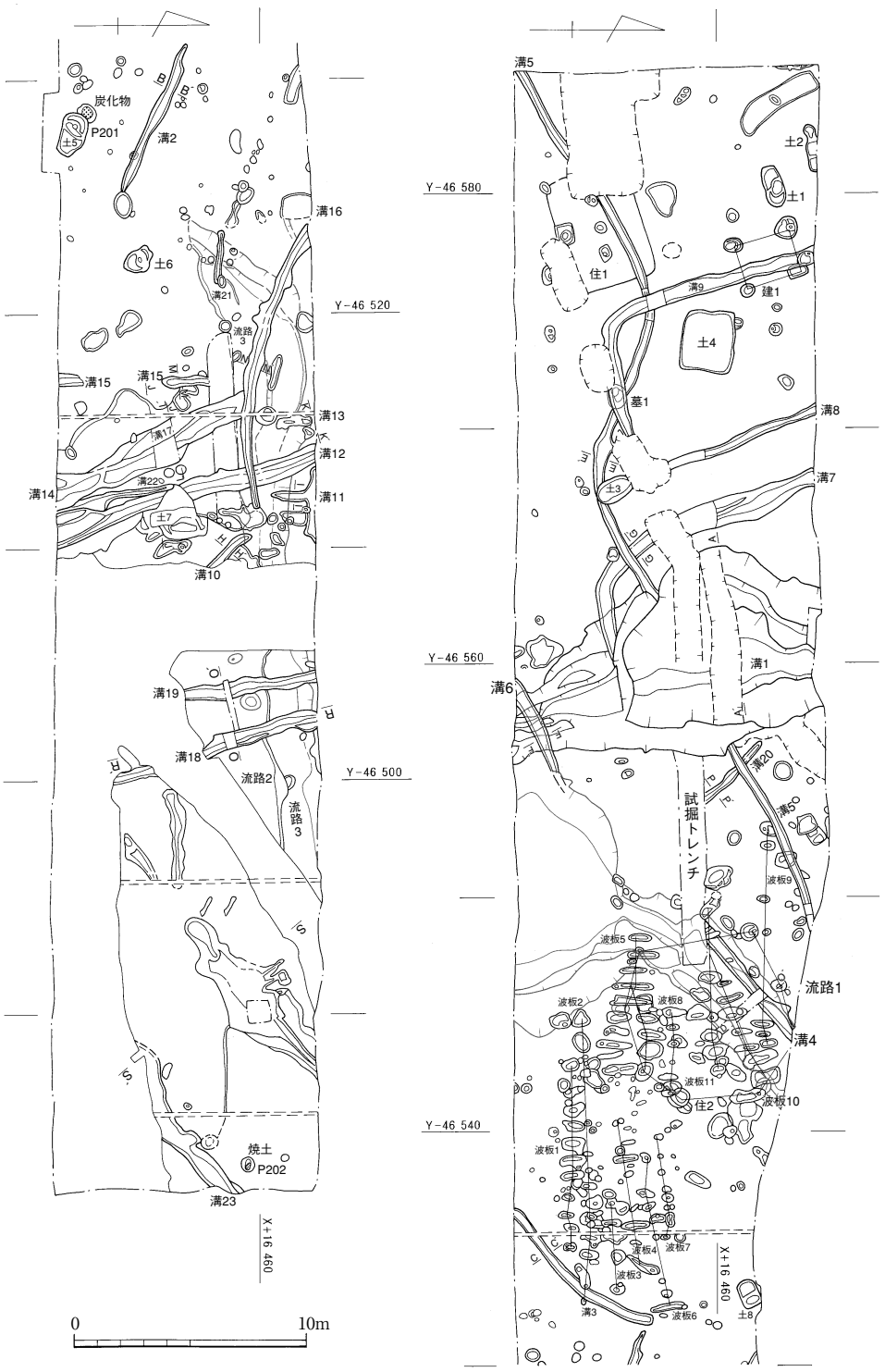


第 63 図　山門牛島遺跡３次調査２区遺構全体図 (1/1,000)

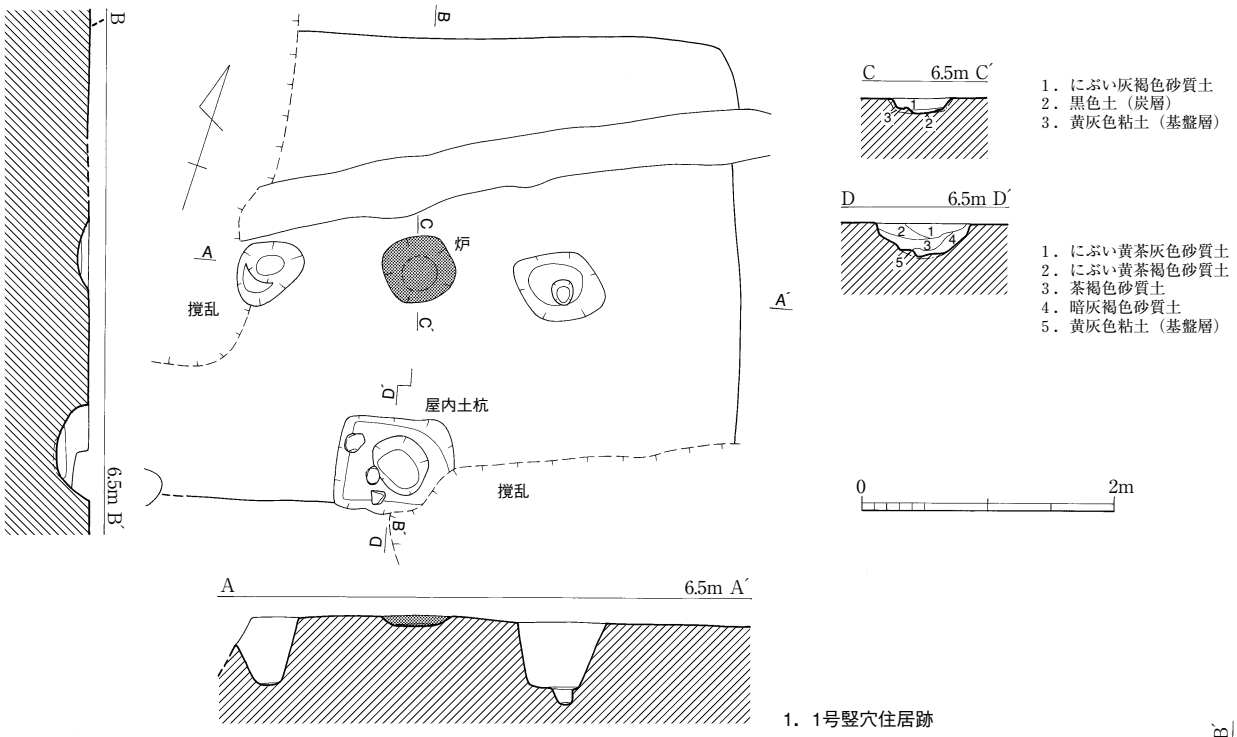
（３）石蓋土坑墓

１号墓（図版 27、第 67 図）

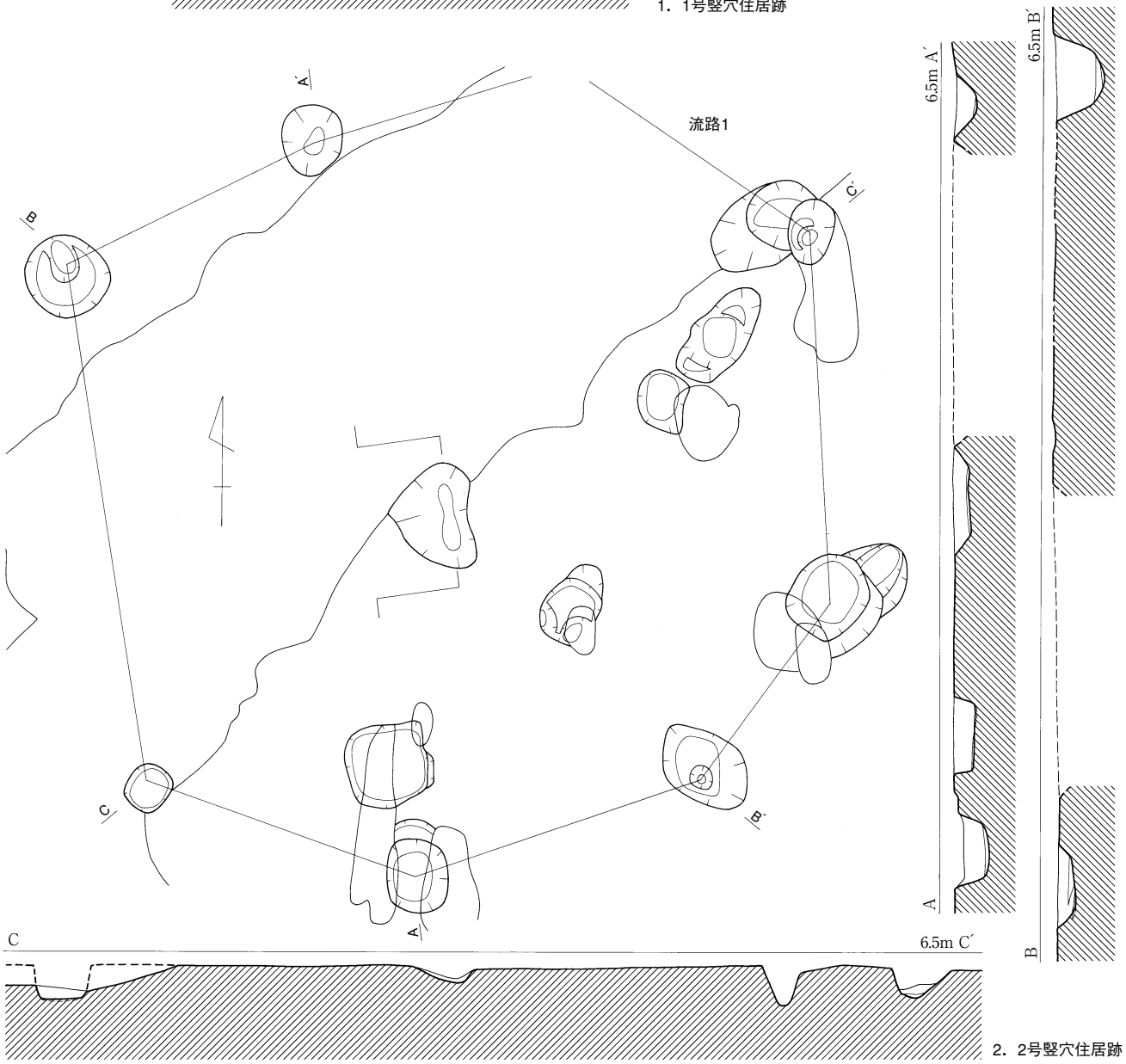
調査区南西部に位置し、１号墓は９号溝状遺構のプランに完全に入っており、検出時に切り合いは認められず、溝の床面から検出された。床面からの検出はまちがいなく、溝の床が下がったものではない。西壁が撹乱坑で失われており、長軸は現存で 115cm、短軸 73cm を測る。凝灰岩製の板石２枚が、一部を重ねた状態で検出されたが、遺構のプランと主軸方向が大きくずれている。板石の



第 64 図　山門牛島遺跡３次調査２区遺構全体図（1/300）



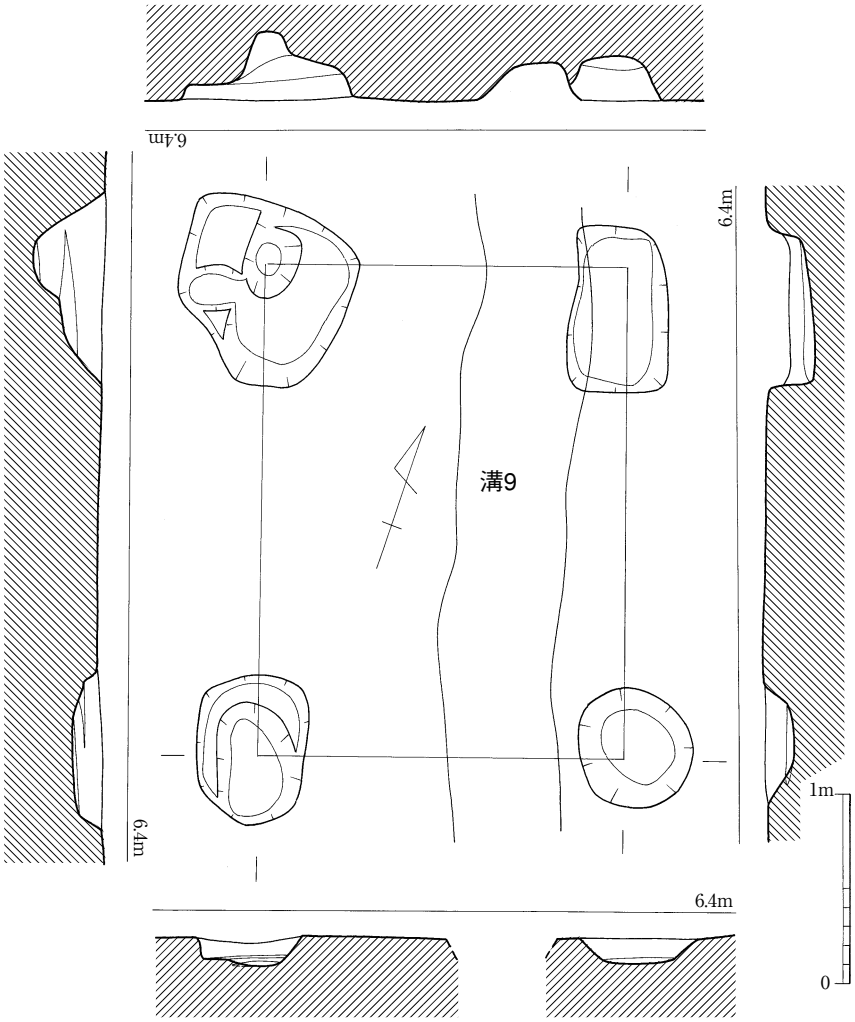
1．1号竪穴住居跡



2．2号竪穴住居跡

第65図　1・2号竪穴住居跡遺構実測図（1/60）

うち下側の石は端部にベンガラが付着していたが、裏面には塗布されていなかった。また、上側の板石には付着が見られなかった。この板石の周囲からもベンガラが認められないことから、別の墓の板石を再利用したものかもしれない。板石の下からは小さな窪みがあったのみで、掘り込みは見られなかった。骨も副葬品もなく、明確に墓とすることはできないが、板石は廃棄したものではなく、墓の形式であることから、墓として報告する。出土遺物がなく、時期は不明。

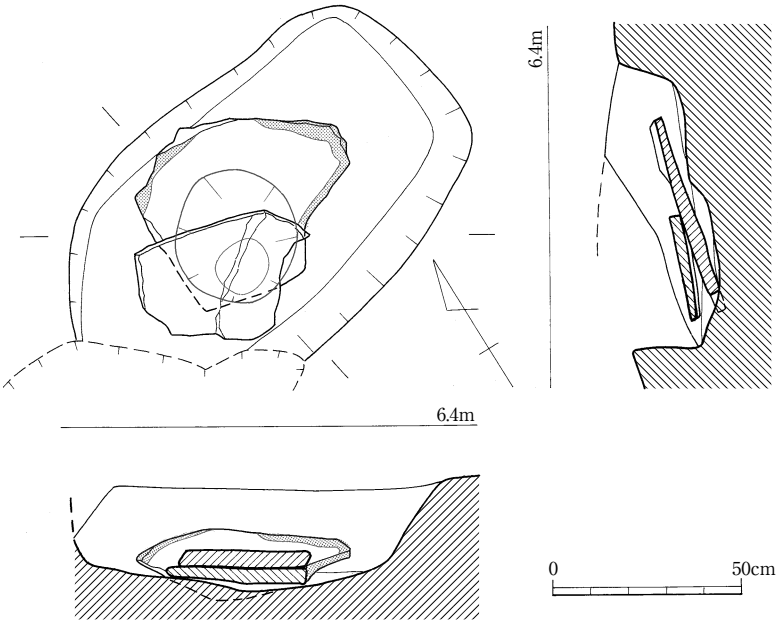


第 66 図　1 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

（4）土坑

1 号土坑（図版 24、第 68 図）

調査区西端部に位置する楕円形プランで、長軸 168cm、短軸 88cm を測る。最深部でも 25cm 前後の浅いものである。土坑の埋まった後に、土坑中央に小型甕が正置状態で埋められている。この土器埋設ピットは明確に検出されており、土坑中央に埋置していることから、土坑と無関係ではないだろう。遺構の時期は、出土遺物から弥生後期中葉である。



第 67 図　1 号墓実測図 (1/20)

出土遺物（図版 35、第 70 図）

2 が肩部に櫛描文がある壺で、器壁が厚い。器面は残っており、チョウ石の混入は多い。3 は完形に復元できるミニチュア甕で、中型甕を精巧に小型化している。ハケ目は細かく、丁寧に施される。外面に煮沸使用の痕跡はなく、内面にも変色はない。胎土は特に精良ではなく、甕と同様だった。

2 号土坑（図版 24、第 68 図）

調査区北西端部に位置する方形プランで、長軸は現存で 123cm、短軸は現存で 46cm を測る。土坑は 4 cm 程の深さしかなく、その内部には炭が充填されており、むしろ遺構面に炭がのっているといっ

たほうがよいぐらいだった。床面は赤変していないが、埋土は炭に土に混ざった状態でないので、灰だけを捨てたものか、この場で赤変しない程度に火を使ったのかもしれない。

３号土坑（図版 25、第 68 図）

調査区西端部に位置する楕円形プランで、長軸は現存で 155cm、短軸 94cm を測る。５号溝状遺構を切っている。20 ㎝ほどの深さで床面はほぼ平坦である。

４号土坑（図版 25、第 68 図）

調査区西端部に位置する略正方形プランで、長軸は現存で 266cm、短軸 230cm を測る。30cm 前後の深さで、床面はほぼ平坦で、壁は直に立ち上がる。３次調査１区の掘立柱建物跡の中央に位置する土坑にプランや規模、断面形の形状などが近いが、これに対応する掘立柱建物跡は見つかっていない。

５号土坑（図版 26、第 69 図）

調査区中央南部に位置する不整形プランで、長軸は現存で 188cm、短軸 110cm を測る。当初、床しか残っていない方形住居の屋内土坑と考えたため、２号竪穴住居跡屋内土坑としていたが、遺構名を変更した。20 ㎝ほどの深さで壁は緩やかに立ち上がることや、小ピットがあることから木の根鉢痕かもしれない。

出土遺物（図版 35・37、第 70・91 図）

第 70 図４は煮沸使用の痕跡がないので、鉢だろう。器壁が厚く、口縁部の傾きと復元径はまちがいない。５は鉢で、器壁が厚い。内面に一部器面が残っているのみ。６は甕で、器壁が薄いが、器面が失われてためでなく、本来薄いもの。７は変色がないので壺の底部か。外面は丁寧なハケ。８は小型の甕の底部で、外面に丁寧なハケが施される。裾が赤橙色に変色している。チョウ石の混入多い。９は蓋で内面には使用変色あり。10・11 は短頸壺の上半部と底部だが、別個体である。10 は外面口縁部にのみ赤色顔料が残っている。体部はハケの上にナデ。11 は内面にハケがあり、やや膨らみのある底部。4・5・10・11 は後期前葉から中葉で、これ以外は混入品である。

第 51 図 32 は石錐で、扇形の剥片を素材とし、先端部分を下にして両側面を調整剥離して尖らせている。黒曜石製で 3.46 g を測る。第 92 図１は実形の打製石鏃で、表裏剥離しており、黒曜石製で 0.58 g。

６号土坑（図版 26、第 70 図）

調査区中央南部に位置する不整形プランで、長軸は現存で 129cm、短軸 104cm を測る。最深部で 22cm ほどの深さで壁は緩やかに立ち上がる。土坑中央部の１・２層下位に黒色バンドが断続的に入ることから、有機物の廃棄土坑だろうか。

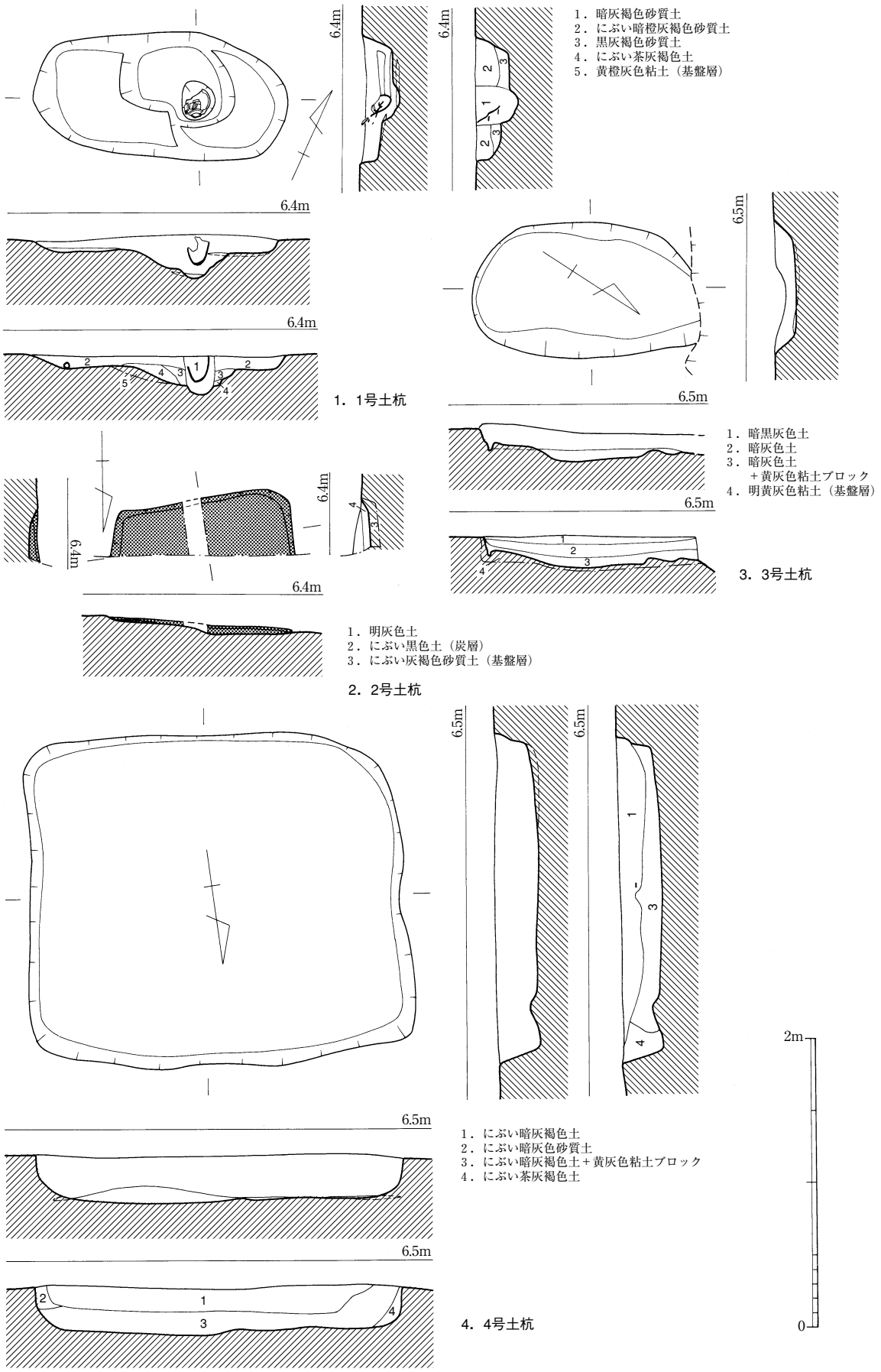
出土遺物（図版 37、第 70・91 図）

第 70 図 12 は平底で体部にタタキをもつ鉢で、椀に近い形態を持つ。甕を作る途中に器種を変更したものだろうか。13 から 16 は甕の口縁部で器面は剥落している。17・18 は甕の底部で、器面は剥落している。底部は煮沸使用のため、橙色に変色し、内面は褐色を呈する。19・20 は器台で、19 は上下端部は赤橙色に変色している。図上接合であり、やや確実性に欠ける。

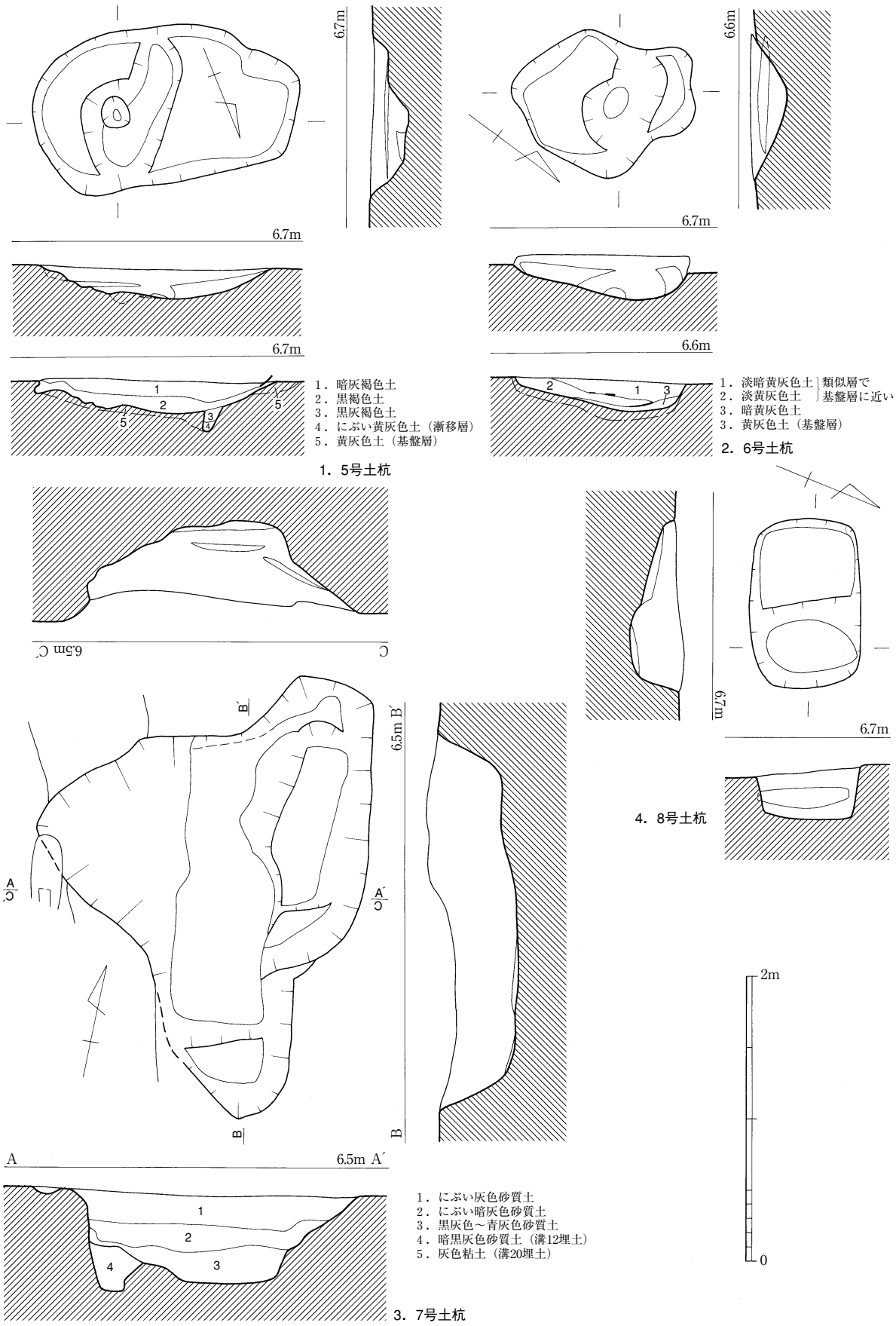
第 91 図 22 は掻器で、扇形の剥片を素材とし、左側縁は刃潰ししている。大きく打ち欠いた剥離面の湾曲を刃部にしている。黒曜石製で 2.86 g を測る。

７号土坑（図版 27、第 69 図）

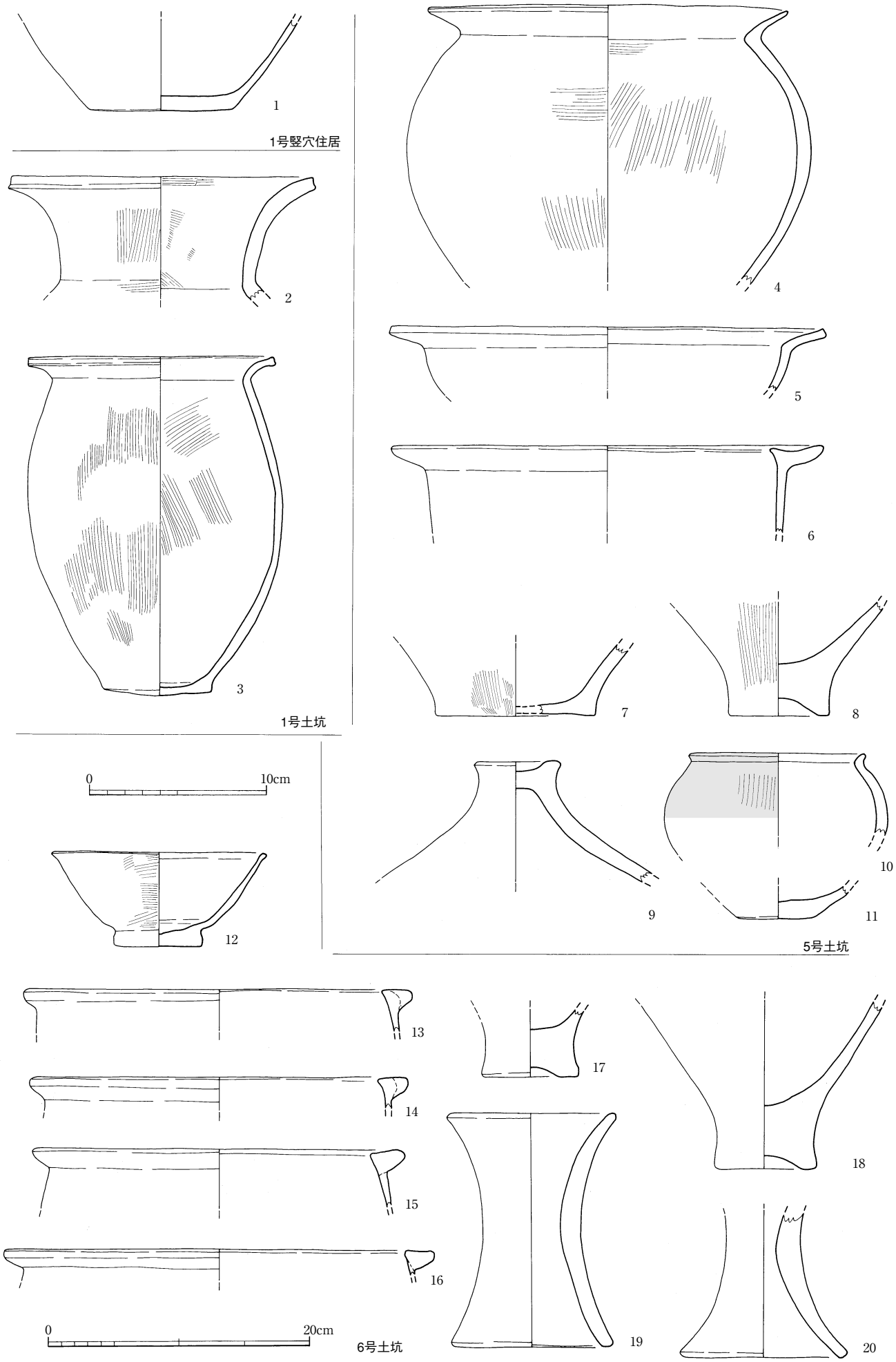
調査区東部に位置し、12 号溝状遺構を切り、20 号溝状遺構を切る不整形プランで、長軸は現存で 312cm、短軸 232cm を測る。深さも 60 ㎝程と大型である。埋土はほぼ水平に堆積しており、２層にラミナがあることや３層下位がグライ化していることから、水成層とわかる。



第68図　1～4号土坑実測図（1/40）



第69図　5～8号土坑実測図（1/40）



第 70 図　1 号竪穴住居跡、1・5・6 号土坑出土土器実測図（13 ～ 16 は 1/4、他は 1/3）

（５）波板状遺構

調査区中央部に位置し、円形のもの、楕円形のもの、細長いもの、円形に近いものの４種類のピットが集中する。それらの並びから、11 基の波板状遺構を想定復元したが、並びから外れるピットもあり、ほかにも短い波板状遺構があった可能性もある。１つの波板状遺構の中でも複数の形態のピットが混在している。波板状遺構は４号溝状遺構を西端、3 号溝状遺構を東端とする。遺構面は西に向かって下がっており、西側が残りがよく、1 号流路より西には続いていない。各波板状遺構が 1 号流路付近で調査区中央に集約することと関連があるものと思われる。東側は削られて失われているが、16・19 号溝状遺構から東は下がっているので、削られておらず本来存在していないといえる。ピットはいずれも壁の立ち上がりが緩やかで床面には凹凸があるが、杭を埋設した痕跡は土層にも床面にも見られない。深さは 15cm 前後のものがもっとも深く、５cm 前後の浅いものが多い。埋土は基本的には砂質土の単一層で、小礫が入っているものもあるが、床面に敷いた状況はなかった。５号波板状遺構と９・10 号波板状遺構の一部は床面が硬化していたが、硬化範囲はこれらの遺構が切っている 1 号流路付近に限られていたことから、これは砂質土内の鉄分が酸化したものであって、圧力を受けて硬化したものではないと判断された。

波板状遺構を構成するピットの周辺に円形の小ピットが集中しており、調査区内の他の範囲にはこのような小ピットの集中が見られないことから、波板状遺構と組み合わさるなんらかの機能があったものと思われるが、規則的な配列や列を成す状況はなかった。

１号波板状遺構（図版 28・29、第 71 図）

円形、楕円形、不整形、略方形の４種類のピットが混在しており、ほぼ直線に並ぶが、一部南側に湾曲する。ピット間隔は 60 ～ 80cm のものが多い。直線距離で 8.12m を測り、ピット中央を通る湾曲ラインで 7.62 m を測る。細長い打円形ピットは東辺の一部に突出部がある。

出土遺物（図版 37、第 91 図）

第 91 図 23 は、ピット４出土の掻器で、左側縁は素面の縁を刃潰ししている。湾曲しているのはつまみ部をつくるためである。下端は刃部のように見えるが欠損と判断した。黒曜石製で 4.34 g を測る。

２号波板状遺構（図版 28・29、第 71 図）

円形、楕円形、不整形、略方形の４種類のピットが混在しており、楕円形のものが多い。ほぼ直線に並び、東端部は南に曲がり、11.62m を測る。ピット間隔は 60 ～ 70cm 前後のものが多いが、一定しない。細長い打円形ピットは東辺の一部に突出部がある。

出土遺物（図版 39）

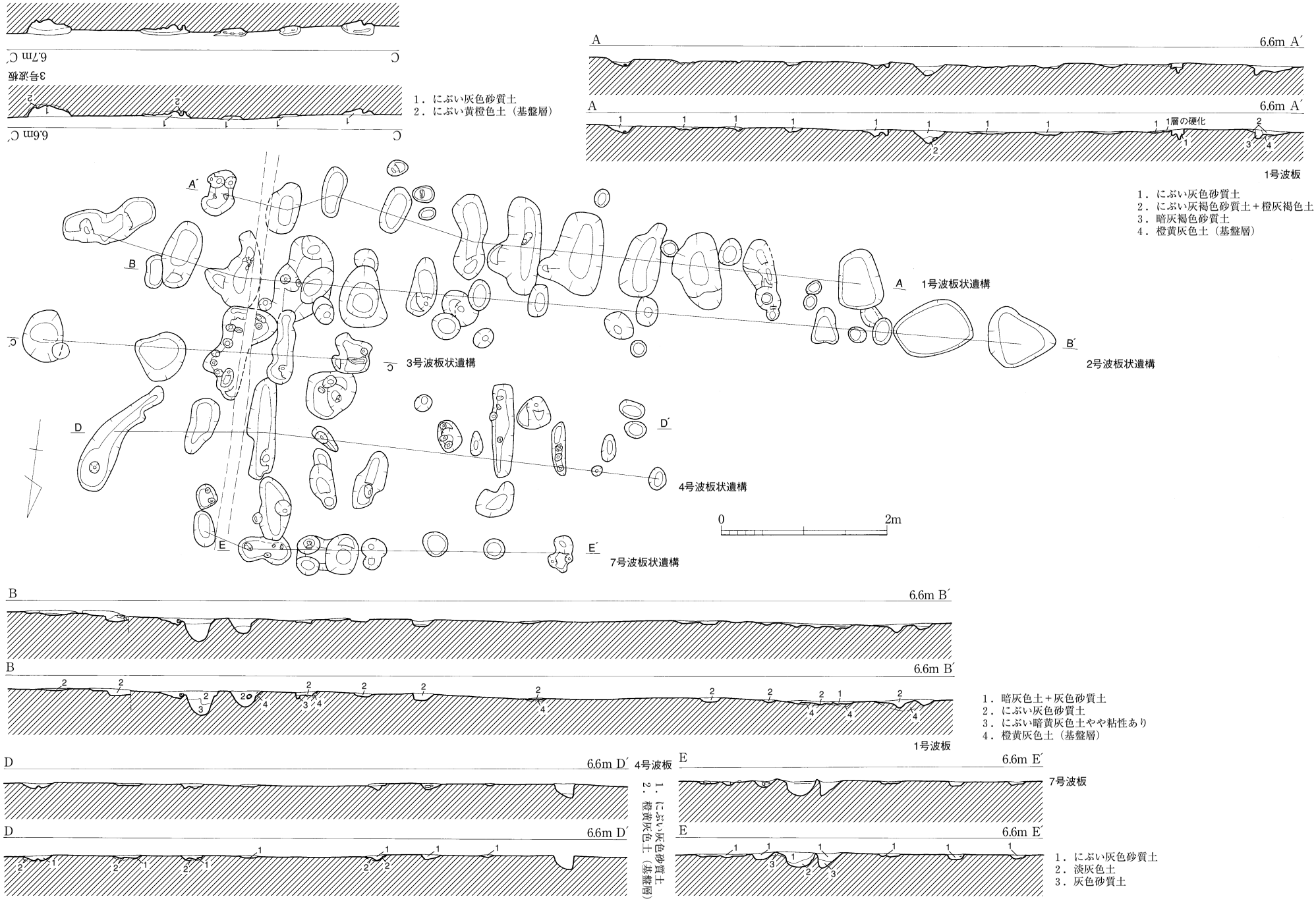
図版 39-1 は写真のみの掲載であるピット５出土の石核で、平坦な古い剥離面を打面として、上から見て長方形になるように２辺を直線的に調整剥離し、調整剥離していない２辺の内、長辺から薄片を剥ぎ出している。短辺はこれを上辺とする面がもう１つの打面となっているため、調整剥離がない。ここに打面を変えて、長方形の剥片を剥ぎ出している。その結果、直方体を呈する。後者の打面は前者の打面を切っており、前者の打面は打面調整がないので、前者の打面の作業を終了して、打面を変更したものである。長さ 2.8cm、幅 1.7cm、厚さ 1.5cm の黒曜石製で 7.38 g。

３号波板状遺構（図版 28・30、第 71 図）

円形、楕円形、細長いもの、不整形の４種類のピットが混在しており、ほぼ直線に並ぶ。ピット間隔は一定しない。直線距離で 4.12m を測る。細長いピットの底面は凹凸が多いが基盤層の小礫の抜き穴と考えられる。細長いピットは東辺の一部に突出部がある。

４号波板状遺構（図版 28・30、第 71 図）

円形、楕円形、細長いもの、不整形の４種類のピットが混在しており、このうち細長いもので構



第71図　1～4・7号波板状遺構実測図（1/60）

成して復元した。直線距離で5.05m、西端部が北側に湾曲して6.63ｍを測る。細長いピットの底面は凹凸が多いが基盤層の小礫の抜き穴と考えられる。ピット間隔は一定しない。

５号波板状遺構（図版28・30、第71図）

２列あるがそれぞれ南北に湾曲して東西端で１つに集約するので、１つの遺構とした。南側の列は細長いピットのみで構成されているが、北側の列は細長いものと略方形プランが混在している。ピット間は芯々で60～70cmのものがほとんどである。北側は直線距離で6.18ｍ、ピットの中央を通る湾曲ラインで6.48ｍ、南側は直線距離で5.90ｍ、ピットの中央を通る湾曲ラインで6.24ｍ。

６号波板状遺構（図版28・30・31、第72図）

直線距離で6.68m、ピットの中央を通るラインは南にわずかに湾曲しており7.30ｍ。不整円形・楕円形･細長いピットが混在しており､ピット間隔は芯々で45～70cmだが､間隔の広いところもある。

７号波板状遺構（図版28・30・31、第71図）

直線距離で4.52m、ピットの中央を通るラインは東端で北にわずかに湾曲しており4.60ｍを測る。楕円形・円形プランのピットが混在しており、ピット間隔は連続しているものは芯々で45cm前後だが、間隔の広い80cm前後のところもある。

８号波板状遺構（図版28・31、第72図）

直線距離で3.82m、ピットの中央を通るラインは北にわずかに湾曲しており3.90ｍを測る。不整円形・楕円形・細長いピットが混在しており、ピット間隔は芯々で30～70cmある。

９号波板状遺構（図版28、第73図）

ほぼ直線であり、距離は11.90mを測る。不整円形・楕円形・細長いピットが混在しており、ピット間隔は、東側は芯々で40～80cmだが、中央から西部は間隔が広くまばらである。東端のピットは10号波板状遺構と接しており､切り合いはわからない。西端のピットは５号溝状遺構に切られる。

10号波板状遺構（図版28・31、第73図）

東端部で９号波板状遺構と重なり、中央部では11号波板状遺構と交差しているが、切り合いは不明である。西部端は試掘トレンチにより失っており、現存で直線距離7.03mを測る。細長いピットがほとんどで、楕円形が混在する。ピット間隔は芯々で40～80cmを測る。

出土遺物（図版39）

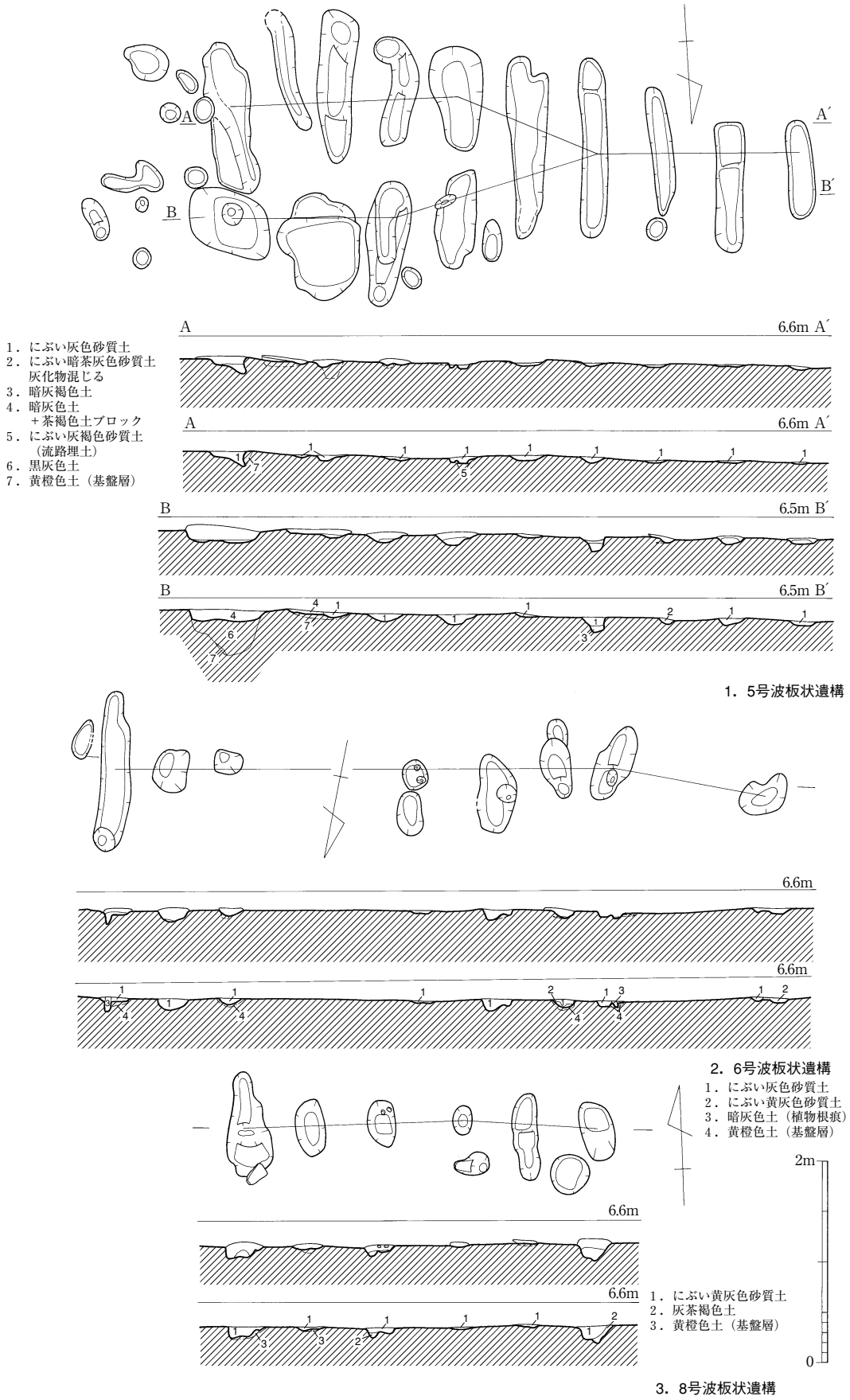
図版39-２は写真のみ掲載のピット８出土である素面と古い剥離面の角を打面として剥ぎ出した扇形の素材剥片で、調整剥離はない。長さ3.8cm、幅2.8cm、厚さ2.2cmの黒曜石製で19.54ｇ。

11号波板状遺構（図版28・32、第73図）

西端部で10号波板状遺構と交差しているが、切り合いは不明である。西部端は試掘トレンチにより失っており、西部は南に湾曲する可能性を残すが現状では不明である。現存で直線距離7.44mを測る。楕円形ピットがほとんどで、ピット間隔は芯々で60～90cmを測る。

出土遺物（図版37、第91図）

第91図１は、ピット７出土の掻器で、扇形の剥片を素材とし、上端面は素面である。左側縁は刃潰し、下縁との角は鋭利に尖らせている。刃部は表面からのみ打ち欠いて刃縁を形成している。黒曜石製で0.75ｇを測る。



第72図　5・6・8号波板状遺構実測図（1/60）

（６）溝状遺構

１号溝状遺構（図版 32・33、第 64・74 図）

調査区西半部に位置し、湾曲しながら南北方向に走る。５～７号溝状遺構・１号流路に切られる。上位は埋土が基盤層に近く、検出は困難だった。埋土が砂質土であったため、水没時に土層セクションや切り合いの壁が崩落し、底面や壁面が崩壊してたため、南北でラインがつながっていない。

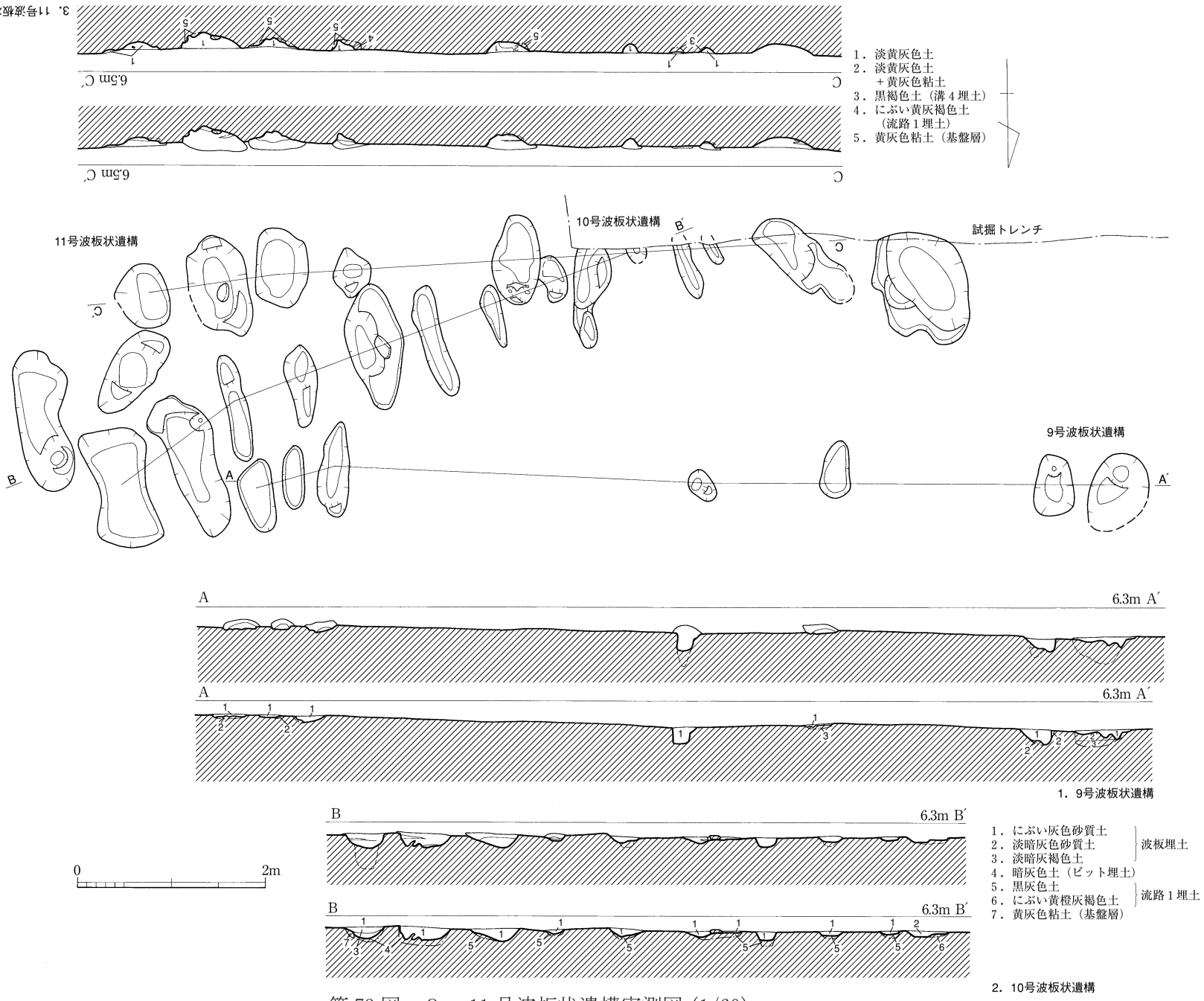
調査区中央部が最も幅が広く 760 ㎝、南端は狭くなり 254 ㎝を測る。壁は西側の立ち上がりが緩やかである。溝底は北側が深く 180 ㎝を測る。壁面下位の抉れは、水流によるものと思われ、西壁の抉れの位置が高いのは、溝のプランが湾曲しているので、湾曲の外側が大きく抉れたためであろう。床面付近の砂層からは湧水があり、溝内部は水が溜まっていたことが想定される。この抉れのある位置から埋土に砂分が多くなり、木製品が集中して出土した。埋土に大きな崩落土は見られず、層はほぼ水平なので土堤の痕跡はなかった。

出土遺物は６層から弥生時代後期中葉から後葉の土器が東側から廃棄されており、パンケース７箱分出土している。中期前葉から後期後葉のものが多く、破片が大きくあまりローリングを受けていないので、近くから廃棄されたものであって、流れてきたものではない。古墳時代初頭のものまで入っていることから、最終埋没はその時期と思われる。木製品の杭や矢板は廃棄された状態であって、打ち込まれたものはない。

出土遺物（図版 35 ～ 39、第 75 ～ 87・91・92・94 図）

第 75 図１・２は複合口縁壺の口縁部で、口唇部は平坦面をもつ。１は外面は全面ハケ調整で、内面は内傾部がオサエ後ナデ。外反部はハケ調整である。金雲母とチョウ石の混入乳する胎土で、にぶい黄灰色を呈する。２は内傾部の内外面はナデ。外反部は内外ハケ調整である。口唇部は平坦面に刺突している。第 75 図３は二重口縁壺の口縁部片で、小片のため不正確ながら 18cｍ前後に口径が復元できる。器面は失われており、調整不明。胎土はチョウ石の混入多いが、比較的精良である。第 75 図４は広口壺の鋤先口縁部で、端部が丸みをもつのは摩滅しているためである。頸部に一部器面が残るのみで、調整は不明。第 75 図５は口縁が内湾して大きな角度で立ち上がるので、黒髪式の肩が大きく張る広口壺の可能性がある。器面は摩滅しているため調整は不明。胎土に特に特色はない。第 75 図６から９は口縁部が長く大きく外反する壺である。６は目の幅の広いハケは丁寧に施される。器壁が厚く、胎土には混入物が多い。７は壺の口縁部片と頸部片で、図上接合である。口唇部の量端は尖っている。刻み目は残存部ではすべて見られた。頸部は櫛描文のみで、波状文は見られなかった。外面はハケ、内面はオサエのみ。８は胴下位で図上接合する同一個体である。外面はハケで、胴中位以下は摩滅のため調整不明。９は頸部に２単位の櫛描文が入り、胴部中位の刻目突帯は１巡して交差しない。内外目幅の広いハケが入り、茶褐色の特徴的な胎土であることから搬入品だろう。使用による変色は認められない。10 の口唇部は刺突後に中央部をナデている刻目が変形している。頸部には連続刺突文が入る。第 82 図１から６の大型甕と同じ胎土で、金雲母が多い。

第 75 図 11 と第 76 図１から５は口縁部が短く外反する壺である。第 75 図 11 は肩部で図上接合する。口唇部が突出するのは刻目のためである。底部はレンズ底。頸部はハケを施したのちナデている。目幅の広いハケが内外に入る。第 76 図１は口唇部を刺突後中央部をナデており、刻目が変形している。内面が暗黄灰色を呈するのは焼成時の酸素不足によるものであり、使用による変色ではない。２の胴部は内外丁寧なハケが施されている。口縁部の刻み目は摩滅で失われたのではなく、途中でなくなっている。３は肩が大きく張るので、４のような胴部が球形の壺の可能性がある。目幅の広いハケ目が内外に施され、胎土は角閃石が多い。４・５は胴部が球形の壺であり、４は全面ハケ調整で丁寧な整形。５は全面淡青灰色を呈し、他に同様の胎土を持つものがないので土壌の影響によるものではないで、搬入品であろう。口唇部の中央がナデ窪んでいる。第 76 図６から８は壺の頸部片で、６は櫛描文と櫛描波状文、７は櫛描波状文のみで、胎土は 78 図２・５～７に近い。８は器壁が厚く、丁寧なハケ調整が施される。第 76 図９・10 は口縁が直立する壺の口縁部で、別個体だが、胎土と色調が酷似する。第 76 図 11・12、第 77 図１から３は壺の胴部で、第 76 図 11 は頸部に櫛描文が入るが、胎土は精良で黄灰色を呈する。第 76 図 12 の内面は丁寧なハケ、外面の胴下位はケズ

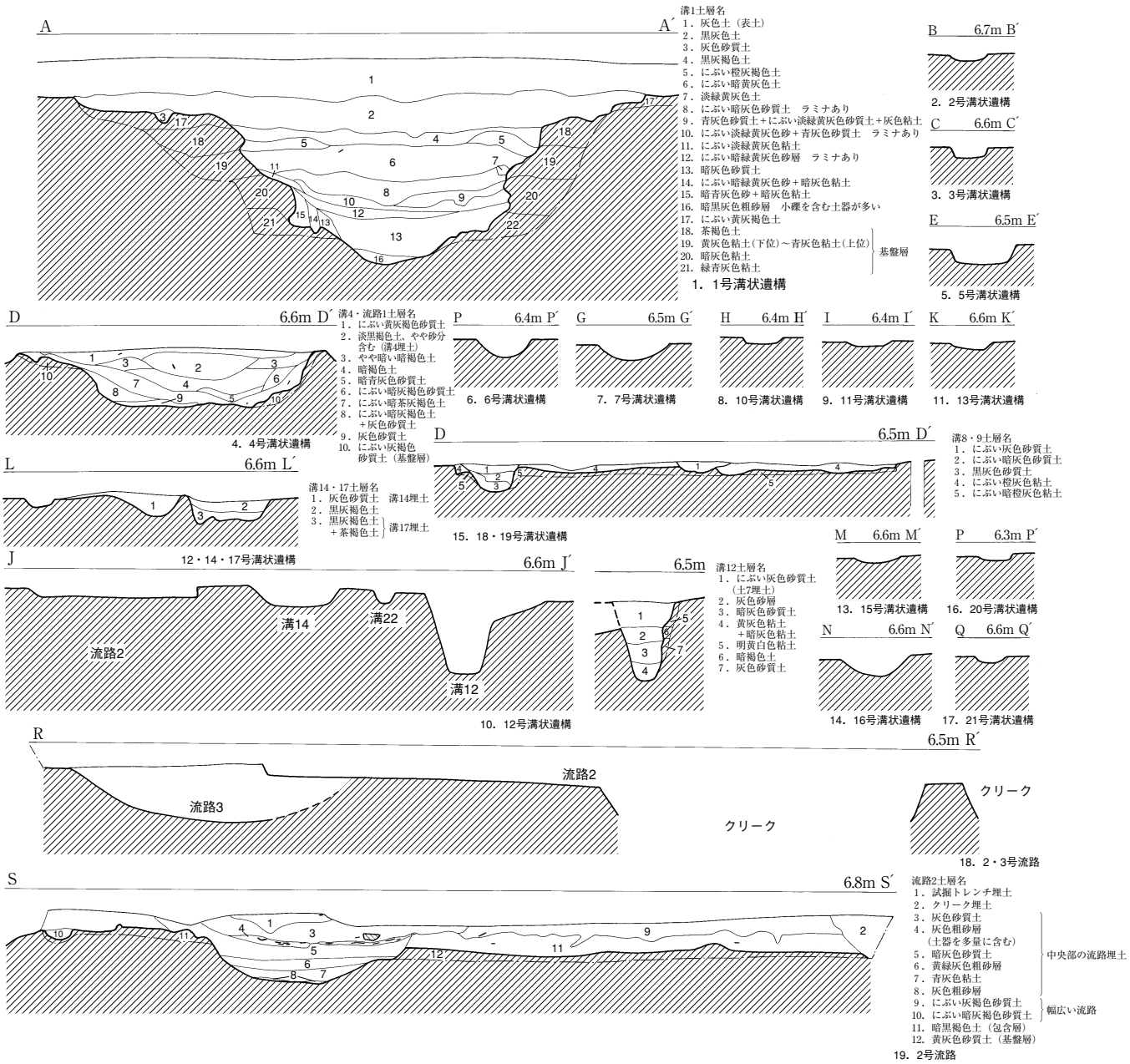


第73図　9～11号波板状遺構実測図（1/60）

リ状のナデとオサエ後ナデ。外底はナデのみ。内外の変色は焼成時のものと思われる。チョウ石の混入多い。第77図1は上底気味の平底で、弥生中期の胴が膨らむタイプのものだろう。第77図2は平底だがレンズ状に近い。第77図3は壺の胴中位以下で、黄灰色を呈し、変色はない。

第77図4から19、第78図・第79図1から8、第80図1は甕の口縁部で、第77図4は器面が摩滅しているため残っておらず、調整不明。第77図5は目の太いハケが施されている。第77図6は軟質で混入物が少ない特徴的な胎土で、朝鮮系無文土器片である。第77図7・8は小片で正確に径を復元できないが、小型甕である。第77図9・10は器面が摩滅のため失われている。第77図11は外面が橙褐色を呈するが、器面が摩滅しているため赤色顔料なのか変色なのかわからない。第77図12は広口壺で内外面にミガキが入る。外面口縁部は縦方向の暗文が入るので、黒髪式の可能性があるが、胎土に差異は見られない。第77図13から15は庄内から布留系の甕の口縁部で、14・15は外面タタキのみで、13の外面はハケしか見られなかったが、いずれも小片や頸部のみであるためかもしれない。内面はいずれもケズリ。変色は頸部まであるが、15にのみ煤の付着がある。

第77図16・17は小型甕で、16の口縁部の形態が通常のものと異なるが、小型品のためだろう。



第74図　溝状遺構・流路跡土層断面図（1/60）

胎土は精良で、粗いハケ調整が入る。両者とも内面は変色しているので、煮沸使用した可能性はある。第77図17・18は口唇部のナデにより内面側が突出する。18の外面は口縁下まで煤が付く。第77図19は口唇部に平坦面を形成していない。第77図20は17・18と反対に外面側に突出する。

第77図１から６は口唇部に刻目の入る甕の口縁部で、１は口唇部が内面側に肥厚する。器面が摩滅しており、内外とも調整不明。２・４は口唇部が外面側に肥厚し、２は内外目幅の狭い丁寧なハケが施される。４は内面の変色が口縁部に達しており、吹きこぼれたものと思われる。３・６は口唇部中央のナデ窪みが大きい。３の内面は目幅の広いものと狭いものの２種類のハケが使われている。外面は口縁下から煤が付着して変色している。６は頸部に連続刺突文が入る。金雲母の入る胎土で、内外煮沸使用による変色がある。５は器面の摩滅が著しい。第78図７も口唇部中央のナデ窪みが大きいものだが、刻目はない。内面は橙色を呈し、器面は摩滅し、混入物多い。第78図８は内外使用変色なし。第78図９は内外ハケで、残存部の外面下位に使用変色がある。第78図10の外面は目の細かいハケで、肩部から下が褐色化し、中位以下が橙色化している。

第79図１は小型甕だが、外面が目の細かいハケで、丁寧に整形されている。煮沸使用による変色は内外とも見られない。第79図２は器面摩滅しており、調整・色調不明。第79図３はタタキの後ハケだが、口縁部にタタキが及ぶ。口縁部まで使用変色がある。第79図４は頸部が屈曲しない器形で、ハケは目幅が広いだけでなく沈線の幅も広く、胎土は特異ではないが、搬入品か。第79図５は口唇部が跳ね上げ状を呈する。外面は口縁部から肩部までハケ状のナデが第79図８と同様で特徴的である。内面は肩部から下に炭化物が付着している。第79図６の外面は目幅の狭いハケ、内面は目幅の広いハケが使われている。内面は肩部から下が変色している。第79図７・８は器高が低く、最大径を口縁部に持つ小型品で、７は内面の胴下位に炭化物が帯状に付く。８は頸部まで煤が付着し、内面は中位以下に変色がある。９の外面胴下半はケズリで、内外肩部以下が変色している。

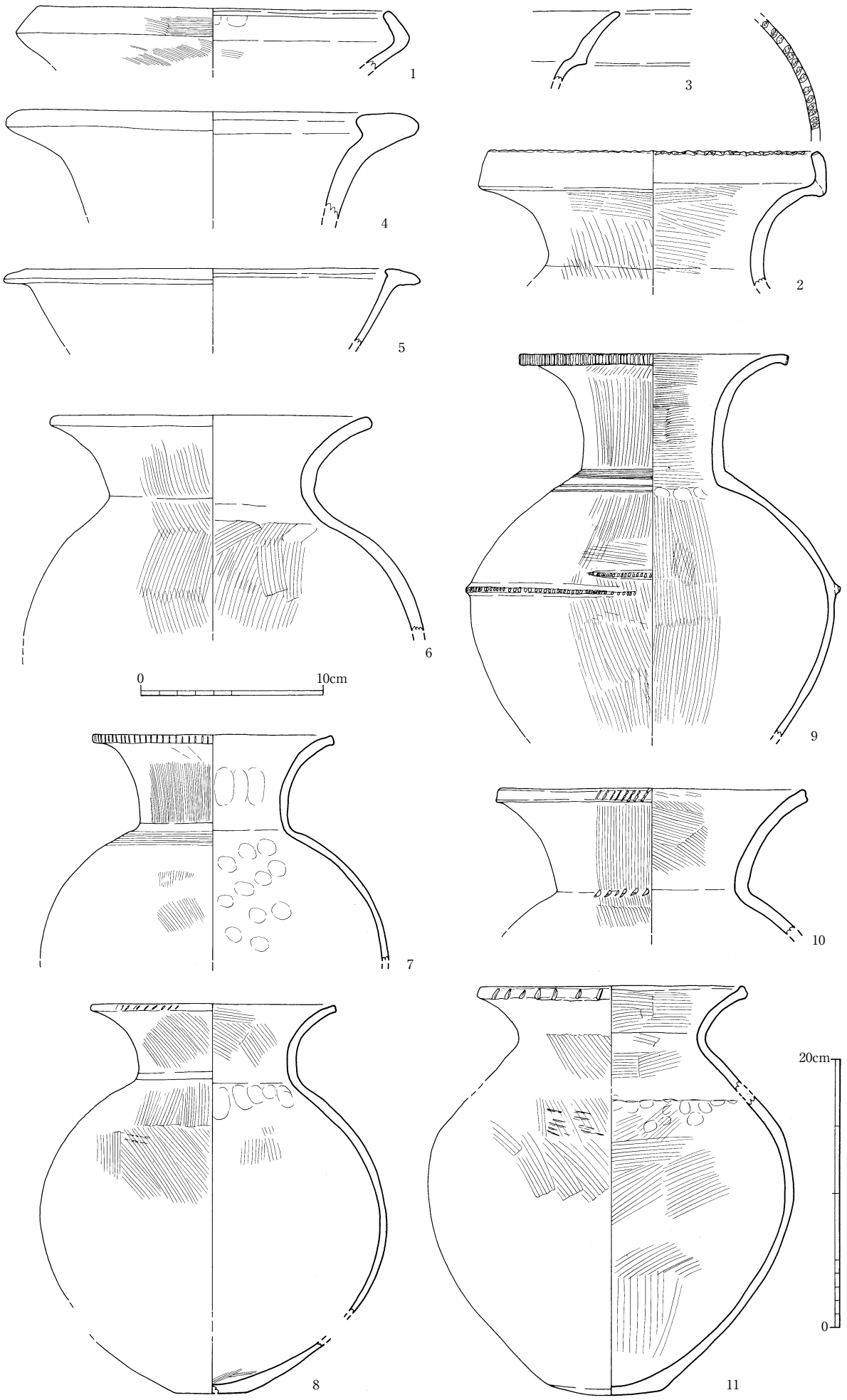
第80図１は外面の胴中位までハケで、それより下はハケのナデ消しか。第80図２・３は完形に復元できる甕で、２はレンズ底で外底にはハケが入る。目幅の広いハケが丁寧に施される。胴下位にはハケの工具端部が残っている。３は外面の胴下位は粗いケズリが入り、器壁が薄くなっている。外面は肩部以下、内面は中位以下が変色している。レンズ状の外底で、ハケ調整は入らない。第80図４は口縁部が欠損する甕で、器面摩滅で調整不明。第80図５・６、第81図１から13は、使用変色から甕の底部と考えられる。５は外面の胴下位から底部には炭化物が薄く付着する。内面は幅広いハケ目が施されている。外底面にもハケが施されているが中央部は使用のため摩滅している。チョウ石の混入多い。６は軟質の甕で胎土が精良で、混入物は少ない外面はケズリ。底部はレンズ状ではないが、丸底化している。

第81図１から３は弥生中期前葉の甕の底部で、１は外底中央を丸く押し上げている。第81図４は小型甕で、外面は丁寧なハケ、内面はケズリ。第81図５・11・12・13は脚付甕だが、12・13は台付鉢の可能性がある。第81図６～８はレンズ状の底部で、外底にハケ調整が入る。第81図９は上底で、接地部分に藁状の痕跡が付く。第81図10は底部が厚く、胴下位はタタキが入る畿内的な甕だが、胎土の差異はない。

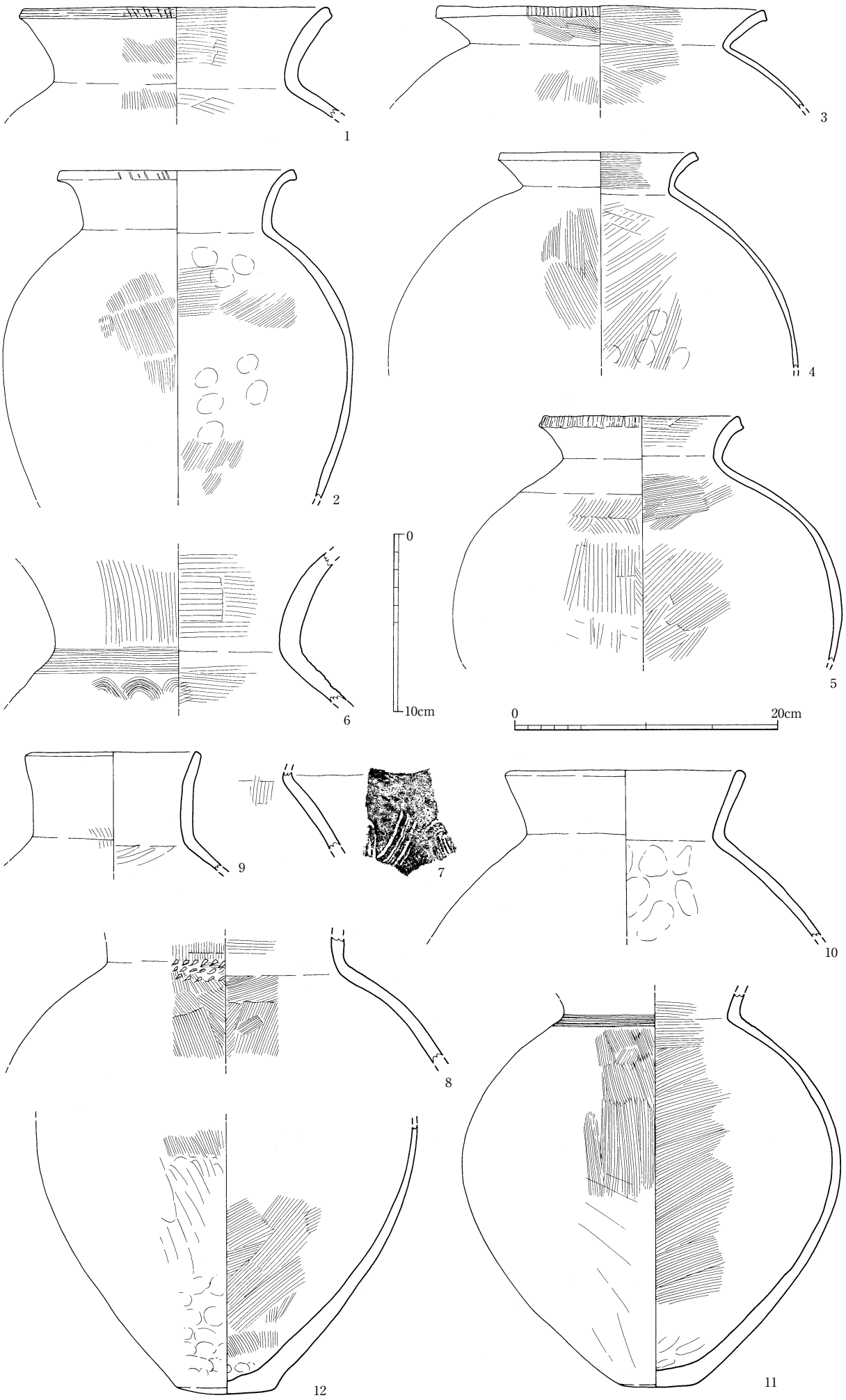
第82図１から９は大甕で、１から６は内外丁寧なハケで、胎土はチョウ石の混入が目立つ橙茶褐色を呈する特徴的な胎土である。２は口唇部にナデ窪みがあり、刻目が中央でナデ消されている。

１・２・４・５は口唇端部が突出している。７のハケ調整は丁寧で、内面の器面剥落は著しい。胎土は中型甕と差異がない。８は中型甕の形態が大型化したもので、内面中位以下は変色しており、煮沸使用したものと思われる。９は成人棺に用いられる甕棺より径が小さい。

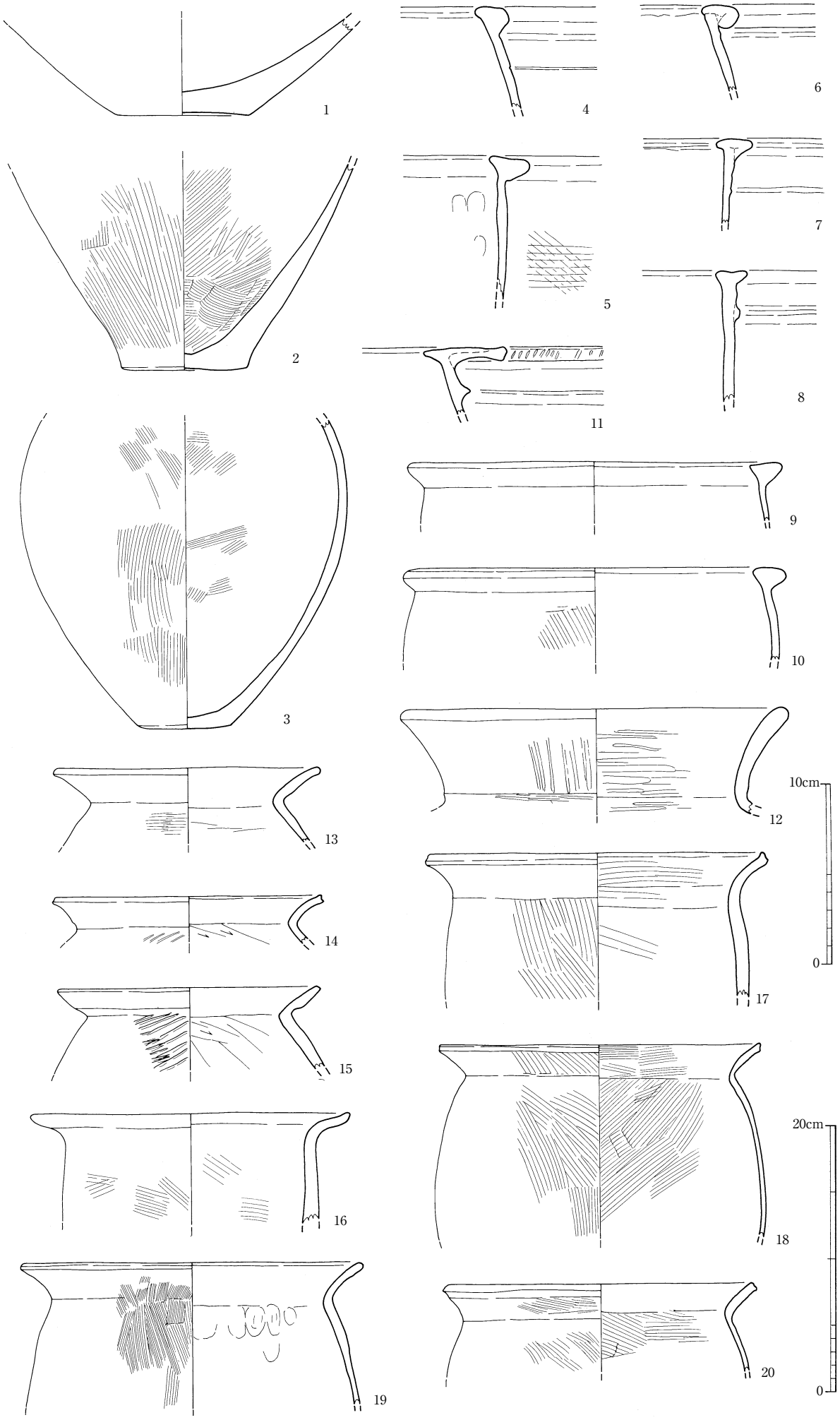
第83図１から16は高杯の杯部である。１は器面が摩滅しているため１部しか残っていないだけで、本来の施文幅は２～３倍あったのではなかろうか。胎土は精良だが、大きめの白色粒子を含む。２は内外ナデのみで、ミガキはない。胎土は金雲母が多い。３と４は胎土が精良で酷似する。５と７は胎土が精良で酷似し、形態も似ているが、口縁部の高さが異なるので、同一個体ではない。６は器面は摩滅しており、調整不明。黄灰白色を呈し、精良な胎土で、ジョッキ形土器と酷似している。



第75図　１号溝状遺構出土土器実測図１（１・７～９・11は1/4、他は1/3）



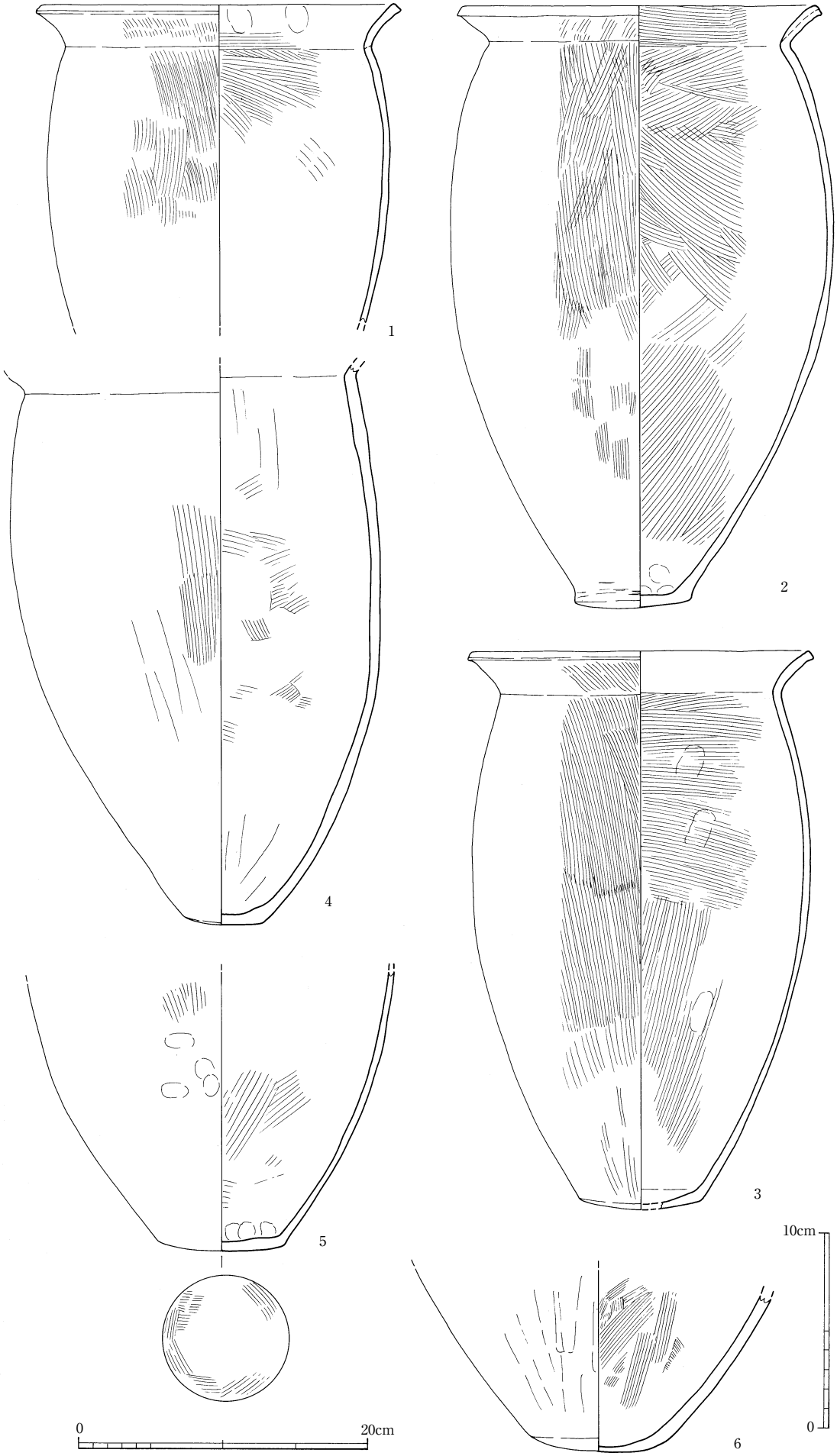
第 76 図　１号溝状遺構出土土器実測図２（１・６～ 10 は 1/ ３、他は 1/ ４）



第 77 図　　1 号溝状遺構出土土器実測図 3（ 3 ・ 9 ・10・18 ～ 20 は 1/4、他は 1/3）

第78図　１号溝状遺構出土土器実測図４（７・９・10は1/３、他は1/４）

第 79 図　　１号溝状遺構出土土器実測図５（４～６・８は 1/4、他は 1/3）



第 80 図　　1 号溝状遺構出土土器実測図 6（ 6 は 1/3、他は 1/4）

８は器面が摩滅したため、杯部と脚部の接合部がわかる。口縁内面にオサエの窪みがある。９は接合部の調整が粗い。口縁部はナデで窪んでいる。10 は外面口縁部に暗文の波状文が入り、脚部の裾には穿孔が２つ近接して存在している。残存部が一部であったため、穿孔の配置はわからない。11 は器面の残りがよく、杯部外面にミガキが見られる。11・12 はやや径が小さいもの。13 は口縁部と杯部との屈曲部が湾曲のため明瞭でない。15 は外面下位にケズリが入る。

第 83 図 16、第 84 図１から５は高杯の脚部である。第 84 図 16 は穿孔があることから小型高杯か脚付鉢か器台の脚裾と考えられる。櫛描波状文はこの穿孔を避けて施されていることから、穿孔後に施文しているとわかる。第 84 図１・２は器面が摩滅しているが、２は赤色顔料がわずかに残っていた。第 84 図３・４は脚の裾部で、目の細かいハケが施される。３は黒灰色粒子が目立つ胎土で、混入物が多い。４は器面が剥落しており、外面はハケの工具端部が残るのみである。５は裾が丸く内湾し、裾端部の接地部に平坦面をもつことから、豊前地方に多い口縁部が丸く内湾する高杯の脚部と考えられる。混入物は少ないが、密度が高いためか、重厚で、異質であることから、搬入品であろう。穿孔は位置が高く、３か所あったようだ。６から９は脚部が柱状で中実なタイプで、胎土は精良である。７は横方向の線状のミガキが入る。10 は小型の高杯の脚部だろう。

11 から 14 は台付鉢である。11 は小型高杯の可能性もある。内面にミガキが残るが、外面は摩滅しており観察できない。12 は器高の低い杯部がつく脚で、胎土は精良。13 は口唇部にナデによる平坦面があり、内面側が突出する。杯部は目幅の広いハケが施されている。14 は小型の高杯の可能性もあるが、身が深いことから鉢とした。胎土は精良で、口縁部に付着する炭化物は 2 次的なものである。15 は 13 の形態の台付鉢の台部だろう。

16・17 は中実の柱状脚から低く大きく裾が開くことから、杯部は半球状のものがつくと思われる。外面に調整工具の端部だけが残っている。18 は裾が屈曲しない脚で、器高の低い鉢がつくものと思われる。第 84 図 19 から 22 は鉢だが、19 以外は高台がつく可能性もある。19 は傾きから甕ではないと思われる。20 の外面は摩滅のため調整不明。内面は丁寧なハケ調整が施される。21・22 は器面が摩滅しており、調整不明。変色なし。混入物多い。

第 85 図１は台付鉢で、内傾する上半部はナデ、下半部は目幅の細かいハケ。第 83 図２から４は器高が低いことから鉢であろう。２は口唇外端が尖る。外面は丁寧なハケ。外面が口唇部まで炭化物が付着している。比較的精良な胎土で肩部内面はケズリ。３は丁寧なハケ調整で、外面は口縁部がハケ後ナデ。体部は摩滅のため調整不明。４は肩が張る甕の可能性もある。

第86図５から10は小型の壺で、変色はない。５は器面が摩滅しており、胴部にわずかにハケが残る。６の肩部はハケが残るが、中位以下は丁寧にナデられている。器壁は厚いが、つくりは丁寧。比較的精良な胎土である。７は外面は肩部以下はケズリ状のナデ。10 は口縁部に歪みがあり、外面はタタキのちハケ。

第 86 図１から 16 は小型丸底壺で、１・２は内傾する無頸の小壺で、１は上半がナデで、下半はハケとミガキ。２は底部が突出し、胎土には混入物あり。３から７は精良な胎土で外面はほとんどナデのみ。６は復元径と傾きはまちがいなく、口がやや開くものである。７は小片のため反転復元できない。８・９は小型丸底壺で、８の外面は丁寧にナデられており、上半には凹凸がある。底部に１㎝ほどの長さの細長い孔が開いているが、穿孔なのか、欠損なのかわからない。内面のみ鉄分の吸着が著しいので、内容物が器壁に染み込んだものが変色したのか。９は目跡の広いハケ調整。10 から 16 は短頸壺で、いずれも胎土は精良で、変色はない。13 は９割残存している。外面は丁寧なナデで、ミガキは見られない。16 は口縁部が欠損しているが、７割残存している。外面上半がミガキ、下半はナデ。21 は小杯で内外灰褐色を呈する。外面はケズリ状のナデで、内面はミガキがある。17・18 は無頸壺である。17 は口唇部の外面部が尖り、わずかに外反するもので、内面の上半はオサエ。外面はナデのみ。18 は小片のため口縁部と突帯のどちらに歪みがあるのかわからない。図は突帯を基準にしたもの。精良で混入物なし。

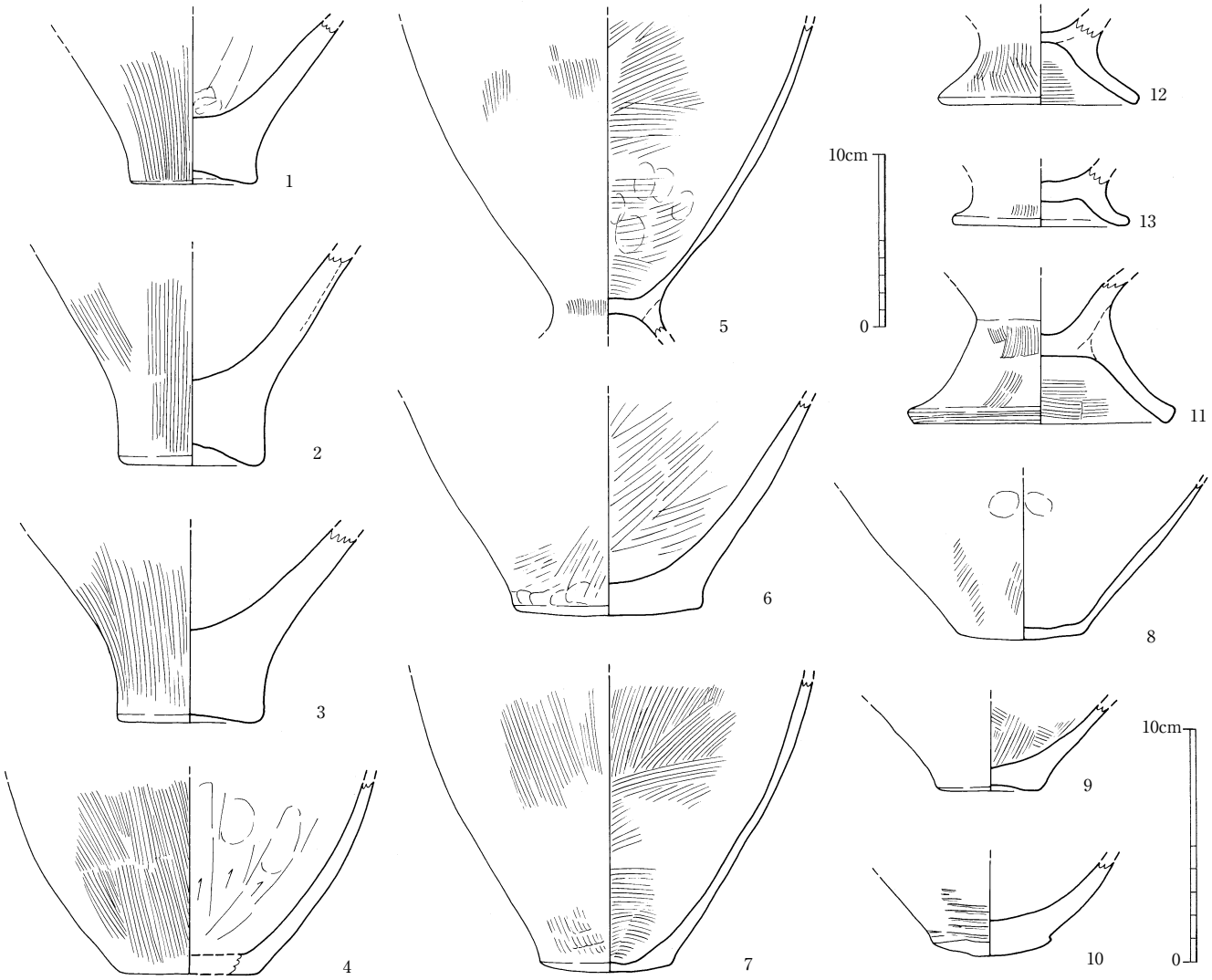
第 86 図 19・20 は鉢で、19 の外面はケズリ状のナデで、内面は丁寧なナデ。20 は上半がオサエで凹凸がある。内面は赤茶褐色で、内面よりも赤色が強く、意図的な焼成か。第 86 図 21 から 23 で、

21は手捏ねで片口がある。完形品で、つくりは粗雑で、外面はオサエのみ。22は外面ナデ、内面ミガキ。23は完形で、小さな平底で、外面はナデ、底部付近は丁寧なハケが入る。第87図１から７は器台で、１の外面はタタキ後上半はナデ消し、下半はハケ。１・６は角閃石が目立つ胎土で、搬入品だろう。２は内外ハケで、胎土は精良。２次的な変色がある。３・４は裾端部が尖り、外面は目幅の広いハケ、内面はナデで、形態と調整の特徴が共通する。５は口縁部に刻みの入る袋状口縁の器台で、比較的混入物が少ない。６・７は口唇部に刻目の入る器台である。８・９は複合口縁で、８の外面には櫛描波状文が２条、９の外面には櫛描波状文と刺突文が組み合わさる。87図10は支脚で、外面は上面まで丁寧なハケが入る。上面の孔径は復元径で不正確。

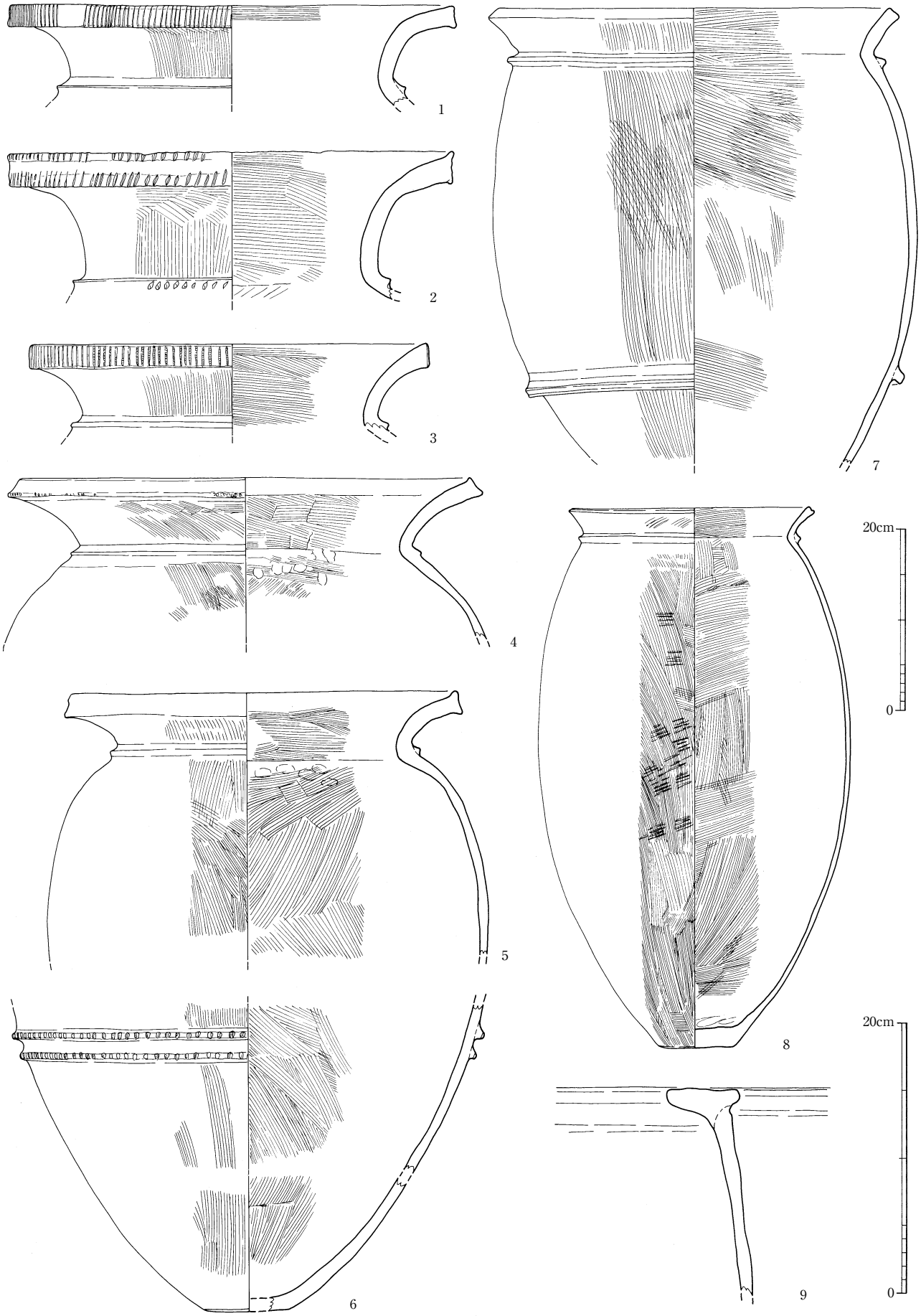
第87図11から17はミニチュア品で、11は小型の広口壺で、器壁が薄い．精良な胎土で変色なし。12は胎土の混入物が少なく、搬入品の可能性がある。13は外面ナデのみで、混入物の多い胎土である。14は丁寧なハケが入り、外面は２次焼成による変色がある。15・16は壺か甕の底部だろう。16はレンズ底状に整形している。17は高杯か器台で、ナデのみか。

第87図18・19はジョッキ形土器である。18は精良な胎土だが、19は他の器種と差異がない。

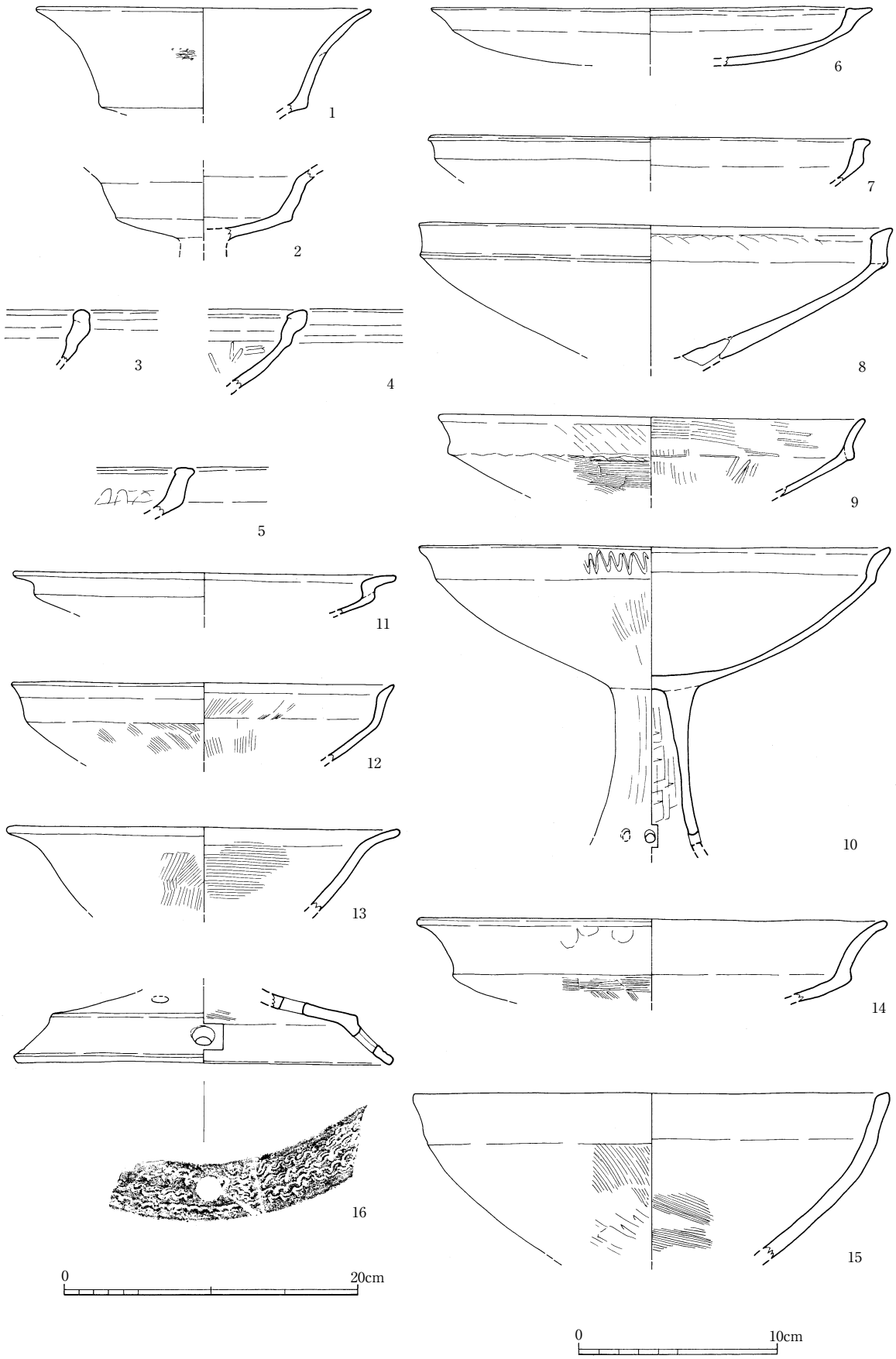
第91図13は掻器で、粗割り段階の剥片を使用し、上位を平らにして、台形状に整形している。黒曜石製で2.05ｇ。



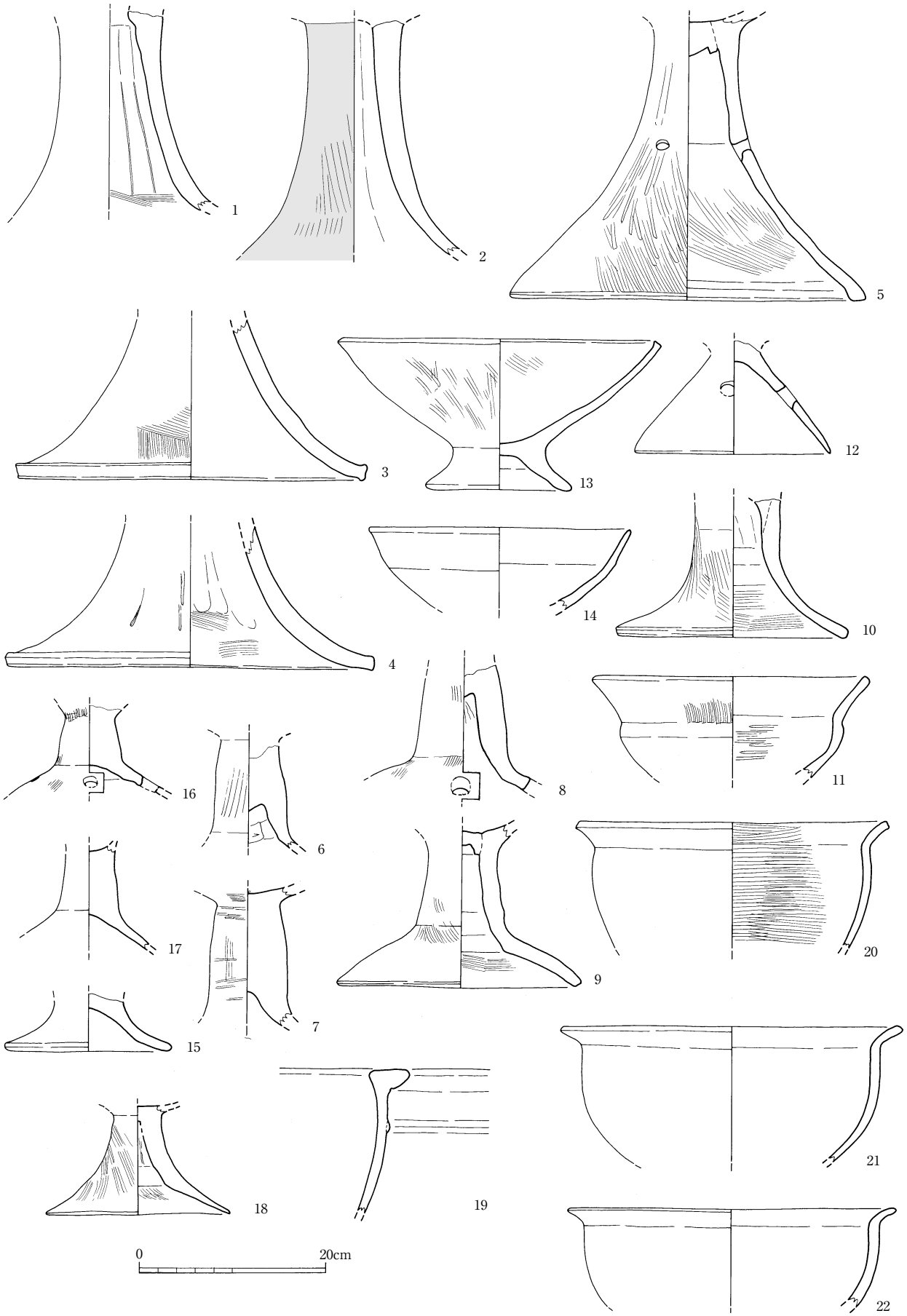
第81図　１号溝状遺構出土土器実測図７（５は1/4、他は1/3）



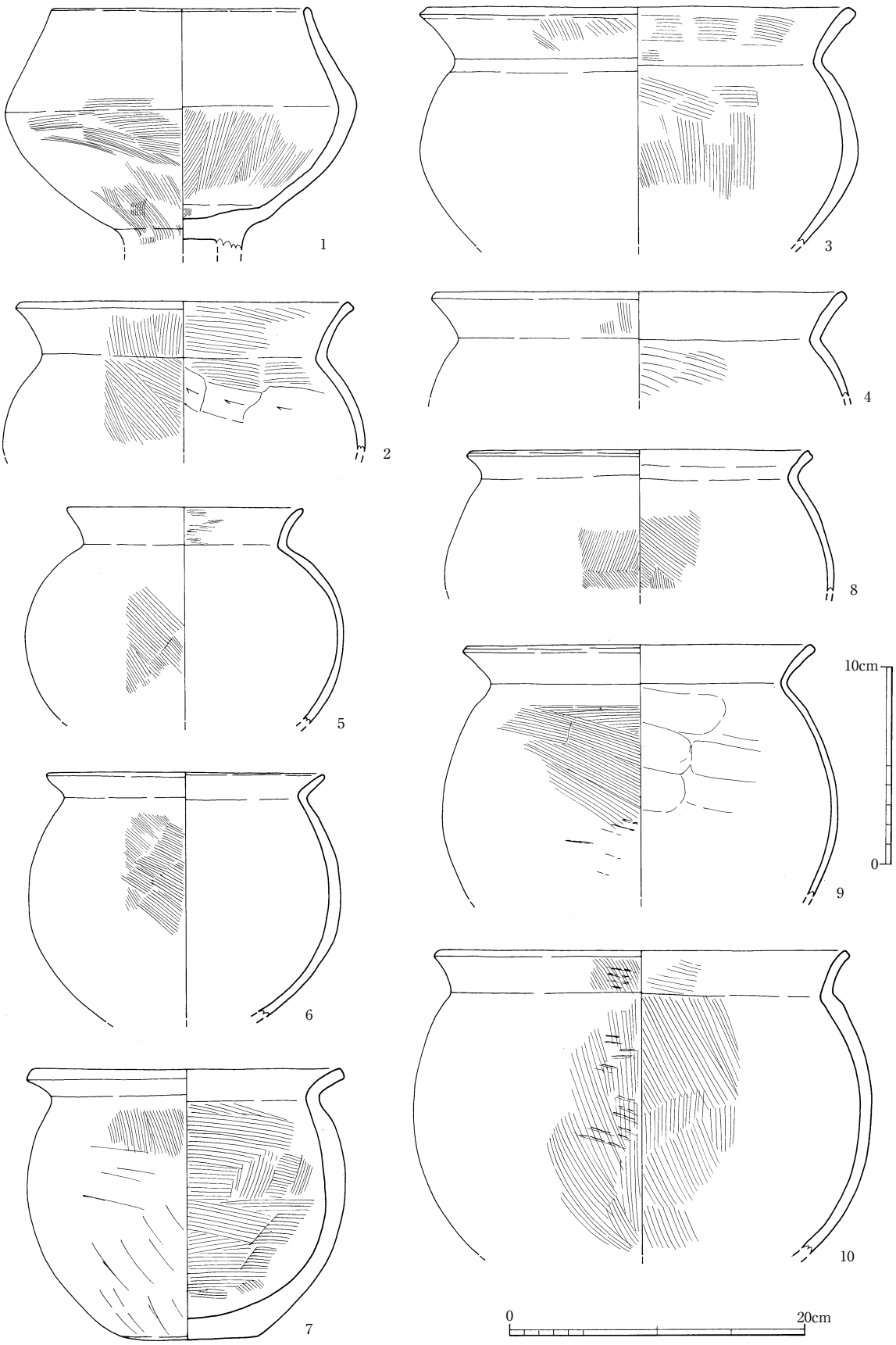
第82図　１号溝状遺構出土土器実測図８（２・９は1/4、他は1/6）



第 83 図　1 号溝状遺構出土土器実測図 9（7 ～ 12 は 1/4、他は 1/3）



第 84 図　1 号溝状遺構出土土器実測図 10（1/3）



第 85 図　1 号溝状遺構出土土器実測図 11（4 は 1/4、他は 1/3）

第91図19は角のある石核から三角板状に剥ぎ出した剥片を素材としたもので、左右側縁は素面である。下面は剥離縁を利用して刃部としている。黒曜石製で3.58 gを測る。第91図28は削器で、斜めに長い剥片を素材としたもので、上縁は素面である。右側縁を利用して刃部としており、左側縁は角を作って背面にしている。黒曜石製で5.73 gを測る。第91図29は掻器で、角のある石核を三角柱状に剥ぎ出した素材を利用しており、上縁と右側縁は素面である。左側縁は剥離縁を利用して刃部としており、右側縁は刃潰しして整形している。刃部は湾曲しており、調整剥離による刃部を形成していないので、軟らかいものを対象にしたものである。黒曜石製で2.36 gを測る。

第92図２は打製石鏃で完形品である。両面剥離しており、黒曜石製で、1.62 gを測る。

第92図４から６は石庖丁である。４は片岩製で、表面の刃部の方が、裏面よりも平坦に研いでいる。40.61 gを測る。５は片岩製で、全面丁寧に研磨されている。穿孔部の間が最も刃こぼれが著しい。44.66 gを測る。６は片岩製で右側縁の下部は欠損部を研磨しているので、再利用したものと考えられる。17.16 gを測る。第92図10・12・13は砥石で、10は表裏２面を使用している。上端面は素面で、下面は欠損。砂岩製なので中砥であろう。403 gを測る。12は５面使用しており、柱状のものが使用により磨り減ったものであろう。置砥石で、頁岩製の仕上げ砥石であろう。622 gを測る。13は表裏２面使用しており、表面は研磨で光沢があるが、裏面はあまり使用していない。砂岩製であることから、中砥。798 gを測る。

第93図１・２・５は凹石で、いずれも硬質凝灰岩製である。１・２は片手にすっぽり収まる大きさで、１は463 g、２は529 gを測る。５の凹みは彫啄によるもの。第93図７は花崗岩製なので、砥石ではなく石皿と思われるが、側面にも平坦面があるので、砥石の可能性も残る。6910 gを測る。

第94図１から９は木製品である。１は縦長い板で、これも矢板だろうか。２は横長い幅広の板で、先端が尖るので、矢板であった可能性がある。３・４は杭で、いずれも皮付きの木の先端をカットして尖らせている。４だけは上部が二股に枝別れする木を使っており二股を利用したものだろう。５は脚付盤で、半分が残っている。高台部には方形の透し穴が開けられている。６は先端を断面方形に加工した棒状のもので、部材の一つ。７は先端を尖らせ、上端は丸く丁寧に仕上げたもので、面取りも丁寧なので杭ではない。投槍のようでもある。８は両側端を薄くして挿入できるようにし、上面は２つのくりこみをあけている。何かの部材である。

２号溝状遺構（図版22、第64図）

調査区中央部に位置し、方向に直線的に走る。北西・南東端部は削られて失われている。幅は50cm前後、深さは５～10cmの小溝である。

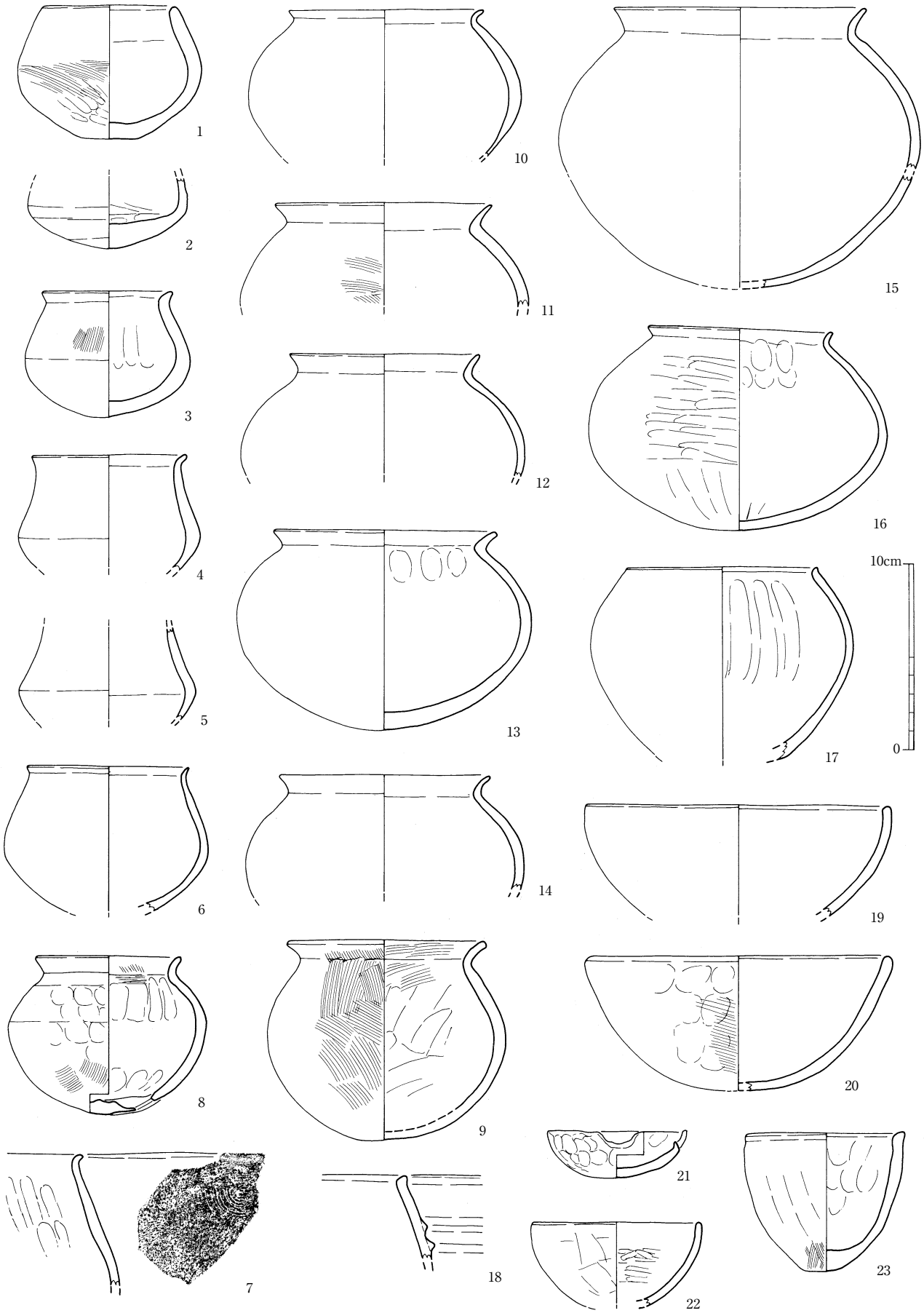
３号溝状遺構（図版22、第64図）

調査区中央部に位置し、方向に直線的に走る。北東端部は本来途切れていた可能性が高い。幅は均一で50cm前後、12～20cm前後の深さで、北に下がっている。２号波板状遺構の東部のピットに切られている。須恵器の小片と摩滅した弥生中期前葉の土器片のため時期不明。

４号溝状遺構（図版22、第64図）

調査区中央部に位置し、南西端部は試掘トレンチで失われており、その先は検出されていない。10号波板状遺構の西側のピットに切られている。１号流路跡の埋没した窪みを掘り直した溝と思われ、本来１号流路跡西岸に沿って６号溝状遺構と繋がる可能性がある。幅は55cm前後で均一で、70～90cm前後の深さで、南に下がっている。４号溝状遺構は流路の上で、同じように中期初頭から前葉の遺物が出土するが、終末期のものがもっとも摩滅が少ない。

図化できないが、タタキをもつ器壁の薄い甕片が出土しており、庄内期のものだろう。



第 86 図　1 号溝状遺構出土土器実測図 12（1/3）

第 87 図　1 号溝状遺構出土土器実測図 13（9 は 1/4、他は 1/3）

５号溝状遺構（図版 22、第 64 図）

調査区西部に位置し、試掘トレンチのために１号溝状遺構との切り合いはわからなかったが、7 号溝状遺構との関係から切っていると考えられる。３号土坑・９号溝状遺構に切られている。1 号竪穴住居跡との切り合い関係は不明である。一部に山形の湾曲がある。幅は 40cm 前後でほぼ均一である。深さは 10 ～ 15cm 前後でわずかに南西に下がっている。

出土遺物（図版 37、第 86・91 図）

第 88 図１は高杯で、口縁部と杯部との接合部外面は段を有する。弥生後期後葉。

第 91 図 12 は掻器で、上端面は左上が高くなるように湾曲させ、両側縁は斜めに調整剥離し、下縁の右半分は水平に剥離して刃部としている。左半分は刃潰しして斜めに整形しているのは、左上をつまみ部とすることを意図したものである。右側縁は素面を利用している。黒曜石製で 29.7 ｇ。

６号溝状遺構（図版 22、第 64 図）

調査区西部に位置し、１号流路との切り合いはわからなかった。１号溝状遺構を切っており、切り合い関係は明確に検出された。遺構の北東端は検出されていないが、４号溝状遺構に繋がる可能性がある。４号溝状遺構と同一遺構であれば、切っていると考えられる。幅は 60cm 前後で北東ほど狭くなる。深さは 10 ～ 15cm で南に下がっている。

出土遺物（第 88 図）

第 88 図２は弥生中期初頭の甕の口縁部で、外面は口縁下から煮沸使用による変色がある。小片なので、他の遺構との切り合いから混入品であろう。

７号溝状遺構（図版 22、第 64 図）

調査区西部に位置し、試掘トレンチのために１号溝状遺構との切り合いはわからなかったが、1 号溝状遺構を切る７号溝状遺構に切られていることから、切っていると考えられる。L 字形に東にカーブし、1 号溝状遺構の東側には検出されていないので、途切れていた可能性が高い。幅 70cm 前後だが、一部が広くなっていて最大 130cm を測る。その部分は西壁が緩やかに立ち上がっており、深さ 20 ～ 30cm で、北に下がっている。

出土遺物（第 88 図）

第 88 図３は器壁の厚い小型壺か。内面の変色は内容物のためか。４はレンズ底の壺の底部で、内外変色なし。外底はナデのみ。

８号溝状遺構（図版 22・34、第 64 図）

調査区西部に位置し、試掘トレンチのために南端が失われている。延長上に３号土坑があるが、３号土坑の土層からは切り合い関係はわからない。幅は 45cｍ前後でほぼ均一である。深さ 10cｍ前後で、南に下がっている。

出土遺物（第 88 図）

第 88 図５は高杯で後期後葉、６は底部が不完全な丸底の甕で、弥生終末。

９号溝状遺構（図版 22・34、第 64 図）

調査区西部に位置し、L 字形に東にカーブするが、試掘トレンチのために東端が失われている。それより東には延長して検出されていないので、本来途切れていたのではないだろうか。５号溝状遺構との切り合いは明確に検出された。１号掘立柱建物跡の柱穴との切り合いも確実である。１号墓は本遺構に中に完全に入っており、検出時に切り合いは認められず、溝の床面から検出された。幅 80cm 前後の均一な幅で、深さは 20cm 前後で、北に下がっている。

出土遺物（第 88 図）

第 88 図７は、天井部のみの破片のため不確実だが、7 世紀から 8 世紀前半の須恵器蓋である。

10 号溝状遺構（図版 22・34、第 64 図）

調査区東部に位置し、南東端をクリークに切られており、わずかに 240cｍだけ検出された。幅 30 ～ 38cm 前後でほぼ均一だが、北西端は途切れている。深さは 65 ～ 70cm で、南に下がっている。上位に土器の集中部があり、下位は遺物が少ない。

11 号溝状遺構（図版 22・34、第 64 図）

調査区東北部にわずかに 192cm 検出され、ほぼ南北に走っている。幅 20cm 前後で、深さ５cｍほどで、浅く北側に下がっており、南端は削られて失われている。

出土遺物（第 88 図）

第 88 図８は須恵器の高杯の脚で径が小さいので小型器種だろう。

12 号溝状遺構（図版 22・23・34、第 64・119 図）

調査区東部に位置する。南側の幅が狭くなっているのは削平を受けているためであり、本来は 92cｍ前後であろう。深さ 70cｍ前後で、やや南に下がっている。断面形は北半は長逆台形だが、南部は西壁の立ち上がりが緩やかである。他の溝状遺構と断面形が明らかに異なる。３号流路跡を切り、16 号溝状遺構を切っている。また、７号土坑に上位を切られている。

出土遺物（図版 38、第 88・92 図）

第 88 図９は須恵器甕の小片で、外面にタタキ、内面に同心円の当て具痕がある。また、肩部に灰被りがある。10 は瓦器碗の底部で、高台がやや摩滅している。

第 92 図９は扁平片刃石斧の基部である。頁岩製で 35.58 ｇを測る。

13 号溝状遺構（図版 22・23・34、第 64 図）

調査区東北端部に位置し、ほぼ南北に走っており、わずかに 167cm 検出された。幅 32cm 前後で一部 46cｍまで広がる。深さ 15 ～ 25cｍ前後ほどで、浅く北側に下がっており、南端は途切れている。３号流路跡を切っている。

14 号溝状遺構（図版 22・23・34、第 64 図）

調査区東南端部に位置し、北端は 16 号溝状遺構に切られ、南端で 20 号溝状遺構に切られ、17 号溝状遺構・２号流路跡を切っている。南側は広がっており最大幅 162cｍで北側は削られている。深さ 30cm 前後で、南に下がっている。土層から見ると掘り直しがある。

出土遺物（図版 38、第 88・93 図）

第 88 図 11 は須恵器の蓋である。8 世紀前半。第 88 図 12 は瓦器椀の底部で、器面は内外摩滅している。混入品と見られる弥生土器のほかに、図化できないほどの須恵器片あり。

第 93 図６は凹石で、硬質凝灰岩製である。上下両面に彫啄による凹みがある。1090 ｇを測る。

15 号溝状遺構（図版 22・23・34、第 64 図）

調査区中央部に位置し、北部を試掘トレンチに切られている。北には検出されていない。途切れている部分は削平されたものと思われる。最大幅 54cm で北部は狭くなっているが、これは上面が削られているためだろう。深さ５cｍ前後で、北に下がっている。図化できない小片で、須恵器出土。

16 号溝状遺構（図版 22・23、第 64 図）

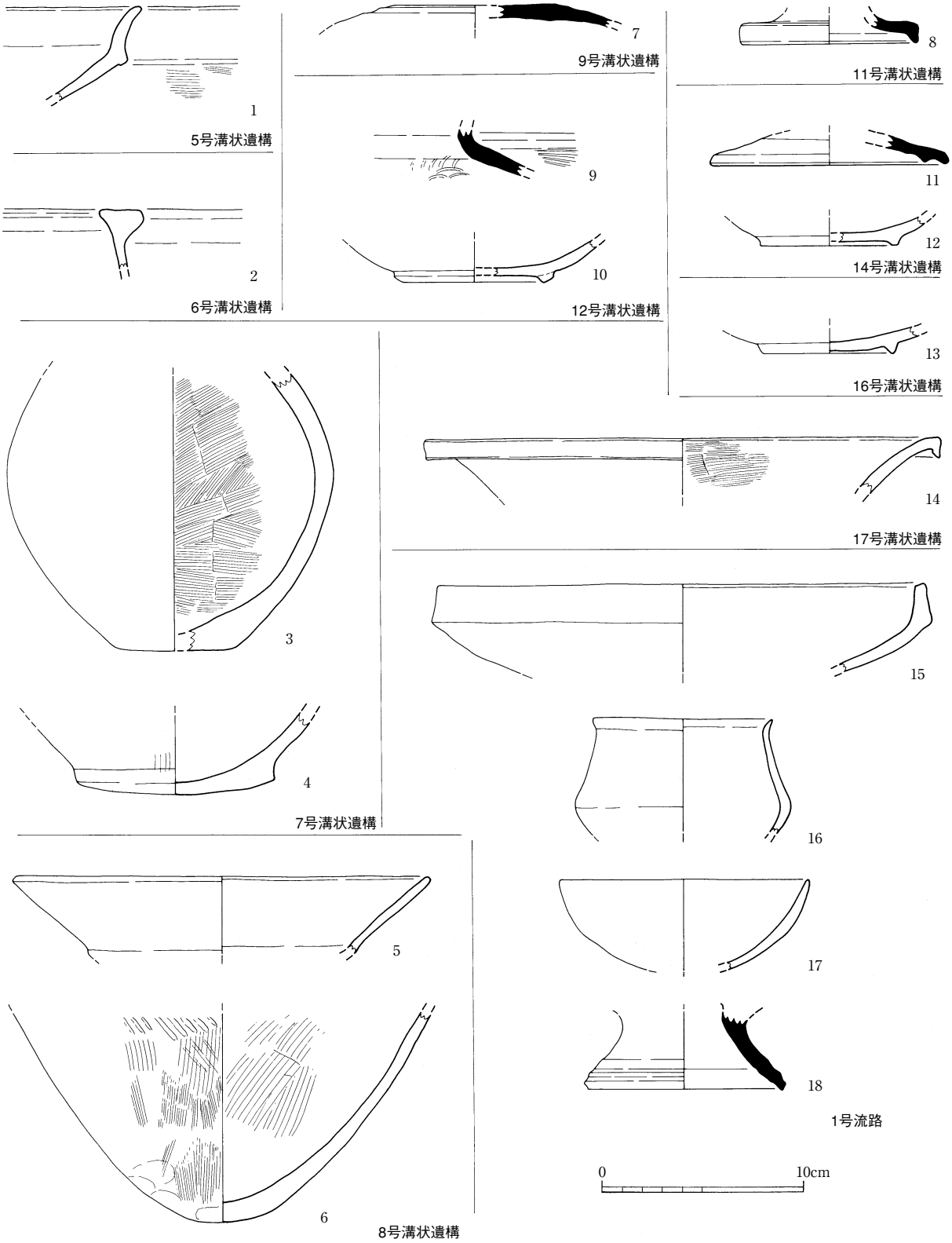
調査区中央北部に位置し、12・17 号溝状遺構・３号流路跡を切っている。最大幅 73cｍで、東ほど狭くなり、削られて失われている。深さは最大 25cm で、北西に下がっている。

出土遺物（第 88 図）

第 88 図 13 は瓦器の底部で、高台内はケズリ。

17 号溝状遺構（図版 22・23・34、第 64 図）

調査区東部に位置し、ほぼ南北方向に走っている。16 号溝状遺構に切られ、3 号流路跡を切っている。南北が 14 号溝状遺構に重なり、西側にずれた状態で検出されたものである。幅は最大 72cm 前後で、深さ 15cm 前後で床面は平坦である。南に下がっている。



第 88 図　5～9・11・12・14・16・17 号溝状遺構、1 号流路出土土器実測図（1/3）

出土遺物（第 88 図）

第 88 図 14 は畿内第Ⅳ様式の壺か高杯の口縁部に近い。胎土に特異なところはなく、搬入品と断定できないが、同じような器形は見られない。

18 号溝状遺構（図版 22・23、第 64・119 図）

調査区東部に位置し、クリークのため南側が失われている。２・３号流路跡を切っている、幅は北側が最大値で 99cm だが、60 ～ 70cm ほどで均一で、南側が狭くなる。これはクリークによる削平のためである。深さは 25cm 前後で南に下がっている。断面形は他の溝状遺構と異なり、東側の立ち上がりが緩やかな台形を呈する。

19 号溝状遺構（図版 22・23・34、第 64・119 図）

調査区東部に位置し、クリークのため南側が失われている。２・３号流路跡を切っている。幅は 70cm 前後で、北側の幅が狭いのは３号流路との切り合いのため上面が下がったためである。深さは 85 ～ 100cm 前後で、南に下がっている。

20 号溝状遺構（図版 22・23・34、第 64 図）

調査区西部に位置し、試掘トレンチのために南端が失われており、試掘トレンチより南には検出されていない。５号溝状遺構に切られており、切り合い関係は検出時に明確に確認された。北端は 1 号溝状遺構に接しているが、切り合い関係は不明である。おそらく満っているものと考えられる。幅 35cm、深さ７cm 前後で、北西に下がっている。

21 号溝状遺構（図版 22・23、第 64 図）

調査区中央北部に位置し、北西端は削られてピットが連続した状態で検出されている。東端で３号流路跡を切り、途切れている。最大幅 28cm、深さはわずか２cm 前後で、南東に下がっている。

22 号溝状遺構（図版 22・23、第 64 図）

調査区南東部に位置し、12 号溝状遺構に切られており、７号土坑を切る。14 号溝状遺構とは接しており、切り合い関係は不明瞭だった。幅 30cm 前後、深さ 10cm 前後の小溝で、北に下がっているが、途切れている。12 号溝状遺構に重なる可能性が高い。

23 号溝状遺構（図版 22・23、第 64 図）

調査区東端部に位置し、南端はクリークに切られている。２号流路跡を切っている。幅 98cm 前後、南側が広がっている。北側は削られているものと思われる。深さ 10 ～ 25cm 前後で、北に下がっている。

（７）流路跡

１号流路跡（図版 33、第 64・88 図）

調査区西部に位置し、試掘トレンチのために中央部の一部が失われている。西壁沿いに４号溝状遺構に切られており、切り合い関係は検出時に明確に確認された。流路が埋没した後、９～ 11 号波板状遺構が作られている。２号竪穴住居跡は本遺構に切られている。中央部は上位を削られて狭くなっているが、南端は広がっており、落ち込み状になっている。流路部分の幅は 256 ～ 320cm だが、落ち込み部分に繋がる。深さは 40 ～ 50cm 前後で南に下がっている。

出土遺物から、弥生後期中葉から終末の間に何度か水が流れたものと思われる。図化していないが、摩滅の著しい弥生中期初頭から前葉の土器も出土しているが、これは混入であろう。上位から鎬連弁文の青磁碗片が出土しており、最終埋没は中世前期であろう。

出土遺物（図版 37 ～ 39、第 88・91 図）

第 88 図 15 は高杯で器面は失われており、調整不明。16 は口縁が内傾する小壺で、精良な胎土である。17 は杯で混入物少ない。18 の須恵器は、６世紀末から７世紀前葉の高台付壺の高台部だろうか。流路の埋没時期をさすのではなく、混入品であろう。

第 91 図２・３・５・８～ 11・16・17・26・29 は掻器である。２は扇形の剥片を素材としており、両側縁は平坦面である。上半分は薄くすると右上側をつまみ部にするための剥離で、下縁は刃部を形成するためのもの。刃部には片刃である。黒曜石製で 1.24 ｇを測る。３は斜めに長い剥片を素材とし、上縁と右側縁は直線になるように調整剥離し、下半分は大きく剥離し、刃部としている。黒曜石製で 0.82 ｇを測る。５は斜めに長い剥片を素材とし、右側縁はと左側縁は同じ角度に調整し、刃潰ししている。下半分は大きく剥離し、刃部としている。黒曜石製で 2.41 ｇを測る。８は古い扇形の剥片を素材とし、左側縁は素面をそのままにし、右側縁は直線的に整形して、刃部との角は尖らせている。下縁の刃部は調整剥離で作っている。黒曜石製で 2.15 ｇを測る。９は斜めに長い剥片を素材とし、右側面は打面の剥離面を、上縁と左側縁は素面をそのまま利用しており、下縁は刃部としている。黒曜石製で 2.42 ｇを測る。10 は斜めに長い剥片を素材とし、左右両側面は刃潰ししている。左上のつまみ部が欠損しており、下縁は曲刃としている。黒曜石製で 1.63 ｇを測る。11 は斜めに長い剥片を素材とし、左上は古い剥離面をそのまま使用している。右側縁は調整剥離で、直線的に整形し、下縁は曲刃としている。黒曜石製で 3.14 ｇを測る。16 は斜めに長い剥片を素材とし、左上は調整剥離し、刃潰ししている。右側縁と上縁も調整剥離し、上縁は素面をそのまま利用している。下縁は裏面側を大きく剥離し、刃部としている。黒曜石製で 10.64 ｇを測る。17 は粗割り段階の剥片の一辺を刃部としたもので、黒曜石製。3.42 ｇ。26 は縦長剥片を素材としており、上面の素面をそのまま利用し、下端を刃部としている。黒曜石製で、26 は 7.41 ｇを測る。

第 91 図 20 は石核の角から剥ぎ出した三角板状の剥片を使用しており、上縁と右側縁は素面である。左側縁は調整剥離して直線的に成形し、下縁は大きく剥離して刃部を形成している。黒曜石製で 4.3 ｇを測る。第 91 図 21 は掻器で、下半を大きく剥離して湾曲する刃部を形成している。上・右縁は素面を利用しており、左上縁は刃潰しして調整剥離している。黒曜石製で 7.41 ｇを測る。剥離面は風化している。

第 91 図 25・31 は削器である。25 は縦長剥片を素材としており、基部は素面をそのまま利用し、左側縁を刃部としている。下縁部は調整剥離で直線的に成形している。黒曜石製で 4.3 ｇを測る。31 は上左下縁を調整剥離して方形をなし、右側縁面を刃部としている。黒曜石製で 3.87 ｇを測る。

第 91 図 33 は石錐で、先端は欠損している。扇形の素材剥片を使用しており、左上縁は素面、右側縁は刃潰ししている。下縁は両側縁を調整剥離して、細長い刃部を作り出している。黒曜石製で 2.83 ｇを測る。

図版 39 －３～７は写真のみの掲載である。図版 39 －３は楔形石器のような形状の２次加工剥片である。上端面は古い剥離面で、この面を打面として表裏両面を粗割りしている。下縁が尖っているが、刃部はない。黒曜石製で、長さ 2.8 ㎝、幅 2.7 ㎝、厚さ 1.4 ㎝、10.52 ｇを測る。図版 38 －４は三角板状の剥片で、３つの側面のうち１面は素面、１面は古い剥離面であり、もう１面は調整剥離している。三角形状を意識していることから、削器か掻器の目的剥片だろう。剥離面自体が風化しており、弥生時代よりさかのぼるものかもしれない。長さ 4.5 ㎝、幅 3.1 ㎝、厚さ 1.5 ㎝、黒曜石製で 21.44 ｇを測る。図版 39 －５から７は石核で、５・６は素面を残して、素面の周縁部を丸く剥離している。剥片を剥ぐ目的のものではなく、石鏃などの製品を作るためのものだろう。黒曜石製で　５は長さ 4.6 ㎝、幅 3.3 ㎝、厚さ 2.2 ㎝、27.59 ｇ、６は長さ 4.1 ㎝、幅 3.6 ㎝、厚さ 1.7 ㎝、22.71 ｇを測る。図版 39 －７は剥離面が風化しており、一部だけ新しい剥離面があるので、試し打ちした石材であろう。長さ 4.5 ㎝、幅 4.5 ㎝、厚さ 3.7 ㎝、黒曜石製で 51.2 ｇを測る。

第 93 図８は検出面から出土したビーズ玉で、色調はコバルトブルーで 0.07 ｇを測る。このほか、馬の歯（図版 39）が出土したが、混入品だろう。

２号流路跡（図版 34、第 64・74 図）

調査区東部に位置し、北東から南西方向に走る。３号流路跡を切っており、18・19 号溝状遺構に南側はクリークに切られている。30cm 程と浅く、幅広だが、中央部に掘り直した溝状の痕跡があり、そこは深さ 120cｍ前後で、北東に下がっており、西側は浅い、埋土は砂質土で流水による堆積と見られ、この掘り直し状の部分以外は包含層状に広く堆積している。包含層状の流路の下からいくつかのピットや小溝が検出されたが、埋土は砂質土で、小溝は石を引きずった跡のようだった。灰色埋土のピットに切られる。

出土遺物（図版 36 ～ 39、第 89 ～ 93 図）

第 89 図１～ 10 は壺である。１は直立気味に立ち上がる口縁で、口唇部は平坦面をもつ。２は頸部に屈曲がなくすぼまる器形で、器面は摩滅していないが白色粒子と金雲母が器面に表れている。胎土が特徴的で搬入品である。３は精良なつくりでハケは丁寧に施され、混入物が少なく特徴的な胎土であることから搬入品か。４は口縁部に円形浮文が２つづつ貼り付く壺で、丁寧にハケ調整されている。５から７は頸部に櫛描文が施され、角閃石と金雲母を多く含む特徴的な胎土から搬入品であろう。８は複合口縁壺で、口縁屈曲部に刻み目がある。器面には摩滅しており、混入物が多い。９・10 はレンズ状の底部で、内外に煮沸使用による変色はない。

第 90 図１・２は甕の口縁部で、１は頸部に刻み目突帯が貼り付けされる甕で、内面が赤橙色である。２は中期前葉である。第 90 図３から 10 は甕の底部である。３は粘土板状の厚い底部で、外面はナデ調整のみであることから前期のものだろう。４は中型甕の底部であろう。５から７は中期初頭のもので。８から 10 は高台付甕で、外面は橙色化しており、２次焼成を受けている。８はハケの工具端部が残る。第 90 図 11 から 13 は台付鉢で、11・12 は細長いコップ形の体部だろう。11 の内面は丁寧なハケ軟質で、精良な胎土である。12 は器壁が薄く、内面には変色なし。13 は器壁が厚く、大型の鉢がついたものと思われる。14 はミニチュア器種の底部であり、中期初頭の甕か台付鉢だろう。第 90 図 15 は蓋で、変色なし。第 90 図 15・16 は高杯である。15 は豊前地方に多い高杯で、内外ミガキが見られる。搬入品の可能性はあるが、胎土に大きな差はない。外面は橙色だが、内面は黄灰色であることから、倒立して焼成したものと思われる。16 は内外器面が摩滅しており、調整はわからない。第 90 図 20 から 22 は大型甕で、20 は中期の底部で、胎土には白色粒子が多い。21 はやや膨らむ平底で、レンズ状まではいたっていない。22 は内外丁寧なハケ調整されており、茶橙色の特徴的な胎土をもつ。

第 91 図 15 は掻器で、上端面は水平に調整剥離し、右側縁の素面の傾きに合わせて左側縁を斜めに調整剥離し、刃潰ししている。下縁は水平に両面から加工しているが、刃部は片刃にしている。左側縁と下縁の角は尖らせており、黒曜石製で 7.24 ｇを測る。第 92 図７は完形の石庖丁で、輝緑凝灰岩製である。左側縁が細く、右側縁が幅広である。刃こぼれは右側にあり、このことから左側を上にして使用したものと考えられる。42.92 ｇを測る。第 92 図８は磨製石斧の刃部片を打ち欠いて、鋭利な角をつくり、彫器にしたものである。凝灰岩製で、82.27 ｇを測る。第 92 図 11 は上面と側面と下端面の３面使用しており、砂岩製であることから、中砥。798 ｇを測る。第 93 図３は凹石で、凝灰岩製である。側面は欠損で、491 ｇを測る。

図版 39 －８・９は写真のみの掲載である。８は石核で、素面を一部に残して、全体を丸く打ち欠いている。長さ 2.7 ㎝、幅 2.6 ㎝、厚さ 1.3 ㎝、黒曜石製で 12.05 ｇを測る。９は皮剥ぎ段階の剥片で、１面のみ剥離面で、他は素面と古い剥離面である。剥離面にも新旧があり、新しい剥離面は欠損か、偶発的な剥離のようだ。このことから弥生時代を遡る可能性がある。長さ 4.6 ㎝、幅 3.6 ㎝、厚さ 1.7 ㎝、黒曜石製で 23.15 ｇを測る。

３号流路跡（第 64 図）

調査区東北部に位置し、西端部でやや南に湾曲し、狭く、浅くなっているので、南西端は削られて失われていると考えられる。東部は２号流路に切られている。幅 30 ～ 50cｍ前後で、南側は上位

を削られているものと思われる。深さ 20 ～ 40cm 前後で、南に下がっている。

（８）ピット

ピット 63 は床面に炭が広がるが、焼土はない。調査区外の北に広がる掘立柱建物跡の柱穴の可能性がある。ピット 201 は調査区中央部南端に位置し、当初、床面しか残らない竪穴住居跡の炉と考えていたが、明確な主柱穴を伴わないので、床面に炭化物が広がるピットとして報告する。ピット 202 は調査区東端部にあり、２号流路跡の上面から検出された。焼け面が底面にわずかに残っていた。床面のみの竪穴住居跡の炉跡とするには根拠がないので、ここではピットとして報告する。

出土遺物（図版 37・38、第 91・92 図）

第 91 図 24 はピット３出土の削器で、先端は欠損している。左側縁を湾曲する刃部とし、上位は刃潰ししている。上端面は素面で、右側縁は直線的で、一部に尖らせている。右側縁は背面だが、刃潰しはしていない。黒曜石製で 0.90 ｇを測る。第 91 図６はピット 31 出土の掻器で、斜に長い剥片を素材とし、大きく打ち欠いた部分を刃部として、左側縁との角を尖らせる。右側縁は素面を利用し、左側縁と上縁は刃潰ししていないが、刃部は形成していない。黒曜石製で 3.34 ｇを測る。第 91 図９はピット 63 出土の掻器で、９はつまみつきの横型で、右側縁は欠損している。上縁は水平に調整剥離し、下縁は大きく打ち欠いた部分を刃部とする。左側縁は湾曲するよう調整して刃潰しし、端部は素面を利用している。黒曜石製で 2.42 ｇを測る。第 91 図 24 はピット 63 出土の削器で、両側縁と上縁は調整剥離し、下縁は剥離縁を利用して刃部としている。内湾する刃縁であることから、削器であるが、刃縁を形成する調整剥離がないことから、軟らかいものを対象としたものだろう。黒曜石製で 3.87 ｇを測る。第 91 図 27 はピット 74 出土の削器で、両側縁と上縁は調整剥離し、下縁は剥離縁を利用して刃部としている。内湾する刃縁であることから、削器であるが、刃縁を形成する調整剥離がないことから、軟らかいものを対象としたものだろう。黒曜石製で 6.40 ｇを測る。第 92 図３はピット 111 出土の扁平片刃石斧の側縁片で、頁岩製で 4.05 ｇを測る。

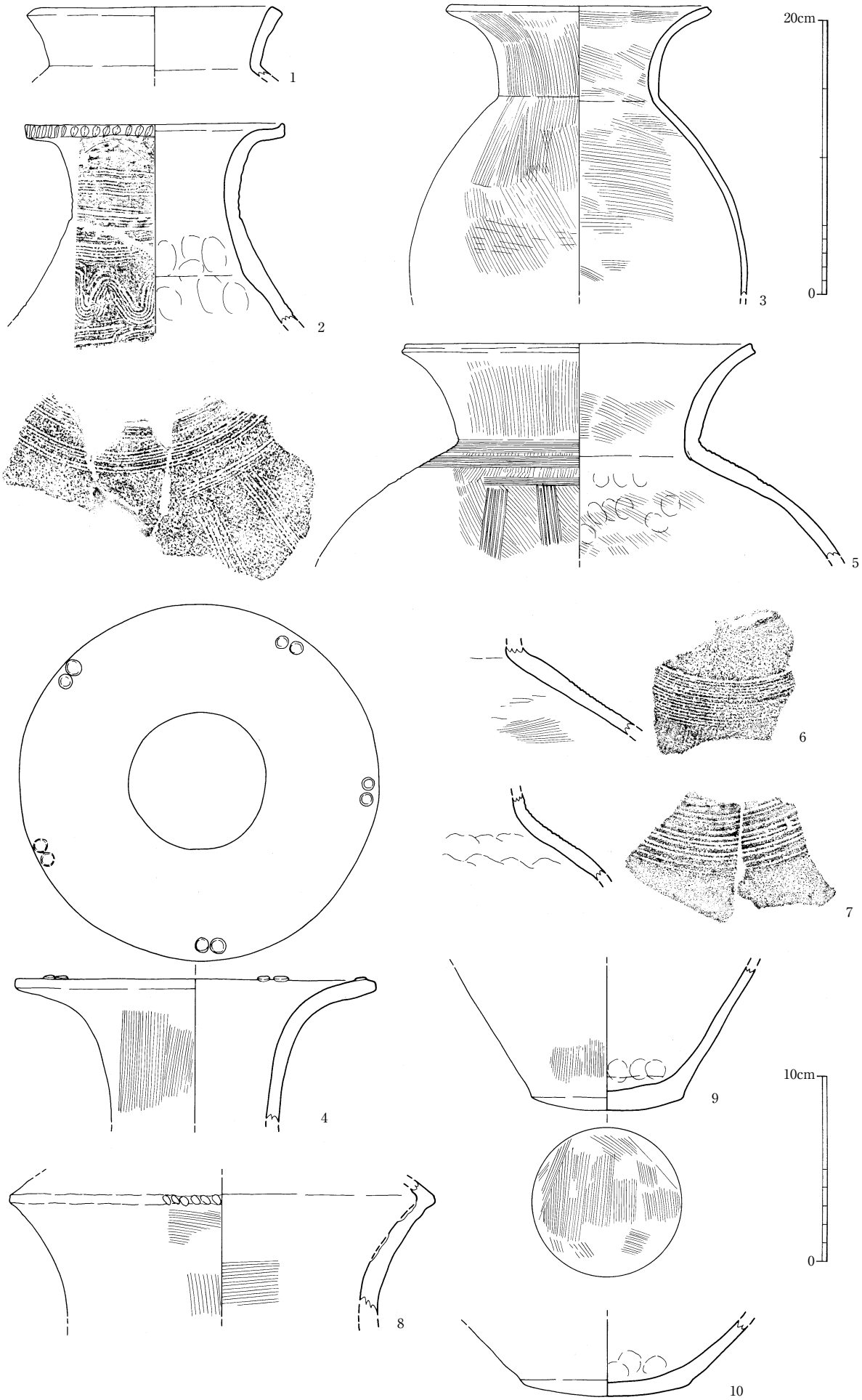
（９）その他の出土遺物

包含層出土遺物（図版 37、第 91 図）

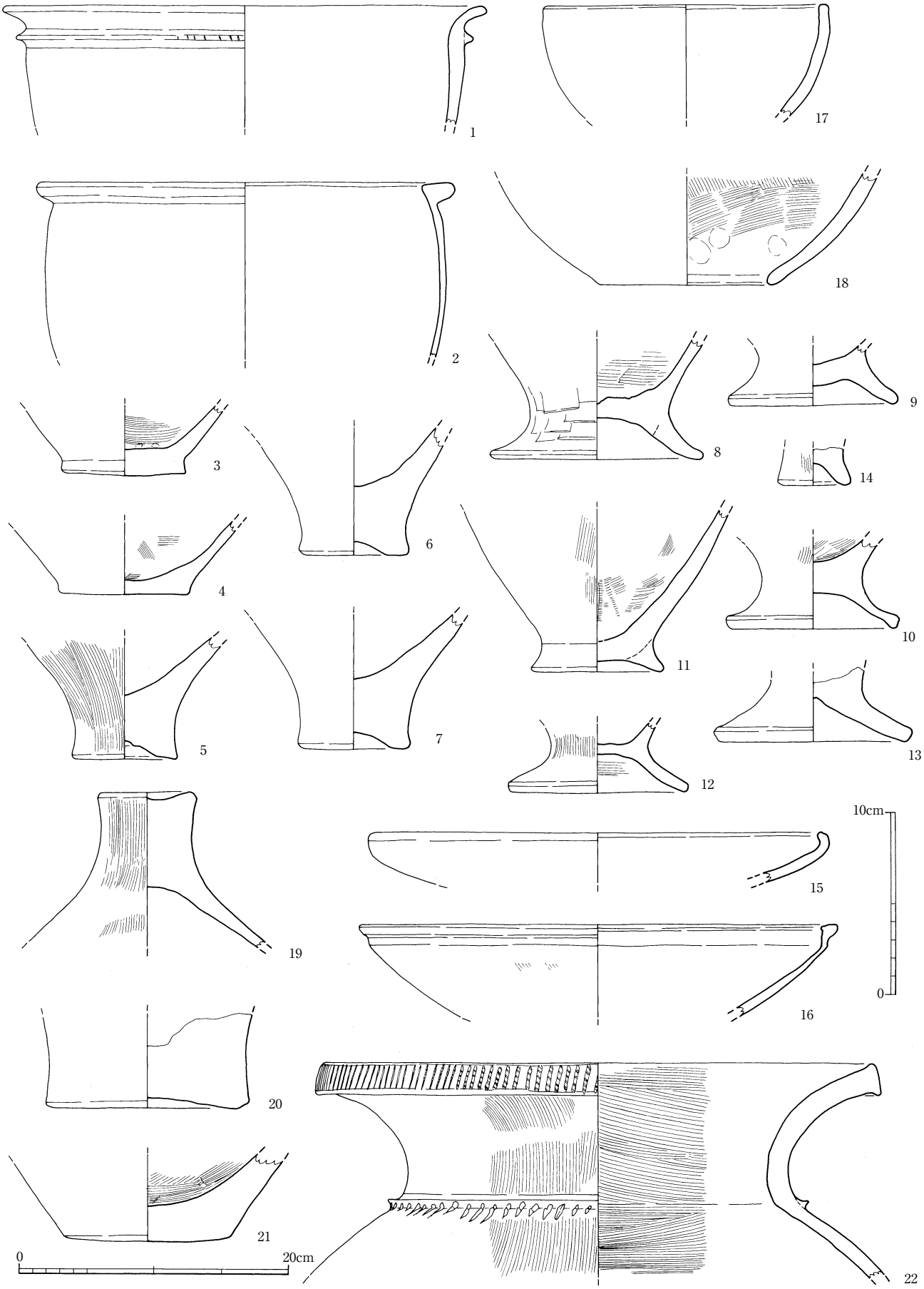
第 91 図 14 は東区包含層出土の掻器で、両側縁は同じ角度に整形しており、右上につまみ部をつくるように調整剥離している、下縁は大きい剥離縁を利用して刃部としている。黒曜石製で 4.48 ｇを測る。

撹乱出土遺物（図版 37・38、第 91 図）

第 91 図４・18 は掻器で、４は扇形の剥片を利用し、上部を平らに調整して、台形に整えている。黒曜石製で、2.30 ｇを測る。18 は右側縁は素面を利用し、左側縁は右側縁の上部と同じ角度に整形しており、左上につまみ部をつくっている。下縁は大きい剥離縁を利用して刃部としている。黒曜石製で 5.10 ｇを測る。図版 39 － 10 は写真のみの掲載である。上面を打面にして、表裏面を粗割りし、下縁を尖らせている。このことからスクレーパーの未製品だろう。サヌカイト製で、長さ 8.2 ㎝、幅 5.5 ㎝、厚さ 2.0 ㎝、71.76 ｇを測る。



第 89 図　２号流路出土土器実測図１（３は 1/4、他は 1/3）



第 90 図　　2 号流路出土土器実測図 2（1・2・15・16・22 は 1/4、他は 1/3）

３　小結

３次調査２区からは、竪穴住居跡２基、土坑８基、石蓋土坑墓１基、波板状遺構 11 基、溝状遺構 23 条、流路跡３条が検出された。遺物としては弥生時代前期から鎌倉時代のものが見られたが、流路に混入するものが多く、遺構に伴うものとしては中期前半、後期前葉から古墳時代初頭、鎌時代のものである。このうち、注目される遺構と遺物について説明を補足したい。また、溝状遺構や流路については、５次調査までの遺構の時期別変遷の中で言及したい。

（１）　１号墓と１号土坑について

本調査区で検出された１号墓は墓としたが、蓋石の下には掘り込みがなく、床面に直接蓋石が置かれたような状態であった。しかし、明らかに土坑の中に２枚の板石が置かれており、廃棄されたとも考えられない。石蓋土坑墓は弥生時代中～後期の埋葬施設であるが、この時期の墓葬は集団墓を形成するはずだが、周囲には他に墓がまったくない。こうした点から、一般的な墓ではない。

１号墓の北西に検出された１号土坑は、土坑の中心にミニチュアの甕が正置して埋設されていた。甕の内部にも土坑の中からも特に変わったものは見られなかった。単に甕を埋設するには土坑の規模は大きすぎ、また土坑を掘って、それを埋めた上から甕を埋設するのも不自然である。また、この甕が単に手捏ねのミニチュア土器ではなく、精巧に中型甕を模倣したものであることも、この遺構の特異さを示している。さらに１号土坑の西に位置する２号土坑は、方形の炭化物の広がりがある遺構で、竪穴住居跡の炉ではない。

このように、調査区西部には特異な遺構が集中しており、同時期に存在する１号溝状遺構は、この特異な遺構の集中部を区画するように、地形を無視して南北方向に走っている。こうしたことから、調査区西部は祭祀的な空間であったと考えられる。類例を見てみよう。まず、１号墓に近いものとして、兵庫県神戸市住吉宮町遺跡第 17 次調査（注１）検出の８号墳を挙げたい。

５世紀の群集墳の中の１つで、周溝外径 2.4 ｍという小さな古墳である。その主体部は、２枚の扁平な川原石を合掌型に組んだ中に瑳を正置するという特異なものであった。副葬品であるにしても他に墓坑もなく、組んだ川原石の中心にあったので、やはりこの瑳を墓の主体部と考えざるをえない。瑳は口径が９㎝しかなく、内部に納められる物があるとすれば、かなり小さいものとなる。もし遺体を納るとすれば、遺体の一部かあるいは未成熟で出産された嬰児と考えられる。成人の遺体の一部を納めるにしても、成人の墓にするには墳丘自体が小さすぎるので、後者の可能性が高い。山門牛島遺跡の場合は集団墓地に入らないので、この事例をそのまま適用できないが、こうした特殊な事例の墓が存在することを示すものである。

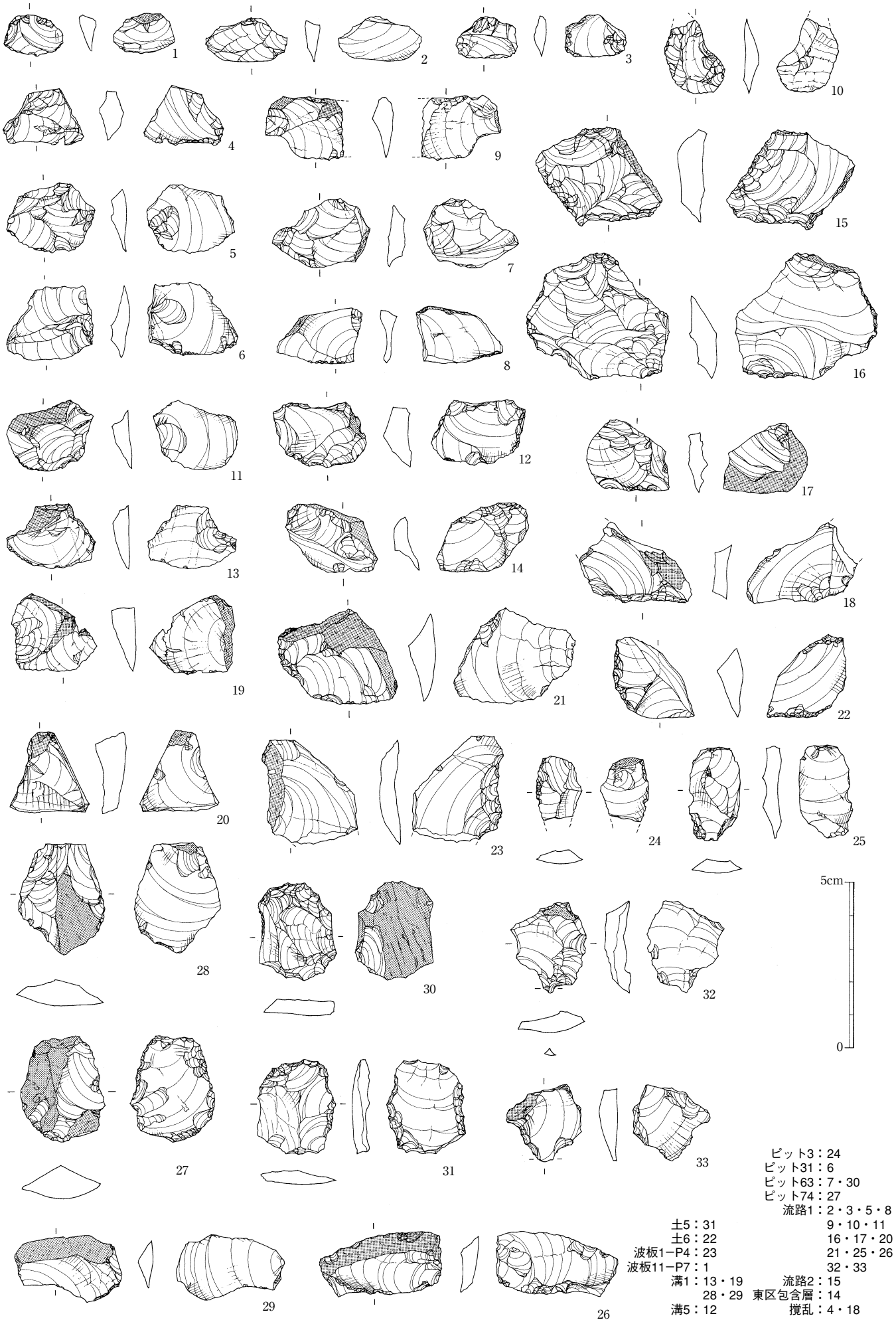
次に１号土坑の完形の土器を埋設する事例として、筑紫野市以来尺遺跡（注２）を挙げる。完形の鉢や丸底壺、器台が横倒しに埋納されたピットが５基あり、このうちピット 300 に埋納された甕は甕棺を精巧に模倣している。以来尺遺跡には神殿のような大型掘立柱建物跡があるので、やはり祭祀的な遺構であろう。

こうした祭祀的な遺構の集中する調査区西部には、１基の竪穴住居跡があるが、これより東には方形住居は存在しない。つまり、集落の端部に祭祀的な空間を設けているのである。

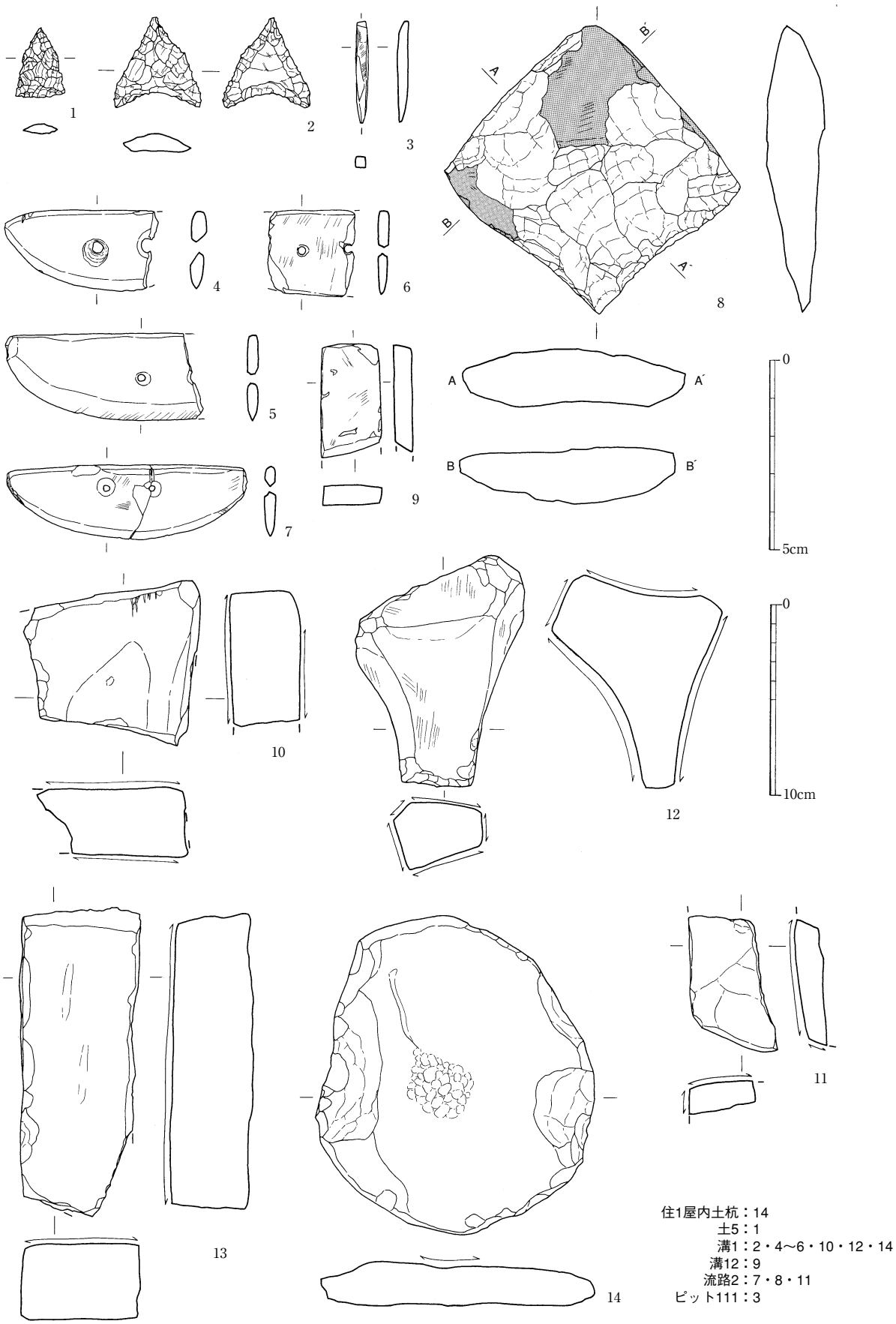
（２）　波板状遺構

本調査区からは 13 条の波板状遺構が検出されたが、東西方向に走り、調査区の南北幅内に広がっている。南端部以南は波板状遺構は存在せず、北には続きがある可能性もある。

波板状遺構の各ピットの床面には小礫が敷かれることはない。一部に硬化面が見られたが、これは砂質土中の鉄分が錆びたものであった。１つの波板状遺構は多様な形態のピットから成っており、その間隔も統一性がない。走る方向は直線ではなく、北に湾曲するものが多い。こららの波板状遺構は切り合うのものがほとんどないので、前後関係はわからないが、数基が同時併存するのではなく、



第91図　出土石器実測図1（2/3）

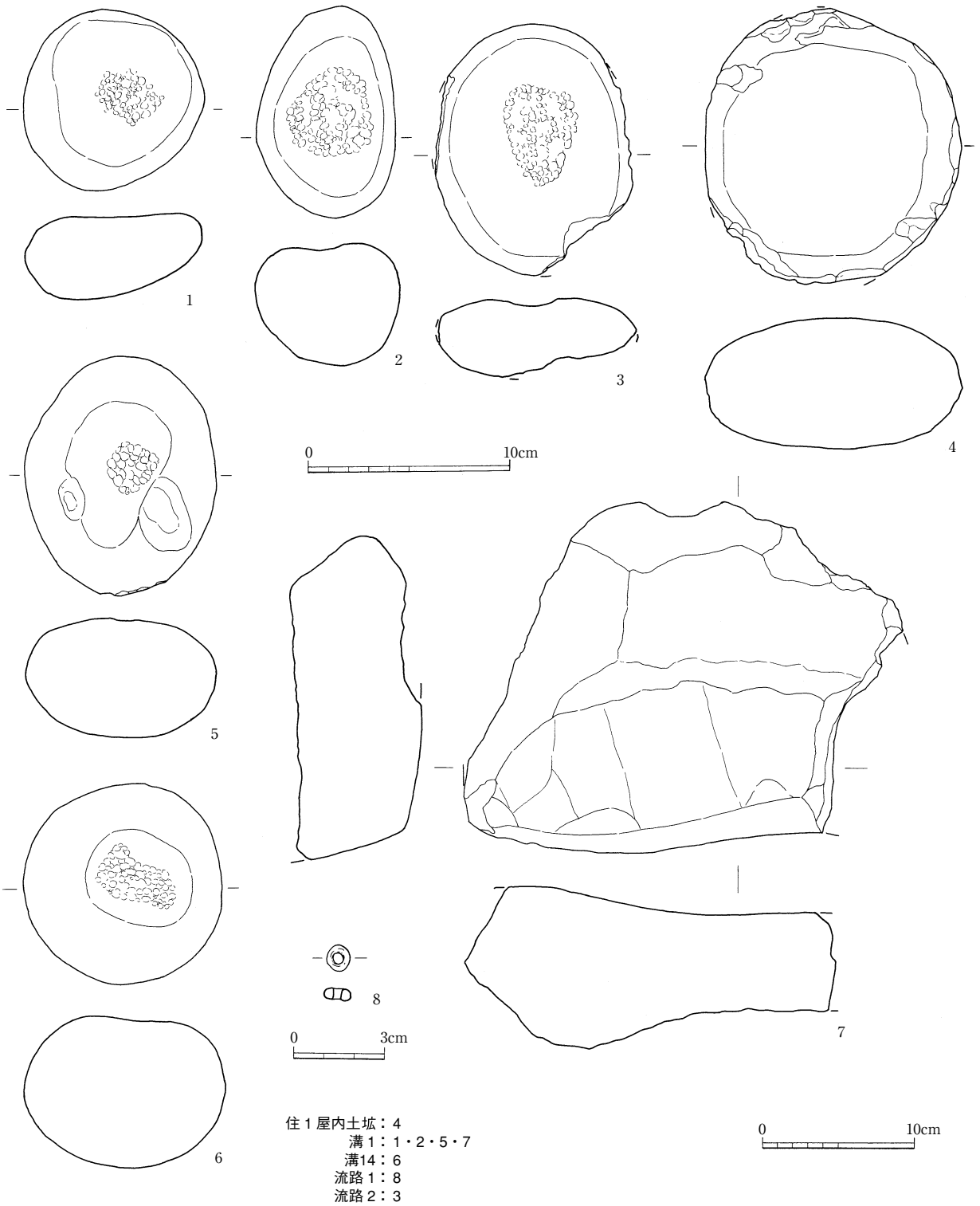


第 92 図　出土石器実測図２（１・２は 2/3、他は 1/3）

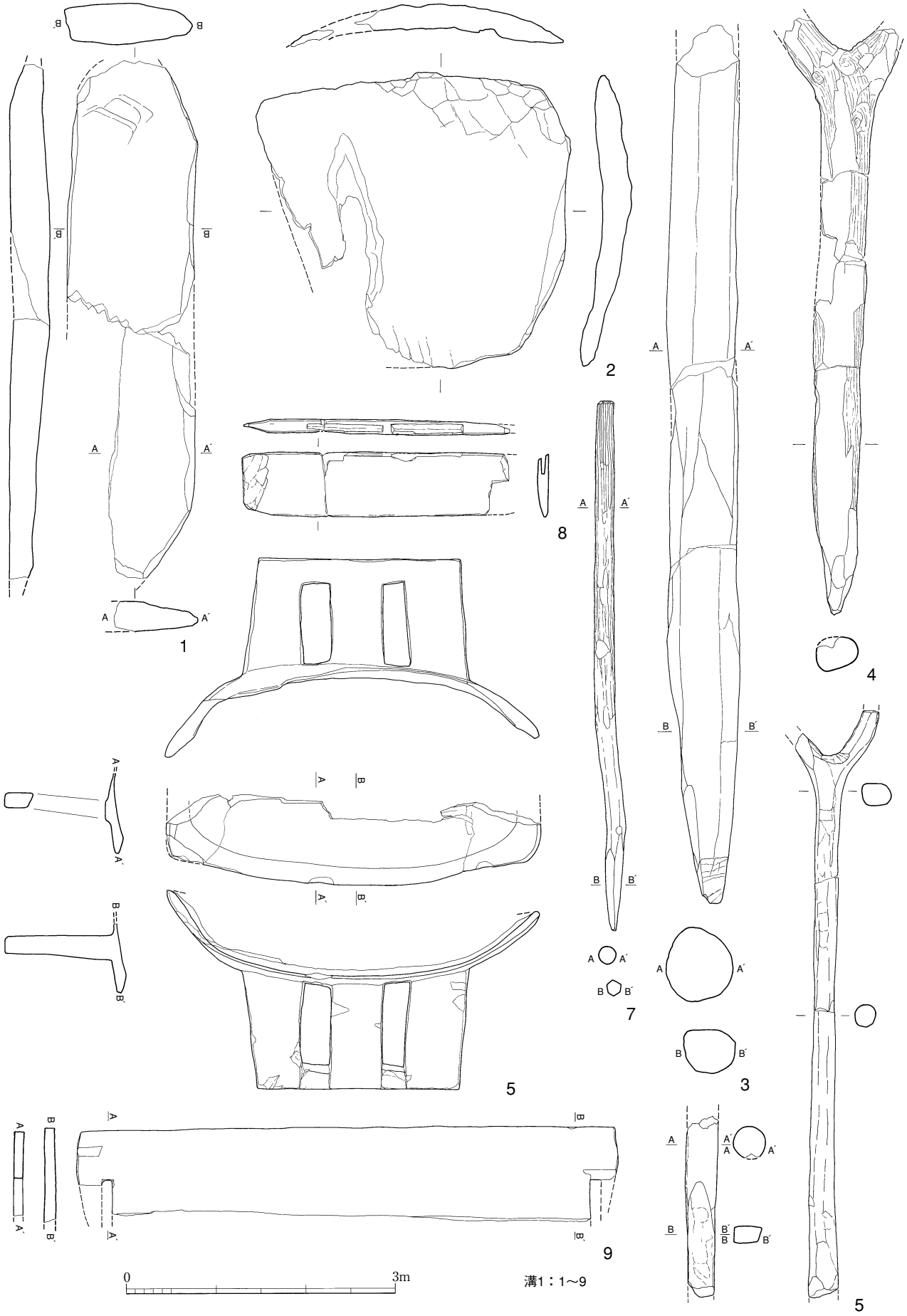
何度も作り直されたのであろう。

また、１号流路の周辺にのみ存在しているが、東西両側は削られて失われているのではなく、本来この部分にしか存在しないものと思われる。

ピットからはほとんど遺物が出土せず、ほとんどがローリングを受けた弥生中期の土器の小片で



第 93 図　出土石器実測図３（７は 1/4、８は 1/1、他は 1/3）

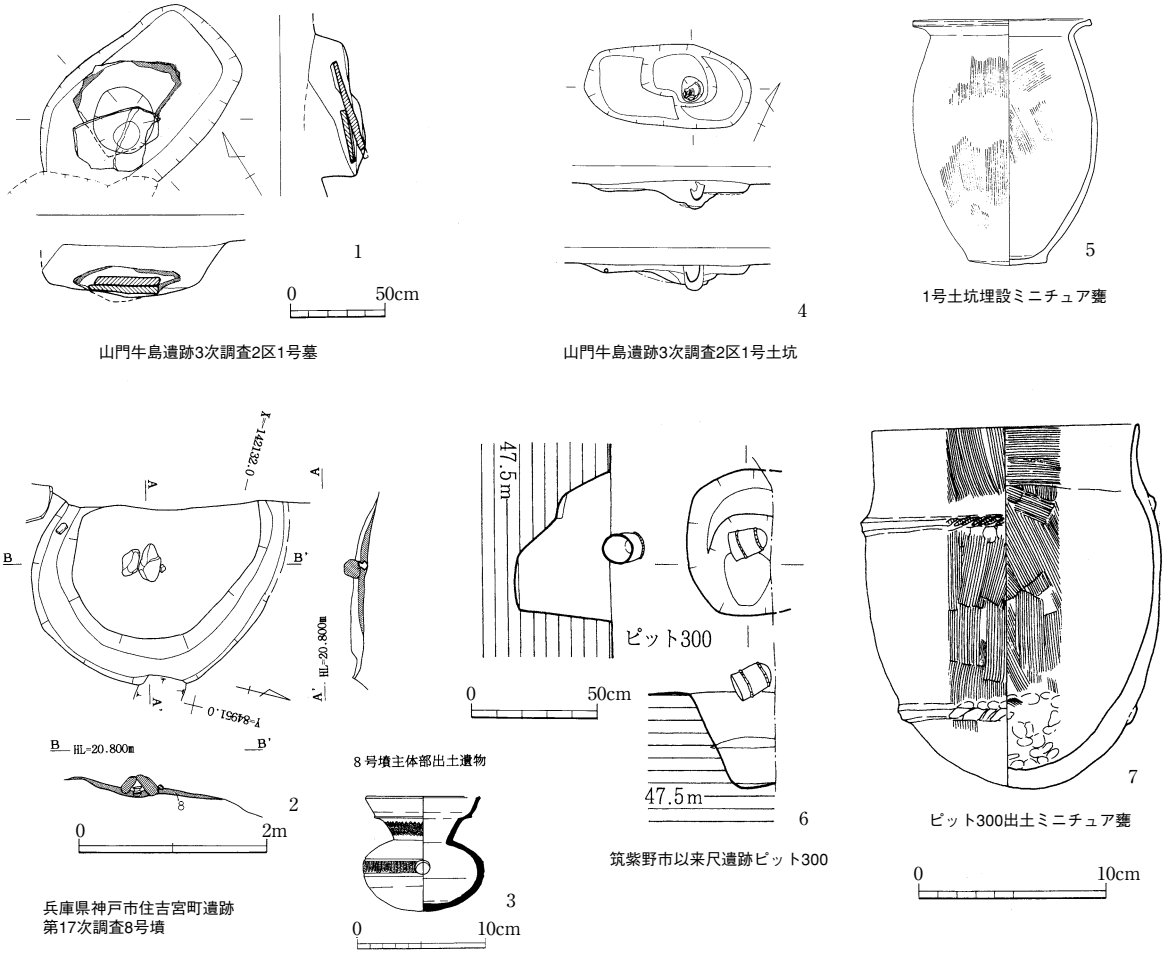


第 94 図　出土木製品実測図（1/ 6）

あることから、遺構の時期は特定しにくい。須恵器片が入るピットがあるので、奈良時代以降のものだろう。

こうした特徴から、これらの波板状遺構の存在理由を考察してみよう。調査区内はほ場整備を受けているので検出面はほぼ平坦だが、１号流路から１号溝状遺構の間が基盤層の砂質分が強いことから､微高地の中でも低かったものと思われる｡そのために１号流路も流れ込んだのだろう｡したがって、この窪地は湿地であり、その軟弱地盤を通るための補強施設であったのだろう。同様な例はみやま市小川柳ノ内遺跡５区（注３）に見ることができ、溝状遺構の埋没後、その場所を横断する位置に波板状遺構が設置されている。

波板状遺構は道路遺構に関係する施設であることは以前から指摘されてきたことだが、これが道路遺構だとすると、同じ場所に作り直されずに南北に場所を変えているのはなぜだろうか。これは計画的に建設された「道路」ではなく、自然発生的な「通路」であり、道を付け替えられるだけの余裕があることから土地の制約もなかったからだろう。おそらく、官道に繋がる支道のような幹線道路ではなく、農道のようなものだったのではないだろうか。そう考えると、２・３号流路付近に



第 95 図　山門牛島遺跡３次調査２区祭祀遺構と類例資料
（１は 1/40、２・４は 1/80、３・５は 1/6、６は 1/30、７は 1/4）

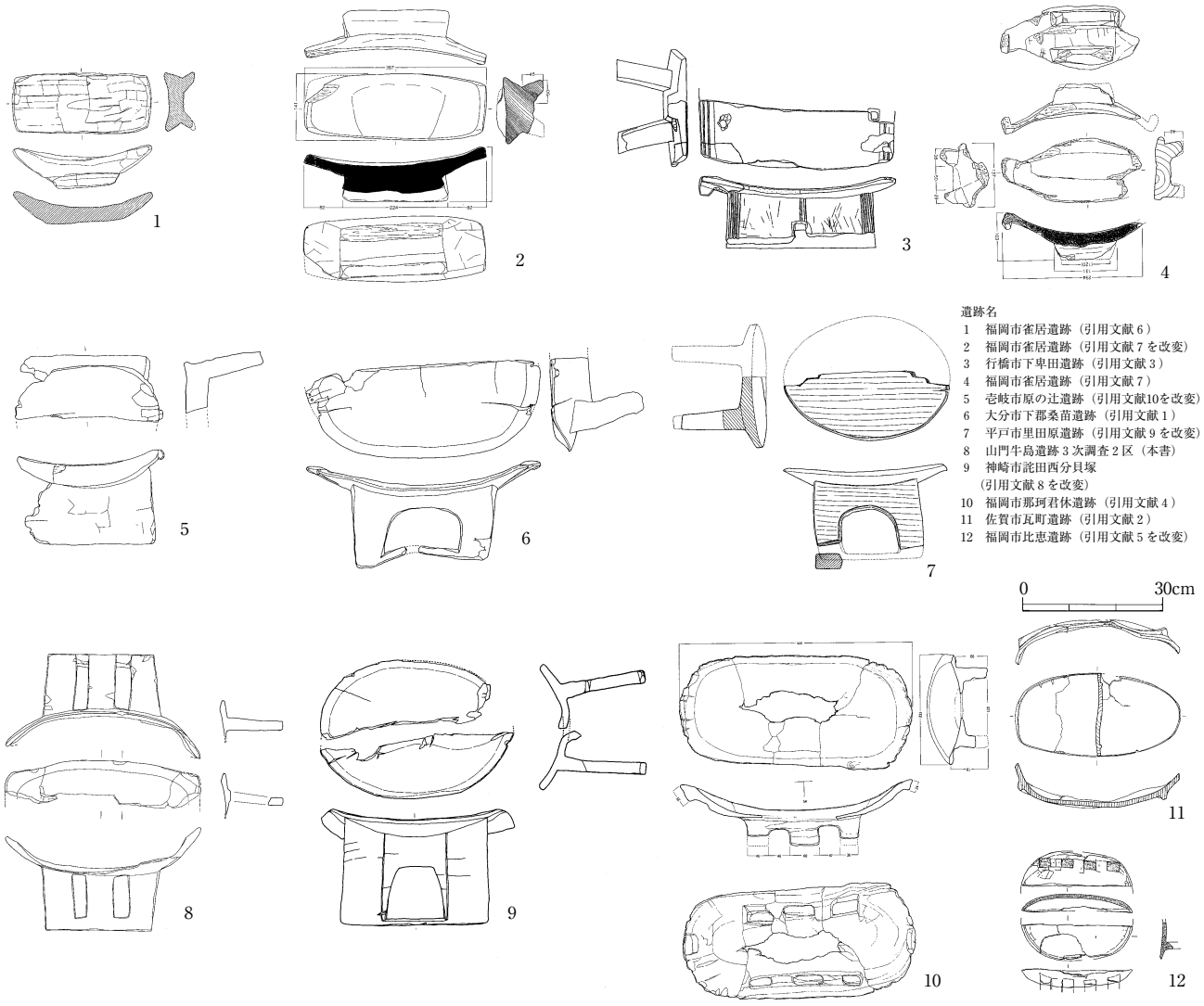
波板状遺構がない理由は、２・３号流路付近が条里区画内に入ることから、波板状遺構が設置された時期には水田地帯であったため通路は作られなかったと考えられる。

（３） 木製盤

１号溝状遺構からは、方形の透孔が２つ空いた脚が２つ付く木製品が出土している。この２脚のつく器種については、「腰掛け」、「脚付盤」、「案」、「枕」とさまざまな呼称が与えられている。しかしながら、名称に対する定義はあるものの、近似する器形については、それぞれ別の名称を与えられるだけの形態上の差異が明確にされておらず、類似する器形に対して別の器種名が付けられるといった混乱が見られる。

これは、この器種の木製品については資料的蓄積が少なく、農具に比べて研究も進んでおらず、統一的な分類基準が示されなかったためである。ここでは主に、北部九州から出土した弥生時代の類例を集めた上で、分類基準を検討したい。

まず、「案」は机の意味であることから、扁平で平坦であるべきである。掲載した類例は、長辺の湾曲が大きいので、机としても使いにくい。弥生時代には、扁平な板を組み合わせた「案」の出土



第 96 図　弥生時代北部九州の腰掛け・脚付盤 (1/15)

例があるので、湾曲しているものを「案」とするべきではないだろう。

また、「枕」については、古墳時代に石枕があることから、枕を使用した可能性はあるが、枕として使用したことを示す証拠がないためここでは除外する。

では「腰掛け」と「脚付盤」のどちらかとするべきであるが、両者の形態的な差異は小さい。「盤」は平たい鉢であり、「槽」のように深さは必要ではないので、縁が低いという要素は判別材料にならない。また、佐賀市瓦町遺跡出土の「台付盤」（第 96 図 11）のように、両側縁が大きく上に反り上がるものが存在しており、両側縁が反り上がる形態をもって「腰掛け」と「盤」を判別することもできない。

最大の分類基準は「腰掛け」としての機能を果たせるかという点にあり、脚の太さと杯部の厚さが人体の体重を支えるのに十分でなければならない。どの程度の法量のものであれば十分かという検証はしていないが、この点から各部位の法量を見てみると、脚の厚さが５㎝前後で、杯部も５㎝ほどの厚さがあり、長辺 30 ～ 40 ㎝、短辺 20 ～ 30 ㎝ほどの法量をもつグループと、逆に、脚部や杯部に厚みがなく、脚部の透かし孔が多く入るグループに二分することができた。したがって、前者を「腰掛け」とし、後者を「脚付盤」とするべきだろう。この基準から、本遺跡から出土した脚付器種は「脚付盤」とする。

（４） 弥生後期から古墳時代初頭の土器相

近年、肥後北部での資料が増加しており、南筑後地域の土器を比較検討できるようになった。

１号溝状遺構からは弥生後期前葉から中葉の土器が大量に出土した。掲載できたのはこのうちの一部であるが、土器相の傾向を見ることはできる。

壺は、筑前地域の複合口縁壺はわずかしかなく、単口縁壺が主体を占める。これは南筑後の特徴で、肥前地方とも共通している。装飾としては、肩部に櫛描文と櫛描波状文の入るものと、列点文の入るものがあるが、前者は肥後北部、後者は肥前に多く見られる。小型無頸壺では内傾する体部で、算盤形のような胴部をもつものがあるが、これは肥前地方に特徴的な器形である。

一方、甕では、脚付甕は甕の底部の中では少数派であるが、一定量存在している。脚付甕は肥後地方の特徴であり、胎土に差異は見られないので、単に搬入されたものではないだろう。ジョッキ形土器はあるが、肥後中部に特徴的な単口縁の壺や肥後南部の免田式の重弧文壺は見られず、南方からの土器と明らかにわかるものは見られない。これと逆に、豊前地方に見られる口縁部に丸みをもつ高杯や、近畿地方に特徴的な壺か器台の口縁部片など、瀬戸内から玄界灘を経由したと見られるものが見られ、交易は肥前の沿岸を経由した西方の方がより活発だったものと思われる。

以上、３次調査２区内で検出された遺構や出土した遺物について考察を加えたが、時期的な変遷については、２次から５次調査全体のまとめの章で記述する。

注

１　神戸市教育委員会 1998『住吉宮町遺跡（第 17 次・第 18 次調査）』

２　福岡県教育委員会 1997『一般国道３号筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第４集　以来尺遺跡Ⅰ』

３　福岡県教育委員会 2008『九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第８集　小川柳ノ内遺跡Ⅱ』

参考文献

埋蔵文化財研究会・第 39 回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1996『第 39 回埋蔵文化財研究集会　古代の木製食器』

奈良文化財研究所 1992『木器集成図録－近畿原始編－』奈良文化財研究所史料第 36 冊

蒲原宏行 1991「古墳時代初頭前後の土器編年－佐賀平野の場合－」『調査研究書〔第 16 集〕』
佐賀県立博物館・佐賀県立美術館

熊本県教育委員会 1992『うてな遺跡』熊本県文化財調査報告第 121 集

熊本県菊池市教育委員会 2006『小野崎遺跡』菊池市文化財調査報告第１集

引用文献

1　大分県教育委員会 1992『下郡桑苗遺跡㈱』大分県文化財調査報告書第 89 輯
2　佐賀市教育委員会 1992『瓦町遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 41 集
3　下稗田遺跡調査指導委員会 1985『下稗田遺跡』
4　福岡市教育委員会 1987『那珂久平遺跡㈱』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 163 集
5　福岡市教育委員会 1991『比恵遺跡群（10)』福岡市文化財調査報告書第 255 集
6　福岡市教育委員会 1995『福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告　雀居３』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 407 集
7　福岡市教育委員会 2003『福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告　雀居８』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 747 集
8　千代田町教育委員会 1983『詫田西分貝塚』千代田町文化財調査報告書第２集
9　長崎県教育委員会 1984『里田原遺跡略報Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第 18 集
10　長崎県教育委員会 1998『原の辻遺跡』原の辻調査報告書第 18 集

4　4次調査

1　調査の概要

山門牛島遺跡4次調査地点は、みやま市瀬高町本吉2115-1、2115-2に所在し、調査面積は約1,200㎡。指定文化財を多数所有する清水寺が所在する筑肥山地の清水山麓から500m程西側の、標高7m前後の低平な沖積地上に立地する。周囲は、いわゆるクリーク地帯の縁辺部にあたり、現在でも多くの水路が縦横に走る。また、現地と清水山との間には、山麓に沿うかたちで九州自動車道が南北に横たわる。

発掘調査は、柳川土木事務所と協議のうえ、平成20年1月25日から重機による表土除去作業を開始し、2月18日にユニットハウス・発掘機材等を搬入、2月20日から作業員による掘削作業を始めた。途中、3月28日にラジコンヘリによる空中写真撮影を実施して一旦作業を中断している。再開したのは約3箇月半後の7月10日で、8月5日までに現地でのすべての作業を終了して、8日に機材一式を撤収した。

発掘調査作業風景

空中写真撮影作業風景

2　遺構と遺物

調査地点周辺は、現在まで水田として利用されてきており、清水山の山裾にあたるが標高は極めて低い。現在ではコンクリート擁壁で囲まれており、かつての姿は留めていないもののクリークが縦横に張り巡らされている、クリーク地帯の縁辺部にあたる。

調査の結果、遺構面は現在の地表面から30～50㎝程の深さで検出し、標高7.2～7.3mの間のわずか数㎝程度の高低差しかない。

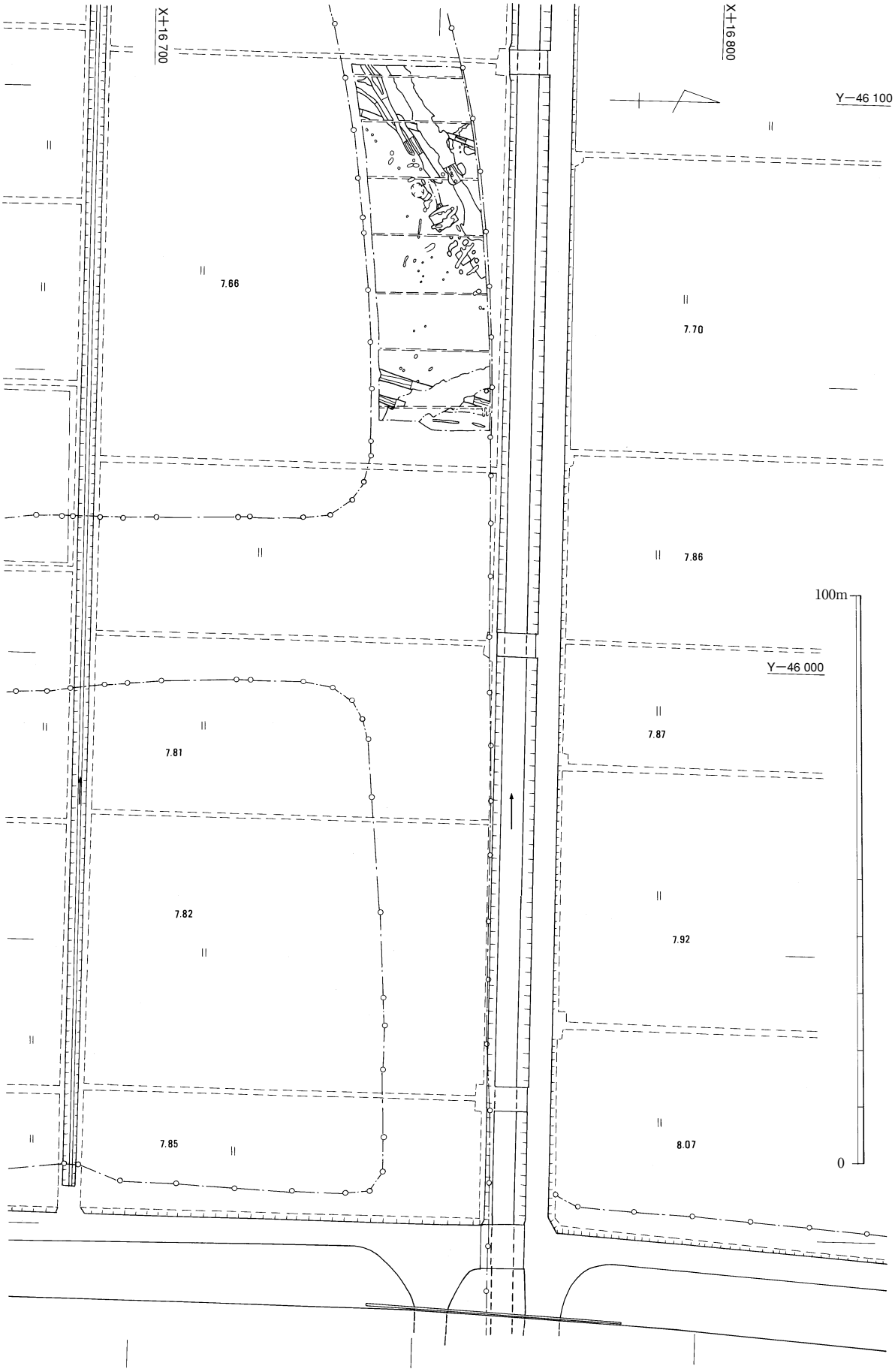
検出した主な遺構は、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝状遺構、土坑等である。

（1）　掘立柱建物跡

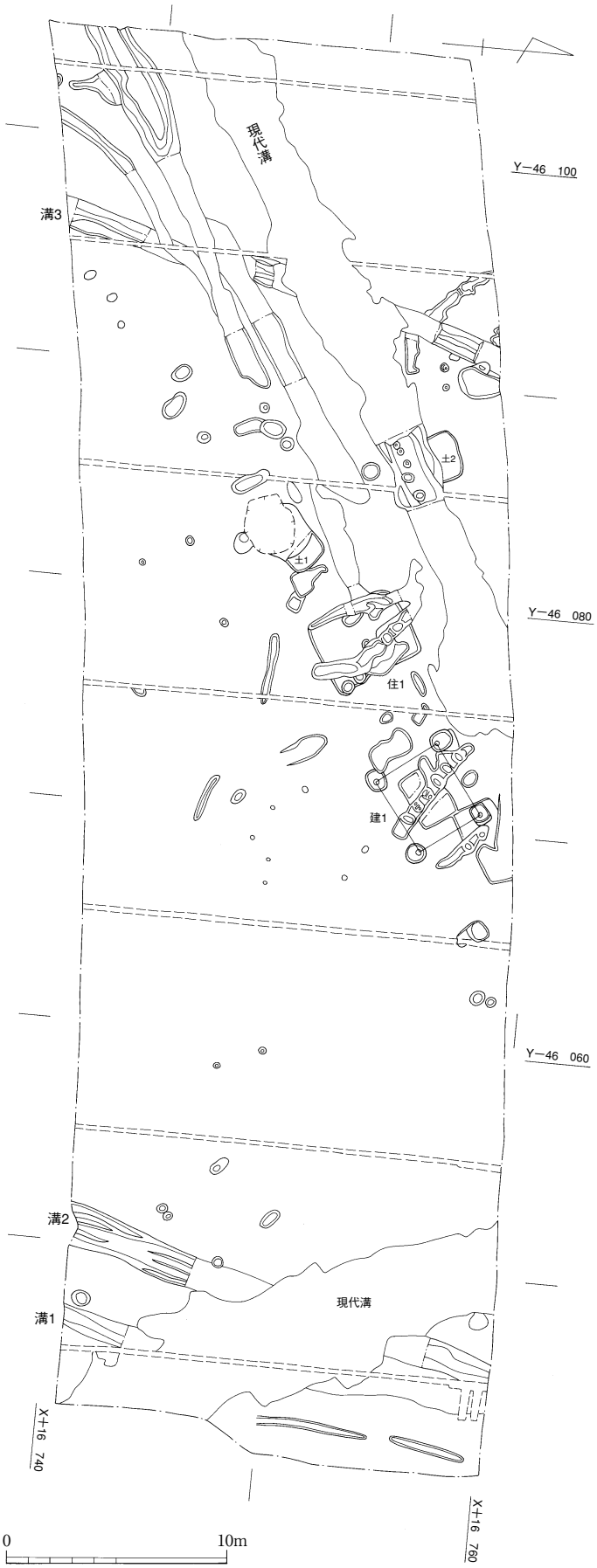
1号掘立柱建物跡（図版42、第99図）

調査区のほぼ中央部で検出した。1間×1間であるが、建物の規模に対して柱掘形、柱痕跡が大きく、また建物内に竪穴状の土坑を持つものと考えられる。建物の規模は3.75×3.25mで、主軸はN－54°－E。柱掘形は、東隅のものが平面円形に近いのを除いて、平面長方形あるいは隅丸長方形で、北隅のもので90×70㎝、深さは30～50㎝程が残存する。柱痕跡から判断して、柱の太さは約20㎝である。

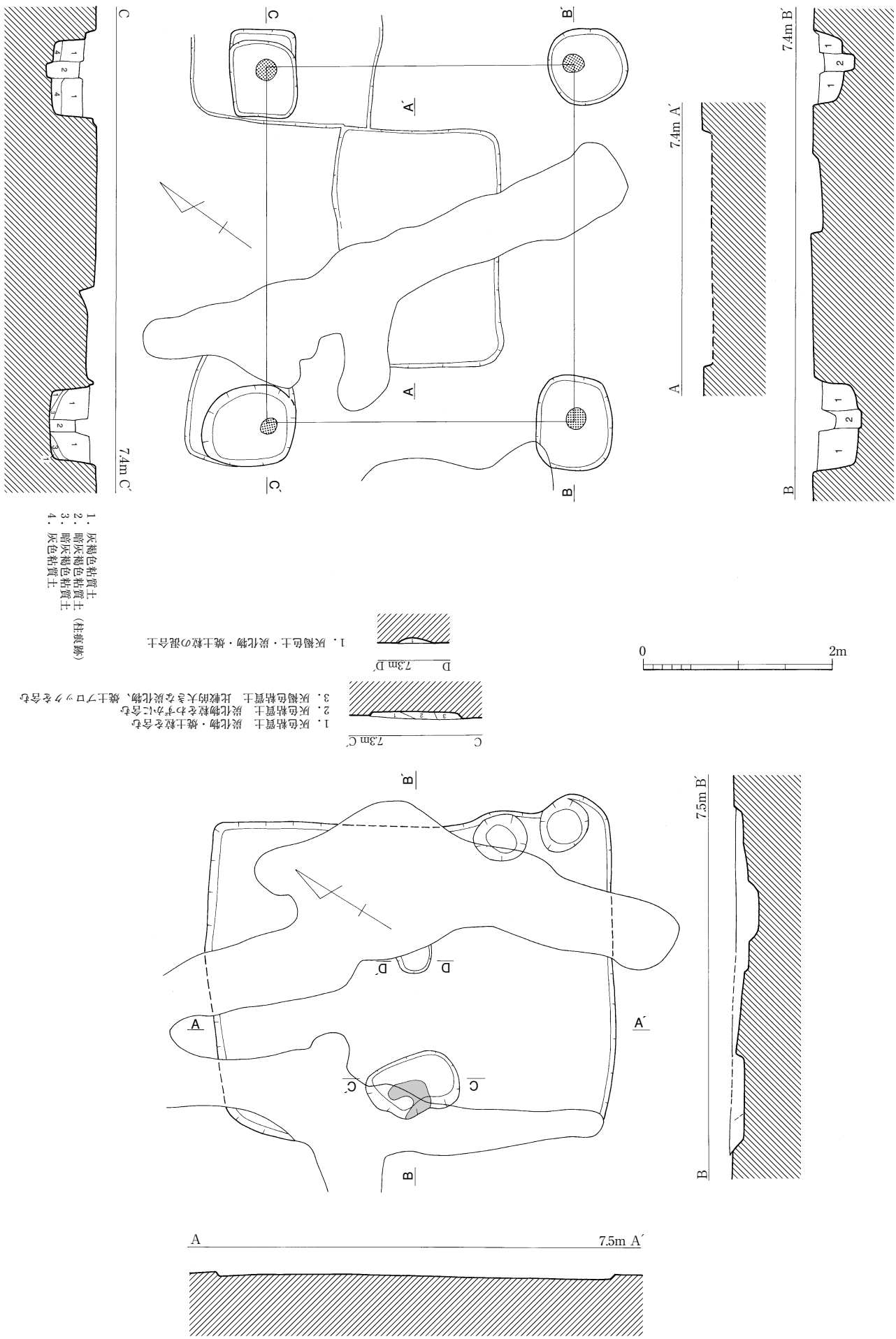
建物内の土坑は、建物の平面形状に合わせた長方形で、建物の各辺から60～80㎝の間隔を開けて屋内中央部にある。遺構の一部は後世の溝状遺構によって切られている。長軸2.5m、短軸1.7



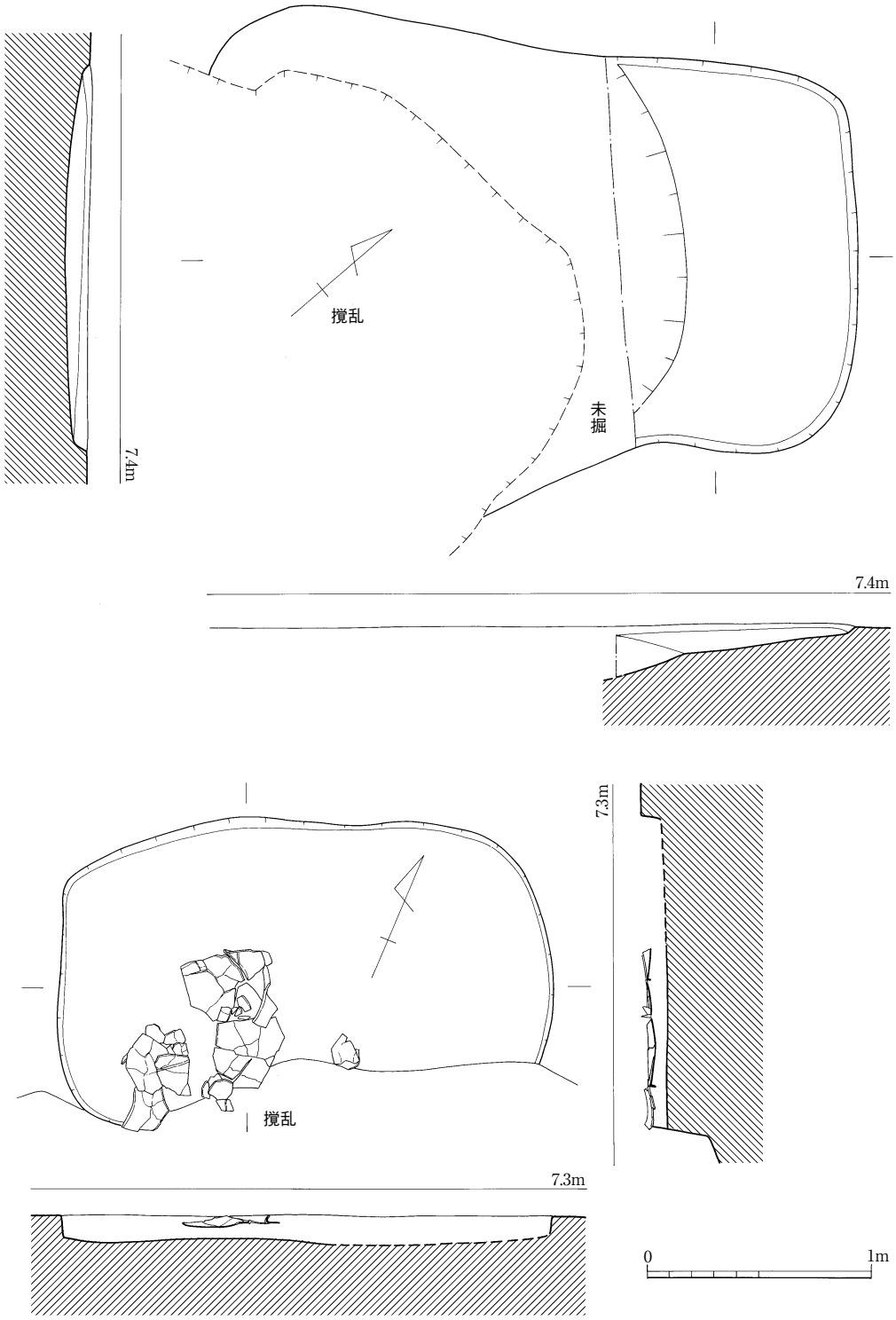
第 97 図　4 次調査区周辺地形図（1/1, 000）



第 98 図　4 次調査区全体図（1/300）



第 99 図　1 号掘立柱建物跡・1 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 100 図　1・2 号土坑実測図（1/30）

～ 1.8 mで、埋土と地山の境が明瞭でなかったため若干掘り過ぎてしまったが、土層断面から判断して深さは約 10 cmと考えられる。埋土の状況から判断して、人為的に埋め戻された可能性が高い。遺物等は出土していない。

（２） 竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（図版 43・44、第 99 図）

調査区の中央部にある。遺構の半分近い部分を、後世の溝状遺構による攪乱を受けているが、形状、規模等は知ることができる。平面形は長方形で、長軸 4.25 m、短軸 4.35 m、深さは最も残りの良い北側部分で 15 cm程度で、ほとんどは数cmしか残存していない。中央部の小穴は、径 35 cm、深さ 5 cmで、平面円形と考えられるが半分程は攪乱を受けて失われている。内部は、灰褐色土、炭化物、焼土粒の混合土で埋まっていた。遺構南西辺の壁に沿うように配置された土坑は平面不整楕円形の 100 × 60 cm程の規模で、深さは約 10 cm。底面の一部は焼けており、埋土は灰色あるいは灰褐色の粘質土で、炭化物、焼土粒を含んでいる。主柱穴と考えられる穴は検出していない。また、年代を決める遺物の出土もなかった。

（３） 土坑

1 号土坑（第 100 図）

調査区中央やや西寄りで検出した。遺構の約半分を近現代の攪乱によって失われている。残存部分から判断して、平面形は南西側の幅が広くなった、やや不整な隅丸長方形で、長軸長 2.85 m以上、短軸長は北東側で 1.7 m、広がった南西側は 2.15 m以上。底面は北東側の約 1/4 の部分が浅くテラス状になって、南西側が一段深くなるようで、深さは北東側が最大 13 cm、南西側は大半を失っているため不明で、現状では 23 cm以上としか言えない。

出土遺物（図版 45、第 101 図）

1・2 とも弥生土器甕。1 は鋤形口縁を持ち、頸部で強く締まる。器壁は厚く、内外面ナデ・ヨコナデ調整。復元口径 41.2 cm。2 は胴部下半で、底部は平底であるが、わずかに上げ底状になる。外面は縦方向のハケメ調整で、使用による変色が見られる。

2 号土坑（図版 44、第 100 図）

1 号土坑の北西側で検出した。遺構の南東側の一部は近現代の溝（クリーク）によって破壊されている。平面隅丸長方形で、長軸長 2.2 m、短軸長 1.2 m以上。底面は、下層地山の暗灰褐色土を埋土と勘違いして、一部を除いて掘り過ぎてしまった。残存部分から、深さ 13 cmでほぼ平らと考えられる。土坑の北西部分から土器がまとまって出土した。

出土遺物（図版 45、第 101 図）

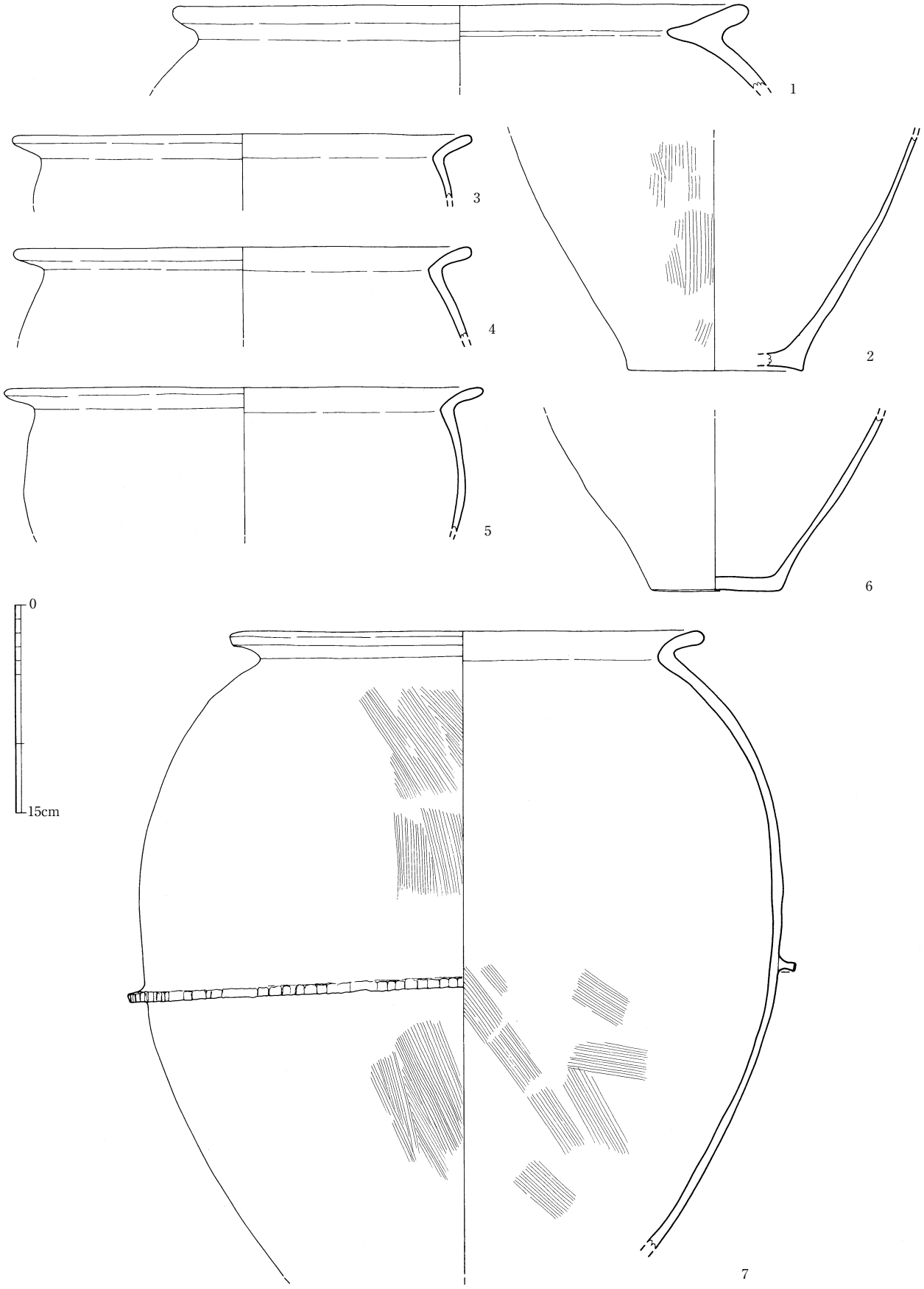
5 点とも弥生土器甕。3 ～ 5 は、口縁から肩部の破片で、く字形の口縁部を持つ。全体に風化のため調整は不明瞭であるが、4 の胴部外面と 5 の内面にはハケメのちナデ調整の痕跡が認められる。復元口径 32.8 ～ 34.3 cm。6 は下半部で、底部は平底。内外面ナデ調整。7 は比較的残存状況が良い。口頸部は丸味をもって外反する。胴部も丸味が強く、中位にやや垂れ気味で長い断面四角形の突帯 1 条があり、刻目を施す。胴部内外面はハケメ調整で、器壁が厚くしっかりとした作りである。口径 33.8 cm、胴部最大径は突帯よりやや上にあり 45.9 cm。

（４） 溝状遺構

今回の調査で検出した溝状遺構は、人為的に掘削したことが明らかな 3 条の南北方向のものの他に、自然の流路と考えられる北東－南西方向のもの、クリークと考えられる近現代のものなどがあるが、ここでは最初に挙げた 3 条の遺構を紹介する。

1 号溝状遺構（図版 45、第 98 図）

調査区の東端にある南北方向の溝。近現代の溝（クリーク）と現代の暗渠排水によって分断され



第101図　1・2号土坑出土土器実測図（1/4）

ていたため、南側の一部分を発掘した。残存部分から、上端幅 80 ～ 110 ㎝、下端幅 30 ～ 60 ㎝の、断面が丸味を持った逆台形の溝で、約 20 m分を確認した。北端部付近で 2 号溝状遺構と交わるものと考えられるが、遺構の先後関係等は不明。

2 号溝状遺構（図版 45、第 98 図）

1 号溝のすぐ西側にある。調査区内で約 20 m分を確認し、ほぼ直線的に延びる。中央部分は近現代の溝（クリーク）によって攪乱を受けているため、北側と南側の合計約 9 m分を発掘した。遺構は上端幅1.2～1.9ｍ、下端幅0.4～1.0ｍの概ね逆台形であるが、南側では底面中央部を幅0.4～0.6ｍ幅でもう一段掘り込んだ二段掘り状になっている。

3 号溝状遺構（図版 45、第 98 図）

調査区西側で検出した。調査区内で約 21 m分を検出し、わずかに蛇行しているが、ほぼ直線的に延びる。3 条の溝と暗渠排水によって分断されていたため、残存状況の良い 3 箇所を発掘した。遺構は上端幅 1.0 ～ 1.3 ｍ、下端幅 0.2 ～ 0.3 ｍで、東側に底面より 20 ～ 25 ㎝ほど高い幅 0.3 ～ 0.5 ｍの平坦部分を持つ。

３　小結

今回の調査で検出した主な遺構は、掘立柱建物跡 1 棟、竪穴住居跡 1 軒、土坑 2 基以上、溝状遺構 3 条以上、等があるが、遺構に伴って時期を明らかにし得る遺物が出土したのは、わずかに土坑 2 基のみであった。

1 号掘立柱建物は、1 間× 1 間の規模ながら、柱掘形の状況などから堅固な造りであるところが注目される。内部にある竪穴状の土坑の形状や大きさとの関係を考えれば、この土坑を覆うための建物であると考えてまず間違いないであろうが、現状ではその使用法や機能は、時期も含めて不明と言わざるを得ない。

1 号竪穴住居跡と 1 号掘立柱建物跡とは、ほぼ一直線上に並び、規模、主軸方向、間隔も、ある程度の規格性を持って揃っているかに見える。さらに南西側を見ると、自然流路と考えられる溝状遺構数条もこの直線上に並んでいることを考えれば、単にかつての地形の状況によるものとも考えられるが、あるいは同時期の一連のものなのかもしれない。

5　5次調査

1　調査の概要

平成20年度に実施した5次調査の調査区は、インターチェンジ本体部分から西側に向かうにつれ、徐々に南下していく路線部分に当たり、東西に平行する路線部分へと向きが変わるまでの、中間地点の周辺である。そのため、南東―北西の軸で細長い形状で、幅約10ｍ程度、長さ115ｍ程度で、面積は約1050㎡である。

沖積地の微高地上の立地で、調査面の標高は7ｍ前後である。主な遺構は竪穴住居跡3棟、溝状遺構10条で、他に落ち込み、流路や多数のピットがある。遺構の主な時期は、弥生時代中期・後期、弥生時代終末期～古墳時代初頭、奈良時代とやや幅が見られる。遺構の底面や床面までの深さから、遺跡は調査区全面にわたってある程度削平されていると考えられる。出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器等で、わずかながら磨石等の石器も含まれる。

3号住居跡の北東側で1号溝より南側において、明瞭な遺構は検出できないが、地山が途切れる一定の範囲が認められた。その部分を徐々に掘り下げながら検出を繰り返していったが、ピットが検出されたのみであるため、包含層の堆積する範囲で竪穴住居跡等は存在しないと判断した。圃場整備の際に埋没したと考えられる近現代のクリークが、調査区内を広い範囲で通っており、中央部よりやや南側で、その向きが変化する。また、調査区北半では、南北に通る暗渠排水用の塩化ビニール管を埋設する4条の狭い溝により撹乱を受ける。南端部では調査面でにごった土質の範囲があり、掘削したトレンチで確認した状況から低い部分に堆積した包含層と見られ、南側へ徐々に落ちていく地形の可能性がある。

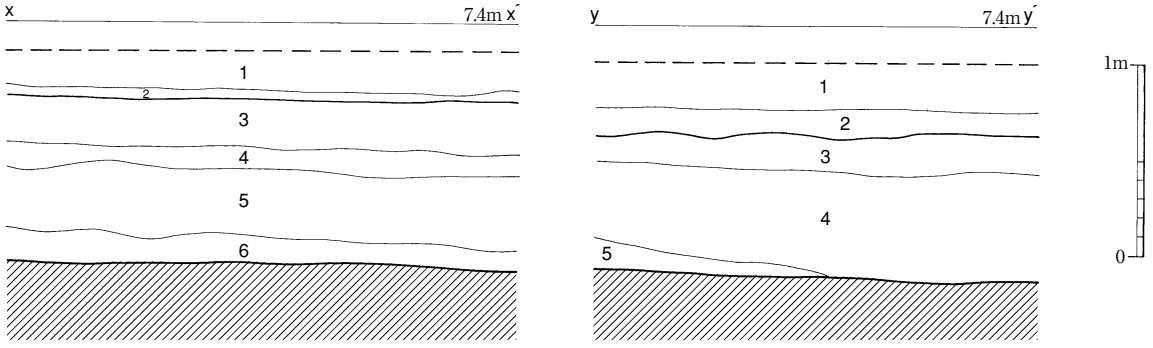
2　基本土層（図版48、第102図）

5次調査区内では、長軸に対して南側壁の2ヶ所において基本土層を記録した。北で1号土坑の東側、南で7号土坑の北東側にあたる地点である。調査区は全て田畑の広がりの中に位置しているため、上層はその表土および床土からなり、その直下が遺構面となる。北側の土層では遺構面は標高7.0ｍ前後であるが、南側では標高6.8ｍ前後である。遺構面より下位の両地点の堆積土層は、色調で近似する点はあるが、北側でやや粘性のあるしまりのよい砂質土であるのに対し、南側は砂質土の砂粒がやや大きく、しまりのあまい軟弱な土質が主体である。この相違は、検出面で確認できる土質の差異の様相から3号竪穴住居跡と5号土坑の中間付近を境として南北で分かれると考えられる。

3　遺構と出土遺物

（1）竪穴住居跡

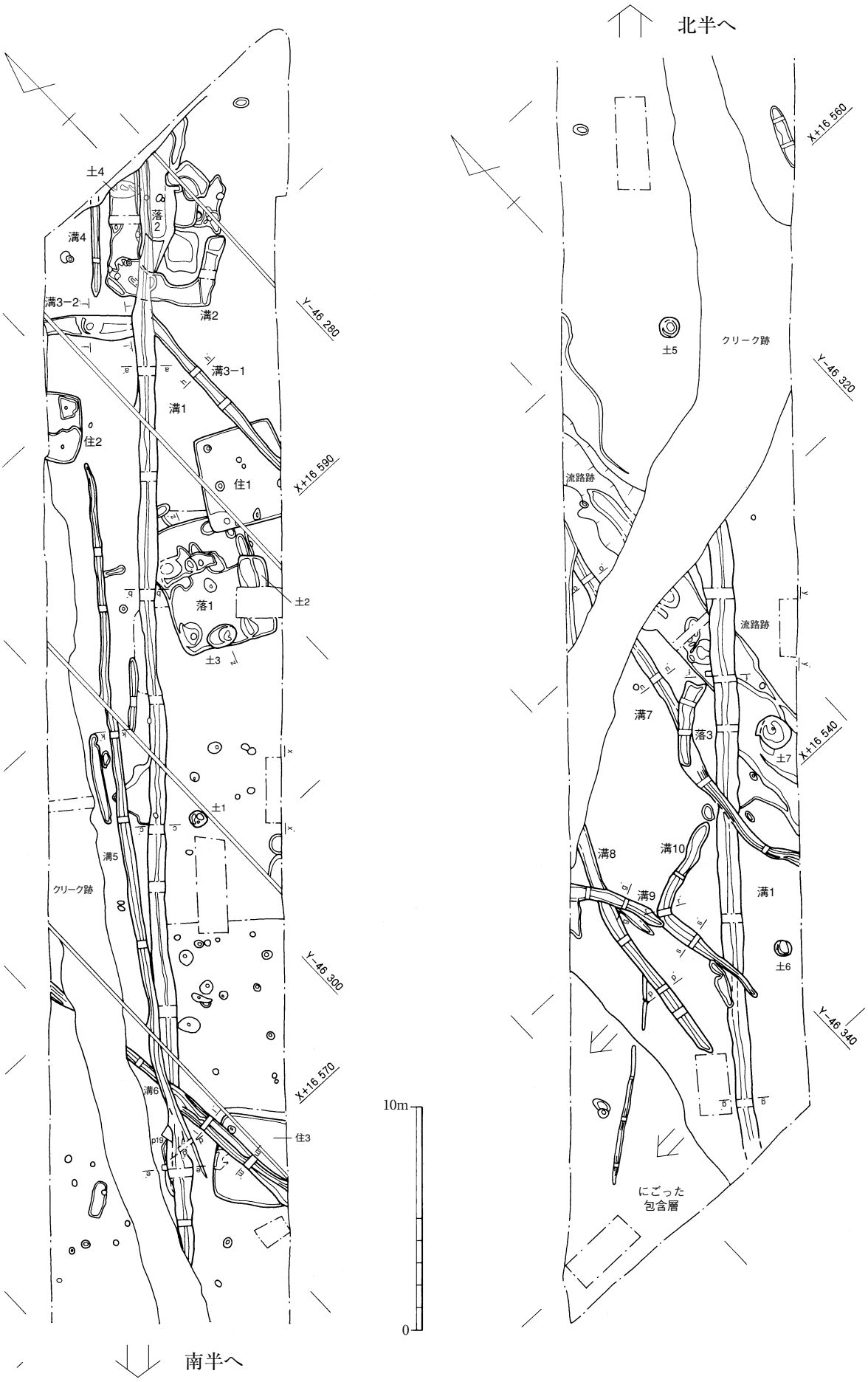
1号竪穴住居跡（図版49、第104図）



北側基本土層
1．淡灰茶褐色土　水田表土
2．淡灰茶褐色土　床土　黄褐色土含む
3．淡黄灰褐色土　しまりよい
4．明黄褐色土　3よりややしまりあまい
5．暗黄茶褐色土　やや粘性あり
6．淡黄白褐色土　やや粘性あり

南側基本土層
1．淡灰茶褐色土　水田表土
2．淡灰茶褐色土　床土　黄褐色土含む
3．淡黄白褐色土　やや粗い砂質
4．淡黄白褐色土　やや粗い砂質　3より明るい
5．淡茶褐色土　砂質　しまりあまい

第102図　山門牛島遺跡第5次調査区基本土層（1/40）

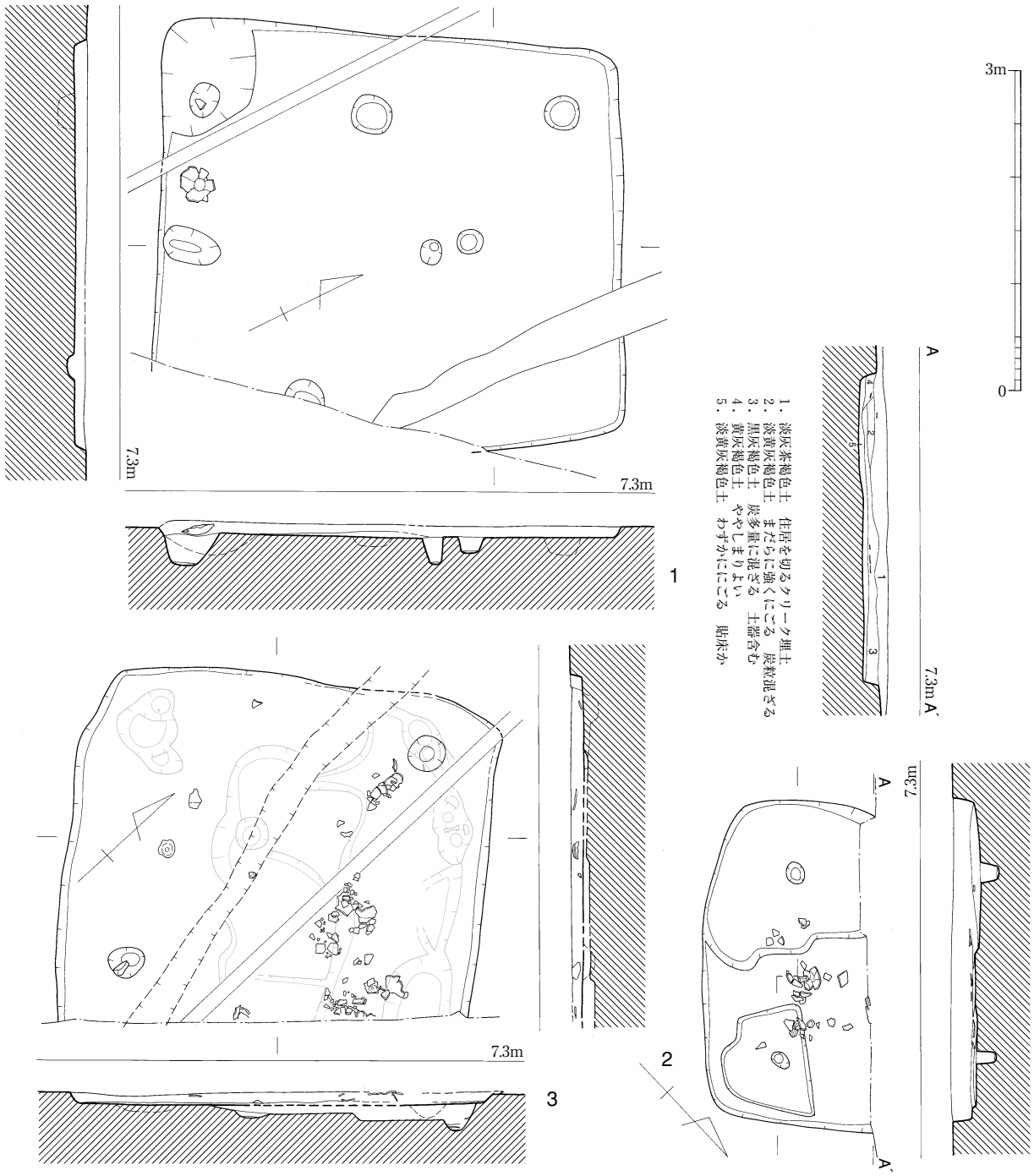


第 103 図　山門牛島遺跡 5 次調査全体図（1/250）

調査区北東部の南側壁際に位置しており、一部は調査区外に及ぶ。埋土は表土掘削の直後から認識できた明瞭なものではなく、黄茶褐色の砂質土で人力による精査で検出できた。平面形は長軸 4.3 m程度、短軸 3.5 m程度の隅丸長方形で、床面までの深さは 10 ㎝程度である。貼床や炉跡は認められず、住居としての確実性にはやや不安が残る。内部から検出された複数のピットの中で、主柱穴は認識し難いが、南端中央の壁際と中央よりやや北側のピットによる 2 本主柱と考えられる。南西隅の角付近が周辺の床面よりも低くなるが、下層の切り合う 1 号落ち込みの埋土を掘削した可能性がある。出土土器はわずかであるが、床面直上から高杯の杯部が出土した。1 号落ち込みを切り、3－1 号溝に切られ、暗渠排水用の溝により撹乱を受ける。出土土器から弥生時代後期前葉と考えられる。

出土土器（図版 60、第 126 図 1）

1 は弥生土器高杯の杯部である。外面中位に断面三角形の突帯が廻る以外に、下部から口縁部に

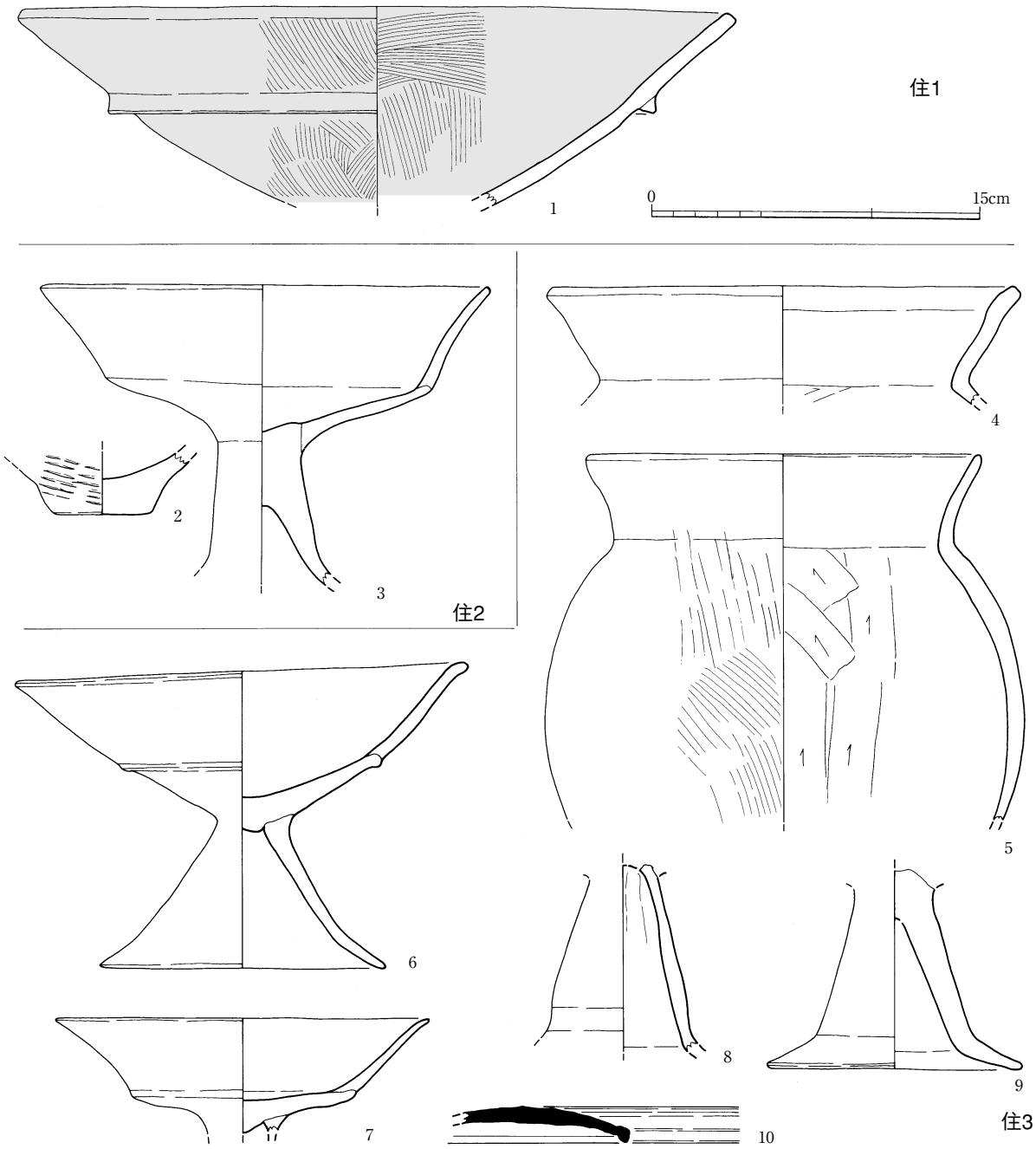


第 104 図　1 ～ 3 号竪穴住居跡実測図（1/60）

かけて大きな変化がなく、わずかに内湾気味に立ち上がる。内外面ともにハケ調整が見られ、外面には赤色顔料が塗布される。

2 号竪穴住居跡（図版 49、第 104 図）

調査区北端付近の北側壁際に位置しており、多くの部分が調査区外に及ぶが、周辺の状況からその部分はクリークによる撹乱を受けると考えられる。埋土は、上層で明瞭に認識できる黒灰褐色土で、最下層の地山に近似する淡黄灰褐色土は貼床の可能性がある。平面形は隅丸方形になると考えられ、残存する一辺は約 2.8 m程度で、深さ 25cm 程度である。底面はわずかであるが段差が生じる部分があり、ピットが 2 基検出されたが小さく、主柱穴は不明である。出土土器はほとんど小片に破損しているが、ほぼ床面直上付近から部分的にまとまって出土した。出土土器より、弥生時代終末から古墳時代初頭の時期と考えられる。



第 105 図　1 ～ 3 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

出土土器（図版 60、第 105 図 2・3）

2 は畿内五様式系甕の底部で、突出した平底である。外面にはタタキが残る。3 は畿内系の土師器高杯である。杯部の上下半部の境は強く屈曲し、上半部はそこから外反気味に大きく立ち上がる。脚部については、裾部付近は欠失しているが、残存する下端部の状況から屈曲して広がると見られる。脚部の上半は中実となっている。

3 号竪穴住居跡（図版 49、第 104 図）

調査区中央付近の南側壁際に位置しており、一部は調査区外に及ぶ。平面形は方形と見られ、残存する一辺は 3.6 m程度である。床面までの深さは 10 ㎝程度であるが、掘形は中央部からやや北側にかけて更に深くなる部分があり、起伏が目立つが最大で 28㎝ 程度の深さとなる。その範囲は貼床を施して床面を平坦に整えたと考えられる。主柱穴は明瞭ではない。出土土器はほとんど小片に破損しており、多くは床面から浮いた位置でまとまって出土した。北西側の壁の中央部付近において、わずかに土質の相違する部分があり、残存するカマドの一部である可能性が考慮された。しかし、わずかに焼土が認められるものの、燃焼部と思しき明瞭な被熱が認められなかった。また、出土土器による古墳時代中期前葉という時期を勘案しても、カマドが所在した可能性は非常に低い。埋土は炭や焼土が含まれ、黒灰褐色主体で認識しやすいものである。6 号溝に切られ、暗渠排水用の溝に撹乱を受ける。

出土土器（図版 60、第 105 図 4 ～ 10）

4・5 は土師器甕である。4 は屈曲する頸部から上部のみが残存し、頸部内面にはわずかにケズリが見られる。口縁部はほぼ直線的に開く。5 の胴部下半は欠失しており、胴部の外面はハケ調整、内面はケズリが施される。口縁部はわずかに外反気味に開く。6 ～ 9 は土師器高杯である。6 は完形に復元され、杯部の上下半の接合部において、外面には突帯状の隆起が廻る。口縁端部はわずかに外半する。脚部では、裾部へ広がる中で、わずかに屈曲が見られる。7 は杯部のみ残存したもので、上下半部の境は強く屈曲し、上半部はそこから外反気味に大きく立ち上がる。8・9 は脚部のみ残存したもので、9 の器壁は厚く、裾部へは強く屈曲して開く。10 は須恵器杯蓋の口縁部付近の破片である。他の出土土器とは時期が明瞭に異なり、6 号溝からの混入品と考えられる。

（２）土坑

1 号土坑（図版 50、第 106 図）

調査区北半の中央部付近に位置する土坑で、平面は一辺 70 ㎝程度の隅丸方形である。壁の立ち上がりは全体的にやや急である。西側はテラス状の部分で起伏があり、東側の最深部の底面で深さ 35 ㎝である。埋土は 2 層に分かれ、上層は暗灰褐色土で、下層は黄灰褐色土である。検出面付近で破損しているものの残存状態の良好な土器が出土した。出土土器より、弥生時代終末から古墳時代初頭の時期と考えられる。

出土土器（第 107 図 1）

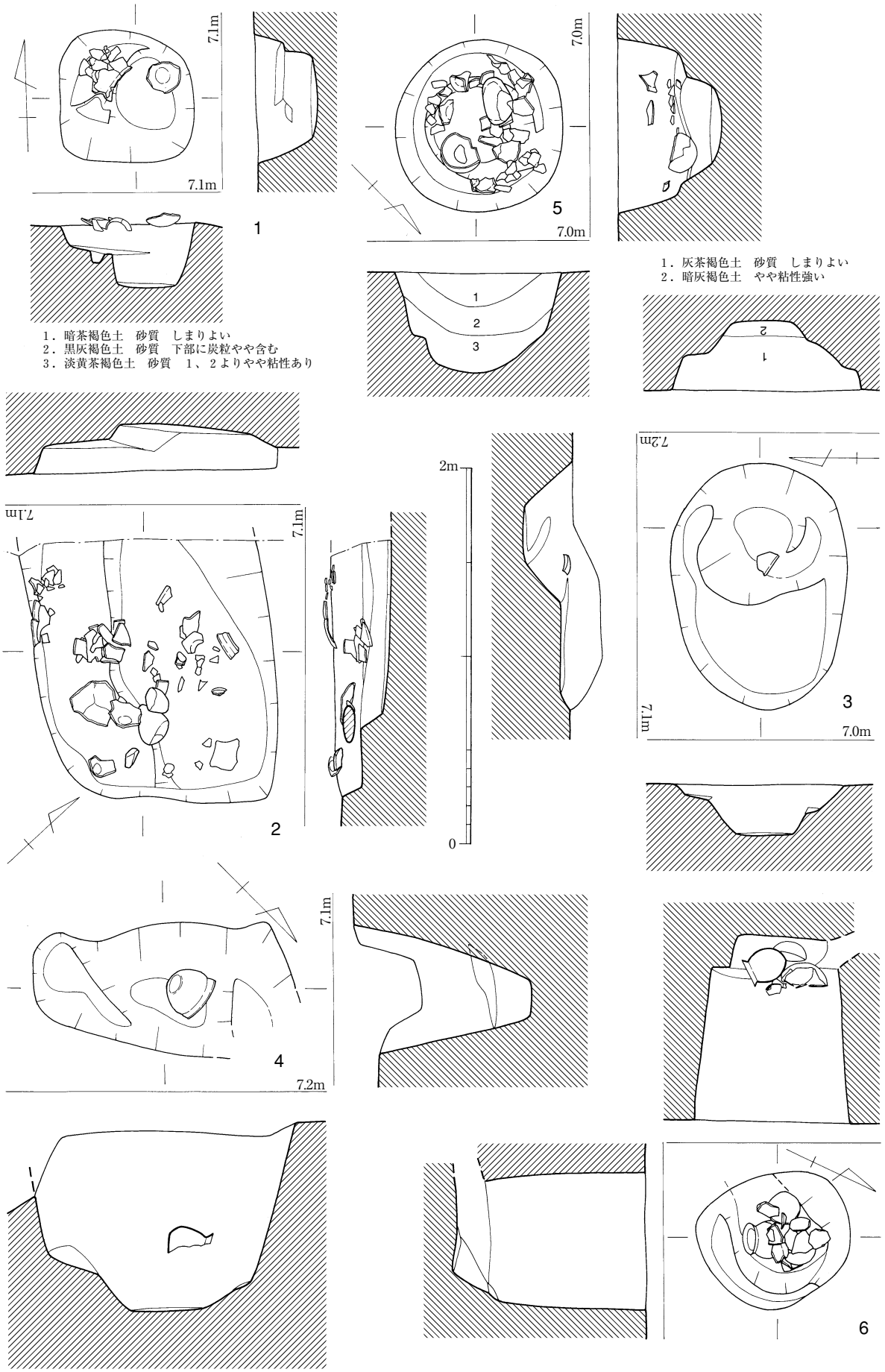
1 は畿内五様式系の甕の上半部である。胴部には、外面ではタタキの後にハケ調整が加えられ、内面にはハケ調整が見られる。

2 号土坑（図版 50、第 106 図）

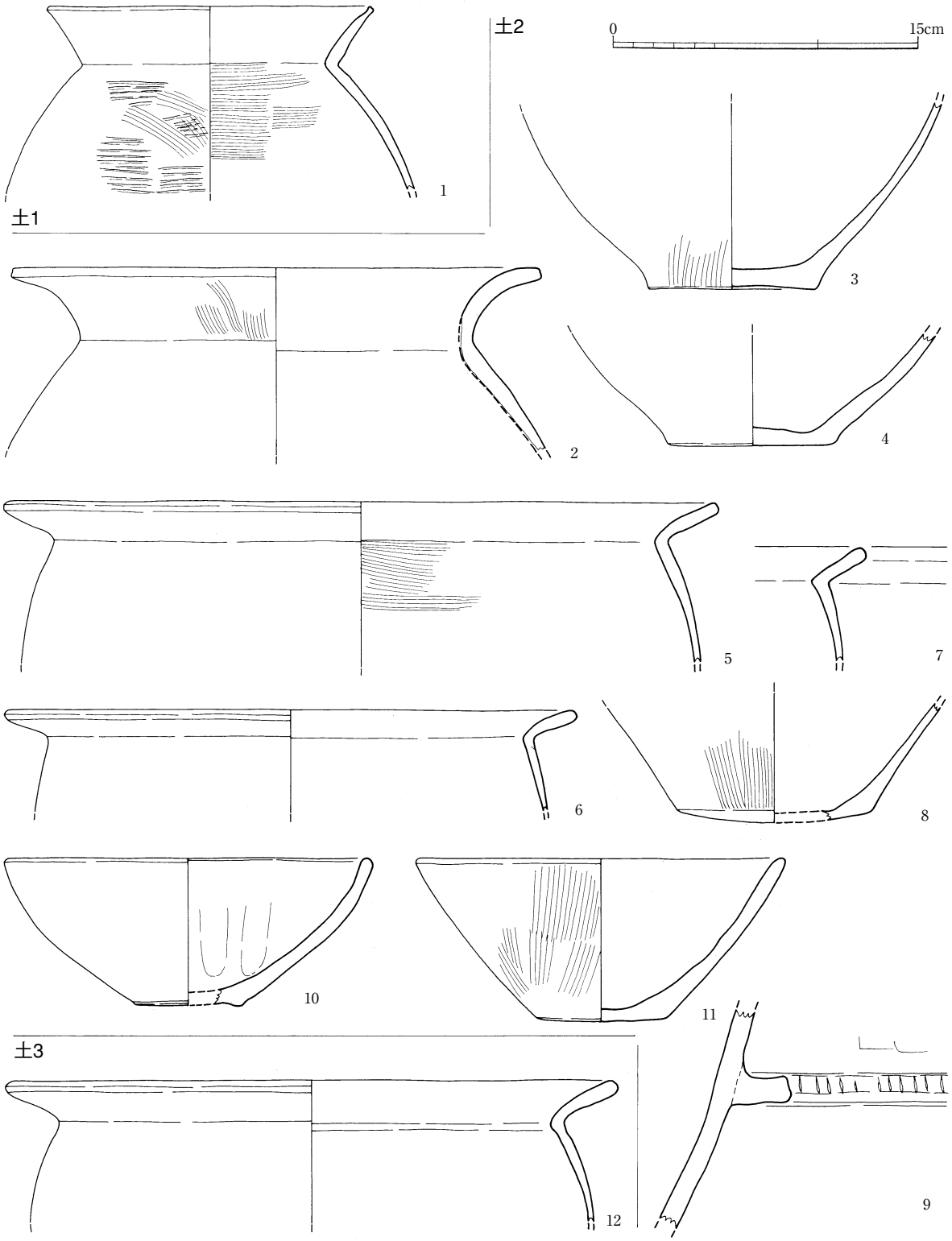
調査区北側で長軸方向の南側壁近くに位置する土坑で、トレンチにより北西側は失われているが、残存部は隅丸長方形に近い平面形で、短軸は 70 ㎝程度で長軸の残存長は 140 ㎝である。東側は広くテラス状となっており、最も深い西側で深さ 30ｃｍ 程度である。埋土は淡灰茶褐色の砂質土である。土器や礫がほとんど底面から浮いた状態でまとまって出土した。1 号落ち込みを切る。出土土器より、弥生時代中期後半の時期と考えられる。

出土土器（第 107 図 2 ～ 11）

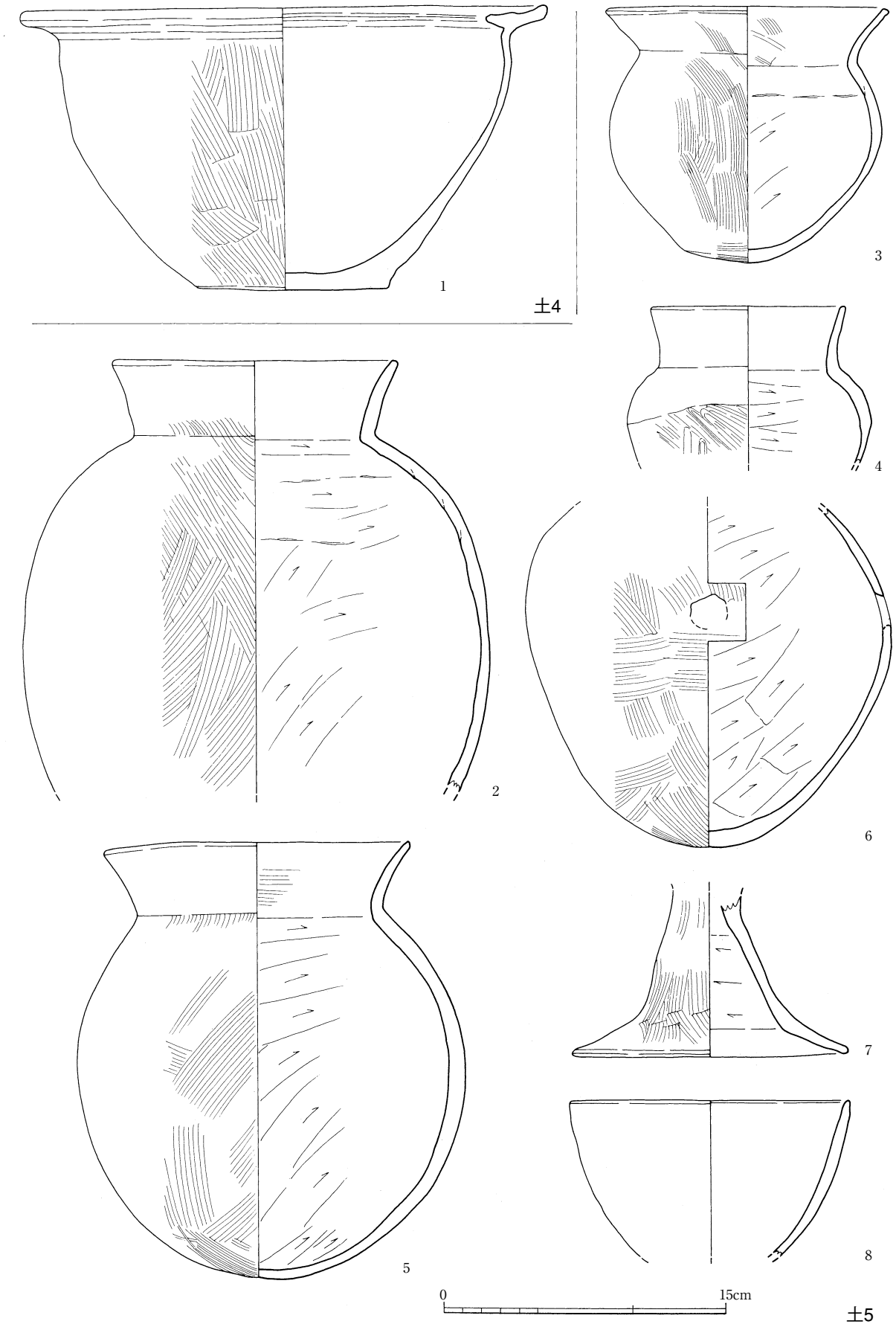
出土土器は全て弥生土器である。2 は広口壺で、頸基部のくびれがあまり強くなく、なで肩の器



第106図　1～6号土坑実測図（1/30）



第 107 図　1 ～ 3 号土坑出土土器実測図（1/3）



第108図　4・5号土坑出土土器実測図（1/3）

形である。3・4はともに平底の壺の底部付近である。5～7はともに甕の口縁部から肩部にかけてであり、口縁部は屈曲して外側へ立ち上がる。8は甕の底部で、ややレンズ気味である。9は大型の甕の胴下部で、キザミを有する突帯が廻る。10・11は素口縁で平底の鉢である。10の口縁端部は、11に比べわずかに内湾気味に立ち上がる。

3号土坑（図版50、第106図）

調査区北側で1号落ち込みの内側に位置する土坑である。調査面での検出時には認識することができず、1号落ち込みを掘り下げる段階で土層等から、1号落ち込みを切る土坑であると確認した。平面形は長軸140㎝、短軸90㎝程度の楕円形で、南側で広くテラス状となり、北側の底面は狭く40cm程度の深さである。埋土は灰茶褐色土主体で、底面近くではやや粘性の強い暗灰褐色土層がわずかに見られる。出土土器はわずかであるが、弥生時代中期後半の時期と考えられる。

出土土器（第107図12）

12は弥生土器甕の口縁部から肩部にかけてで、口縁部は屈曲して外側へ立ち上がる。

4号土坑（図版51、第106図）

調査区北端に位置する土坑で、北側は道路の施工時に掘削したと思われる部分に撹乱を受ける。長軸で140㎝以上、短軸75㎝程度のやや細長い不整な平面形である。下位でテラス状の部分が見られ、中央部が最も低くなっており、深さ90㎝程度である。中位よりやや低い位置で残存状態の良好な土器が出土した。2号溝の掘削時に、溝の底面が現れない範囲を周辺より更に掘り下げたことにより検出され。そのため、2号溝との先後関係は明瞭に把握できなかったが、2号溝に先行すると思われ、また1号溝にも先行する。埋土は上層が暗茶褐色土で、下層が地山に近似する淡黄灰褐色土である。出土土器から、弥生時代中期後半の時期と考えられる。

出土土器（図版60、第108図1）

1は弥生土器鉢で、内側への突出が発達した鋤先状口縁である。外面でハケ、内面でナデという調整が認められる。

5号土坑（図版51、第106図）

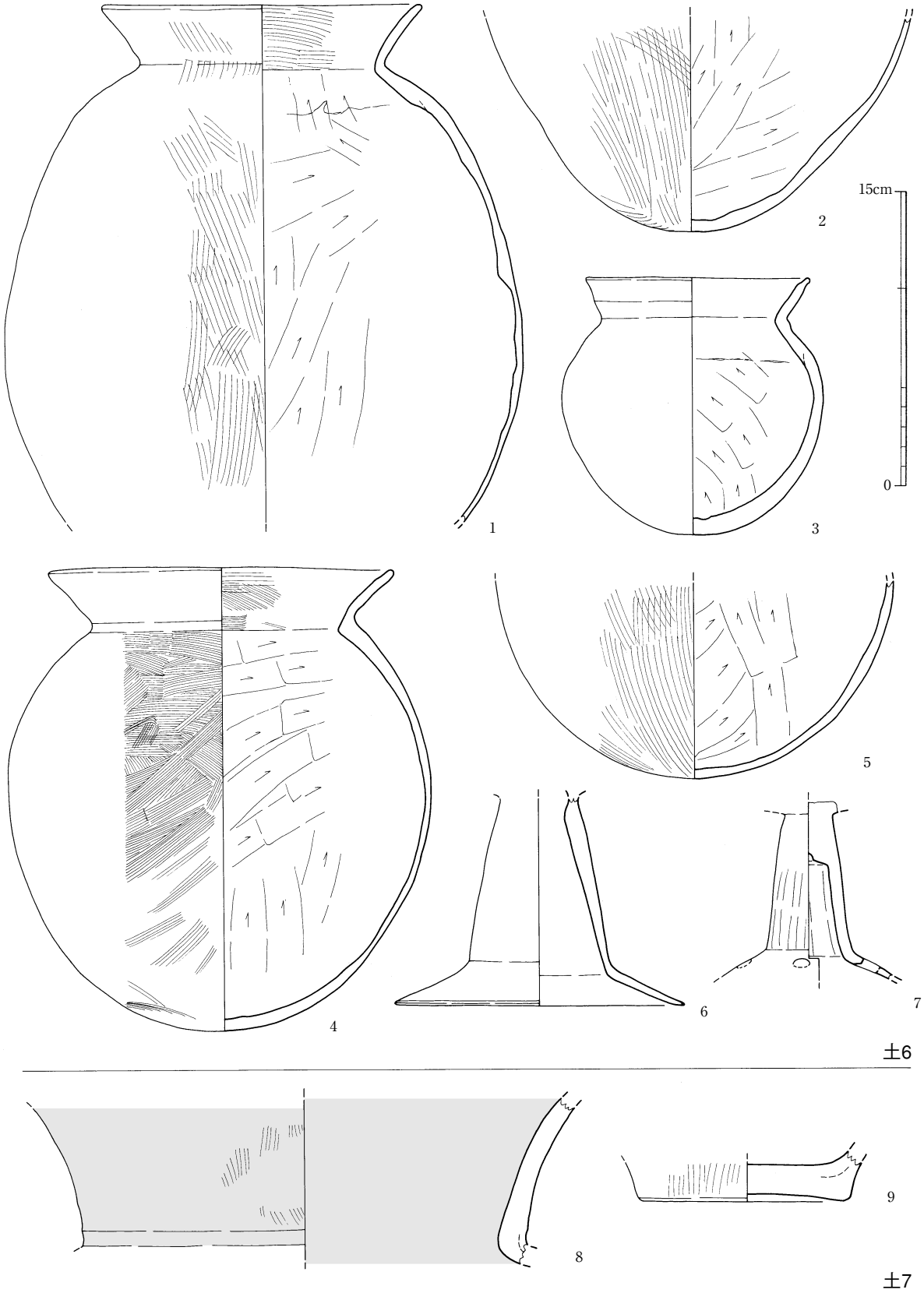
調査区中央部のやや南寄りに位置する土坑で、平面形は径90㎝程度の円形である。深さ30～35㎝程度でテラス状の部分が廻り、中央部で深さ53㎝である。埋土はレンズ状に堆積し、3層に分割された。出土土器は大きく破損するものがほとんどであるが、まとまって出土し、下位の層に帰属すると見られる。出土土器から、古墳時代前期の時期と考えられる。

出土土器（図版52、第109図2～8）

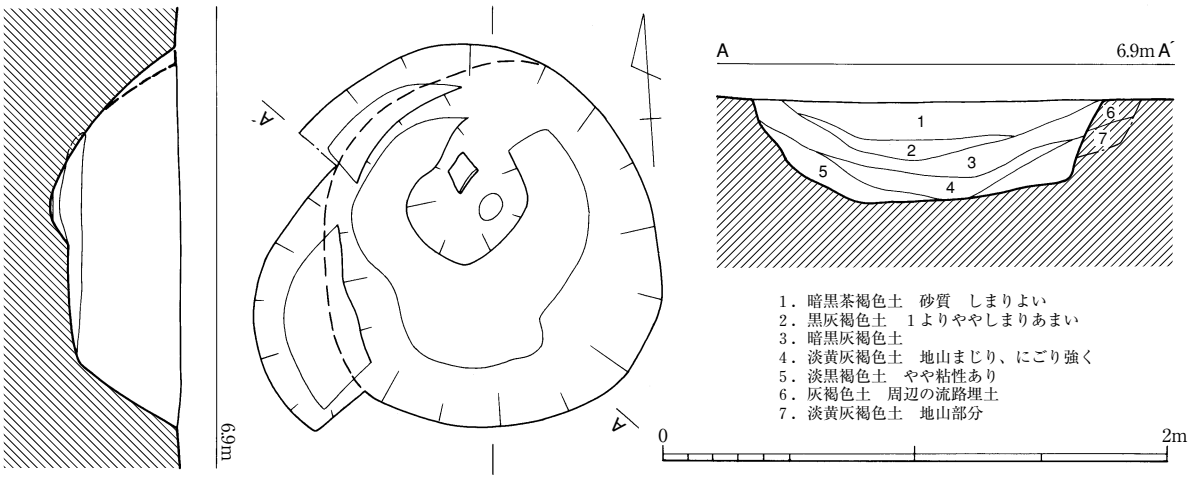
出土土器は全て土師器である。2は広口壺で、頸基部がやや強く締まり、口縁部がやや外側の上方へ立ち上がる。胴部の調整は、外面ハケ、内面ケズリである。3は小型の広口壺で、頸基部はあまり強く締まらず、口縁部は外側の上方へ立ち上がる。底部はややレンズ気味である。4は小型の直口壺である。胴部の外面下半には粗いハケが見られ、内面にはケズリが施される。5はほぼ完形の甕で、胴部外面は被熱により橙茶褐色を呈し、煤が付着する。胴部調整は、外面でハケが見られ、内面にはケズリが施されるが、あまく器壁が厚い。6は甕の肩部より下位で、焼成後穿孔と見られる部分が残る。調整は外面ハケ、内面ケズリで、器壁は薄い。7は高杯の脚部で、脚柱部から自然に広がり裾部で強く屈曲して開く。透かし孔は認められず、脚柱部内面にはケズリが施される。8は素口縁の鉢で、外面は被熱により赤橙褐色を呈す。

6号土坑（図版52、第106図）

調査区南端部付近で、長軸方向の南側壁際に位置する土坑で、平面形は長軸86㎝、短軸74㎝の不整楕円形である。深さは100㎝で、底面付近はテラス状の部分があり、やや複雑な形状で、南西方向へ狭い範囲で強くオーバーハングして入り込んだ部分があり、全ての埋土を掘削するに至らな



第 109 図　6・7 号土坑出土土器実測図（1/3）



第 110 図　7 号土坑実測図（1/30）

かった。この部分は水脈と繋がっていたと考えられ、本遺構が井戸であったと想定される。完形に近いものを含むまとまった土器が底面付近から出土した。埋土はレンズ状に堆積し、上層では黒灰褐色、灰茶褐色の砂質土層が見られ、深さ 75cm 程度の底面付近では淡灰シルト層の下位で淡灰粘質土層が堆積する。出土土器から古墳時代初頭の時期と考えられる。

出土土器（図版 60、第 109 図 1 ～ 7）

出土土器は全て土師器である。1 は広口壺で頸基部がやや強くくびれ、口縁部がやや外反気味に開く。胴部は下膨れの器形となると見られ、調整は外面ハケで、内面のケズリは粗い。外面には煤が付着する。2 は壺の底部と考えられ、1 と同一個体の可能性が高い。外面には煤が付着するが底付近ではやや薄くなる。また、内面には炭化物が付着する。3 は小型広口壺で、口縁部は頸基部から外側上方へ直線的に延びる。4 は完形の布留系甕と考えられるが、口縁部は外反気味に開く。胴部の調整は外面ハケ、内面ケズリで、器壁は薄い。外面には煤が付着するが、底付近では薄くなる。5 は甕の底部で丸底である。調整は外面ハケ、内面ケズリである。6 は畿内系高坏の脚部で、脚柱部から自然に広がり裾部で強く屈曲して開く。透かし孔は認められない。7 は高坏脚部で、脚柱部は細身で、裾部では強く屈曲して開く。上部は中実で、その内面下端には工具によると思われる窪みがある。上端部には杯部との接合のためのキザミが見られる。

7 号土坑（図版 52、第 106 図）

調査区南側で、長軸方向の南側壁際の流路跡に囲まれる位置にある土坑で、流路跡を切る。本土坑と流路跡の埋土の判別のつきにくかったことから、平面形の検出を誤って掘削し、土層の観察から補正したために、掘り過ぎでテラス状となってしまった部分が 2 ヶ所ある。本来の平面形は、径 140 ～ 145 ㎝程度の不整円形であったと見られる。底面は広い範囲で深さ 40 ～ 45 ㎝程度であるが、中央部よりやや北側のわずかな範囲で更に下がり、深さ 50cm となる。埋土はレンズ状の堆積をなす。出土遺物はわずかである。出土土器から、弥生時代中期後半の時期と考えられる。

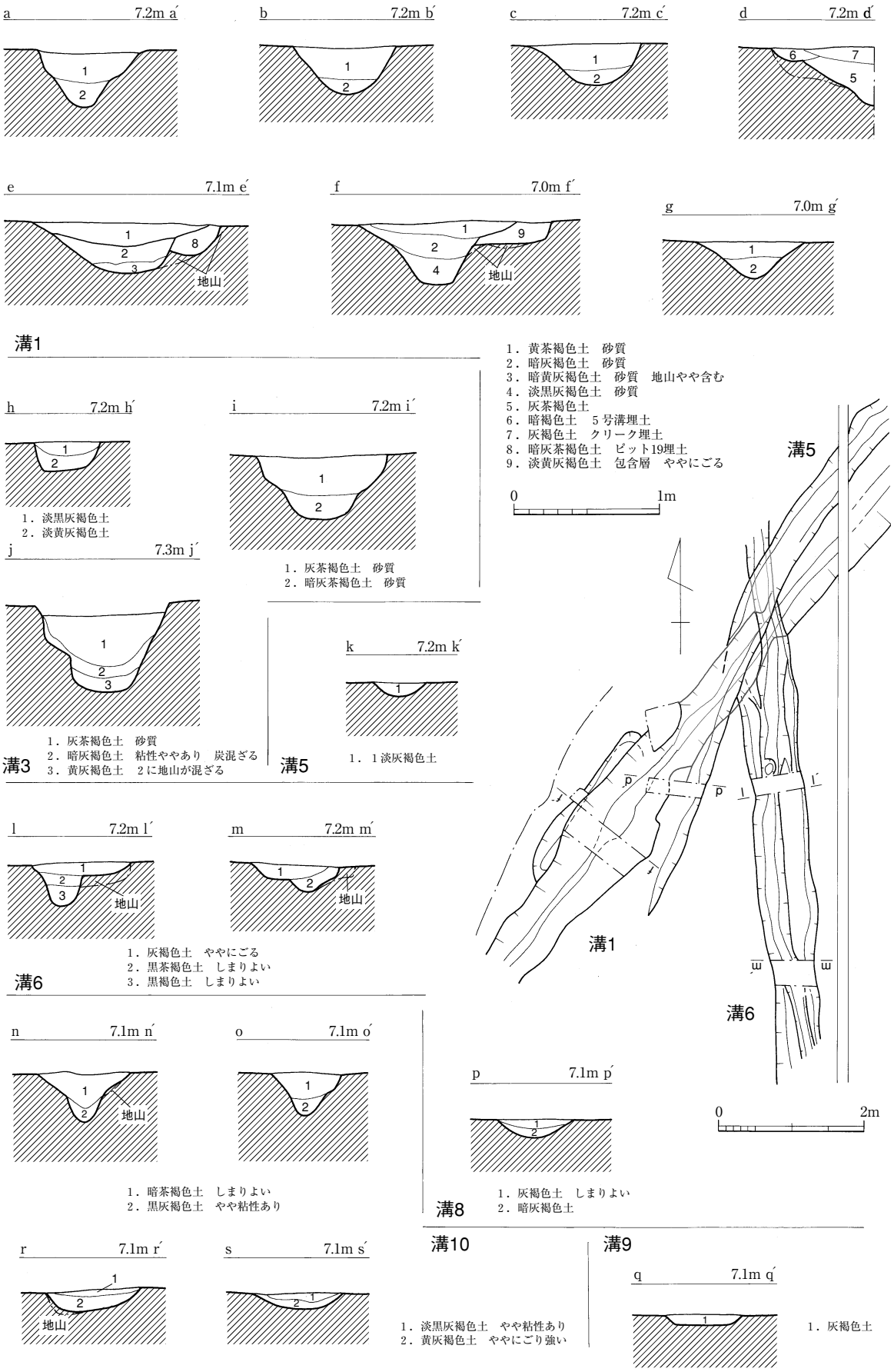
出土土器（第 109 図 8・9）

8 は弥生土器広口壺の頸部で、内外面ともに丹塗りの痕跡が見られる。9 は弥生土器壺の平底の底部である。

（3）溝状遺構

1 号溝状遺構（図版 53 ～ 55、第 103・111 図）

調査区の長軸に沿う形で、ほぼ中央部分を調査区北東端から南西端にかけて通る溝である。本来調査区全体で連続していたと見られるが、中央部よりやや南側でクリーク跡に切られて途切れる部分がある。北端部付近では、2 号溝や他の遺構に切られ、それらの下位から残存する底面に近い下部のみが検出された。幅は 70cm 以上あり、1 mを越える部分も認められる。溝の断面については、



第 111 図　溝状遺構土層断面図および 1・5・6 号溝状遺構重複地点実測図（1/40、平面図は 1/80）

壁の立ち上がりは全体的にさほど急な傾斜ではなく、底面の幅はあまり広くない形状である。特に南側では上部の壁の傾斜は非常に緩やかである。埋土は上層の黄茶褐色土と下層の暗灰褐色土の2層が主体で、部分的に暗黄灰褐色土や淡黒灰褐色土が最下層として認められる。底面の標高は南側がやや低くなる傾向が見られる。4号土坑、3号溝、1号落ち込み、流路跡を切り、2・5～7・10号溝に切られる。出土土器から弥生時代中期後半に掘削されたと見られ、以降も存続していた可能性が高い。

出土土器（第113図1～8）

出土土器は全て弥生土器である。1は壺の口縁部と考えられ、緩やかに屈曲して開く。2は短頸壺の口縁部である。3は甕の口縁部で、く字状に屈曲して開く。4は甕の鋤先状の口縁部で、内側にはわずかに延びる程度である。5はやや大型の甕の口縁部で、内側にも強く突出する鋤先状である。外端部に向かって立ち上がる。6は甕の口縁部で、内側にも突出する鋤先状で、外端部に向かって立ち上がる。外面の口縁直下には、断面三角形の低い突帯が付される。7は大型の甕の底部と見られる。8は素口縁の鉢で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。

2号溝状遺構（図版53、第103図）

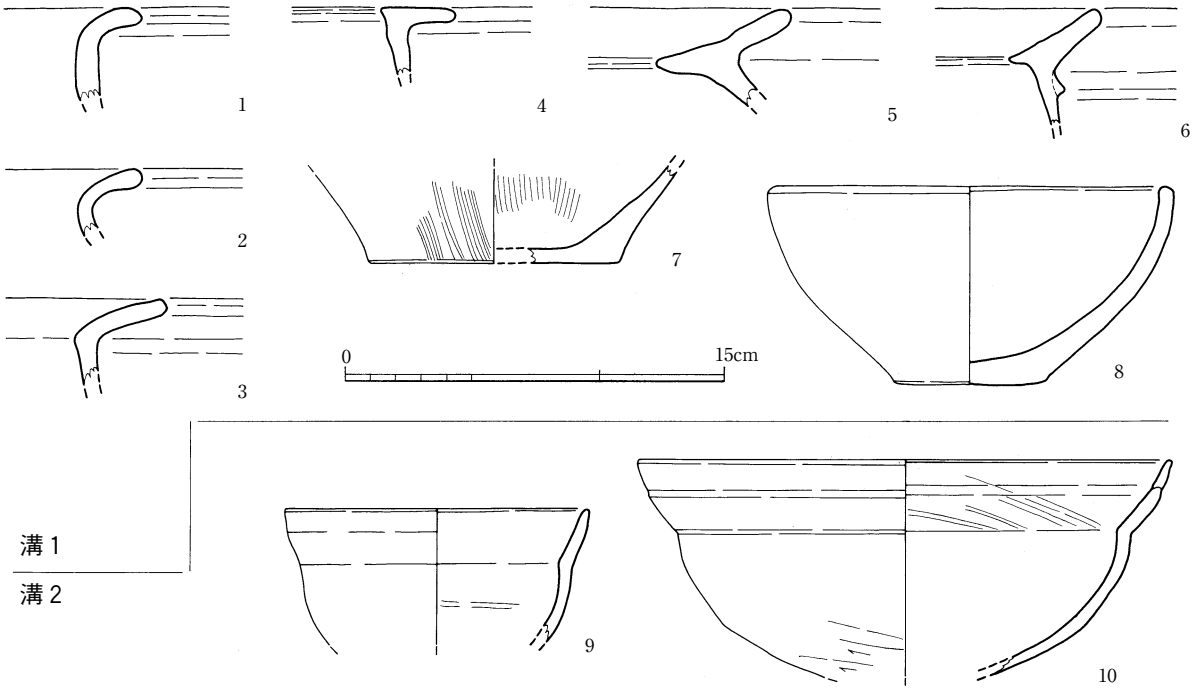
調査区北端付近に位置し、2ヶ所で同じ方向へ90°に近い屈曲をし、180°折り返すような平面形となっている。片側は調査区内で途切れ、反対側は北側の調査区外へと延びる。埋土は黒茶褐色土主体である。幅は70㎝から1.5ｍと部分により差がある。深さは数㎝から15㎝と非常に浅く、底面は小さな起伏や段差が多数あり、溝ではなく落ち込み状の遺構である可能性もある。底面で検出した4号土坑や1号溝を切る。出土土器から古墳時代初頭の時期と考えられる。

出土土器（第113図9・10）

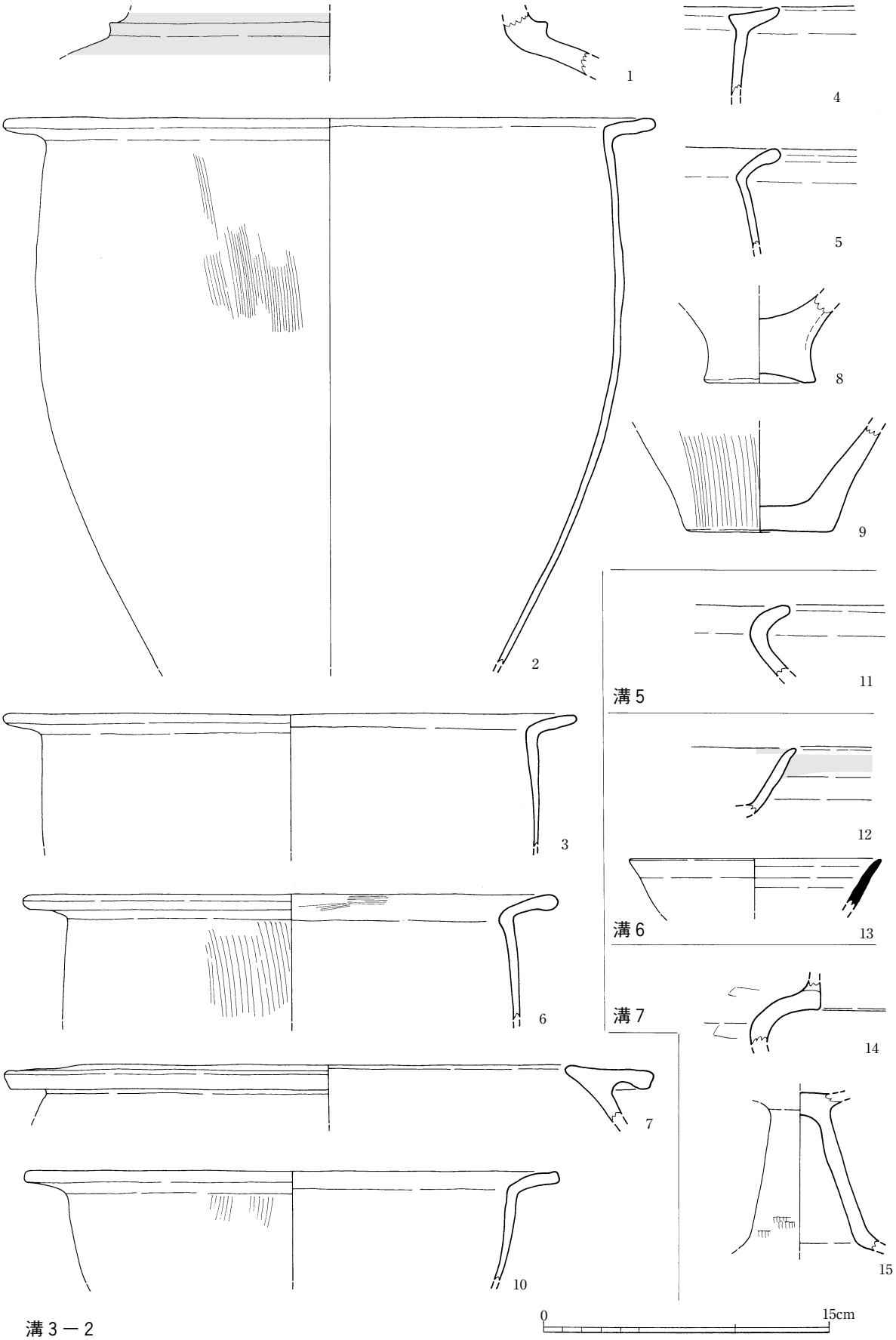
9は土師器小型丸底壺で、器表は全体的に摩滅し、白黄褐色から淡橙褐色を呈す。10は屈曲口縁鉢で、口縁部に段を有して二重口縁状となる。外面の底部付近にはケズリが施される。

3号溝状遺構（図版53・56、第103・111図）

調査区北端近くに位置し、1号溝を挟んで南北で異なる様相である。1号溝より南側（3－1号溝）



第112図　1・2号溝状遺構出土土器実測図（1/3）



第113図　3-1および5～7号溝状遺構出土土器実測図（1/3）

では南北の軸に沿って直線的で、深さ 10 ㎝程度で埋土は淡灰褐色土の 1 層である。1 号竪穴住居跡を切り、遺物は出土していない。一方 1 号溝より北側（3 － 2 号溝）では南側と軸が異なり、また底面は起伏で深さの差が大きく、南側の中央部付近がもっとも深く 60 ㎝程度で、南東側で 40 ㎝程度、北西側は 15 ㎝程度と非常に浅い。埋土は複数の層がレンズ状の堆積を成す。出土土器は多く、弥生時代中期後半の時期と考えられる。北東端部の調査区壁際付近はわずかにクリーク跡に切られる。

検出時点においては、1 号溝を挟んで 3 － 1 号溝、3 － 2 号溝で軸が異なるものの、それぞれの連続部分が他に認められず、両者が同一の遺構と判断した。しかし、遺構の内部の様相や遺物の出土状況の相違は大きい。また、出土土器から 3 － 2 号溝が弥生時代中期後半であるのに対し、3 － 1 号溝は弥生時代後期前葉の 1 号竪穴住居跡を切ることから、両者の時期は整合せず、明らかに別遺構と判断できる。また、3 － 1 号溝は弥生時代中期後半の 1 号溝も切るはずであり、実際には検出時の切り合いの判断とは異なっていたと言える。

出土土器（第 113 図 1 ～ 10）

出土遺物は全て弥生土器で、3 － 2 号溝からの出土である。1 は壺もしくは瓢形土器の頸基部から肩部にかけてで、外面には断面三角形の突帯が廻り、丹塗りが見られる。2 ～ 7 は甕の口縁部から胴部にかけてである。4・7 は鋤先状口縁で、4 は外端部に向け立ち上がる。他の口縁部は屈曲して開く。8・9 は甕の底部で、8 は厚く上底状である。10 は鉢で、口縁部は屈曲して開く。

4 号溝状遺構（図版 53、第 103・111 図）

調査区北端付近で、1・2 号溝の西側に位置し、調査区の長軸に沿う形で通る溝である。北側は調査区外に延びるが、4 m程度検出されて南側は途切れる。幅は 25 ～ 35 ㎝程度、深さ 5 ～ 7 ㎝程度とわずかに遺存するのみである。埋土は淡黒灰褐色土の 1 層である。5 号溝とは軸や埋土の共通性から、同時の並存や、本来連続しており、間の空隙は底面の浅い部分が削平されたという可能性も考えられる。図示できる土器は出土していない。

5 号溝状遺構（図版 53・57、第 103・111 図）

調査区南半のやや北寄りを、ほぼ調査区の長軸に沿う形で通る溝である。1・6 号溝を切る。北側は 2 号竪穴住居跡付近で途切れる。南側は 3 号竪穴住居跡付近で、やや南向きへ軸が変化するとともに途切れるが、溝のラインは西側より東側で残存状態がよい。1 号溝と切りあう部分において観察した土層から、クリーク跡の埋土とほぼ共通する灰褐色土に撹乱を受けており、クリークの流れや氾濫で 5 号溝の南側は流失したと見られる。また、そのためクリークに近い西側の遺存が悪いと判断される。幅 35 ～ 45 ㎝程度で、底面の標高に明瞭な高低差はない。埋土は暗褐色土から淡黒灰褐色土の 1 層の堆積である。4 号溝とは軸や埋土の共通性から、同時の並存や、本来連続しており、間の空隙は底面の浅い部分が削平されたという可能性も考えられる。出土土器から時期は古代と考えられる。

出土土器（第 113 図 11）

11 は土師器甕の口頸部で、短い口縁部は屈曲して外側へ開く。

6 号溝状遺構（図版 53・57、第 103・111 図）

調査区中央部よりやや北側に位置し、南北軸よりもやや北西－南東に振れた軸の溝で、3 号竪穴住居跡、1 号溝を切り、5 号溝に切られる。両端がそれぞれ調査区外へ延び、北側でクリーク跡により大きく撹乱を受ける部分がある。掘り返しにより 2 条の溝が切り合っていると見られ、その結果テラス状の部分が生じているが、クリーク跡付近は撹乱を受け、下部のみ残存する。上層の先行する溝の埋土は灰褐色土、下層の埋土は黒茶褐色土、黒褐色土と明瞭に異なる。出土土器より時期は古代と考えられ、3 号竪穴住居跡出土の須恵器杯蓋（第 105 図 10）が、本遺構からの混入品とすれば奈良時代と判断される。

出土土器（第 113 図 12・13）

12 は土師器杯の口縁部で、口縁と平行して内外面に墨痕が見られる。13 は須恵器杯身の口縁部である。端部がわずかに外傾する。

7 号溝（図版 53・58、第 103・111 図）

調査区南半の中央部付近に位置し、南北軸にほぼ沿って通っているが、南端部はやや東方向へ屈曲する。1 号溝を切り、8 号溝に切られる。南端部は調査区外へ延び、北端部は 8 号溝に切られ欠失するが、調査区外へ延びると見られる。また、一部クリーク跡により撹乱を受ける。掘り返しにより 2 条の溝が切り合っていると見られ、その結果テラス状の部分が生じる範囲もある。上層の先行する溝の埋土は暗茶褐色土、下層の埋土は黒灰褐色土と明瞭に異なる。幅は 60 ㎝程度である。出土土器より、古墳時代前期の時期と考えられる。

出土土器（第 113 図 14・15）

14 は土師器二重口縁壺の下部口縁と考えられ、上部口縁との接合部が見られる。15 は土師器高杯で、脚柱部は自然に広がり、屈曲部より下位で開く裾部は残存していない。杯部は接合部以外は欠失している。

8 号溝（図版 53・58、第 103・111 図）

調査区南半部の北側壁付近を通る溝で、北側では調査区長軸にほぼ沿う向きであるが、南側へ寄るにつれて東方向へやや屈曲していく。調査区北側の壁際では広い範囲にわたってクリーク跡により撹乱を受け欠失する。7 号溝、流路を切り、9 号溝に切られる先後関係が認められる。埋土は灰褐色土、暗灰褐色土の 2 層からなる。幅 50 ㎝程度で、深さ 15 ㎝程度である。図示できる遺物は出土していない。

9 号溝（図版 53・59、第 103・111 図）

調査区南端近くで、北側調査区壁際に位置する溝である。8・10 号溝を切り、北側は調査区外へ延び、南側は途切れる。幅は 50 ㎝程度で、深さ 10 ㎝程度と非常に浅く、埋土は灰褐色土の 1 層である。図示できる遺物は出土していない。

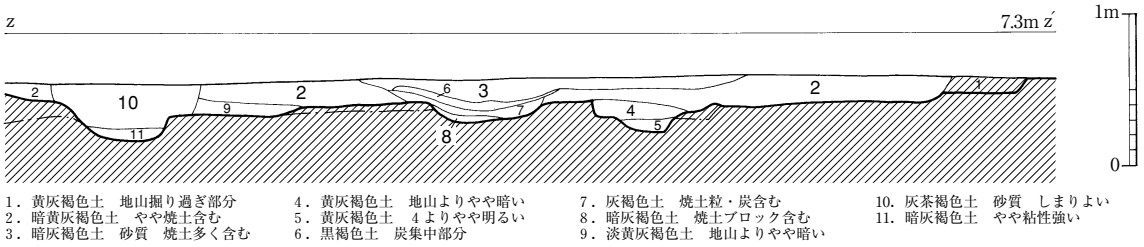
10 号溝（図版 53・59、第 103・111 図）

調査区南端近くに位置する溝で、1 号溝を切り 9 号溝に切られる。中央部分で屈曲しており、南北軸に近い部分と、東西軸に近い部分がある。両端は調査区内で途切れている。幅 60 ㎝、深さ 10 ～ 15 ㎝で、埋土は上層の淡黒灰褐色土と下層の黄灰褐色土からなる。図示できる遺物は出土していない。

（4）その他の遺構

1 号落ち込み（第 102・114 図）

調査区北側の長軸方向の南側壁際で、1 号竪穴住居跡の西側に位置する。埋土には焼土が集中して含まれる部分があり、検出した遺構のラインには直線的な部分が多いとともに平面プランは長方

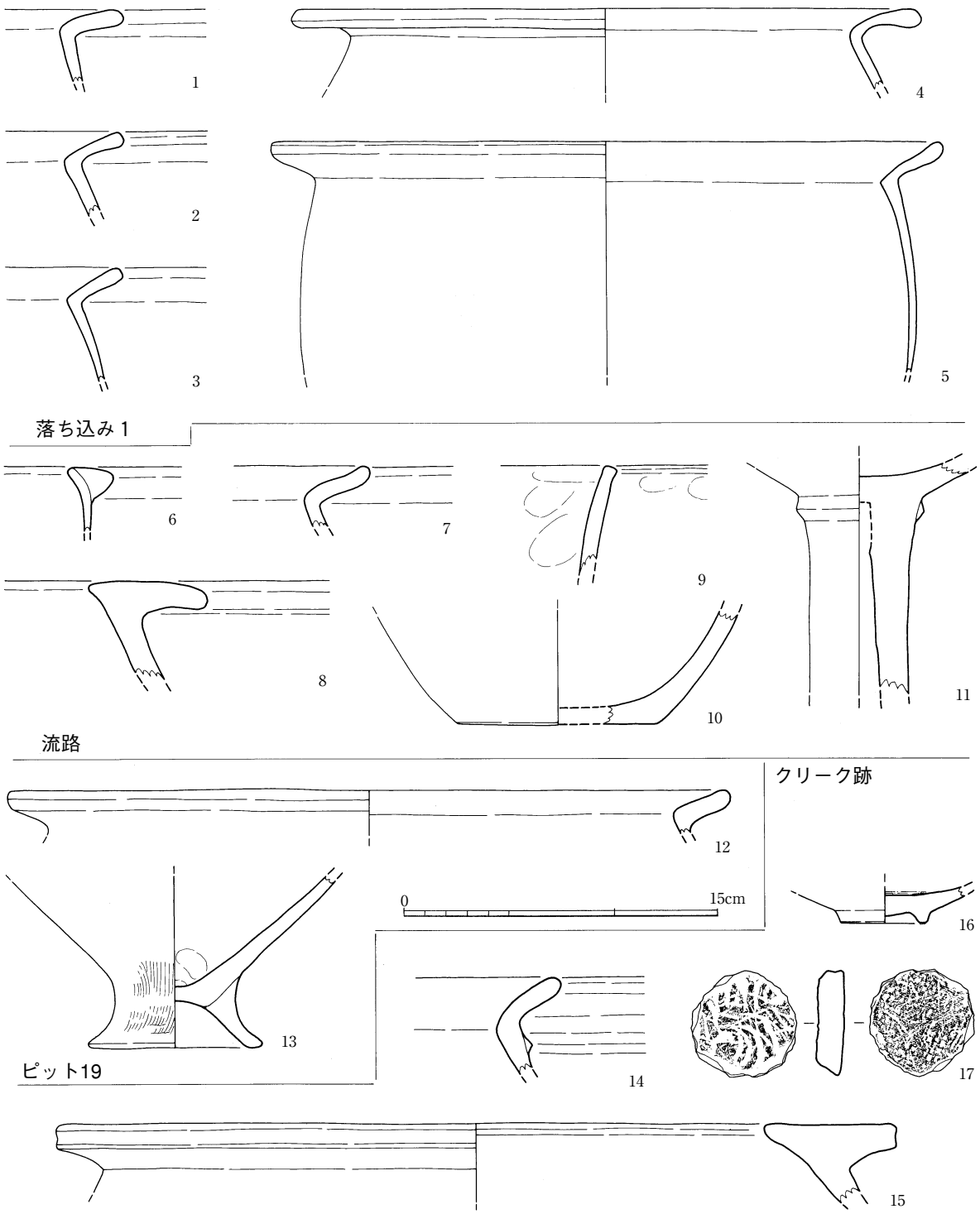


第 114 図　1 号落ち込み土層断面図（1/50）

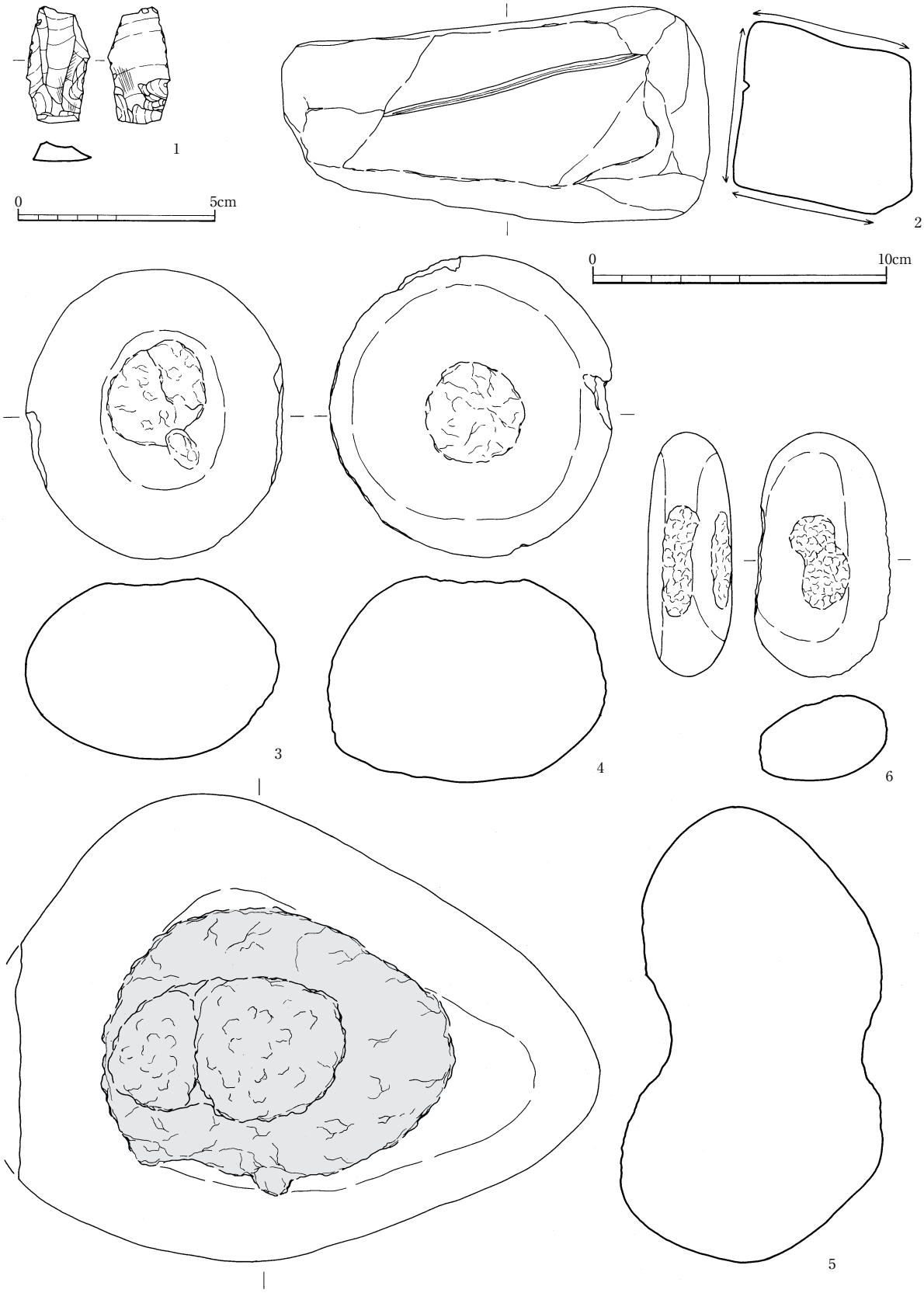
形に近いため、掘削前は竪穴住居跡の可能性が高いと考えた。しかし、底面は不整な起伏が多く、焼土の多い層は遺構が全体的にある程度埋没した後に堆積したものと見られ、炉跡や主柱穴も検出されなかったため、落ち込みと判断した。1号竪穴住居跡、2号土坑や1号溝に切られ、また掘削段階に内部で検出された3号土坑も、土層から本遺構を切ると確認された。出土土器より、弥生時代中期後半の時期と考えられる。

出土土器（第115図1～5）

1～5はいずれも弥生土器甕の口縁部から胴部にかけてである。1～4の口縁部は強く屈曲して開き、5の口縁部は強く屈曲するとともに、他より上方への立ち上がりがやや強い。



第115図　落ち込みおよびその他の出土土器実測図（1/3）



第 116 図　出土石器実測図（1 は 2/3、他は 1/2）

流路

調査区南半部に位置し、ほぼ南北に沿った軸で延びており、両端部が調査区外へ及ぶ落ち込みである。平面的に不整なラインで検出され、西側ではほとんどが7号溝に切られる形で限られる。壁の落ち込む傾斜は全体的に非常に緩やかであるが一様ではなく、底面も起伏が目立つ。7号土坑や1・7・9号溝など、周辺の切り合う全ての遺構よりも先行する先後関係である。出土土器には時期幅が見られるが、弥生時代中期後半に埋没したと考えられる。

出土土器（第115図6～11）

出土土器はいずれも弥生土器である。6は亀ノ甲系の甕の口縁部である。7は屈曲して開く甕の口縁部である。8は大型の甕の口縁部で、やや内側へ延びる鋤先状である。9は鉢の口縁部と考えられ、素口縁でわずかに外反気味に立ち上がる。10は鉢の底部である。11は高杯で、杯部と脚部の接合部外面には低い突帯が廻る。

（5）その他の遺物

その他の出土土器（第115図12～17）

12・13はピット19出土の弥生土器甕で、両者は同一個体の可能性がある。12はやや短い口縁部が屈曲して開き、13の底部は上げ底状である。

14～17はクリーク跡出土である。14は弥生土器甕の口縁部で、屈曲して外側上方へ延びる。外面には非常に低い突帯が付される。15は弥生土器の大型の甕の口縁部で、内側にも延びる鋤先状である。16は肥前系陶器碗の底部で、ケズリ出しによる高台が見られる。見込みには目跡が残存し、全体的に灰釉が施される。17は須恵器大甕の小片であるが、打ち欠きにより円盤状に整形されたと考えられる。外面には格子状タタキ、内面には同心円状の当具痕が見られる。

石器（図版60、第116図1～6）

1は黒曜石製の使用痕剥片で、8号溝出土である。片側に主要剥離面が見られ、両側縁に微細剥離が認められる。長さ2.0㎝、幅1.6㎝、厚さ0.5㎝で、重さ2.6gを測る。2は細粒砂岩製の砥石で、3号竪穴住居跡出土である。全体的に欠損が目立つが、砥面が3面残存する。内1面には溝状の窪みが見られる。表面は白色化し、風化が目立つ。長さ14.6㎝、幅7.5㎝、厚さ6.1㎝で、重さ767.8gを測る。3は凝灰岩製の凹石で、1号溝南半部の出土である。片面のみが使用され、側縁の一部が叩石として使用されたと見られる。長さ9.7㎝、幅8.6㎝、厚さ7.2㎝で重さ734.3gを測る。4は凝灰岩製の凹石で、1号溝出土である。片面のみが使用され、側縁が部分的に叩石として使用されたと見られる。長さ10.3㎝、幅9.6㎝、厚さ7.9㎝で重さ940.0gを測る。5は凝灰岩製の凹石で、2号土坑出土である。両面が使用されており、特に片側の使用部位の範囲が広く、大きく窪み、その内部には暗黒茶褐色の付着物が見られる。長さ19.9㎝、幅15.9㎝、厚さ8.9㎝で重さ3396.5gを測る。6は玄武岩製の叩石で、2号竪穴住居跡出土である。側縁が部分的に使用され、その中で特に1箇所の使用が顕著である。また、上面にわずかに凹石としても使用された痕跡が見られる。長さ8.3㎝、幅4.6㎝、厚さ2.9㎝で151.2gを測る。

4　小結

5次調査区では、遺構の検出状況から上部の大幅な削平が考えられ、その中で弥生時代中期後半が主体的な時期である。それに先行する遺物も散見されるが、遺構の時期を示すのはピット19出土の弥生時代中期前半のもののみである。弥生時代中期後半の遺構としては、2～4・7号土坑、1・3－2号溝状遺構、1号落ち込み、流路があり、ほぼ同時期でありながら複数で切り合う点は、集落内の生活行為が活発な時期を表していると言える。特に調査区を縦貫する1号溝状遺構は集落の形成を捉える上で重要な要素である。以降では、1号竪穴住居跡が弥生時代後期で、弥生時代終末から古墳時代中期にかけては、2・3号竪穴住居跡、1・5・6号土坑、2・7号溝と続き、古代にも5・6号溝があり、断続的ながら集落地として長期にわたり利用されたことがわかる。

３　まとめ

山門牛島遺跡では、昭和63年度のほ場整備事業に伴う瀬高町教育委員会（現みやま市教育委員会）が実施した発掘調査を最初の調査とし、本報告所収である県道本吉小川線建設に伴う発掘調査が２～５次調査まで行われた。ほ場整備事業に伴う１次調査は、遺跡北東部の道路と幹線水路部分を対象として十字にトレンチを入れたような調査であり、２～５次調査区は遺跡を北東から南西に向けて直線的に調査しており、遺跡の南部を縦断している。

この結果、遺跡の南部については、遺構の変遷や旧地形が明らかになった。遺跡は本吉地区の丘陵から派生する微高地上に位置しているが、この微高地は丘陵の谷から流れる流路によって北東から南西方向に削られ、細長い微高地となっていることがわかった。地形的制約のある立地に集落が営まれるため、一貫して大規模な集落は形成されていない。現在の地形で見ると本遺跡の北西にある朝日集落が最も近い集落であることから、ここに母村集落があったのではないだろうか。

弥生時代前期から中期中葉

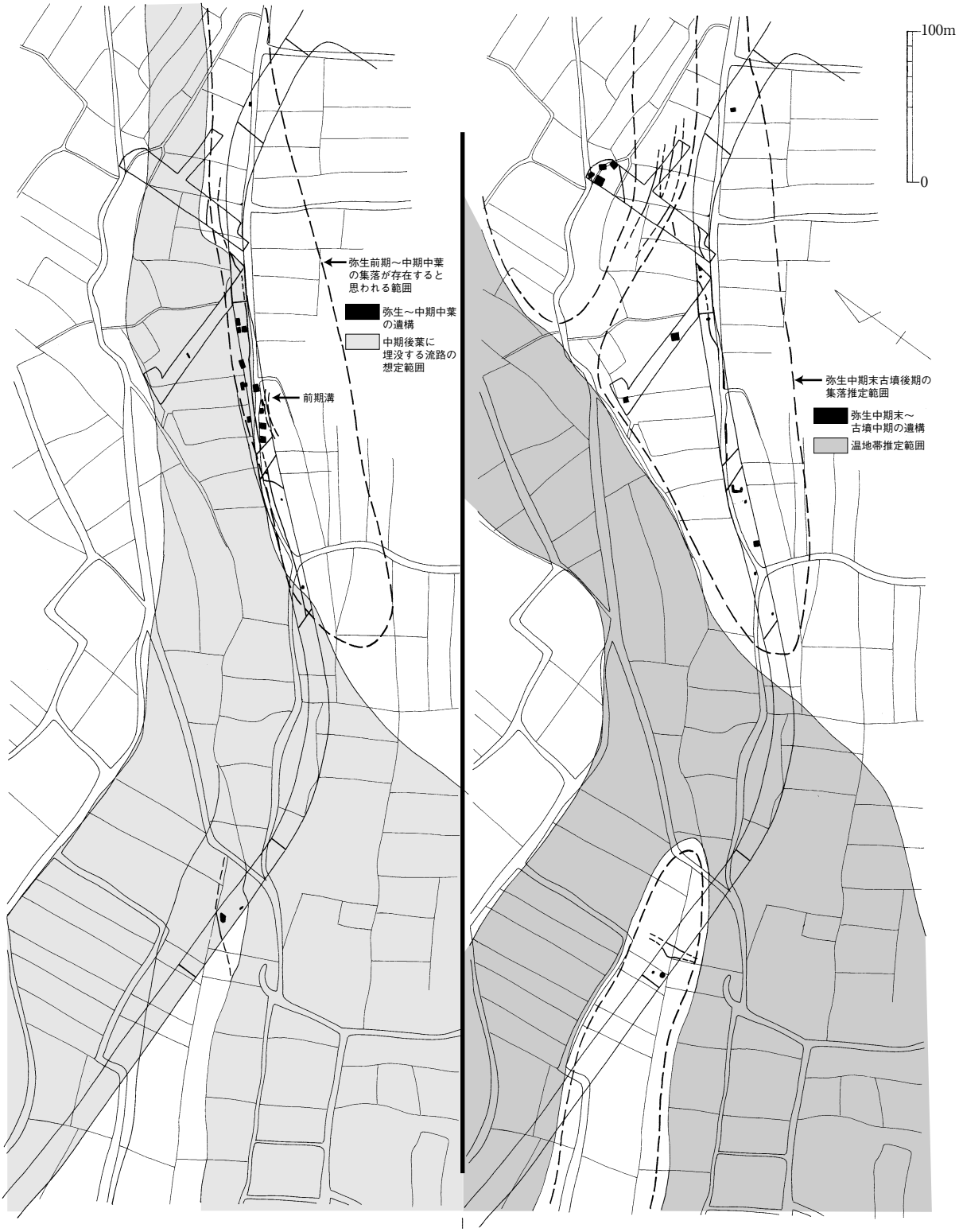
山門牛島遺跡内には縄文時代の遺構は見られず、弥生時代前期になって集落が進出している。１次調査区と３次調査１区から弥生時代前期の遺構が検出されており、後者の10号溝状遺構の西側には前期の遺構はなく、この溝状遺構の東側に集落があった可能性がある。しかし、本吉地区の路線内の試掘調査では遺跡の存在が確認されておらず、１次調査も南に延びていないことから、集落域は小規模で細長いものと思われる。

中期初頭になると２次調査区と３次調査１区北端の流路に土器が入るようになる。この流路は規模や出土遺物から見て１次調査Ｂ区の東支流と繋がるものと思われる。この流路は規模が大きく、短期間に形成されたものではないだろう。出土遺物のうち、弥生前期の土器はわずかで、中期初頭のものから増えるが、これはこの流路付近まで中期集落域が拡大したためであろう。前期の土器は混入ではなく、すでに集落が存在していたのではないだろうか。中期初頭から中葉の遺構はこの流路の南側に展開しており、３次調査１区の掘立柱建物跡群は時期が特定しにくいがこの時期に属するものと見られる。５次調査区の南西側の路線内の試掘調査の結果は、遺物をほとんど含まない流路のみで、他に遺構が検出されていないことから、５次調査区がこの集落の南限だろう。この５次調査区南側の流路は、３次調査２区東部の２・３次調査の流路と同じものだろう。

弥生時代中期後葉から古墳時代初頭

２次調査･３次調査１区の流路の埋没は中期中葉であり、これに伴って集落はさらに北西に移動し、１次調査Ａ・Ｂ区で方形竪穴住居跡が見られるようになる。３次調査２区西部には南北方向に走る大型の溝である１号溝状遺構が掘られ、それより西には竪穴住居跡と小型の掘立柱建物跡各１基と祭祀遺構群が存在する。３次調査２区以西の路線内では、試掘調査の結果遺構が確認されていない、３次調査２区西部は１号溝状遺構で区画されており、山門牛島集落とは隔絶している。南西部に位置する現在の松田集落に展開する集落の先端部分であろう。１号溝状遺構は直線的であり、南端部がわずかに東側に湾曲している。調査区南側は２･３号流路の延長と交差することが予想されるので、集落を巡る環濠ではない。条濠として区画するのが目的なのではないだろうか。１号溝状遺構は幅は広く、深いので単なる区画溝ではなく、北側の旧河川につないで水運に利用していたのかもしれない。

後期出土の遺物の中には、豊前地方の高杯や近畿地方の壺･高杯や、肥後中部の甕が存在しており、それまでの肥前や肥後北部地方の土器に加えて、交易範囲が広がったことがわかる。



第 117 図　山門牛島遺跡遺構変遷図 1 （1/4, 000）

古墳時代初頭になると、２次調査区には竪穴住居跡と井戸があり、３次調査１区の流路上面の窪みには土器が捨てられており、廃棄土坑もある。この流路が完全に埋没していなかったことと、３次調査１区の流路以南に古墳時代初頭の遺構が見られず、流路以北がこの時期の集落域であったようだ。遺物は布留１期段階までのものしか見られないようで、それ以降は集落が廃絶する。その後、藤ノ尾車塚古墳や権現塚古墳などの古墳が出現していることから、古墳を築造する有力氏族による集落の再編が行われた可能性がある。

古墳時代後期から奈良時代以降

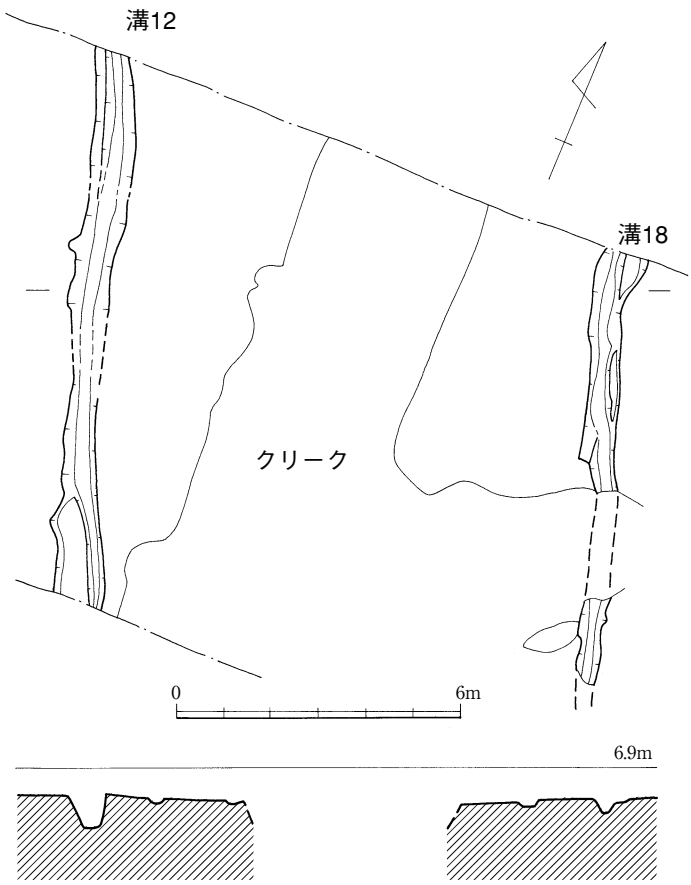
古墳時代中期の遺構は見られず、後期になって再び集落が展開するが、竪穴住居跡の集中部が数グループあるのみの小規模な集落になる。

奈良時代には本吉地区に条里が施工されており、ほ場整備前の旧地形には表層条里が残されていた。３次調査１区の７号溝状遺構は奈良時代のもので、表層条里の北端部に位置している。３次調査２区の北西から南東に走る溝は表層条里方向とほぼ同じ方向であることから、条里に伴う溝であろう。これらの溝からは瓦器椀が出土しているので鎌倉時代前期までは存続したようだ。方向が異なるものがあるのは条里の方向が変わったのかもしれない。３次調査２区東部の流路の下には弥生土器をわずかに含む硬い包含層が水平に堆積しており、５次調査区との間の遺構の無い範囲にも広がっていたようだ。この包含層が水抜けを防いだことで、水田化できたのだろう。つまり牛島遺跡の立地する砂質土の細長い微高地を大畦畔として、遺跡の北西側に流れる流路の水を導水し、南東側の低湿地を条里水田化したものと考えられる。

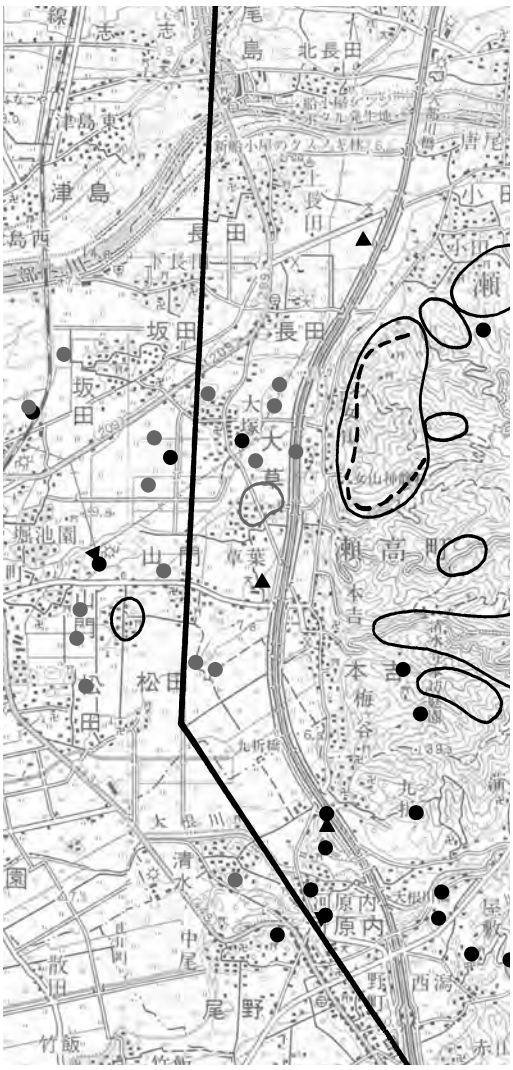
第 118 図　山門牛島遺跡遺構変遷図２（1/4, 000）

３次調査２区の波板状遺構はこの条里水田に入るための通路であったと考えられ、２区より西には遺跡が存在していないことから、北西に位置する山門ガラン遺跡の集落が水田を経営していたのではないだろうか。本吉条里については、第３分冊『本吉遺跡』に詳述を譲りたい。

なお、古代官道である西海道は、山門地区を走ることが想定されている。筑後市内までの路線は発掘調査による成果から明らかになっているが、矢部川を越えると地表面の痕跡が残っておらず、どこを通るかはわかっていない。県道本吉小川線の路線が山門地区を東西に横断することから、官道がかかることが期待されたが、。試掘の精度の問題やほ場整備での削平の可能性もあるが、２区調査区の東西両側に確実な痕跡は残っていない。



第 119 図　山門牛島遺跡 3 次 2 区 12・18 号溝状遺構（1/160）



第 120 図　西海身道推定線（1/5,0000）

３次調査２区の 12・18 号溝状遺構は N-18°-W 方向に併走しており、溝の中心間で 10.6m、内法で 9.8 から 10.1m を測る。官道の側溝にしてはやや直線的でないので、条里に伴う溝とも考えられるが、条里の坪境溝にしては間隔が狭すぎるうえに、同間隔で東西に溝が表れず、この２本だけが併走している。

撹乱が多く、溝間も削平が及んでおり、道路状遺構の側溝であることを示す証拠はない。しかし、この位置に条里区画と同方向に走っていると仮定すれば、官道は条里区画に達する前に南東方向へ折れ曲がり、条里区画内の坪境付近に取り込まれていることになる。前述したように、条里は遺跡の立地する微高地の長軸方向を基準としているので、先に条里の軸方向があって、そこに道路が計画されたと考えられる。現段階では官道の側溝の可能性を指摘するにとどめ、是非については今後の調査・研究に委ねたい。

以上、２次から５次までの発掘調査では、山門牛島遺跡の南側の変遷の解明のほか、本吉条里の北限や西海道の可能性のある溝を確認できたことを成果としたい。（秦）

参考文献

瀬高町教育委員会 1992『山門遺跡群Ⅱ』瀬高町文化財調査報告書第８集

図　版

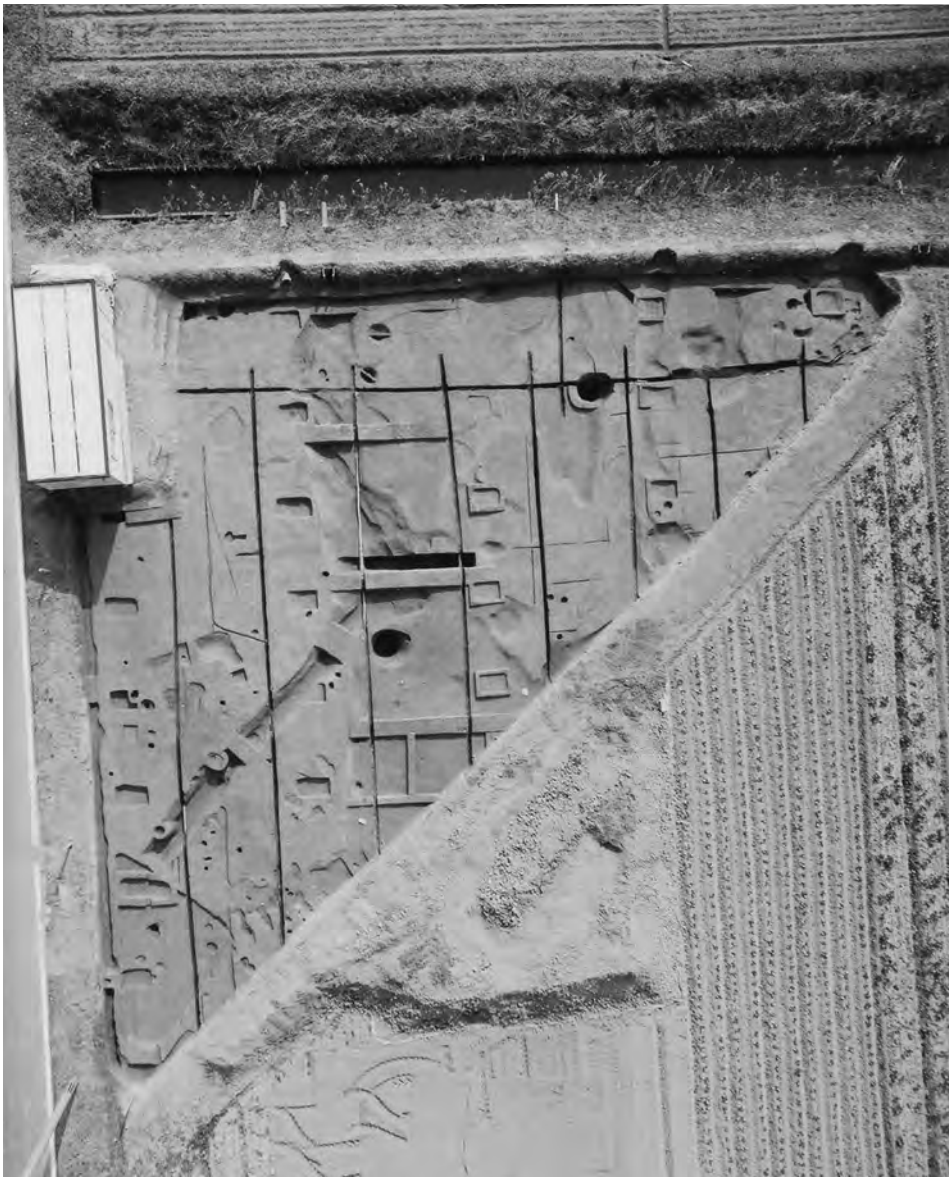
1　山門牛島遺跡遠景（西から）

2　山門牛島遺跡遠景（東から）

図版２

１　山門牛島遺跡
２次調査区遠景（南西から）

２　山門牛島遺跡
２次調査区全景（北から）



１　山門牛島遺跡
　２次調査区全景（下が北）

２　１号竪穴住居跡（西から）

図版４

１　１号井戸遺物出土状況１
（南東から）

２　１号井戸遺物出土状況２
（南から）

３　１号井戸の木材出土状況
（西から）

１　２号井戸（東から）

２　１号溝状遺構（南から）

２　流路土層堆積状況（南東から）

3－2

3－3

3－5

6－1

6－4

6－5

6－6

6－7

6－8

6－9

6－10

6－11

6－12

出土遺物１

7-14

17-39

25-142

7-15

28-1
28-3
28-5
28-4

10-1

28-6
28-7
28-8
28-9
29-10
29-11

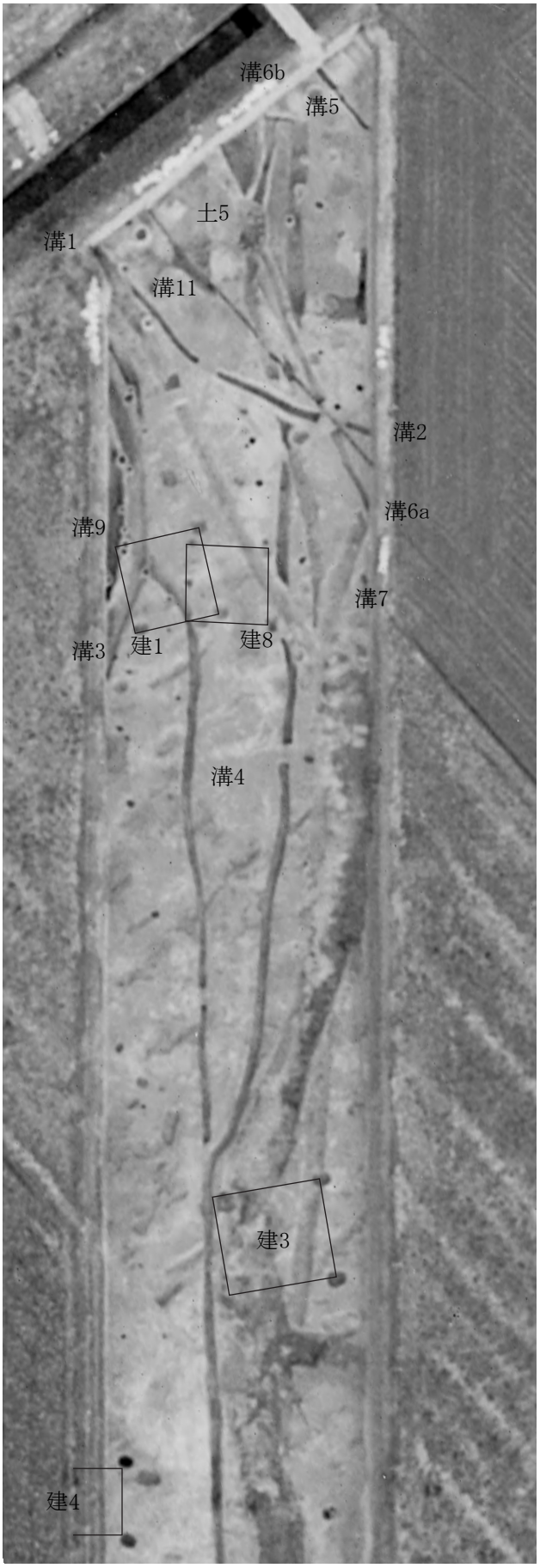
15-15

29-12
29-13
29-14
29-15
29-18
29-16
29-17
29-19
29-20

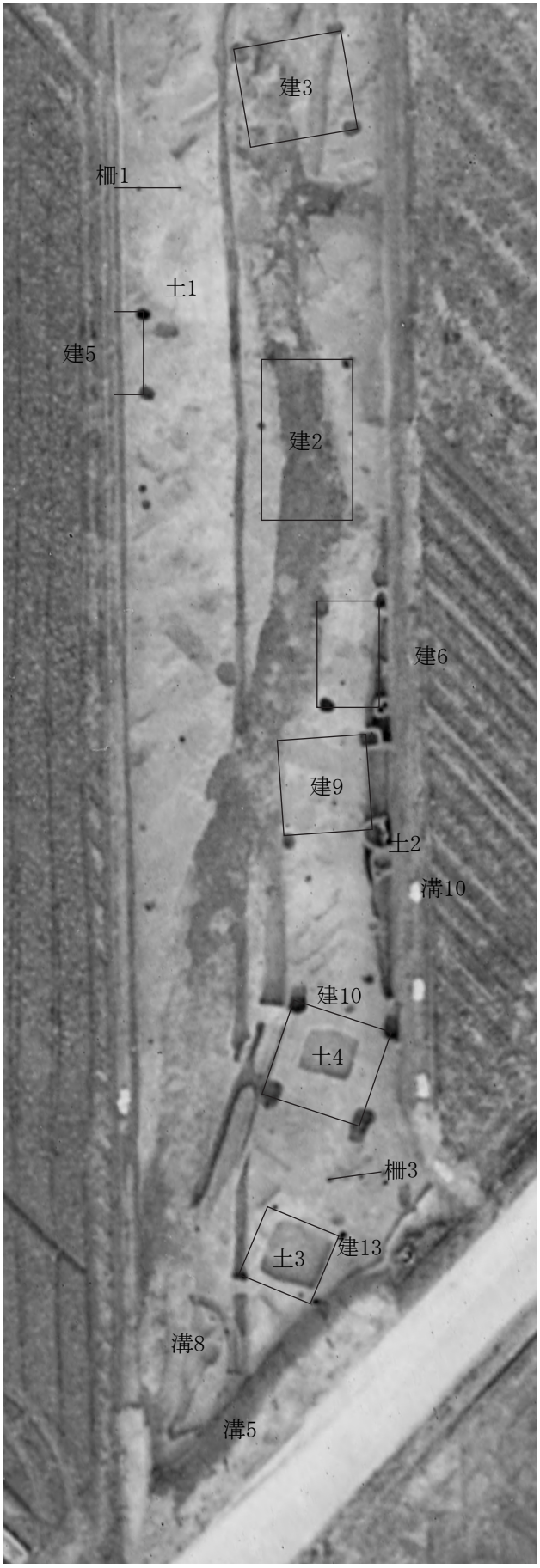
出土遺物２

１　山門牛島遺跡３次調査１区遠景（西上空から）

２　同上全景（上空から）

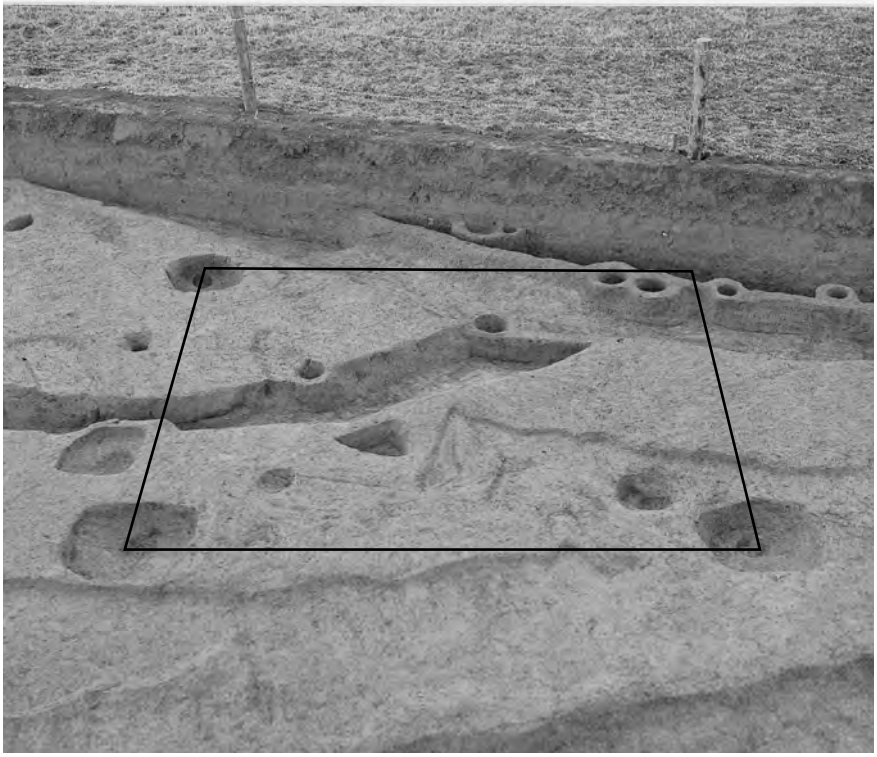


1　山門牛島遺跡調査１区北半全景（上空から）

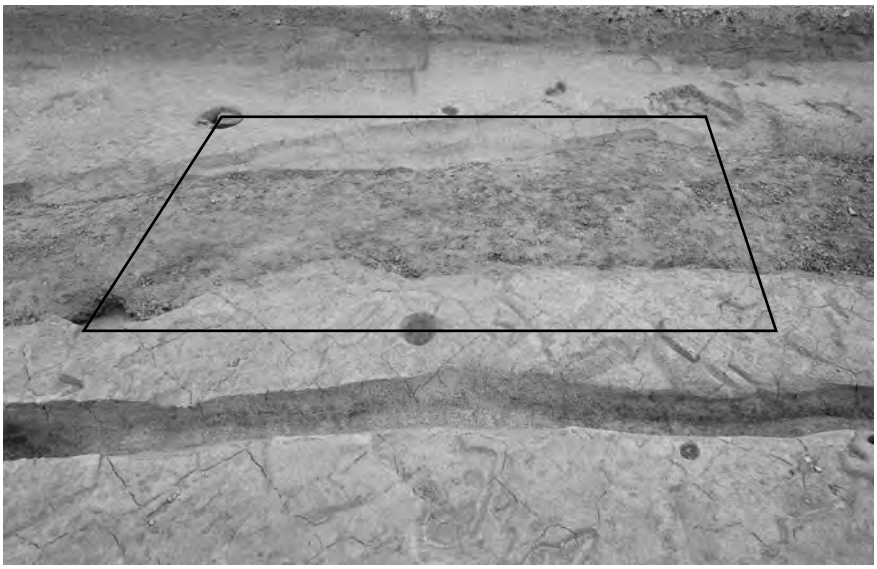


2　同左南半全景（上空から）

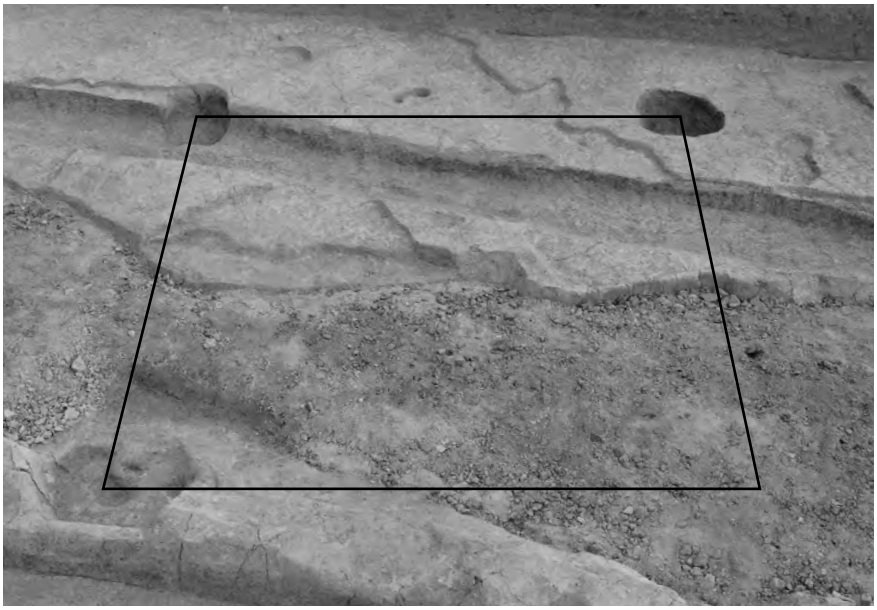
図版 10



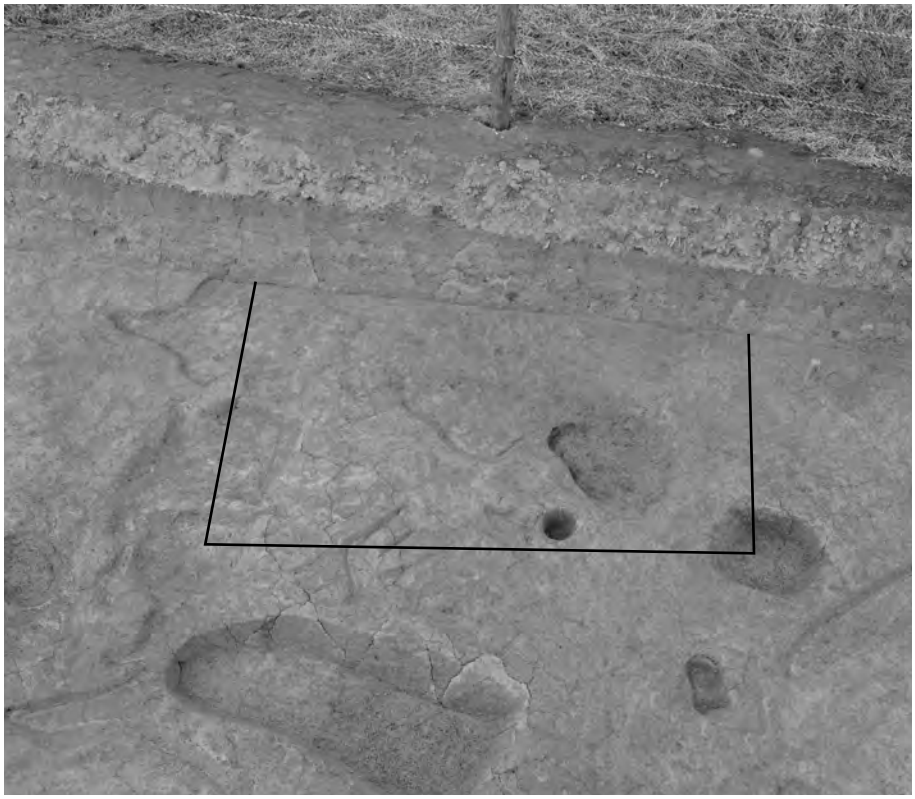
1　１号掘立柱建物跡（東から）



2　２号掘立柱建物跡（西から）

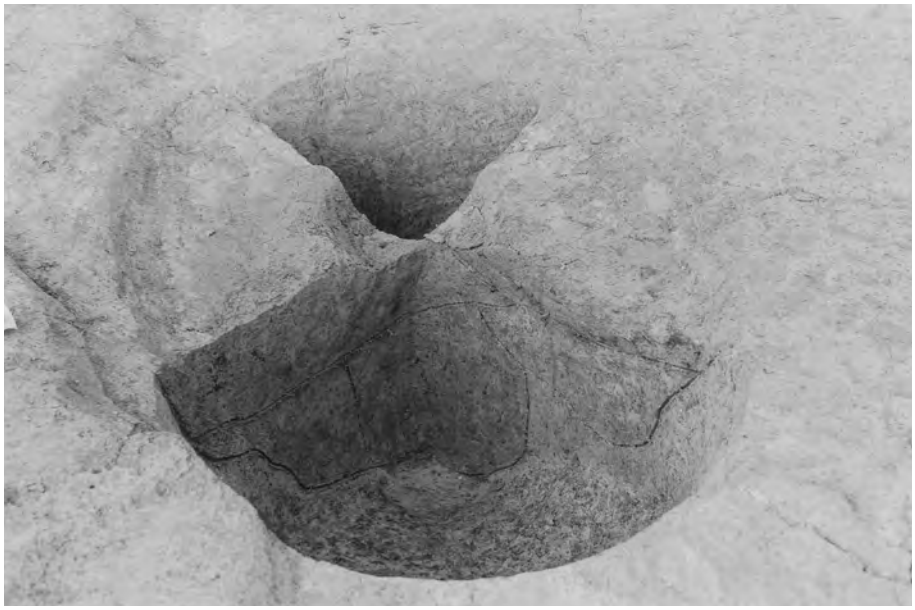


3　３号掘立柱建物跡（西から）

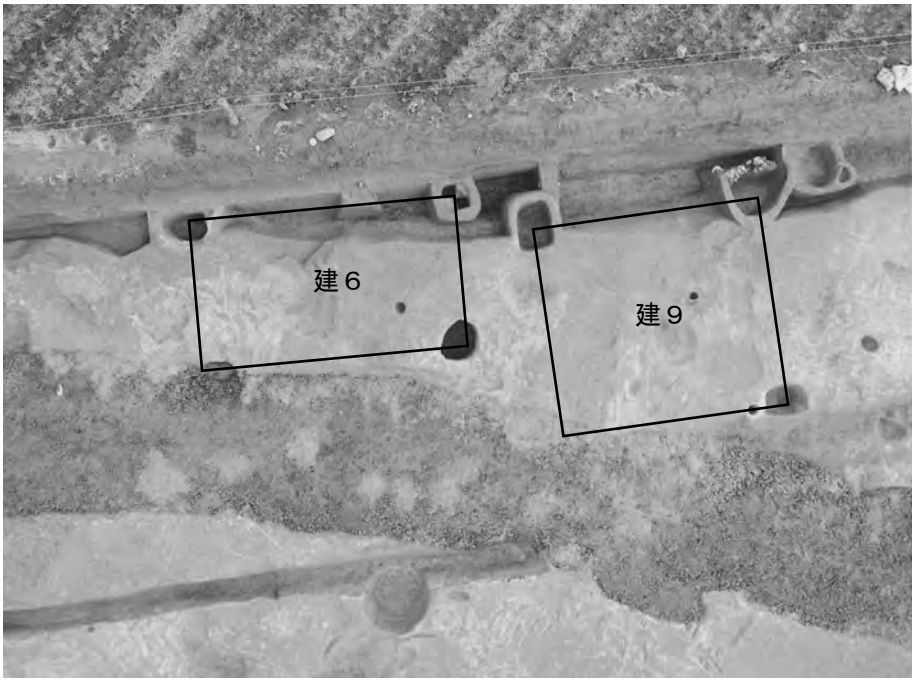


1　４号掘立柱建物跡（東から）

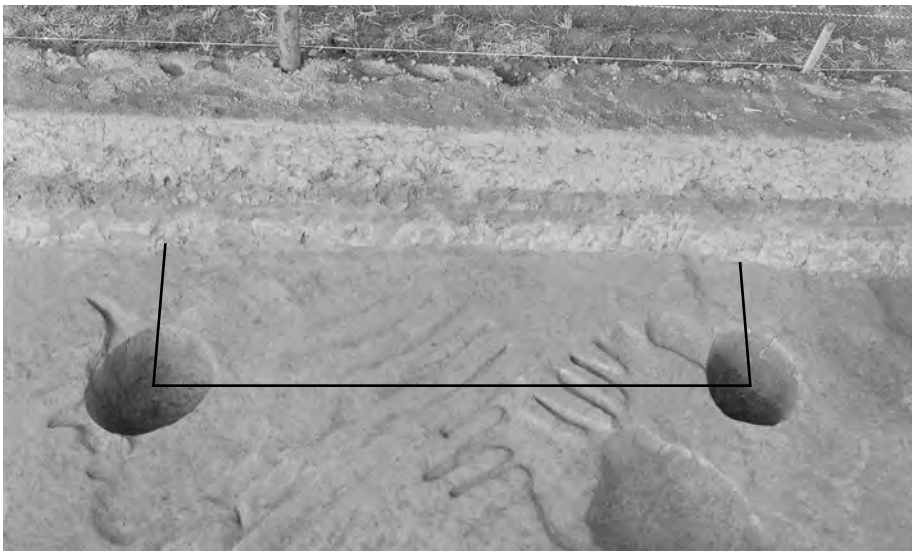
2　５号掘立柱建物跡（東から）



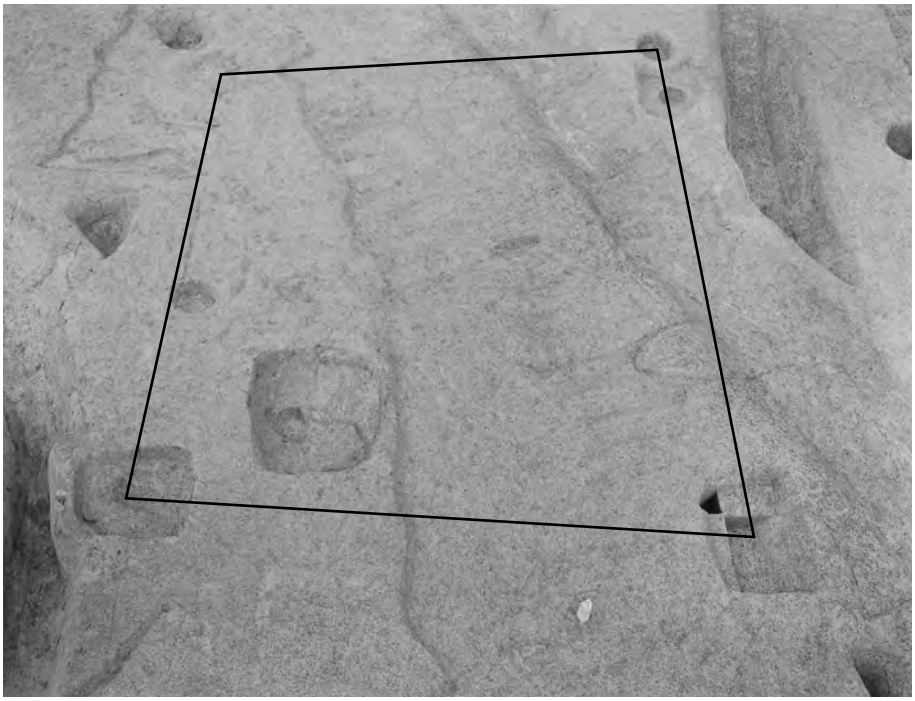
3　同上柱１土層断面
（南東から）



1　６・９号掘立柱建物跡
（上空から）



2　７号掘立柱建物跡
（東から）



3　８号掘立柱建物跡
（南東から）

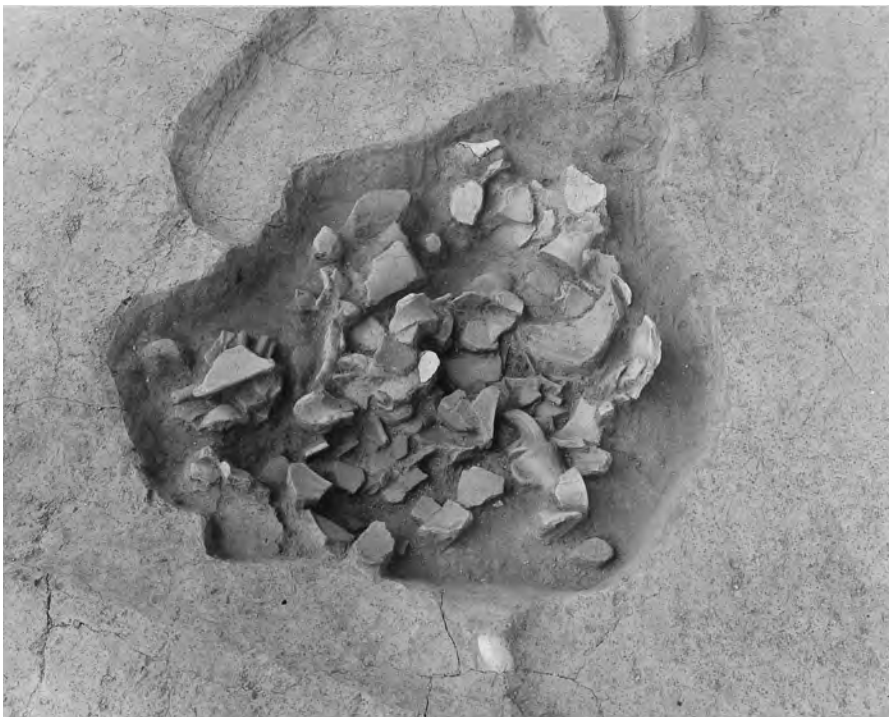
1　10号掘立柱建物跡・
4号土坑（上空から）

2　同上柱２土層断面
（南西から）

3　11号掘立柱建物跡
（東から）

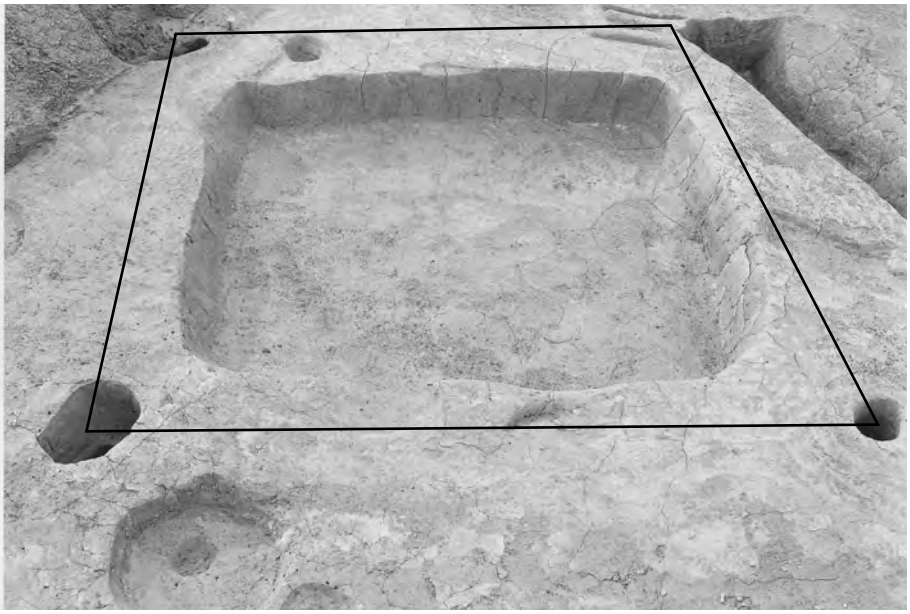
図版 14

1　12号掘立柱建物跡
柱３土層断面（北東から）



2　１号土坑（東から）

3　２号土坑（南東から）



1　12号掘立柱建物跡・３号土坑
（北東から）

2　３号土坑土層断面１（北から）

3　同上土層断面2（南から）

4　４号土坑土層断面（北東から）

1　５号土坑（南東から）

2　１号溝状遺構土層断面１（北西から）

3　同左土層断面２（南東から）

4　２号溝状遺構土層断面（南西から）

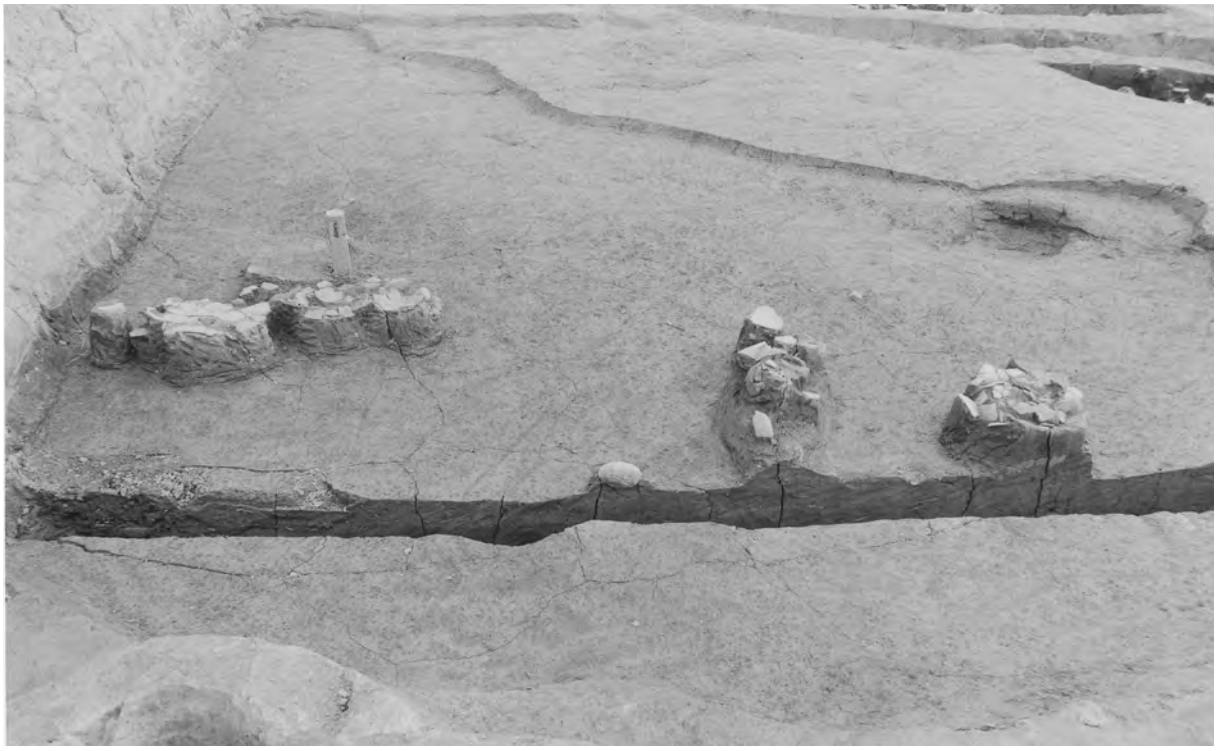
5　４号溝状遺構土層断面（北東から）

6　５・６号溝状遺構土層断面（北東から）

1　８号溝状遺構（北東から）

2　10号溝状遺構土層断面（南東から）

3　流路上面遺物出土状態（南西から）



1　流路上位遺物出土状態（西から）

2　流路完掘状態（南西から）

3　流路土層断面（北西から）

39-24

41-11

43-1

41-5

41-6

43-3

41-8

41-7

43-9

41-9

42-1

43-10

41-10

42-2

43-11

出土土器 1

46-12

46-13

49-3

49-5

56-3

56-4

54-3

55-14

55-13

56-9

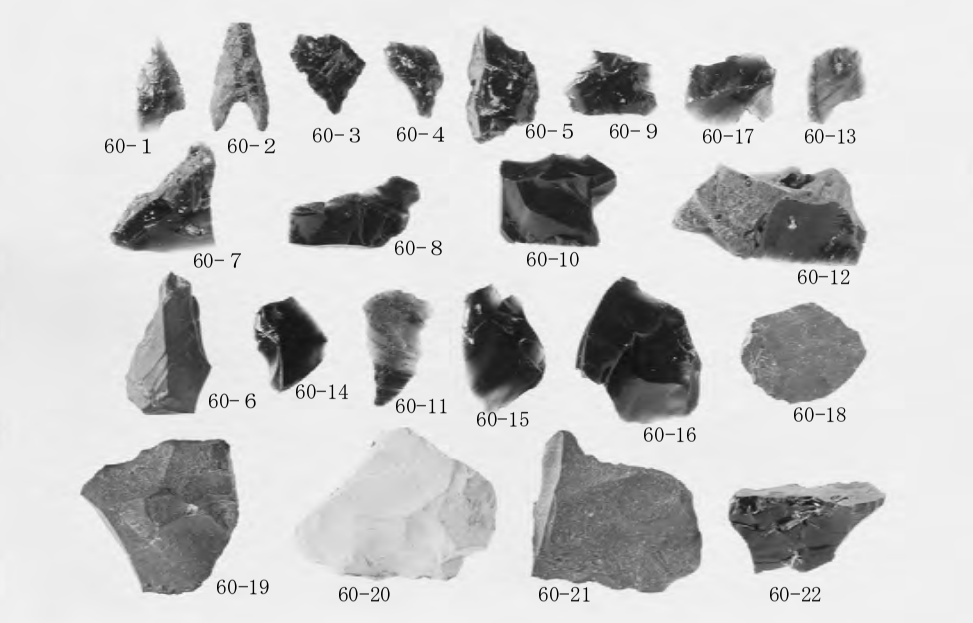
56-8

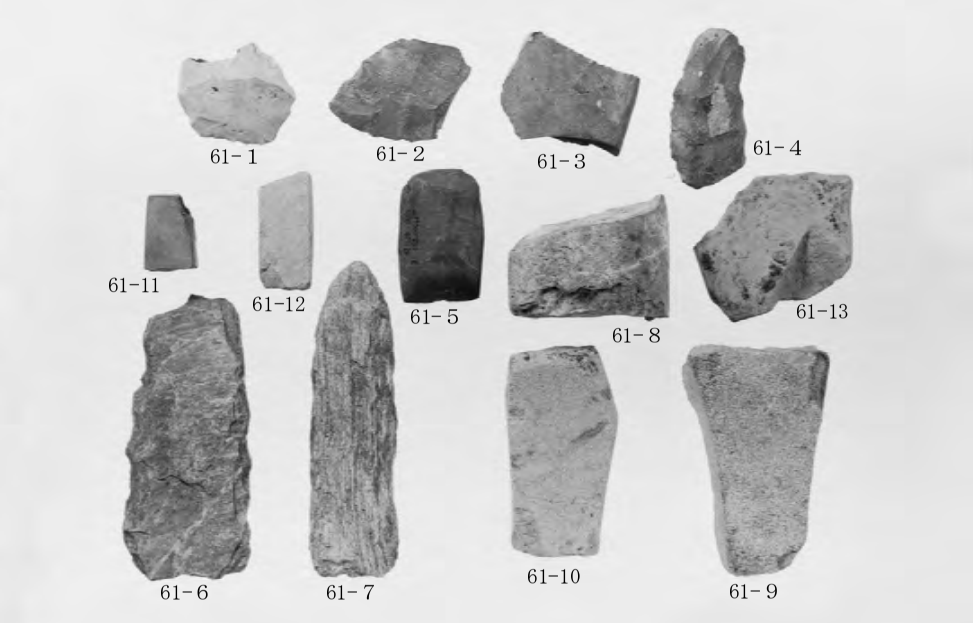
56-10

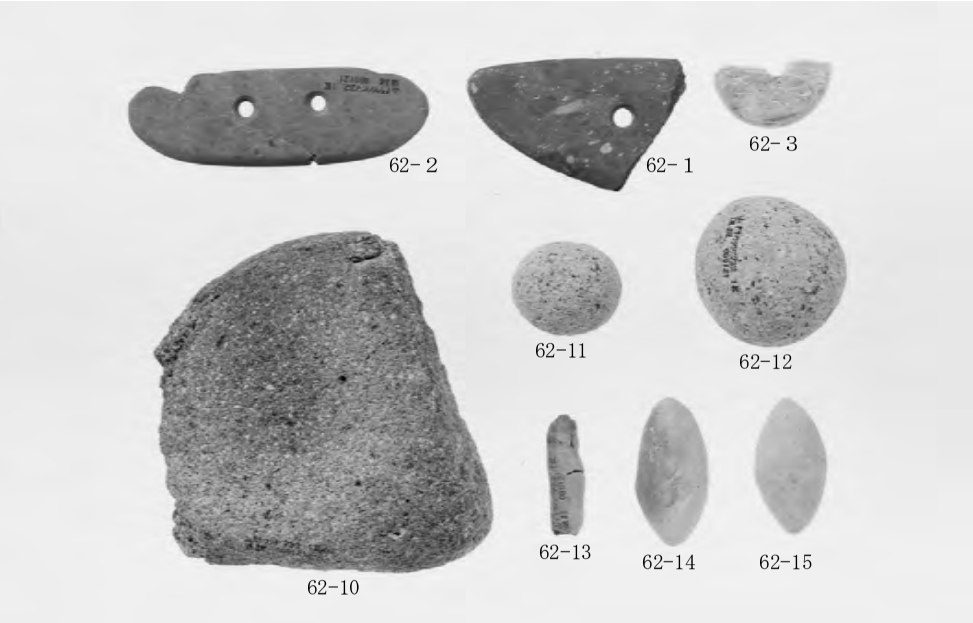
55-18

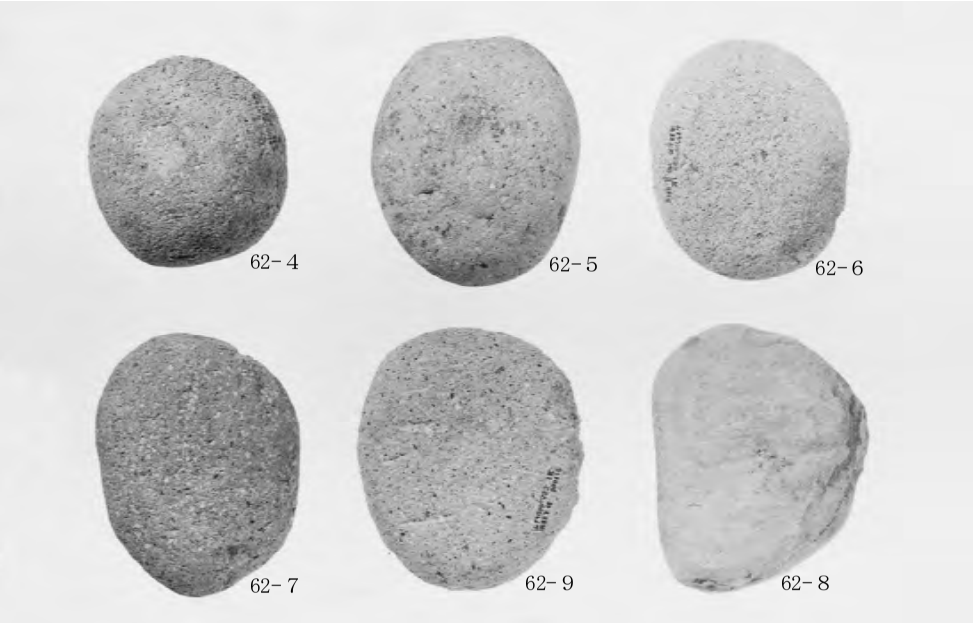
56-11

出土土器２









出土石製品・土製品

図版 21

図版 22

1　山門牛島遺跡３次２区
遠景（西上空から）

2　同上西半部（上空から）

3　同上東部（上空から）

1　山門牛島遺跡３次調査２区東半全景（西から）

2　１号竪穴住居跡（北から）

3　同上炉跡（北から）

4　同左屋内土坑土層断面（東から）

1　１号土坑（南から）

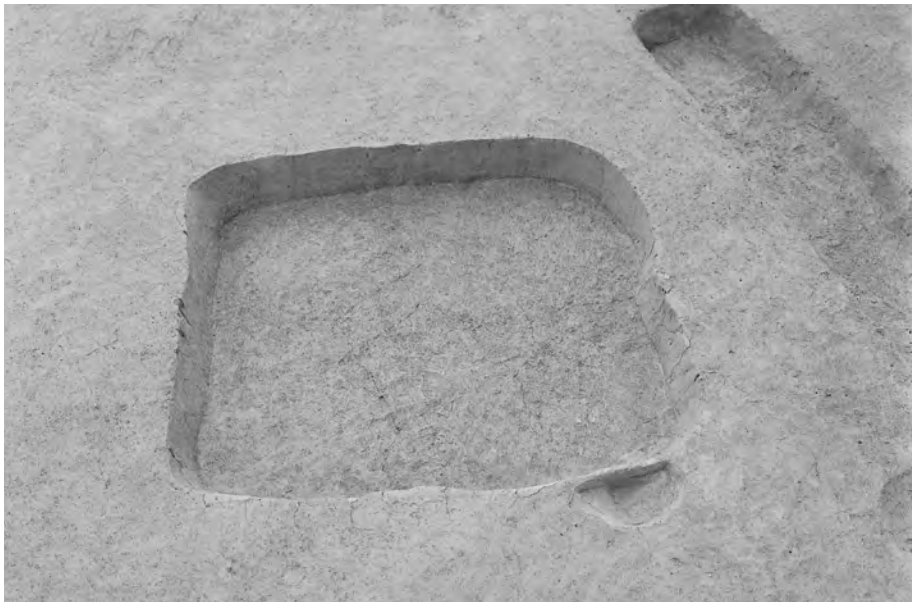
2　同上土層断面（南東から）

3　２号土坑（南から）

4　同上土層断面（西から）

1　３号土坑（北東から）

1　同上土層断面（北東から）



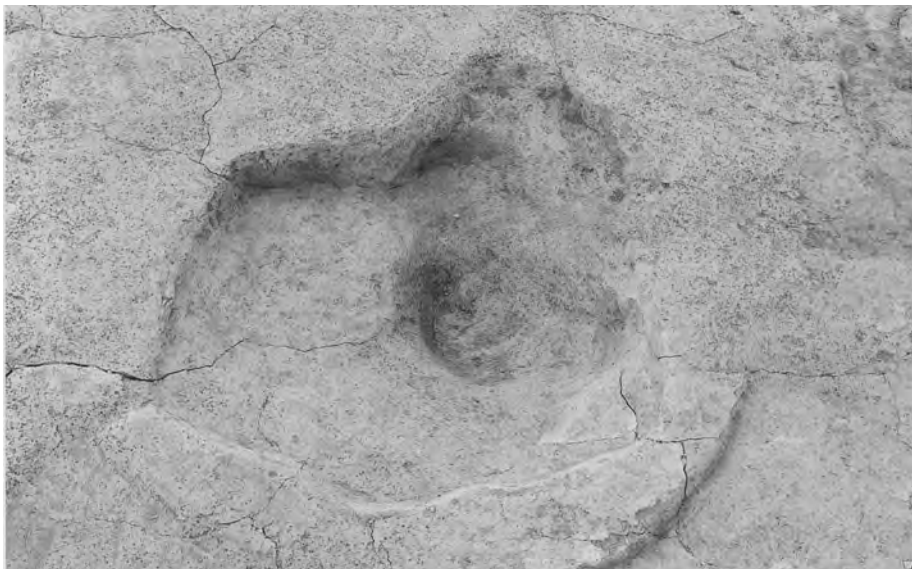
3　４号土坑（北から）

4　同上土層断面（北東から）

1　５号土坑掘り上り状況
（北から）

2　同上土層断面
（北から）

3　６号土坑遺物出土状態
（西から）



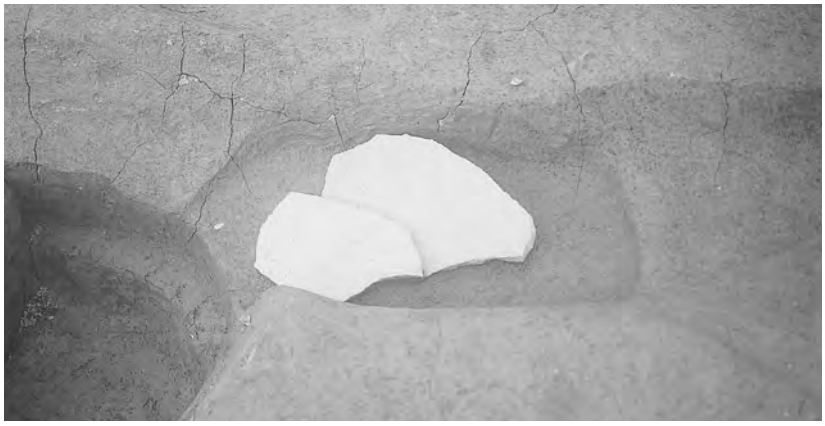
4　同上掘り上り
（西から）

1　７号土坑（南から）

2　７号土坑・12号溝状遺構
土層断面（北から）

3　８号土坑（南から）

4　同上土層断面（南から）



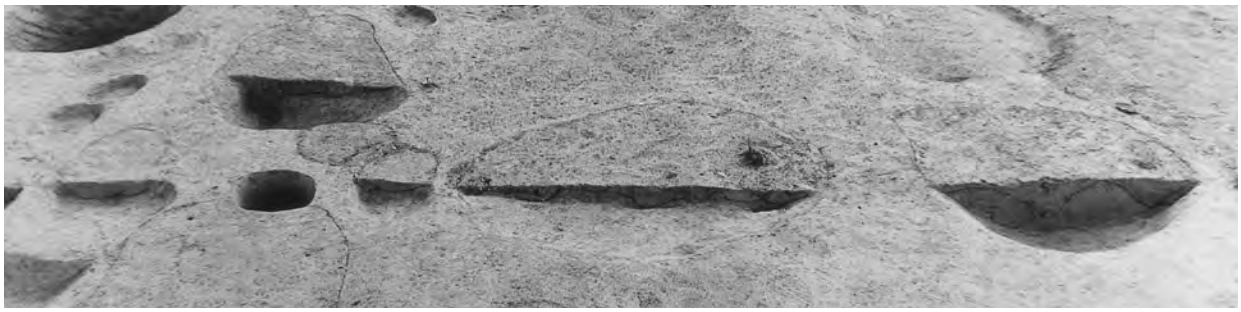
5　１号墓（南東から）

1　波板状遺構群検出状況（西から）

2　同上完掘状況（西から）

1　１・２波板状遺構東部土層断面（南から）

2　同上中部土層断面１（南から）



3　同上２（南から）

4　２号波板状遺構北端完掘状況（西から）

1　３号波板状遺構
土層断面（南から）

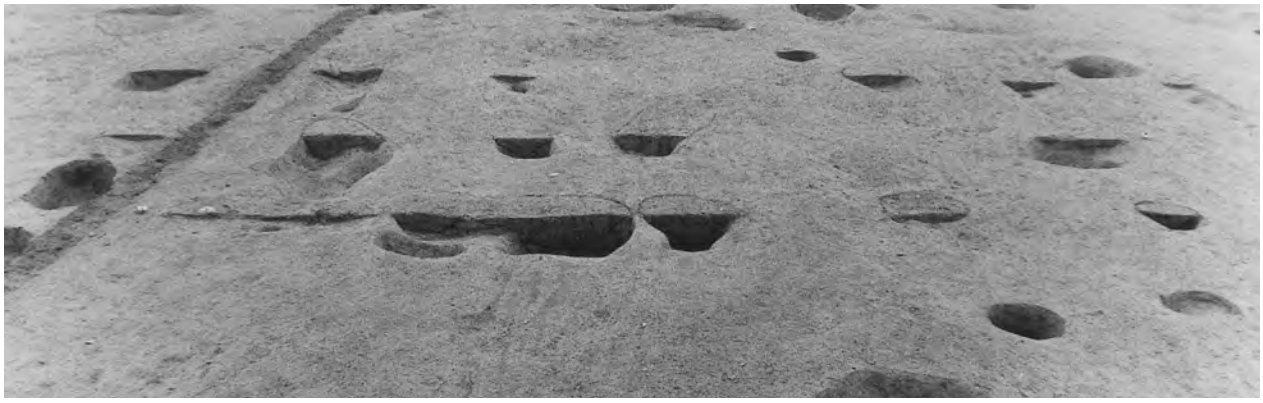
2　４・６・７号波板状
遺構土層断面
（北から）

3　５号波板状遺構
北部土層断面１
（南から）

4　同上北部上層
断面２（南から）

5　同上南部土層
断面１（北から）

6　同上南部土層
断面２（南から）



1　６・７号波板状遺構土層断面（北から）

2　８号波板状遺構北部土層断面（南から）

3　10号波板状遺構土層断面１（北から）

4　同上２（北から）

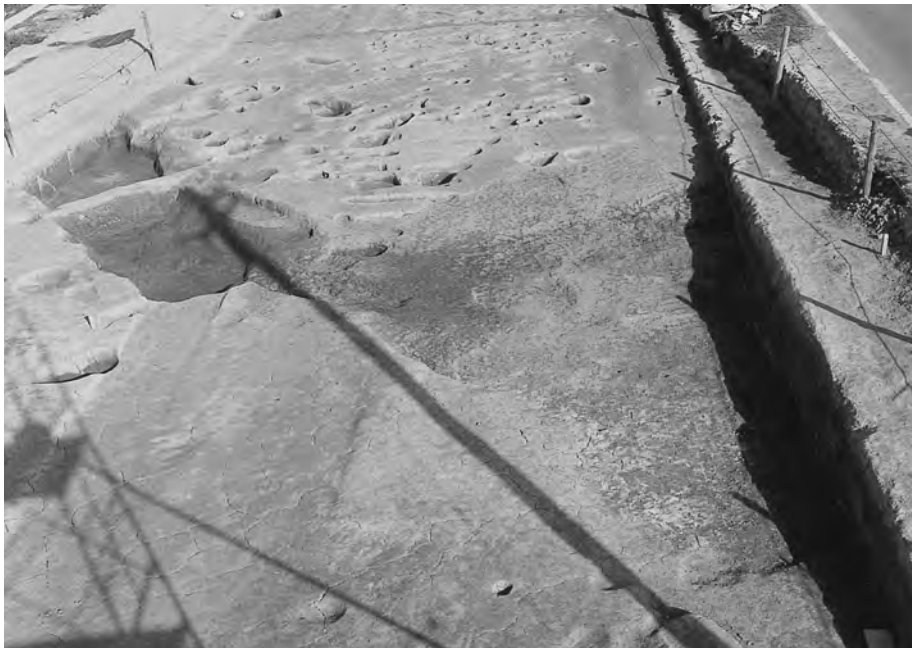
1　11号波板状遺構土層断面（南から）

2　1号溝状遺構
（西上空から）

3　同上遺物出土状態（東から）

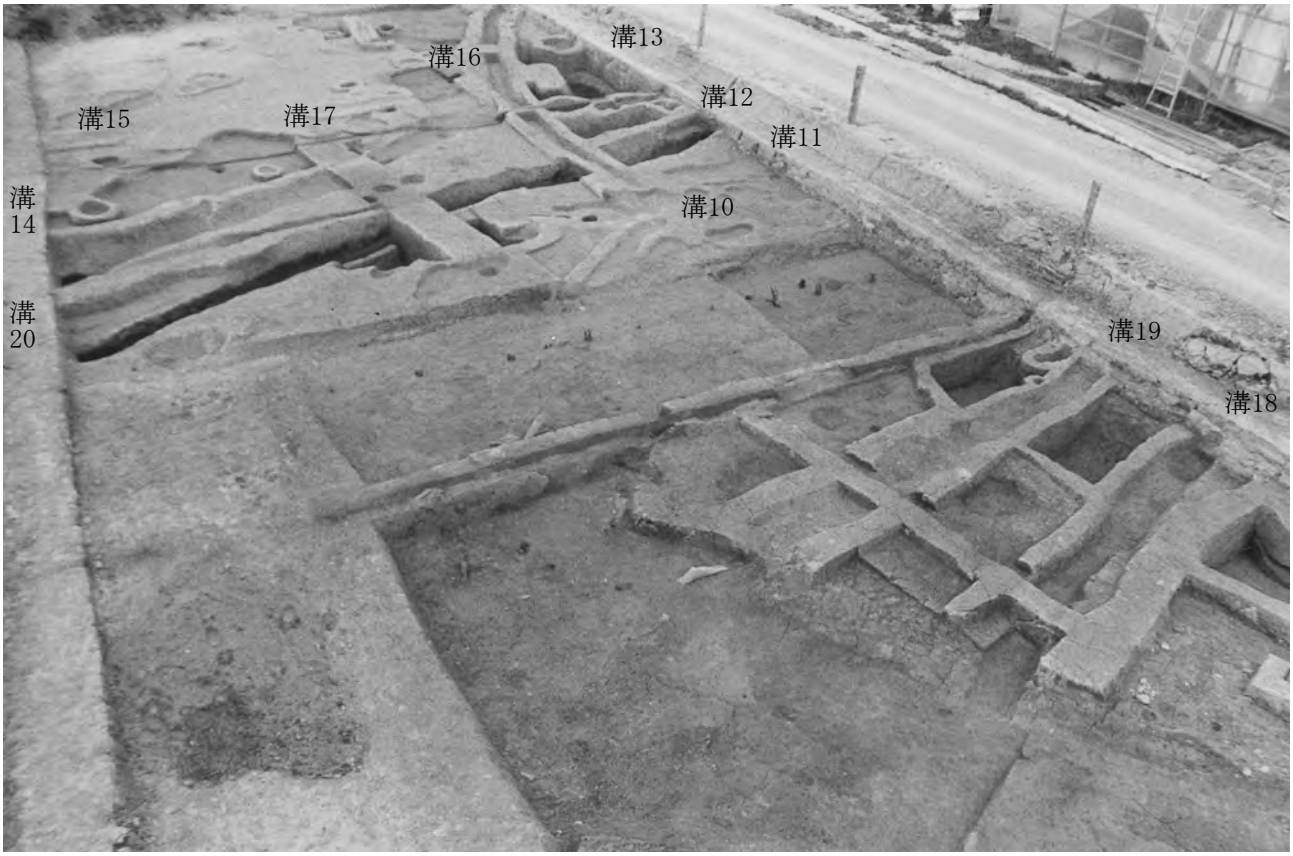
4　同左木製品出土状態（北東から）

1　１号溝状遺構土層断面（南から）



2　１号流路（南西から）

3　同上土層断面
（北東から）



1　８～17・20号溝状遺構、２号流路（南東から）

2　８・９号溝状遺構、２号流路土層断面（北から）

3　12号溝状遺構土層断面（北から）

4　14・19号溝状遺構土層断面（南から）

5　２号流路土層断面（南西から）

70-3

76-4

78-3

70-4

80-2

82-8

76-2

80-3

80-4

75-9

76-5

76-11

75-11

出土土器 1

79-7

79-9

82-7

82-5

86-23

83-8

83-10

86-21

86-13

86-16

86-8

86-3

86-9

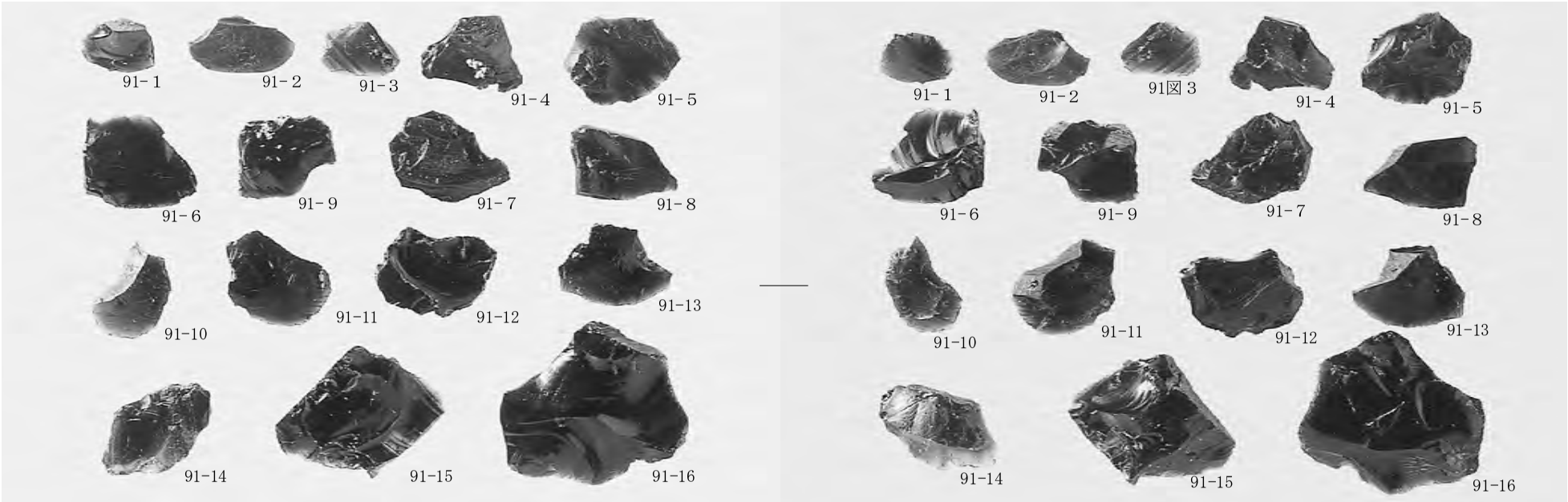
86-10

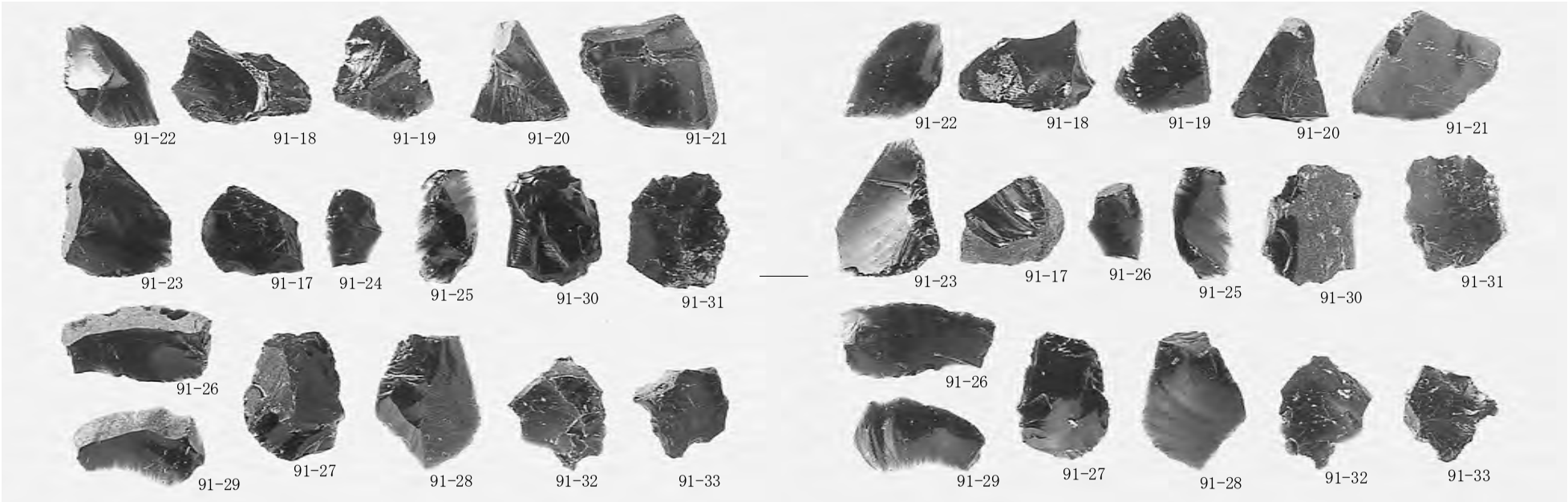
85-1

87-7

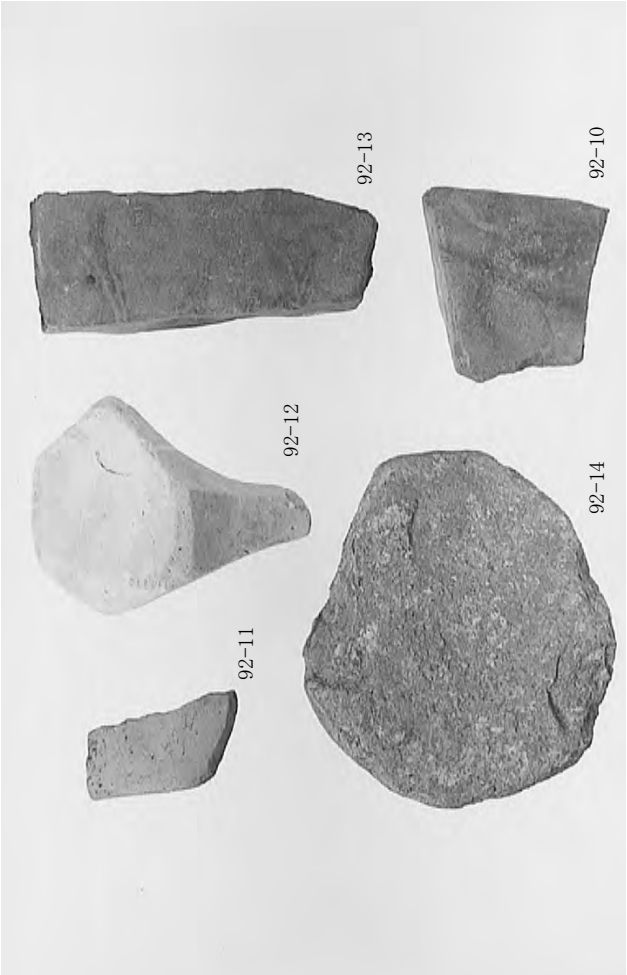
89-3

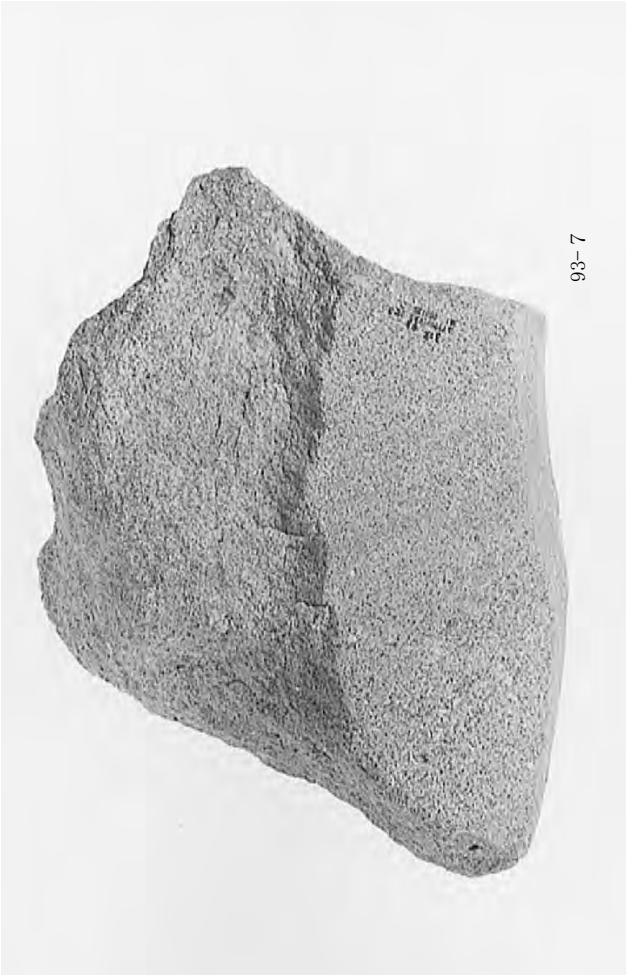
出土土器２

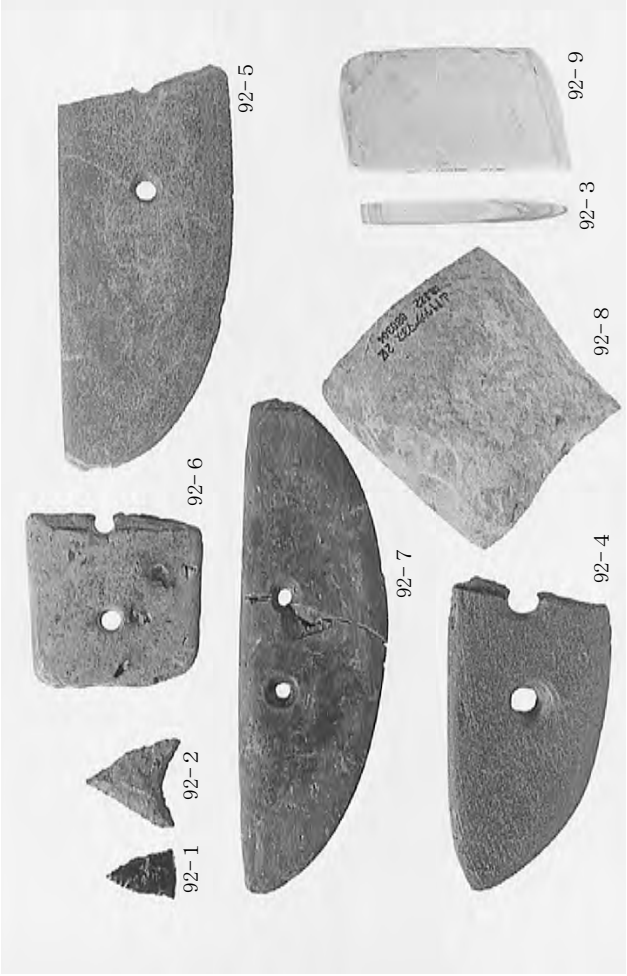

91-1
91-2
91-3
91-4
91-5
91-6
91-9
91-7
91-8
91-10
91-11
91-12
91-13
91-14
91-15
91-16
91-1
91-2
91図3
91-4
91-5
91-6
91-9
91-7
91-8
91-10
91-11
91-12
91-13
91-14
91-15
91-16

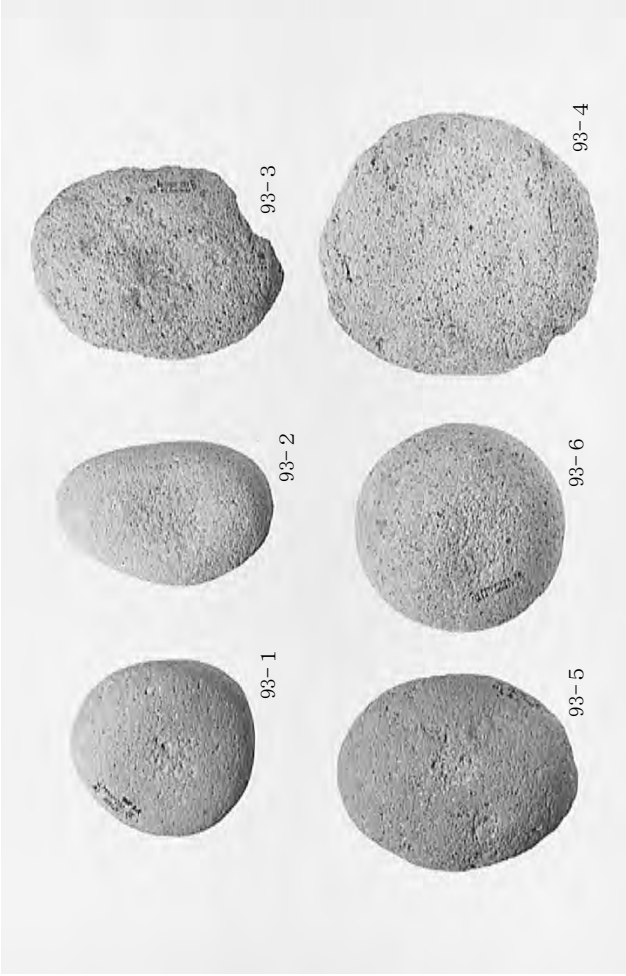

91-22
91-18
91-19
91-20
91-21
91-23
91-17
91-24
91-25
91-30
91-31
91-26
91-29
91-27
91-28
91-32
91-33
91-22
91-18
91-19
91-20
91-21
91-23
91-17
91-26
91-25
91-30
91-31
91-26
91-29
91-27
91-28
91-32
91-33

出土石器 1

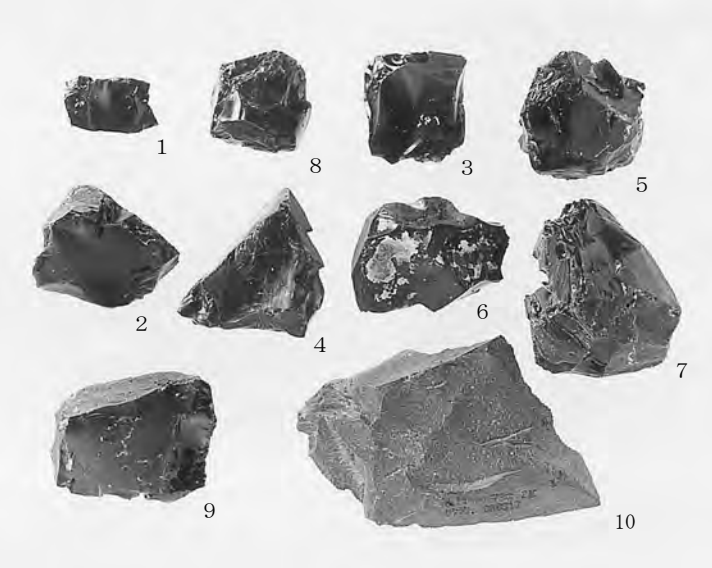

92-13
92-10
92-12
92-14
92-11

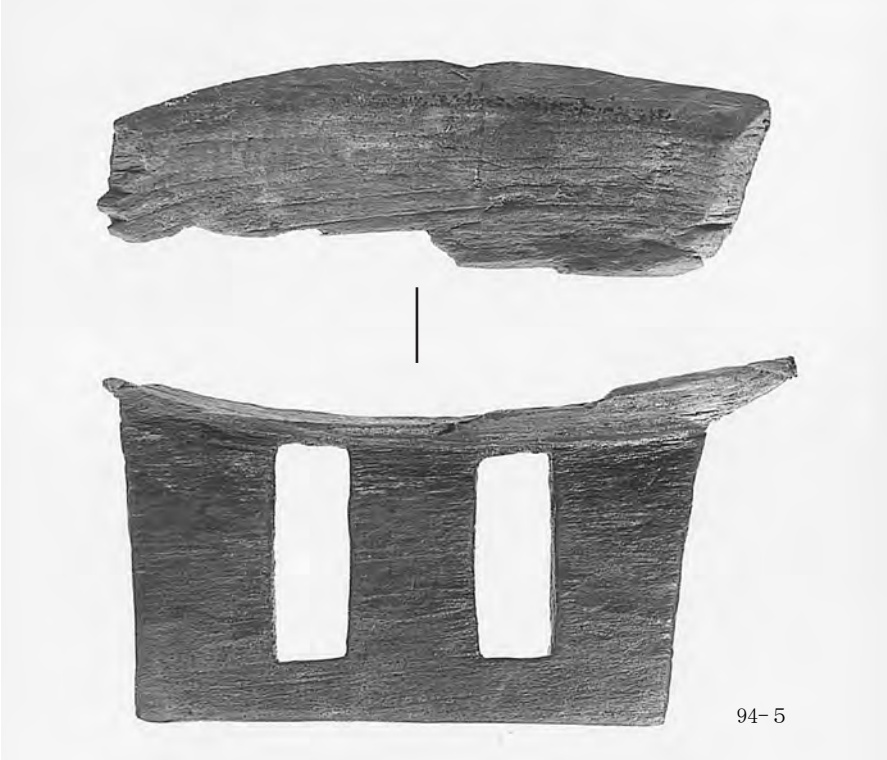

93-7

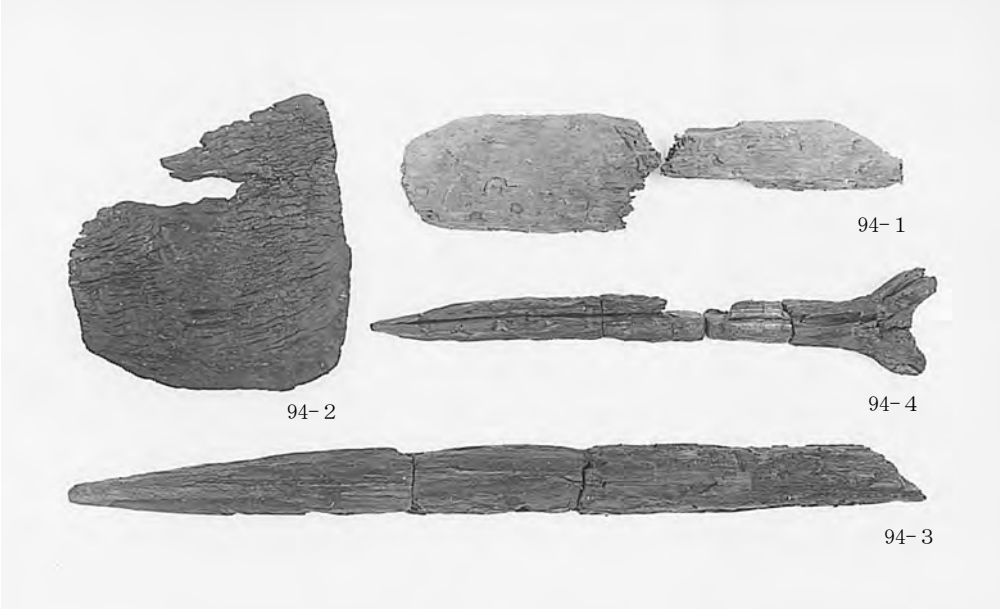

92-5
92-9
92-3
92-8
92-6
92-7
92-4
92-2
92-1


93-4
93-3
93-2
93-6
93-1
93-5

出土石器 2







出土石器・木器・獣骨

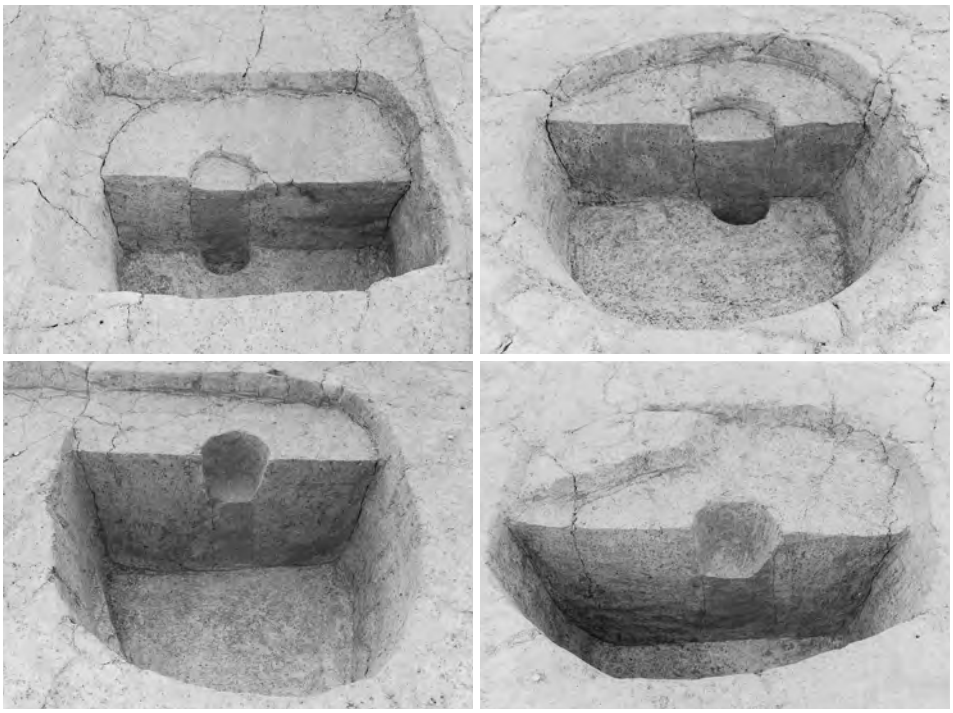
1　山門牛島遺跡
　４次調査区遠景（西から）

2　山門牛島遺跡
　４次調査区全景（東から）

1　山門牛島遺跡
　４次調査区全景（西から）

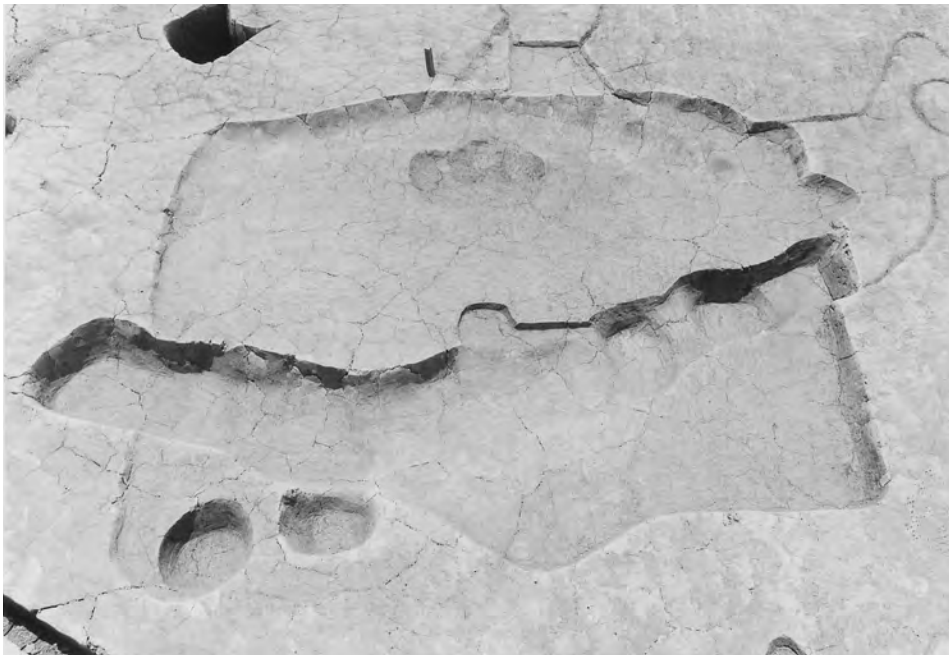
2　山門牛島遺跡
　４次調査区全景（上空から）

1　１号掘立柱建物跡
（南西から）



2　１号掘立柱建物跡柱掘形
土層堆積状況

3　１号掘立柱建物跡
屋内土坑（北西から）

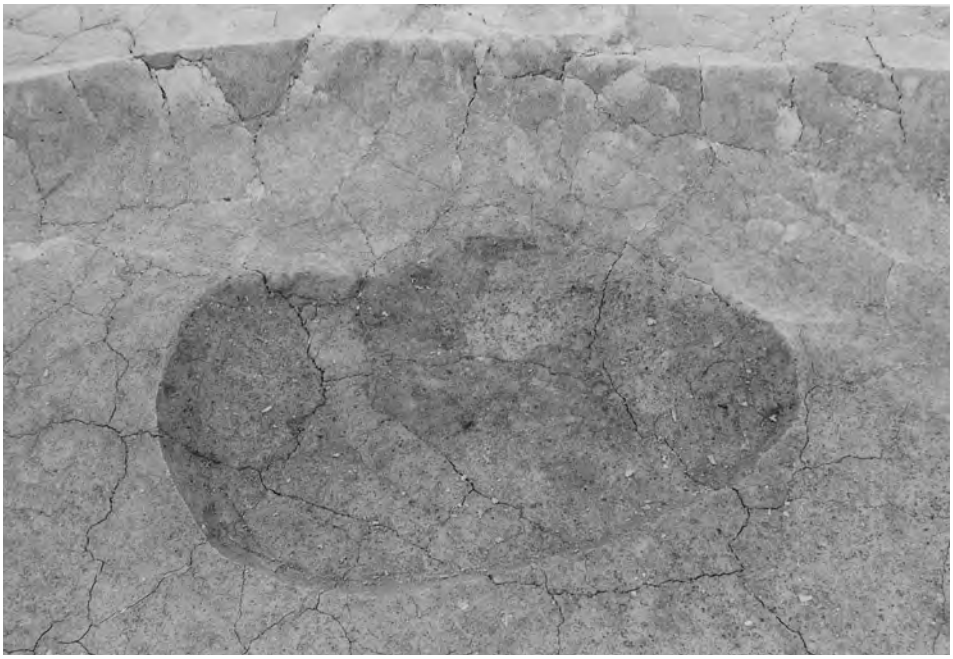


1　１号竪穴住居跡（北東から）

2　１号竪穴住居跡屋内小穴
土層堆積状況（北東から）

3　１号竪穴住居跡屋内小穴
（北東から）

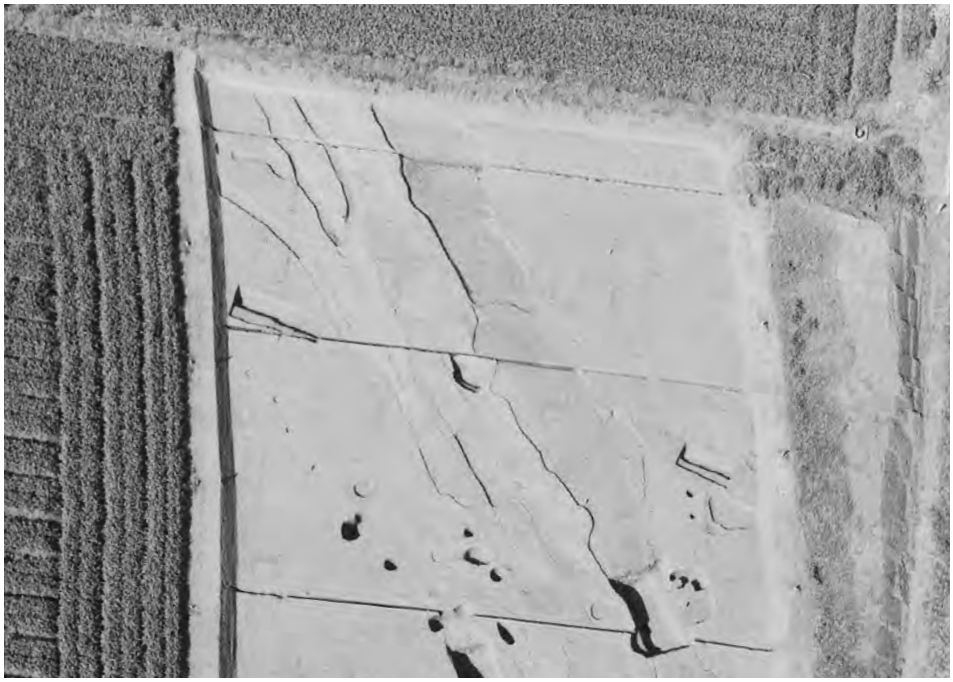
1　１号竪穴住居跡屋内土坑
土層堆積状況（北東から）



2　１号竪穴住居跡屋内土坑
（北東から）

3　２号土坑（南東から）

1　1・2号溝状遺構(上空から)



2　3号溝状遺構（上空から）

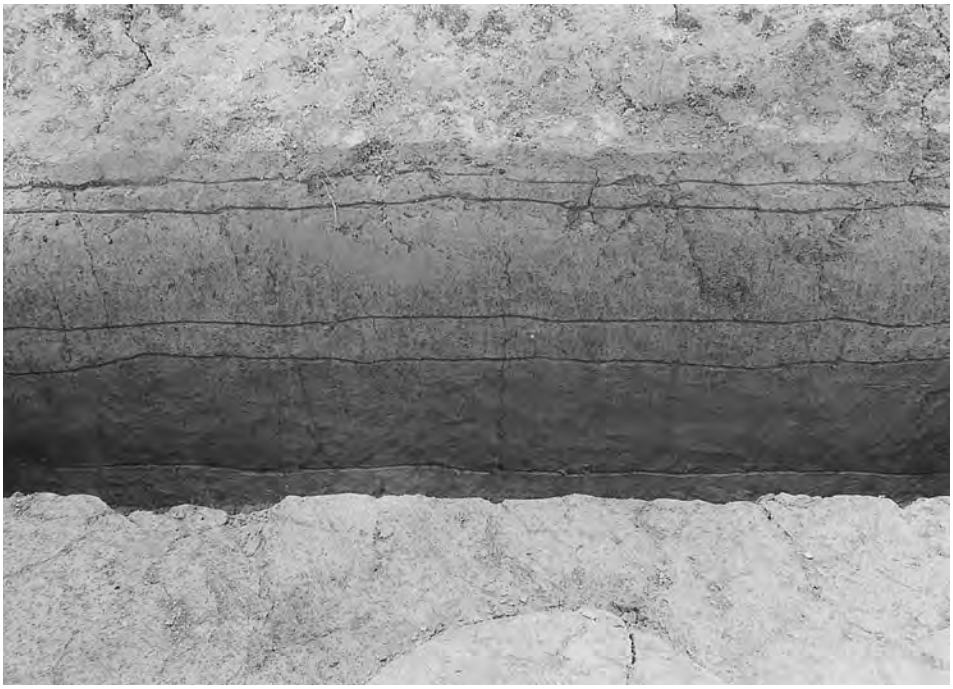
3　1・2号土坑出土土器

山門牛島遺跡
５次調査区全景（上空から）

1　山門牛島遺跡
　５次調査区遠景（北東から）

2　山門牛島遺跡
　５次調査区遠景（西から）

1　空中撮影風景



2　北側基本土層（北西から）

3　南側基本土層（北西から）

1　１号竪穴住居跡（北西から）

2　２号竪穴住居跡（南東から）

3　３号竪穴住居跡（北東から）

1　１号土坑（南から）

2　２号土坑（北西から）

3　３号土坑（北東から）

1　４号土坑（南西から）

2　５号土坑（北から）

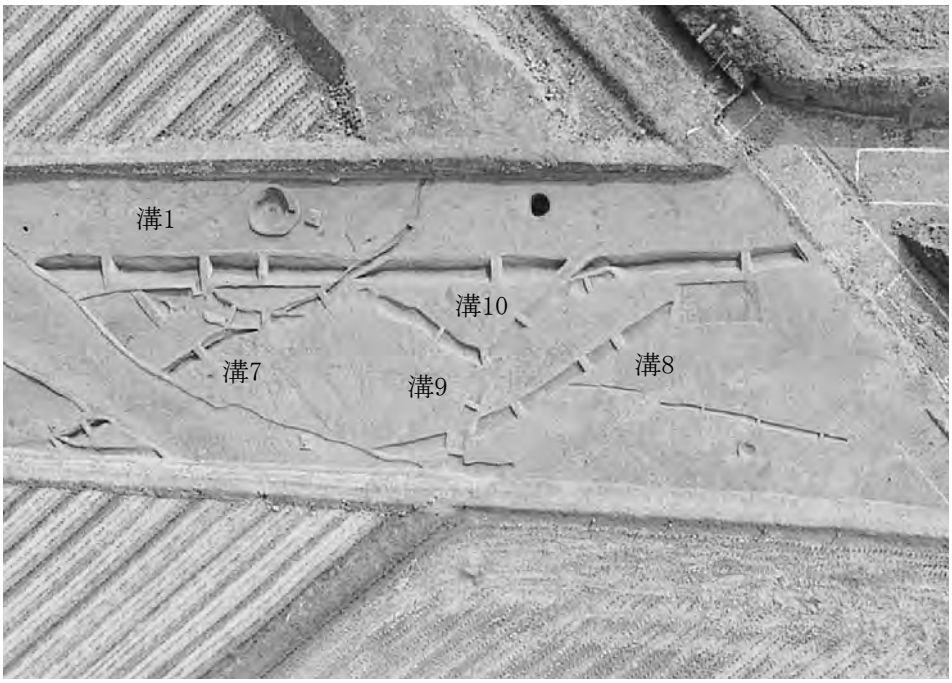
3　５号土坑土層（北から）

1　6 号土坑（南西から）

2　7 号土坑（東から）

3　7 号土坑土層（北西から）

1　北端１～６号
溝状遺構分布状況（上空から）



2　南端１および７～10号
溝状遺構分布状況（上空から）

3　１、５および６号
溝状遺構切り合い状況
（西から）

1　1 号溝状遺構ベルト
　　1 土層（北から）

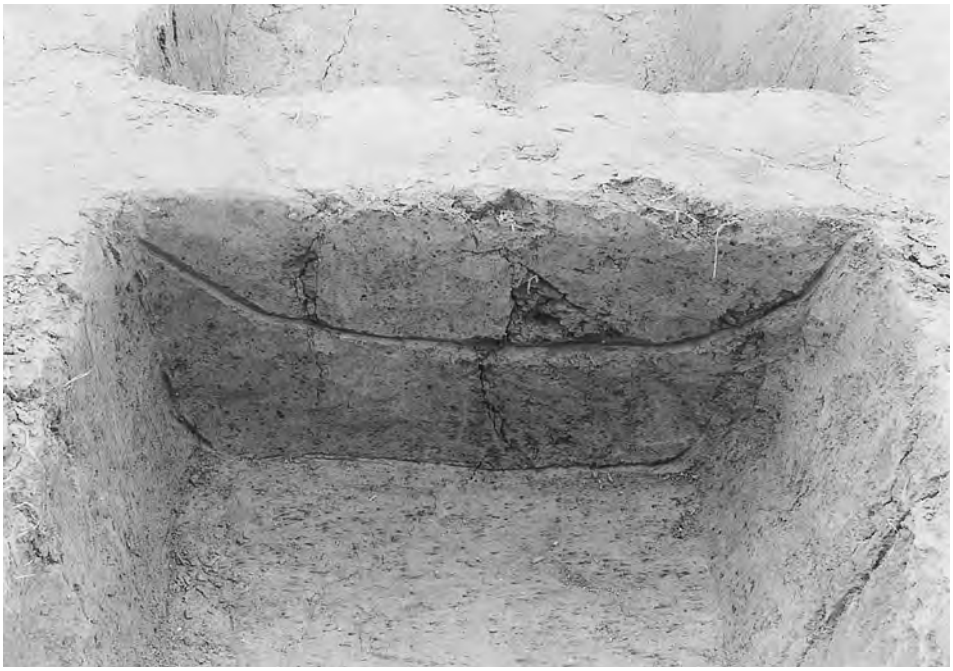
2　1 号溝状遺構ベルト
　　2 土層（北から）

3　1 号溝状遺構ベルト
　　3 土層（北から）

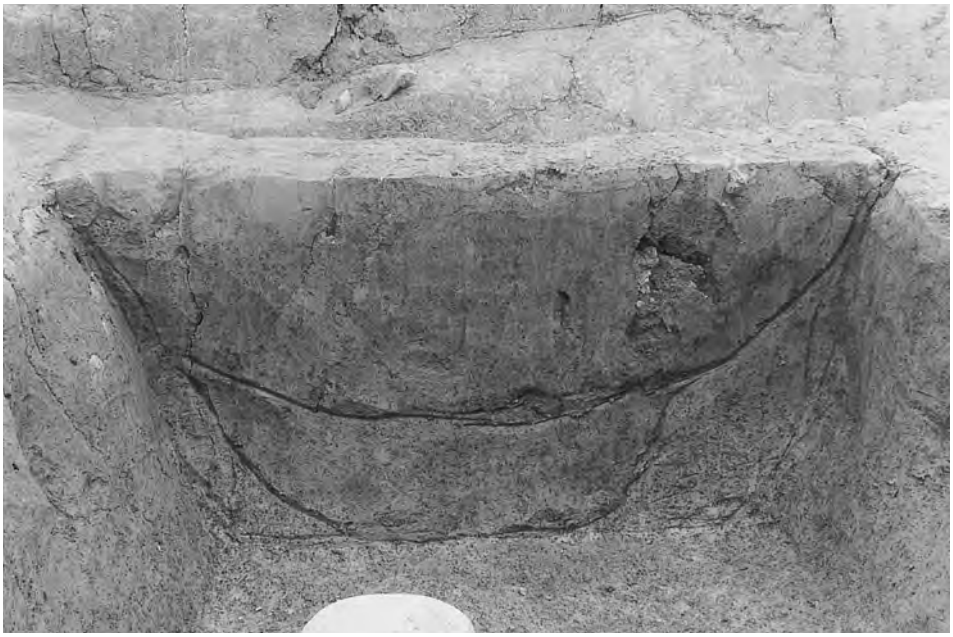
1　１号溝状遺構(ベルト４)
および５号溝状遺構
切り合い状況土層（北から）

2　１号溝状遺構ベルト
５土層（北から）

3　１号溝状遺構ベルト
６土層（北から）

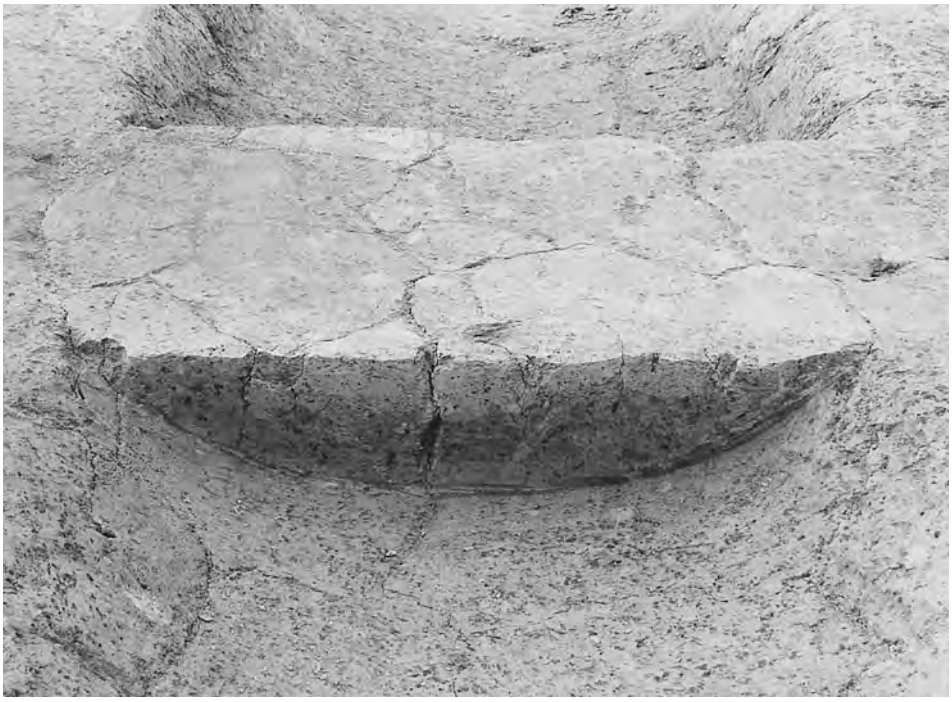


1　3－1 号溝状遺構
ベルト土層（南から）



2　3－2 号溝状遺構
東側ベルト土層（西から）

3　3－2 号溝状遺構
西側ベルト土層（東から）



1　５号溝状遺構土層
（北東から）

2　６号溝状遺構
東側ベルト土層（西から）

3　６号溝状遺構
西側ベルト土層（東から）

1　７号溝状遺構
南側ベルト土層（南から）

2　７号溝状遺構
北側ベルト土層（南から）

3　８号溝状遺構土層
（南から）

1　９号溝状遺構土層
（北から）

2　10号溝状遺構
北側ベルト土層（北から）

3　10号溝状遺構
南側ベルト土層（北から）

105-1

105-3

105-6

108-1

108-3

108-5

108-8

108-8

109-3

109-4

116-1

116-2

116-3

116-4

116-5

116-6

5 次調査出土土器および石器

報　告　書　抄　録

ふりがな	やまとがらんいせき・やまとうしじまいせき・もとよしいせき
書名	山門ガラン遺跡・山門牛島遺跡・本吉遺跡
副書名	県道本吉小川線関係埋蔵文化財調査報告
巻次	
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第226集
編著者名	小田和利・吉村靖徳・小川泰樹・秦　憲二・岸本　圭・坂元雄紀・城門義廣
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-8575　福岡市博多区東公園7-7
発行年月日	西暦2010年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東緯 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
やまとがらんいせき 山門ガラン遺跡	ふくおかけんみやまし 福岡県みやま市 せたかまちやまと 瀬高町山門	40229	790323	33° 14′ 66″	130° 49′ 62″	2007.3.14 ～ 2007.9.28	3,000㎡	道路改良
やまとうしじまいせき 山門牛島遺跡	せたかまちやまと 瀬高町山門			33° 14′ 81″	130° 50′ 34″	2007.1.11 ～ 2008.11.28	5,000㎡	
もとよしいせき 本吉遺跡	せたかまちもとよし 瀬高町本吉			33° 14′ 75″	130° 50′ 76″	2006.9.1 ～ 2008.9.12	2,400㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山門ガラン遺跡	集落	弥生・中世	竪穴住居・土坑・溝・井戸	土器・青銅製品	舶載鏡・銅鏃
山門牛島遺跡	集落	弥生・古墳	竪穴住居・掘立柱建物・溝	土器・石器・木製品	木製盤
本吉遺跡	散布地	縄文・古代	土坑	土器・石器	条里関連溝

要約

山門ガラン遺跡では、中世・弥生時代の集落跡である。弥生時代は後期を中心とするもので、数多くの竪穴住居が検出された。中世の遺構として、連続して築かれた多数の井戸状遺構が特徴的である。

山門牛島遺跡は弥生時代前期から古墳時代前期までの比較的長い時期にわたって営まれた集落跡である。竪穴住居や溝の他、波板状遺構等特徴的な遺構もみられる。出土品にも木製脚付盤といった注目されるものが含まれ、また井戸の出土品には古式土師器の良好な一括資料がある。

本吉遺跡では、縄文時代後期前葉の土器・石器が多数出土した。北部九州において当該時期の資料はこれまで多くなく、まとまった量の出土は貴重である。

各遺跡で検出された溝状遺構の中には、奈良時代以降に施工された条里に伴う可能性が指摘されるものを含む。今回の発掘調査およびこれまでの九州新幹線建設・圃場整備事業に伴う発掘調査の成果により、縄文時代以降の集落や土地利用の動向を具体的に考える多数の資料が得られたものといえる。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード ２１１４１０７
登録年度 21	登録番号 2

山門牛島遺跡

（県道本吉小川線関係埋蔵文化財調査報告）

福岡県文化財調査報告書第226集　中巻

平成22年3月31日

発　行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園７－７

印　刷　石橋印刷株式会社
福岡市博多区東比恵３丁目21番10号
TEL（092）411-0544